
空に架かる橋

ナカコ（旧：楓花）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に架かる橋

【Nコード】

N1908D

【作者名】

ナカコ（旧：楓花）

【あらすじ】

劇的な恋愛を夢見ている21歳のマドカは雨の交差点で美しい男性に出会う。それは孤独なボーカリスト、ロラン。記憶に眠る一枚の絵葉書を軸に、二人の運命ともう一つの恋が交差する……

第一章 雨の交差点（１）

「でさ、なんかそういうのって運命の出会いって感じがしない？」

オープンカフェで通りを行き交う人々の雑談を聞きながら、マドカは向かい側に座る智樹の顔を覗いた。

明らかに呆れ顔の彼はアイスティーのグラスから伸びるストーリーに口をつけ、適当に上手い言葉を搜しているようだった。

「お前、まだそんな少女漫画みたいなこと考えてるわけ？」

「え？」

「だから、街で偶然出会っただけの男が運命なわけないだろ、ってこと」

智樹の口から出た言葉は、面白いほどマドカの予想通りだった。

確かに智樹の言うことは正しい。

交差点のど真ん中で転倒した女の子に手を貸す男なんて山ほどいるだろう。

たったその瞬間、たまたま居合わせただけのことなのに、それを運命の出会いと勘違いしてしまうなんて、やはり少女漫画か恋愛ドラマの見過ぎだからかわれても仕方ない。

思えば、そんな出会いが運命の恋に発展するというストーリーをどこかで見た覚えがある。

三日前、いつものようにライターに依頼していた原稿を引き取り、マドカは九段下にあるオフィスへと急いでいた。

梅雨を迎えた東京の空はどんよりと雲り、今にも雨が降り出しそうな顔をしていて、地下鉄の改札を抜けて地上に出ると、案の定、空から大粒の雨がバケツをひっくり返したシャワーのように降り注いできた。

「やばい！原稿が濡れちゃう…！」

みるみるうちにアスファルトが黒色に染まり、行き交う人々が足早に駆けて行く。

右手に抱えた原稿の入った茶封筒を気にかけてながら、マドカは小走りに交差点へ向かった。

アスファルトに躍る雨粒が跳ね返り、買ったばかりのポンプスの爪先に雨水が浸透する。

足先は生温かく湿り、皮の靴底はつるつると滑った。

赤信号に苛々しながらも立ち止まり、信号が青に変わるとマドカは歩き出す人の群れから急いで駆け出した。

交差点を渡れば、オフィスはもう目の前だ。

だが、不運に足元を掴まれたのはその時だった。

勢いよく駆け出したせいでバランスを崩したかと思うと、次の瞬間に履いていたパンプスの踵が見事に折れ、マドカは交差点のど真ん中で派手に転んでしまったのだ。

「いつ……たあ……」

転んだ拍子に膝を擦り剥き、マドカはひどい格好で交差点の真ん中に放り出された。

運悪く、抱えていた原稿は茶封筒の外に飛び出して散々な姿になってしまっている。

マドカは今にも泣き出しそうな気分だった。

雨に降られ、三回払いで買ったお気に入りのインポートブランドの靴は壊れてしまい、おまけに原稿は四方八方に飛び散らかっている。

行き交う人々は皆、マドカの姿を気にも留めずに交差点の向こうへ消えて行く。

やれやれ、マドカはそう思うと静かに立ち上がり、信号が変わるのを気にながら原稿を一枚一枚拾い集めた。

「大丈夫？」

マドカの視界に、皮の擦り減った男物のブーツが飛び込んでくる。少し高めの柔らかな声にふと顔を上げると、一人の男性がマドカの顔を覗き込んでいた。

美しく整った顔立ちに吸い込まれそうな大きな瞳。
彼の白い頬にかかる髪が小さな雫を落として風に揺れ、マドカは一瞬言葉を失った。

なんて…綺麗な男の人なんだろう……

「早くしないと、信号、変わっちゃうよ」

彼はそう言いながらアスファルトに散らばる原稿を拾い始めた。

傘を持たない人は皆、顔をしかめて急ぎ足で駆けて行くのに、彼は雨を楽しんでいるように見えた。

彼には雨がよく似合っていた。

彼を取り巻く神秘的な空気は、多くの雨粒と一緒に地上に降りて来たといっても過言ではなかった。

その美しい横顔に見惚れ、マド力は呆然としてしまう。

「ほら、信号変わったちゃう」

「えっ…？」

原稿は拾い終えたものの、片足に踵の折れたパンプスを履き、膝を派手に擦り剥いてしまったマド力は立ち上がることさえ困難だった。

今思えば、あの時立ち上がることができなかったのは、突然目の前に現れた完璧な美しさを持つ彼のせいだったのかもしれない。

「痛っ…」

「ケガ…してるの？」

足元に転がったパンプスを拾い上げると、彼は咄嗟にマドカの肩をとった。

「あっ……あの……」

彼は信号待ちのドライバーに向かってすまなそうに会釈をすると、マドカを支えて横断歩道を渡りきった。

「あの……、あ、ありがとうございました」

交差点を渡るとマドカは礼を言った。

「足、大丈夫？」

彼は顔をしかめると、擦り剥いたマドカの膝を心配そうに指差した。

「だっ、大丈夫です！平気です！このくらい」

「そんな不安定な靴履くからだよ。そんなおしゃれ用の靴で全速力で走ったら危ないよ」

まさか、勢いよく走り出したところを見られたのかと思うと、マド力は苦笑いを浮かべるしかない。

「あの、本当に…ありがとうございました」

再び頭を下げ、ヒールのないパンプスに片方の足を入れると、マド力は胸の茶封筒をきつく抱き寄せて彼に背を向けた。

「さよなら」

そう言つて静かに微笑み、綺麗な歯並びをのぞかせた美しい彼は、そのまま雑踏の中に消えて行った。

あの寂しそうな深い瞳をした彼は、どこへ行ったのだろうか。

ほんの数秒の出来事だった。

交わした言葉も平凡以下のものだった。

けれど、あの人の瞳は特別な言葉を語りかけていた。

「さよなら」と言った彼の口元は、大切な何かを伝えたがっているような気がした。

それはどこかに仕舞い込んだ淡い記憶をふっと思い出した時のような表情に似ていた。

ただの自惚れかもしれないけれど、少なくともマドカにはそう思えたのだ。

けれど、おそらく二度と会えないだろう。
マドカにだってそのくらいの分別はつく。

智樹の言う通り、運命の出会いなんてないのだ。

「智樹には分かんないのよ」

「何が？」

「智樹みたいに、色んな女の子をとつかえひつかえしてるような男には、私の気持ちなんて一生分かんないでしょ？」

マド力はうつむいて、ティーカップの底に溶け残った角砂糖をじっと見つめた。

智樹は肩を落として溜息をつく、通りを歩く人の群れに視線を注いだ。

智樹は中学時代からの友人で、同じ高校に進学し、クラスもずっと一緒という、いわゆる切っても切れない腐れ縁というやつだった。

180センチのバランスのとれた体格に、スポーツが得意で頭もキレル爽やかな印象の智樹は、後輩からも“智樹先輩”と慕われる、女の子たちの憧れの的だった。

なのにこの男は致命的なほど女癖が悪くて不真面目で、今まで泣かせた女の数はいくつどころか両手でも足りないだろう。

智樹は大学に、マド力は短大進学のために上京し、休日はこちらが誘うわけでもなく一緒に街に出て時間を潰した。

今日も、短大を卒業して一足先に社会人になったマド力を就職活動のアドバイザーという口実で呼び出した智樹は、いつものようにカフェの椅子に座って忙しなく変化し続ける街並をぼんやりと眺めている。

「智樹はさ、好きな女の子とかいないわけ？」

不意をついたマド力の質問に、智樹は正面に向き直ると眉間に皺を寄せた。

「お前さ、今更何言ってるの？俺が女と真面目に付き合う気なんてこれっぽっちもないって知ってるくせに」

「そ、そうだけど…、これも今更聞くようで悪いんだけど、何で？智樹だったら言い寄ってくる女の子だっていっぱいいるし…智樹にぴったりの子、いると思うよ？」

智樹は曖昧に首を傾げると、うんざりといった様子で肩をすくめた。

「さあね…てゆうか、お前に心配してもらう理由が分かんねーよ。むしろ、俺はお前のほうが心配だけど？」

「心配？」

智樹の言う“心配”の意味が分からずに、マド力は睫毛をぱちぱちさせた。

「少女漫画みたいな恋なんて、やってくるわけないんだって」

「ど…どうつうつと？」

「いや、俺はただ、お前に忠告してやってるだけ」

「何を？」

聞き分けのない子供みたいにクエスチョンマークを送り続けるマド力に、智樹は諦めたように目を伏せると、椅子の背に深くもたれかかった。

「ほら、あのさ、お前さあ…分かんないの？」

「だから、何なのよ？」

「だから、な、21で処女はマズインじゃないの？っていう話だよ」

「なっ…、な、何言ってるの！？こんなところで、急にそんな話…」

頬を赤らめて俯いたマド力を見て、智樹はふつと微笑んだ。

「お前って、ホント分かんないよな。顔もスタイルもブスじゃないし、むしろ可愛いくらいだけど。俺はお前が男に何を求めてんのかさっぱり分かんねーな。男に何を期待してんだよ？白馬の王子様とか待ってたりするわけ？お前は、自分を大切にしすぎなの」

「そんなこと……ないもん…」

「そう？」

頬を膨らませてムキになるマド力を、智樹はおかしそうに笑った。

「お前さ、高校ん時の彼氏いたじゃん。あの時はお前が相手のこと無視して自然消滅っていう話だったけど、あれってお前がエッチするの断ったからだろ？お前…、もしかして男嫌いなのか？それとも、本気で運命の相手とか探してるわけじゃ…ないよな？」

本気で探しているわけじゃなかった。
けれどマド力はずっとこう思っていた。

いつか出会う誰かのために、静かにそつとこの胸をあたためていたい。

笑われてもいい、惨めでもいいから…たった一人の人を愛せたら、
どんなに幸せだろう、と。

「ま、俺がしてやってもいいんだけどね」

「何を？」

「お前の初めての相手」

「ばっ…ばっかじゃないの！？」

いつものように馬鹿な冗談を言って笑う智樹に呆れながら、マド
力はあの彼のことを思い出していた。

三日前の、雨の交差点を。

第一章 雨の交差点（2）

オフィスの窓から見る夕日は、なんだかとても切ない。
それはきつと、都会で見る夕日だからだろう。

東京は太陽も月も、星さえも、すべてが虚像のように見える。

マドカは都内にオフィスを構える出版社で働いている。

大手の出版社に比べたら月給なんて雀の涙みたいなものだけれど、マドカはこの会社が好きだった。

主に大手の下請けである音楽関連誌を扱うこの会社は、設立二年、社員数四名というまだまだ未熟なところもあるけれど、年齢や経験に関係なく、大きな仕事を任された。

入社して一年を迎え、まだまだひよつこだけれど、マドカは編集者としての第一歩を踏み出したところなのだ。

マドカはこの仕事が好きだった。

何よりも打ち込めたのは、その仕事のほとんどがインディーズで頑張っているアーティストの取材だったからだろう。

メジャーデビューを目指すひたむきな彼らの瞳を見るととても幸せな気持ちになれたし、巻頭ページを飾るような大物アーティスト

と仕事をするよりはずっとやりがいのある仕事だとマドカは思っていた。

九段下にある雑居ビルの五階、そこがマドカのオフィスだった。

「マドカちゃん」

名前を呼ばれて顔を上げると、上司兼社長である松田が、缶コーヒ―を片手に一服していた。

「松田さん、その“マドカちゃん”っていう呼び方、止めてくださいっていつも言ってるじゃないですか」

「マドカちゃんはマドカちゃんなんだよなあ。吉井って呼ぶと、なんだか調子狂っちゃうんだもん、俺」

松田はそう言ってにっこりと笑った。

「“マドカちゃん”って呼ばれているうちは、編集者として認められてない感じがするんですね。まるで学生のアルバイトみたいだ

し」

「言われてみればそうだなあ。だいたいこの会社、俺が学生時代の延長で作ったようなもんだから、文句言われても仕方ないっか」

大手出版社のアルバイトで学んだノウハウを活かして、大学を出てすぐにこの仕事を始めた松田は社長といってもまだ二十六歳。考え方に柔軟があつて、たまに突飛押しもない行動を起こすユーモアのある男だった。

マド力は一年以上この会社にいるが、彼がどういう経営方針を掲げているのかも未だに謎で、とにかく音楽、特に松田が馬鹿みたいにロック好きだという理由で音楽雑誌を中心に扱うようになったらしい。

松田はコーヒーを飲み終えると、煙草の火を消してマド力の隣に並んだ。

「マド力ちゃん、そろそろ一人前の仕事してみる気、ない？」

「一人前の仕事……ですか？」

笑顔を見せながらもいつになく真剣な眼差しの松田に、マド力はその言葉の真意を聞き返してしまう。

「実はね、マドカちゃんに任せてみようと思っている仕事があるんだ」

「それって……」

「メジャーデビューの決まったロックバンドの取材。ほら、今までインディーズで活躍するアーティストを追いかける感じの仕事が多かったじゃない？ だけど、今度はメジャーに漕ぎ着けたアーティストがなぜメジャーという器に認められたのか……その理由をマドカちゃんなりに考えてもらいたいんだよ。アーティストを見る目を養うのも、僕らには必要だしね」

松田はそう言うつと窓の外を眺めて、はにかんだ表情を浮かべた。

「あの私……」

「もちろん、俺もバックアップするけど？」

編集者としてのステップを踏むために与えられたチャンスに、喜びと不安が交差する。

複雑な表情のマドカを見つめると松田は穏やかに笑い、二枚のチケットを差し出した。

「今夜、そのバンドがインディーズ最後のライブをすることになっ

てる。チケットは既に完売。インディーズでは何もかもが異例だったと言われているバンドだけに、行ってみる価値は十分だよ」

松田はマドカの手にチケットを握らせると、にっこりと歯を見せて笑った。

「ライブが終わったら楽屋に行ってみるといい。先方に話はつけてあるから。挨拶程度に覗いてみてよ」

智樹は約束の時間より少し遅れて現れた。

夕暮れの繁華街は、仕事を終えて自宅へ向かうサラリーマンと、夜の街に繰り出す若者たちが活発に出入りしている。

マドカは落ち着きなく辺りを見渡し、雑踏の波を押し分けてやって来る智樹の姿を見つけた。

「もう、遅いってば」

「てゆうか、お前もいきなりなんだよ。何のライブか知らないけど、俺がついて行って問題ないわけ？」

「だってチケット二枚あるし、松田さんが行ってみる価値は十分って言うてたし」

スクランブル交差点を渡り、二人は緩やかな坂道を進んで行く。排気ガスの匂いと湿気を含んだ生温かい風が肌を撫でていった。

「で、どんなバンド？」

「まあ、私もこのバンドに関して詳しいことは何も分からないんだよ。さっき知ったばかりだし、バンドの略歴もメンバーのことも全く知らない」

マドカは肩に下げた鞆の中から、松田に渡されたチケットをもそもぞと取り出した。

「何かね、覚え難い名前だったよ。ラ・ヴォワ…ラク…テ？」

「あ？何だよそれ、フランス語かよ？こいつら人気あんの？」

「少なくともインディーズではそれなりにファン獲得してるでしょ。メジャーデビュー決まってるんだし」

眉をしかめる智樹の横を、黒いジープが通り過ぎて行った。

二人は交差点を横切って路地を曲がり、裏通りに抜けた。

路地裏にあるライブハウスの前に、奇抜なメイクとファッションに身を包んだ女の子たちの姿が見えている。

「おい、これってビジュアル系じゃねえの？俺、やっぱパス！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！智樹！」

顔を歪めて方向転換する智樹の腕を、マドカは強引に引き寄せた。

「とにかくさ、中に入ってみようよ！私、取材がてら女の子たちに話聞いてみるからさ」

半ば無理やりに智樹を地下のフロアに連れ込み、マドカは近くにいるフアンの子たちに話しかけていく。

「こんにちは。ちょっとお話聞かせてもらってもいい？」

会場に集まった女の子たちの話によると、ラ・ヴォワ・ラクテは男四人のロックバンドで、ファンのあいだでは“ラクテ”と呼ばれているらしい。

メンバーの年齢は公表されておらず、中でもボーカル“ロラン”の気は凄まじく、彼女たちの言葉を借りれば、『超カッコイ！』『超キレイ！』で『女の人よりもめちゃくちゃ綺麗な顔立ち』をしているそう。

どうしてそんなに派手なメイクをしているの？という質問には、『ロランがあまりにも綺麗だから、それに負けないように』という答えが返って来た。

「このバンドの気は、ボーカルのルックスにあるみたい。女の人より綺麗なんだって」

「はあ？なんだよそれ、肝心な音はどうなんだよ？ビジュアルで気のあるバンドにろくなもんいねえじゃん」

相変わらず眉間に皺を寄せたまま、智樹は退屈そうに闇に包まれたステージを直視していた。

会場にぎゅうぎゅうに詰め込まれた女の子たちは騒がしく雑談している。

マドカは辺りをぐるりと見渡した。

ぱつと見たところ、客席に男性の姿は見当たらない。

智樹の言う通り、男ウケの悪いビジュアルだけが売りのバンドなのかもしれない。

一見の価値はあると言った松田の言葉が、説得力を失っていく。

冴えない顔をした智樹の隣で、マドカは肩を落とした。

突然、ギター音が大音量で鳴り響いたと思うと、大きな拍手と歓声が捲き起こった。

女の子たちの悲鳴にも似た黄色い声でフロアが埋め尽くされていく。

照明が落とされ、ステージはオレンジ色の光にぼんやりと包まれた。

「キャーーーーー！！！！！」

歓声の湧き上がるステージに、メンバーが順に登場する。

ベース、ギター、ドラムス、それぞれが持ち場につく。

ステージに向けて絶え間なく注がれる女の子たちの声。

おそらくメンバーの名前を叫んでいるのだろう。

けれど、あまりの騒々しさに何を叫んでいるのか分からない。隣にいる智樹の声も聞こえないくらいだ。

そして最後のメンバーがステージに現れた時、その歓声はさらに高揚を増した。

その熱狂と叫び声は、ライブハウスの屋根を吹き飛ばして地球の裏側にまで届きそうなくらいのものだった。

ロランがステージに立ったのだ。

開いた口が塞がらないとはこのことだ。

マドカはまるで時の淀みの中をぐるぐると彷徨っているような気がしていた。

ステージでは演奏が始まっている。

ギターの音が鳴り響き、ベースが正確にリズムを刻み、ドラムが曲に装飾をつける。

ステージの中央でマイクスタンドを優雅に操るボーカル。

照明が彼の肉体を鮮やかに照らした。

不規則に揺れる、肩にかかったブラウンの髪。
曲調に合わせて、様々な表情を見せる瞳。

透き通るように柔らかな、だけど力強い歌声。

あの雨の日に出会った、完璧な美しさ。

「智樹！ねえ、智樹！」

ステージの上に現れたボーカリストの姿に、呆然としたマドカを次に襲ったのは果てしない興奮だった。

「智樹！あの人だよ！交差点で会った、あの人だよ！」

一週間前、九段下の交差点で原稿を拾ってもらった美しい男性は、ロックバンドのボーカリストだったのだ。

まだ熱気の冷めない女の子たちがぞろぞろとライブハウスを後にする。

楽屋口の通路に向かうと、そこには出待ちのファンが群がっていた。

正直に言って、マドカはライブの間中、曲もMCもまともに聴けたものじゃなかった。

ただ、瞳はステージの上に立つロランの姿を追っていた。

曲調に合わせて次から次へと様々な表情を見せる彼の、甘く力強い歌声。

ステージの上で黄色いライトを浴びたその整った顔立ちは、確かに美しいという形容しか浮かばない。

美しい彼の大きな瞳は、まるでフロアにいる女の子たちの何もかもを吸い込んでしまいそうだった。

群がる女の子たちのあいだをすり抜けて、マドカは古びた楽屋のドアの前に立っていた。

乱雑な文字で『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた紙切れが貼られた、コンクリートが剥き出しになった壁。

そこはとても冷たくて、さっきのフロアとは対照的だった。

深呼吸をして息を整える。

アーティストの楽屋を訪ねるのはこれが初めてではない。
これまで何度も経験してきたことだ。

けれど、マドカは今までにない緊張感に襲われた。

このドアの向こうにロランが、交差点で出会ったあの男性がいるのだと思うと、それだけで松田が一人前の仕事だと言って渡したチケットが、とても愛しいもののように感じられたのだ。

マドカは意を決して、錆びた分厚い扉を叩いた。

コンコン…

中から出てきた男性は、ドアの前に立つマドカの姿を見ると怪訝そうに眉をひそめた。

「何か御用ですか？関係者以外立ち入り禁止ですが」

「あ、あの…」

手帳の中から名刺を一枚取り出して、男性の前に差し出す。

「私…KK出版編集部の、吉井マドカと申します」

マドカは深々とお辞儀をした。

「なんだよー、誰？」

部屋の中から明るい声が聞こえてきた。

「入ってもれえばいいじゃん？」

彼らの陽気な笑い声は、休み時間の男子生徒を思い起こさせた。

「では、どうぞ」

男性が扉を開けると、マドカは恐る恐る中を覗きこんだ。

十畳ほどの広さの部屋で、ライブを終えたばかりのメンバーがビールを片手に思い思いの話をしていた。

古びた壁には何本もギターが立て掛けられ、アンプがあり、いくつものコードが殴り書きされた六線譜がテーブルの上に散らばっている。

「お…、お疲れさまです！」

マドカは精一杯の笑顔でメンバーに声をかけた。

「おつかれ」

そう言って微笑んだのは、ギターを弾いていた背の高い男性だっ

た。

彼の啜えた煙草の煙が緩やかに円を描いて天井に昇っていく。

彼はマドカの顔をまじまじと見つめると、首を傾げて煙草の煙を吐き出した。

「この子は？」

「あ、あの…KK出版編集部…吉井マドカと言います」

マドカが再び頭を下げると、ベースの男性が近づいてきた。

「ねえ、今日のライブ、どうだった？」

「え、あの…とても素敵でした」

上の空だったとは口が裂けても言えない。

マドカはにっこりと愛嬌のある笑顔で答える。

「俺、リーダーのタツ。で、その背の高いのがギターのシンちゃん
で、あっちの無愛想な黒い服の男がドラムのカナル。そして、そこ
の小さいのがボーカルのロラン」

タツはメンバーを指差して紹介し、マドカは再び会釈を繰り返した。

「あ、よかったら、お嬢ちゃんも飲めば？」

「お…お嬢ちゃん？」

シンに缶ビールを差し出され、緊張でこわばった笑顔のマドカは後退りしてしまう。

「え、あの…」

「デビュー祝いで、どうぞ」

シンは屈託のない笑みでマドカに歩み寄ると、冷えた缶を鼻先に近づけた。

「あ、あのっ…今日はもう、これで…」

「もう帰っちゃうん？」

「は、はい…ご挨拶に伺っただけですから」

マドカは小さく頭を下げ、そそくさと今来たドアへと向かった。

そして気づかれぬよう、そつと彼の姿に目をやった。

ロランは窓際の壁にもたれ、ぼんやりと缶ビールに口をつけている。

「マドカちゃん、まったねー」

「また、よろしくね」

シンが大きく手を振り、タツが優しく見送っている。

「今日はお疲れさまでした。また後日ゆっくり伺います。よろしく
お願いします」

マドカはドアノブを捻って通路に出た。

ドアを閉めるその瞬間、マドカは扉の向こうに佇むロランに視線を向けた。

こちらの存在に気づいている様子すら伺えない彼は、テーブルの上に置かれたセブンスターに手を伸ばし、ジッポで火を点けるとこ

ろだった。

「結構いいバンドだったな」

帰り道、濁った夜空を見上げた智樹がぼつりと言う。

「けど、女のファンばかりってのはもったいない気もするな。なあ、マドカ」

「あ、うん…そうだね」

「お前、どうかした？我が意識、ここにあらずって顔してんだけど」

「そつ、そんなことないって！ほら、普通だよ！」

智樹にぼんやりしていたことを指摘され、マドカは意味もなく両手でガッツポーズを作ってみせる。

「もしかして、お前…あのボーカルに惚れた？お前の言う、運命ってやつか」

「ばつ、馬鹿なこと言わないでよ！これは仕事だよ？でも、あんな綺麗な人と仕事ができたらッキーみたいな…」

智樹に胸の中を見透かされた気がして、マドカは無理にはしゃいだふりをしてしまう。

「まあな。でも、あのボーカル、下手すりゃそのへんの女より綺麗だよな」

「う、うん…」

「お前より断然キレイなんじゃねーの？」

「しっ…失礼ねっ！」

茶化してばかりの智樹に文句を言いながらも、マドカはこの胸の高鳴りが永遠のドラマの始まりであるような気がしていた。

できることなら、今すぐにも確かめたい。

交差点で出会ったあの雨の日を、あなたは覚えていますか？

第一章 雨の交差点（3）

「マドカちゃん！」

「あ、松田さん」

東京の空には朝から久しぶりに太陽が顔を覗かせていた。

梅雨時とはいえ、六月の太陽はジリジリと肌を刺すような暑さだ。

羽織っていたカーディガンを脱ぎ、額の汗を拭いながら、マドカは照りつける太陽を恨めしそうに見上げる。

いつものように地下鉄を降り、交差点で信号待ちをしていると、出勤途中の松田に声をかけられた。

「マドカちゃん、昨日はどうだった？」

「どうだったって…」

「ライブだよ、ライブ！」

「は…、はい！楽しかったです」

実際は曲など聴いているどころではなく、彼らのステージもぼんやりとしか記憶していない。

マドカはバツの悪い顔をしながら松田と肩を並べてオフィスのエレベーターに乗り込んだ。

「で、どうだった？」

「どうだったって…」

「あのボーカル、あれは当たりだな」

「え？松田さん、あのバンドのこと詳しくご存知だったんですか？」

「マドカちゃん、俺を誰だと思ってる？ロック好きの松田だよ？ラ・ヴオワ・ラクテ、ボーカルのロラン。あれは凄い」

エレベーターが五階で止まり、松田の後に続いてオフィスに入る。室内は既に蒸し暑く、マドカは急いでエアコンの電源を入れた。

「凄いつて…松田さん、昨日ライブに行く時は何も教えてくれなかったじゃないですか。バンドの略歴ぐらい教えてくれたったよさそうなものなのに…」

「それは、初めて彼らのライブを見た君の率直な感想が聞きたかったからだよ。浅はかな知識と先入観でアーティストを見るもんじゃない」

松田は満足そうにお決まりの台詞を言うと得意げに笑い、会議用のソファに上着を投げた。

「マドカちゃん、これ。ラ・ヴォワ・ラクテの資料」

デスクの上に所狭しと詰まれた雑誌を掻き分けて、松田はA4サイズの紙を引っ張り出した。

- - - - -

La Voie ラ・ヴォワ・ラクテ
Lactee

199X年、ベースのタツとドラムのカラルを中心に大阪で結成。次いでギターのシンが加入、ボーカルのロランは9X年、正式にバンドへ加入。

関西のライブハウスを中心に人気を集め、結成から二年後、アルバム『Per gola』を発表。

インディーズでは異例の売上を記録する。

9X年、同アルバムを引っ提げて全国ライブハウス行脚を決行。その名を地方にまで広める。

今夏、インディーズで話題となった『Stars』でメジャーデビューが決定。

結成から約四年を経て、デビューへ漕ぎ着けた。

作曲は主にギターのシンとベースのタツ、作詞はボーカルのロランが担当している。

- - - - -

「そういえば…、メンバーの年齢は公開されていないって話でしたよね？」

「ああ、今そういうミュージシャン多いじゃない？それも話題作りに過ぎないんだろうけどね」

松田はそう言って、本日一本目の煙草に火を点けた。

「でも、松田さんの言う、ロランが当たりって…どっいう意味ですか？」

ロラン……、その名前を声に出すだけで、マドカの胸は高鳴った。

「マドカちゃんはどう思った？あのボーカル、どうだった？」

「え、あ…まあ…」

松田の質問に妙な恥ずかしさを感じ、マド力は口ごもりながら室内に立ち昇る煙を見ていた。

「生まれ持った才能っていつのかな、あのボーカルには人を惹きつける不思議な力がある。マド力ちゃんには、それが何だか分かった？」

マド力は首を横に振った。

「天性の美しさ、だね」

「天性の…美しさ？」

「そう、あのルックスも才能のひとつだってこと。もちろん、肝心な彼らの音も十分魅力的だよ」

松田は煙草の火を消すとコーヒーを淹れ始めた。

カんで握り締めていた資料はいつの間にか手の中でくしゃくしゃになっていて、マド力は慌てて紙についた皺を伸ばした。

ラクテの略歴を妬きつけるように読み返し、数日後に迫る取材の

ことを考えると、今から緊張で押し潰されそうになる。

「あ、そうだ。マドカちゃん知ってる？ラ・ヴォワ・ラクテってフランス語で“天の川”っていう意味でさ。
彼らのデビューは7月7日、七夕の日だ」

「では、本日はよろしくお願いしまーす」

待ちに待ったラクテの取材は、都内にあるカフェの一部を貸し切って行われた。
会社が契約するカメラマンと共に、マドカは早朝から写真撮影の準備に追われていた。

「マドカちゃん」

名前を呼ばれて振り向くと、そこにはタツが立っていた。

「タツさん！」

「今日はよろしく」

「こちらこそ……！よろしくお願いします！」

微笑むタツに笑顔を返しながら、マド力は撮影の準備が進むフロアを見渡した。

「あの……他のメンバーの方たちは？」

「あいつらヘビースモーカーだから。俺は愛煙家じゃないんでね。ほら、このカフェって全席禁煙みたいだから。きつと今頃、裏の路地で野良犬みたいに地面に這いつくばって煙草吹かしてるだろうね」

「冗談交じりに会話を弾ませるタツに、マド力は好印象を抱く。

初めて任された仕事に緊張を隠せないマド力も、タツと交わした何気ない会話にいつもの元氣を取り戻していく。

メイクを終えたメンバーが丸いテーブルを囲んで座る。

まずは、四人揃ったカットの撮影だ。

順調に進む撮影をカメラマンの脇で眺めながら、マドカの視線は自然とロランの表情を追っていた。

ロランはステージにいる時よりもずっと小柄で、長身なギターのシンが隣にいるせいなのか、おそろしいほど華奢だった。

相変わらずロランはマドカの存在を気にも留めておらず、それどころかまともな挨拶すら交わしていなかった。

「少し休憩入れましょうか」

カメラマンから休憩の声がかかる。

撮影から開放されたメンバーの顔が緩み、ポラをチェックするために真っ先にタツがマドカの隣に駆け寄った。

「四人だと良いショット選ぶのも大変だな。みんなが良い顔してないといけないから」

撮影されたばかりの写真を真剣にチェックしていくタツの後ろから、シンが顔を覗かせた。

「可愛い編集者さん！せっかくやから皆でメシでも食わない？近く

に美味しい蕎麦屋があるって聞いたんやけど」

『可愛い編集者さん』とはマドカのことらしい。

「いいねー、マドカちゃんも行こうよ。時間、大丈夫なんやろ？」

取材の準備を理由に渋るマドカをシンとタツが強引に連れ出し、五人は老舗の蕎麦屋でテーブルを囲んでいた。

案の定、マドカは彼らの雰囲気になまじく馴染めず、ただ静かに相槌を打ったりにつこりと微笑んでみせたりしたが、頭の中を「不安」の二文字が過ぎる。

松田から任された仕事の責任を考えれば、メンバーをリラックスさせ、午後からのインタビューに備えて多くのことを聞き出したいところなのに。

四人の会話が途切れたところで、マドカは思い切って自ら話題を振った。

「あの…、ロランさんってメイクで随分表情が変わりますね。なんだか…凄く綺麗で…私、女性として恥ずかしいっていうか…」

「あれ？マドカちゃん、こいつのメイクしてない顔、見たことあるん？」

シンの質問に、マドカは一瞬動揺する。

「あ、あの…この間、助けていただいたんです。私、交差点で転んで…、その時落とした原稿をロランさんが一緒に拾ってくれたんです」

「それ、ホンマ？」

メンバーの視線がロランに集中する。

「どうせまた、ナンパしようとしてただけじゃねえの？」

口を閉ざしていたカヲルがぼつりと言うと、シンが面白がって笑った。

「あの時は助かりました。ありがとうございます」

マドカはそう言うとロランに向かい、ぺこりと頭を下げた。

「おい、ロラン…何か言えよ」

「…知らん。覚えてない」

テーブルに備え付けられた紙ナプキンを所在無さそうに折り畳みながら、ロランは壁に掛かった水墨画を眺めている。

「俺、綺麗な女の子やったら忘れたりしないんやけど。残念ながら、君のことは覚えてない。人違いちゃう？」

「なあ、ロラン…そんな言い方ないだろう？」

タツが呆れたように大きな溜息をついた。

やだ…泣きそう……！

行き場をなくした想いをどうすることもできずに、マドカは俯いたまま席を立った。

「あの、ごめんなさい！私…戻ります！」

マドカはそのまま店を飛び出した。

ビルが立ち並ぶ喧騒の中を、溢れる涙を両手で拭いながら、その足を前に進めるしかない。

ロランの言葉が頭の中でリフレインして、言いようのない虚しさが込み上げる。

撮影の行われたカフェに戻り、マドカは路地裏にしゃがみ込んだ。膝を抱え、両腕で顔を覆いながら大きく深呼吸をする。

それでも細い涙の粒は静かに頬を伝っていく。

こんなところで泣くなんて、どうかしてる……

マドカは再び深呼吸をして空を見上げ、そこに垂れ込めた灰色の雲を恨めしそうに眺めた。

「吸っていい？」

しゃがみ込むマドカの隣に誰かが腰を下ろした。

顔を覆っていた腕の隙間から、マドカはその横顔にちらりと目を向ける。

ロラン…？

ロランはセブンスターに火を点け、ほろ苦い煙の渦を曇り空に向かって吹きつけていた。

その姿は流れるように美しく、彼の周りだけが何か特別なベールに覆われているみたいだった。

「こら、またこんなヒールの高い靴履いてる。コケても知らんよ」

ピンヒールのパンプスを指差して、静かに、そして優雅に煙草の煙を吐き出すと、ロランはマドカのジーンズの上からあの時擦り剥いた膝を人差し指で突付いた。

「ケガ、治ったん？」

「あ、あの…」

「もしかして俺、君のこと傷つけたかな？」

ロランはうずくまるマド力を横目で見下ろすと、がさがたと音を立ててハンバーガーの包みを差し出した。

「何か言ってくれへんと、これはお預けやで」

「えっ…」

「腹、減んない？」

「え、あ…、うん…」

「お前のせいで美味しい蕎麦食い逃した」

もしかして…あれからすぐに後を追いつけて来てくれたのかな……

「で、これ食うんか？」

ハンバーガーの包みをさらにマドカの顔に近づけながら、ロランは煙草の火をアスファルトの上で揉み消した。

「たっ、食べます!」

「おい!こら!待て!これ一個しかないねん!」

「えっ…?」

ロランの手から奪い取ったハンバーガーの包みをマドカがじっと見つめていると、彼の大きな瞳が近づいた。
吸い込まれそうな、深い、そしてどこか寂しそうな藍色の瞳。

「だから、半分こな」

ロランはマドカの手からハンバーガーを受け取ると、それを半分に割って手渡した。

「俺、チーズバーガーはダブルって決めてんねん。ピクルスが二枚入ってるところが、ええやろ?」

にっこりと微笑むロラン。

ロランの整った美しい顔立ちがほんの少しだけ柔らかく崩れる瞬間。

マドカはこの笑顔をもっと見たい、と思った。

ただ純粹に、ロランに惹かれている自分がそこにいた。

第二章 星の見えない夜（1）

「マドカちゃん！原稿！」

オフィスに響く松田の声。

原稿の締め切りを前日に控えた社内は猛烈に忙しい。

朝から晩まで威勢のいい松田の声が、マドカの頭上に漂っていた。

七月一日、ラクテのメジャーデビューまで一週間。

結局、取材のほうはマドカの心配をよそにスムーズに進んだ。

メンバーとマドカのあいだに横たわっていた溝も取材を終える頃にはすっかりと取り払われ、メジャーデビューを果たす彼らのことをマドカは心の底から応援していた。

いくら初の大仕事とはいえ、これほどまでに担当したミュージシャンに感情移入してしまうのはマドカにとって初めてのことだった。

インタビューで彼らが語ったひとつひとつの言葉は、数日経った今でも鮮烈な印象を残している。

「はあ……」

梅雨明け間近の真っ青な空に浮かぶ雲を頼杖について眺め、マド力は溜息をつく。

「マド力ちゃん、最近ため息多くない？」

「そ、そうですね？」

「だいぶ疲れてるみたいだね」

確かにここ数日の徹夜に加え、どうしてもロランのあの笑顔が頭から離れないのだ。

「そんなマド力ちゃんに、電話だよ」

松田の声に顔を上げ、マド力は急いで受話器を受け取った。

「はい、お電話変わりました。吉井です」

「…マド力…ちゃん？」

受話器の向こうは騒がしかった。
大勢の話し声と、楽器の音が響き合っている。

「マドカちゃん、聞こえる？」

「あ、はい……」

マドカは顔をしかめながら受話器を持ち替えた。

「ラ・ヴォワ・ラクテのタツです」

「……タツさん？どっ、どうしたんですか！？」

「いや、マドカちゃんどうしてるかなと思って。てのは半分冗談でね……あのさ、今ね、リハーサル中だったんだ」

どおりで騒がしいわけだった。

「でね、シンとも話してたんだけど、マドカちゃん七月七日の夜って空いてる？」

「七月七日ですか？」

「そう、七夕の日」

デスクに放り投げてあったシステム手帳をぱらぱらとめくり、マドカは七月のカレンダーを開いた。

「夜ですよ、ね。18時以降ならなんとか大丈夫そうですね……」

「空いてる？ならさ、オレたちのライブ見に来ない？」

「えっ、いいんですか!？」

ガシャン……!!!

勢いよく立ち上がった衝動で、騒々しい音を立てて椅子が床に倒れた。

松田が渋い顔をしてマドカを見上げ、呆れたように笑っている。

「マドカちゃん？大丈夫？」

「だ、大丈夫です！絶対に行きます！七月七日、18時ですね!」

太陽はすっかり真夏の顔をしている。

初めてロランに交差点で出会った雨の日から、一ヶ月が過ぎようとしていた。

この一ヶ月で、マドカは人生で一度も味わったことのない充実感を覚えた。

任された仕事をやり遂げた達成感、才能あるロックバンドとの交流。

そして何より、偶然にしては出来過ぎているくらい運命的な、ロランとの出会い。

それはまるで海底を泳ぐ魚のようにひっそりと、それでも確実に子供でも大人でもないマドカの心に変化をもたらしていた。

「暑い……」

仕事の打ち合わせを終えて、マドカは遅い昼休みにオフィスの近くにある公園へ気晴らしに出かけた。

緑が多いこの公園は日陰も多く、静かで心地が良い。

午後の日差しを遮る木々の葉は、本格的な夏を迎えようとする都会の生温い風を、心地良く透き通る風に変えてくれる。

コンビニで買ったパンとアイスティーを抱え、マドカはいつものベンチに向かった。

太陽の光を浴びてきらきらと輝く噴水が見える、お気に入りの場所だ。

あれ？先約かなあ…

いつものベンチにはすでに誰かが腰を下ろしていた。

楽しみがひとつ減ってしまったような気持ちで、マドカは仕方なく隣のベンチに座る。

午後二時の強い日差しが葉の隙間から洩れ、マドカの白い腕に光を落とした。

ここだと日焼けしそう…

マドカは園内をぐるりと見渡し、他に空いたベンチを探した。昼時はとくに過ぎているのに、大好きな場所が使えないのは寂しい。

「いつもの特等席が一番なのにな…」

マドカは肩を落としてつぶやくと、数メートル先に見えるあのベンチに視線を向けた。

ロラン…？

まさか……、ロランに九段下の公園は似合わない。

そう勝手に納得し、マドカはアイスティーの紙パックにストローを突き刺した。

見覚えのある横顔。

男性は足を組み、膝の上にスケッチブックのような大きなノートを広げて何やら書き物をしている。

耳まで伸びたブラウンの長い髪が頬にかかり、正確な表情は掴めない。

けれど、彼の存在はマドカの心を乱した。

絵でも描いている人なのかもしれない。

さらさらと器用に鉛筆を動かす彼は、スケッチブックから顔を上げる様子はなかった。

少しでいいから、こっち向いてくれないかな…

心の中で念じながら、マドカは昼食のメロンパンを頼張った。

時折吹く風が彼の前髪をふわりと上げた。

横目でその様子を伺い続けるマドカの気持ちをよそに、彼がこちらの視線に気づく気配は全く感じられない。

しばらくすると、マドカの想いが通じたのか彼は鉛筆を動かす手を休めた。

ジーンズのポケットからくしゃくしゃになった煙草を取り出す。

フィルタに形の良い唇をはさみ、ジッポで火を点ける。

「ロラン！！」

思わず口にした彼の名前。

男性は静かに顔を上げ、こちらを向いた。

「こんにちは」

ロランは目を覚ました幼い子供のように軟弱な瞳で、ぼんやりとマドカを見つめていた。

「こんにちは」

マドカはアイスティーの細いストローに唇を押し当てたままの格好で、蚊の鳴くような声で答えた。
それが精一杯だ。

「そこ、日焼けしない?」

ロランは目を細めて、マドカの腕に落ちる光の筋をたどった。

「あ…、はい…ちょっと暑い…です」

小さな声で答えると、マドカはひらひらと揺れる葉の隙間からのぞく水色の空を見上げた。

「こっち来れば?」

「えっ、でも…」

ロランはベンチの右側に寄り、左側に半分ほどのスペースを空けた。

「ほら」

そう言っ、彼はベンチをぽんぽんと叩く。

「あの…、す、すみません……お邪魔します…」

メロンパンの袋とアイ스티ーのパックを持ってマドカはロラン

の隣に腰を下ろす。

緊張という言葉では推し量れないほどの心拍数がマド力を襲う。

夏の太陽が、マド力の周りだけぐんぐんと気温を上げていく。

「なんか…」

「ん？」

「よく会いますね、しかもこんなところで…」

「そう？」

ロランは煙草を持ち替えると、ベンチに軽く叩きつけた。

灰がぱらぱらと地面にこぼれ落ち、いくつかの粉末は風に流された。

「明日ですね、デビューライブ。本当に、おめでとうございます」

「ああ…」

共通の話題も見つからず、二人の会話はすぐに途切れてしまう。

何か話さなければいけないと思えば思うほど、緊張でマド力の体

温は上がった。

「今日はお休みなんですか？」

「んー…、21時からラジオの生出演。それまで放浪中」

マドカはメロンパンを頬張り、アイスティーで流し込んだ。

緊張で味なんてしない。

「君は？」

「え？」

「仕事中？」

「は、はい…！今は遅い昼休みです」

マドカの返事を頷きもせず聞き流して、ロランは噴水の水飛沫を目で追っている。

二人の頭上を、大きな音を立ててヘリコプターが飛んでいった。

「そういえば…さつき何を描いていらしたんですか？」

マドカはロランの横に置かれたスケッチブックに目をやった。

「ああ、これ？」

スケッチブックを広げてマドカの前に差し出すと、ロランは煙草の火を消してベンチの背にもたれかかった。

「これ…、ロランが描いたの？」

「そうやけど？」

そこには目の前に広がる風景がそのまま収縮された世界が忠実に描かれていた。

噴水とイチヨウの木、広場を取り囲むベンチ、遠くに戯れるハトの姿……

マドカは大きく輝く瞳をさらに見開いてロランの顔を見つめた。

「すごい…素敵！私、こんなに一枚の絵に感動したの初めて」

興奮で涙目になりながら、マドカは絵の中の噴水と目の前の水飛沫を交互に眺めていた。

「それ、ただのスケッチやで」

「ううん、そんなことない！だって、この噴水から湧き出る水の光を浴びた感じとか、ハトの斑点模様とか……誰でも描けるものじゃないわ」

「ここのベンチから眺める噴水が一番綺麗に見えるんだ。ほら、その木とのバランスだって最高に良いしね」

私も、このベンチから見る景色が一番好き……

「ロランさんって、すばらしい才能に恵まれた方なんですね」

マドカがにっこりと笑うと、ロランは肩をすくめて足を組み替えた。

「クロード・ロランっていう画家がいるんだ」

「クロード・ロラン？」

「そう、古いフランスの風景画家。ボーカリストとしての俺の名前、彼から取ったんや。知ってる？」

マドカは首を振った。

「ごめんなさい。あまり絵画に詳しくなくて…でも、素敵な名前。ロランって…素敵な名前ですね」

マドカの言葉にロランはにっこりとしたずらな少年のような笑顔を見せた。

マドカが大好きな、無邪気な屈託のないその笑顔。

「あのさ、どっちでもええんやけど…君、さっきからロランって言ったりロランさんって言ったり、結局どっちなん？」

スケッチブックを閉じ、ロランは二本目の煙草に火を点けた。

「あ…ごっ、ごめんなさい！ロランさんです…！」

「まあ、好きなように呼べばいい。俺は何て呼ばれても逃げないから」

口元に絶えず微笑を浮かべるロランの傍にいられることが嬉しくて、マドカは彼の隣で呆然としていた。

煙草の煙が風にたなびいて、夏の午後に飲み込まれていく。

マドカはふと我に返り、腕時計に目をやった。

「あれ！？やっぱーい！！そろそろ戻らなきゃ！」

マドカは立ち上がり、膝の上に零れたメロンパンの屑をパタパタと払い落とした。

「あの…、今日はありがとうございました。お話できて楽しかったです。とっても…」

ロランは僅かに頷くと、煙草の灰を落とした。

「じゃあ、これで失礼します！」

メロンパンの袋と紙パックのゴミを両手で丸め、マドカは小さく頭を下げる。

「じゃあ、明日な」

「えっ…？」

「明日、君も来るんだろ？ライブ」

ロランの髪が風にさらさらと揺れている。

マドカを見上げたその静謐な瞳は、深海のように穏やかだった。

「晴れるように祈っとけば？天の川…見れるかもしれない」

天の川…見れるかもしれない。

どうか、明日の夜は晴れますように……

天の川が見れますように……

第二章 星の見えない夜(2)

『みなさんこんにちは。FM TOKYO ミュージックリクエストの時間です』

オフィスの古いラジカセをつけ、FM放送にチャンネルを合わせる。

『それでは、本日の一曲目をご紹介します。』

本日、七月七日メジャーデビューのロックバンド、ラ・ヴォワ・ラクテのデビューシングルです。

ラ・ヴォワ・ラクテというバンド名はフランス語で天の川、という意味だそうですか…

今日の七夕は…残念ながら生憎の雨となってしまいましたね。

本日、彼らのデビューライブが行われるそうなのですが、なんとチケットは20分で完売してしまったとか！

今、大注目のバンドです。

今日は雨の夜空になってしまっても、織姫と彦星が雲の上で会えることを祈りましょう！

それでは、ラ・ヴォワ・ラクテで「Stars」………」

マドカはラジオのボリュームを上げた。

緩やかなギターのメロディーが流れ出し、ベースとドラムが力強

いリズムを奏でる。

そして、ロランの甘い歌声が聴こえた。

ロラン…、今日は雨だよ……

マドカは厚く垂れ込めた雨雲を、恨めしそうに見つめた。

「ごめんね、マドカちゃん」

すまなそうに掌を合わせる松田に、マドカは満面の笑みで首を振る。

「いえいえ、気にしないで下さい！私なら、残業くらいどうってことないので」

「でも、マドカちゃん今日はライブの約束があるって…」

午後四時。

急な打ち合わせが入ったという松田から、急ぎの仕事を頼まれて

しまった。

あと二時間で終われる保障はどこにもない。

「いいんですよ、大事な仕事ですからね！それに、私が行っても行かなくてもライブは始まるし、誰も困らないんですから」

「本当にゴメン！この借りは絶対返すからさ」

静かに降る雨の音が、マドカの心の奥までじつとりと染み渡っていく。

ライブ…、行けないや…

晴れるように祈っても、無駄だったかな…

マドカは大きな溜息をつくど、パソコンのキーボードをパタパタと打ち始めた。

朝から降り続いた雨がぱたりと止んだのは22時過ぎだった。
松田を残してオフィスを後にすると、マドカは傘を畳んだ帰り道をゆっくりと歩いて行く。

ふと目に留まった、コンビニのガラスに貼られた一枚のポスター。
ラクテのデビューシングル発売の広告だった。

吸い寄せられるようにしてガラスに近づき、ポスターを覗き込む。

「やっぱり…笑ってない…」

ポスターの中に佇む、すまし顔のロラン。
愁いを帯びたその瞳に、マドカの胸は締め付けられる。

笑った顔のほうが好きなのにな…

「あっ、そうだ！」

閃いたように表情を明るくして、マドカはそそくさとコンビニに足を踏み入れた。

マドカはオフィス近くのあの公園に来ていた。

昼間は会社員の姿が見られるこの公園も、夜になるとオレンジ色の外灯だけが小惑星のようにぼんやりと浮かんでいるだけだ。

「さてと、私は一人でバンドのお祝いでもしますか！」

お気に入りのベンチに座り、マドカはコンビニの袋から缶ビールを取り出した。

勢いよくタブを開け、缶を持つ手にひやりと伝わる冷気が気持ち良い。

「いただきまーす！ひゃあ、うんまい！」

缶の半分程まで口をつけると、マドカは再びコンビニの袋から買ったばかりのCDを取り出した。

慎重にフィルムを剥がし、ケースを開ける。

今日一日で何度耳にしたことだろう。

朝からつけっぱなしのラジオから幾度となく流れるこの曲を、マド力は特別なもののように感じていた。

鞆の中にあるウォークマンを手探りで探す。

無駄に絡みつくイヤフォンのコードがじれったい。

やっとの思いで両耳にイヤフォンを入れ、プレイボタンを押す。

シンの優しく繊細なギターの音、タツのベース、装飾をつけたカ
ヲルのドラム。

ロランの声が耳元に響き渡る。

歌詞カードに小さく載ったロランの横顔に、マド力にはっこりと
微笑んだ。

「綺麗……」

ロランの写真を繰り返し眺めながら、改めてその歌詞をじっくり

と追う。

分厚い雲を突き抜けて／あの小さな星まで君をさらえたなら
まるで永遠のように感じられるだろう
幻想の彼方に浮かぶ／星々の影に隠れ
この銀河の世界の中／そつと瞳を閉じるまで

「なにこれ？まるで、七夕の夜の織姫と彦星の歌じゃん！」

一本目のビールを飲み干し、マドカはリプレイボタンを押した。

「ロランって…意外とロマンチスト？」

自然とにやけてしまう顔を夜空に向ける。

分厚い雲を突き抜けて／あの小さな星まで君をさらえたなら

「でも、言われてみたい気もするな…」

それが自分に向けて放たれた言葉であるような錯覚をおぼえながら、ぼんやりとした意識の中でマド力は三本目のビールを空けた。

雨上がりの夜空。

東京の夜特有の、グレーがかった紫色の夜空。

さっきまで垂れ込めていた大きな雨雲が、ばらばらに散らばっていく。

ロラン…、会いたい……

マド力はベンチの背にもたれ、薄汚れた空気の舞う天を見上げた。

「マド力織姫は、彦星に会えませんでした…」

耳元で鳴り響くロランの歌声は、ほろ酔い気分のマド力を眠りに誘う。

通りを走る車のエンジン音も、遠くに消える電車の音も、マド力の意識を遠退いていく。

ただ、瞳を閉じればそこにロランがいて、今日も静かに微笑みかけてくれるような、そんな気がしていた。

「夜の公園に女の子が一人で酒なんて飲むな」

閉じていた目蓋を静かに開けるマドカの瞳に、べっこつ色のサン
グラスをかけたロランの顔が映る。

あ、あれえ……？

ロラン　？

私…寝ぼけてるんだろうか…？

「何聴いてるん？」

左耳のイヤフォンが抜かれ、ロランの顔が近づいた。

「ロ、ロラン…！」

驚いて立ち上がったマドカの膝から、ウォークマンがガシャンと落ちる。

同時に歌詞カードとCDケースも地面に叩きつけられた。

「あーあ、せっかくのデビューシングルなのに」

ロランは意地悪そうに頬を膨らませると、落ちたウォークマンとCDケースを拾った。

「なっ…、なんで…？」

何も言わず隣に腰掛けるロランに、戸惑うマドカは思わず後退りしてしまふ。

「何が？」

「だっ、だって…、ライブは！？」

「終わった」

ロランは何食わぬ顔でそう言うと、歌詞カードを丁寧にケースの中に仕舞い込んだ。

「終わった…じゃなくて…」

「何？」

「何…って…なんでここに…いるの？」

「居ちゃ悪いん？」

ロランはいつものようにポケットからくしゃくしゃになった煙草を取り出すと、セブンスターを形の良い唇に挟み、ジッポで火を点けようとしてふとその手を下ろした。

「やっぱ、東京の空じゃ晴れても星なんて見えないんやな」

「えっ？」

「ほら、空見てみ」

マドカはロランの指差す先にあるグレーの空を見上げた。

半月が薄っすらとその姿を現しては、散り散りになった雲の間に隠れる。

「晴れるように祈れって言っただろ？まあ、これだけ晴れてたら、星が見えなくても織姫と彦星はちゃんと会えてるんとちゃう？」

ロランはそう言って煙草に火を点けた。

マドカは薄明かりの中に見える、ラインの美しいロランの横顔をそっと見つめた。

口元から細く吐き出される煙は、螺旋を描いて灰色の空に昇っていった。

「それ、聴いたの？」

マドカの掌に乗ったCDとウォークマンを、ロランは首を傾げて眺めた。

「う、うん…」

「これで一枚は確実に売れたことになるわな」

「え…あ、まあ…」

ロランは私をからかいに来たんだろうか…？

予想外の出来事に、マドカは少し戸惑った。

「あの…、これって、七夕の歌？」

マドカはCDジャケットの S t a r s の文字を指差した。

「どうやるな…どう思う？」

「えっ、うん…七夕っばい…」

マドカの答えを聞くと、ロランはふっと声を出して笑った。

「なっ…、何で笑うの!？」

大きな口を開け、綺麗な歯並びをのぞかせて笑うロランを、マドカはじつと見つめる。

笑いすぎて薄っすらと涙目になっているところが悔しい。

「何で…笑うの？」

「だってお前、編集者やる？もっと気の利いた表現できないん？」

「でっ、でも！そこまで笑わなくなっただけいいじゃないですか！」

「ごめん…、君のことからかうと、面白くて」

ロランはそう言って、煙草の灰をぱらぱらと落とした。

「でも、まあそんな感じだろうな。七夕って、一年に一度、願い事

が叶う日やろ?」

目の前に揺れる噴水だけがベンチの二人をひっそりと見つめている。

さらさらと流れる水の音は一段と美しく響いていた。

「ロランは今日、何かお願い事したの?」

「ん?」

「願い事、した?」

サングラスの奥で静かに息づくロランの瞳。

この瞳は今まで何を見て、何を求めて、そしてこれから何を探していくんだろう、とマドカは思った。

「願い事が……君は?」

「……私?」

「さっき、夜空を見上げて何か祈ってたみたいやったから……」

ロランの言葉にマドカは思わず顔を赤くする。

「私は…ただ、晴れるように祈ってただけ…。そうすれば、大切な人に会えそうな気がしたから…」

マドカは恥ずかしそうに俯いて、手の中に眠る　S t a r s のジャケットを眺めた。

「今の、もらい！」

「えっ!？」

「今の、もらってもいい？」

ロランはそう言ってマドカに顔を近づけた。

近づいた彼の体温に圧倒され、高鳴る鼓動の音が聞かれないように、マドカはただそれだけを祈っていた。

「もらって…?」

少し上からマドカの顔を覗き込むロランは、にっこりと微笑んでいる。

「今の、使えそう」

「だから…、何に？」

もうちょっと離れてくれないと…緊張して息ができないんですけど…

「曲のイメージ」

「曲？」

「そう、いつか使わせて。ただ晴れるように祈る、小さな女の子のお話」

ロランがにっこりと微笑んだ。

生温い風が吹き抜け、散り散りになった雲を揺らす。

灰色がかった紺の夜空に、半月だけがぽつんと表情も変えずに消えたり現れたりする23時の空。

「あっ！」

マドカは気づいたように空を指差した。

「星、見えた。すつごく小さな星…今、見えたんだよ!？」

二人はそのままじっと空を見つめ、星が現れるのを待っていた。

けれど、なかなかその小さな星は姿を見せてはくれない。

「もう、厚くなった雲で見えないな」

「うん…、でも本当に見えたんだよ…」

短くなった煙草を靴の底で揉み消して、ロランはベンチの背にもたれた。

「二人はちゃんと会うことができたんやな」

「二人…?」

「君は、二人の願いが叶う瞬間を見たんだね」

織姫と、彦星の…こと?

ロランが言うと、どんなおとぎ話でも生き生きと現実味を帯びる。

彼の幻惑した美しさは、青白い光を放つ月の下で、音も立てずに震えているみたいだった。

「なあ…キス、したくない？」

マドカは思わずロランの横顔を見つめ返した。

何一つ変わらないロランの表情は月明かりに照らされて、いつもより一段と美しく見える。

「キスしようか」

優しい視線を絡め、ロランはマドカに向き合った。

「あ、ちょっと待って。これじゃ雰囲気出ないやろ？」

ロランはそう言ってサングラスを外した。

マドカを撫でるように優しく見つめるその二重の瞳は、どこか強引な強さをまとうていた。

「ロラン…」

マドカの頬に手が触れる。

その華奢な体には似合わないほど、ロランの手は大きく、指先はこつこつと骨張っていた。

指先が唇に触れ、硬直したマドカの体が一瞬揺らぐ。

ロランは指は穏やかな波のように、ただ静かにそこを這っていた。

マドカはきつく瞳を閉じた。

「可愛い唇やな」

瞳を閉じたまま、マドカはロランに指に翻弄される唇を噛み締める。

「キスしたい…？」

ロランが意地悪そうに質問する。

「して欲しい？ちゃんとして欲しいって言わなきゃ、分からないやろ？して欲しいん？」

マドカは戸惑いながらも、小さくこくりと頷いた。

「フレンチとディープ、どっちがええ？」

ロランの意地悪な質問は続いた。

唇の上をなぞるロランの指先が愛しい。

マドカは静かに息を呑んだ。

「どっち？」

「フレンチ…」

短くさりげない、シンプルだけど優しいキスだった。

ロランの腕が背中に回され、マドカはふわりと抱きしめられる。

「羽みたいやな…」

「羽…？」

マドカは腕の中で小さく丸くなりながら、ロランの美しい顔を見上げた。

「柔らかくて、温かい。だけど…興味本位で触れてしまったら、すぐに壊れてしまいそうなくらい脆い羽」

湿り気を帯びた夜風がロランの長い髪を揺らし、マドカの頬を悪戯にくすぐる。

ロランの煙草の香り。

煙草の匂いは大嫌いだったけれど、ずっとこの香りに包まれていたい。

ロランを彩るすべてのものを、望遠レンズで覗きたい。

その色や形、香りをもっと近くに感じることであればいいのに…

「願い事…」

ロランはその美しさが凝縮されたように優しい曲線で象られた耳を、マドカの頬にぴたりと寄せた。

「俺は、羽が欲しい」

「ロラン…。どうして？どうして、羽なの？」

指先に絡めたマドカの髪を丁寧に撫でると、ロランは寂しそうにうつむいた。

「羽があればどこにだって会いに行ける。星のない夜でも君をさううることができる」

この銀河の世界の中、そっと瞳を閉じるまで。

第二章 星の見えない夜（3）

フライパンで目玉焼きが焼ける音でマドカは目を覚ました。

懐かしい朝の匂い。

母親が朝食を準備してくれていた学生時代を思い出す。

制服に着替えて、バタバタと家を出たあの頃。

でも今は違う。マドカは上京して一人暮らしの身だ。

あれ……？

寝惚けた目をこすり、見慣れたはずの部屋を見渡してみる。

ここ……、どこ？

板張りの六畳の部屋。

14インチのテレビに、空になった缶ビールと、セブンスターとジップが置かれた小さなテーブル。

テレビ台の脇に、古いスケッチブックが二冊重ねられている。

窓際にはギターが三本立てかけられ、そのうち一本はアコースティックギター。

どれも丁寧に手入れされていて、上品な艶を放っている。

カーテンは前の住人が置き忘れたのか、だいぶ色褪せていた。

なっ…、なにこれっ！！

マドカはベッドから起き上がると、自分が何も身に付けていない姿だということに気づいた。

記憶の糸をたどる。

けれど、何も思い出せない。

重い頭を上げ、マドカはこめかみの辺りを強く押さえた。

「起きたみたいやな」

ガラス戸で仕切られた簡素なキッチンから、ロランの声がした。

「よく寝てたから起こさなかったんやけど」

トーストと目玉焼きを乗せた皿を持って、ロランが部屋に入ってくる。

マドカは足元に丸められたタオルケットを首まで引っ張り上げ、眼鏡をかけたロランの顔を見つめた。

「どうしたん？ 狐につままれたみたいな顔して。牛乳買い忘れてたから、オレンジでいい？」

ロランはそう言って再びキッチンに戻ると、グラスにオレンジジュースを注いで持ってきた。
抜けるような果汁の色が眩しい。

「…説明…して」

「説明？」

「そう、説明…」

タオルケットを引っ張り上げながら、マドカは壁にもたれる。

ロランは立ち上がり、カーテンを開けて外の風を入れた。
むっとした空気と夏の匂いが混じりあった微力な風が、はらはらとカーテンの裾を揺らした。

「説明って、どこから説明すればいいん？」

「どこって…」

「覚えてないんか？」

マド力は縦に首を一回振った。

「困ったな」

ロランはテーブルの上に散らばった空き缶を集めてキッチンのゴミ箱に捨てると、冷蔵庫からマーマレードの瓶を取り出して溜息をついた。

「なら、どこまで覚えてるん？」

「コンビニ…。コンビニでビールとCDを買って…公園に行った。そこまでしか…覚えてない…」

「じゃあ、その後のことは全く覚えてないわけやな」

ロランはマーマレードの瓶の蓋を人差し指でコツコツと叩いている。

それは恐ろしいほど確実に、一定のリズムだった。

「だったら、何でここにいるのかも分からないやろ？」

マド力は再び縦に首を大きく振った。

「簡単に言うと、お前が公園で寝てたから連れてきた」

「寝て…た？」

マドカには身に覚えのない話だった。

「お前が公園のベンチですやすや寝てたから連れて帰ってきただけや」

タオルケットを握る手に力がこもる。

「じゃあ…なんで？なんで…裸なの…？」

「それも覚えてないんか？」

マドカは静かに頷いた。

「それは、お前が自分で脱いだ。お前が自分で脱いだんや」

「嘘…、信じられない…」

ロランは床に座るとマーマレードの蓋を開けて、オレンジ色の粒をトーストに塗り始めた。

「だったら…、私が眠っているあいだ、あなたは何をしていたの…？」

微かに床を覆う光の影がカーテンの裾の揺れに合わせて大きくなり、そしてまた小さくなった。

眠気と訳の分からない疲労でぐったりとしたマドカの顔に、ロランの視線が静かに注がれる。

マドカはタオルケットに包まれた足の指をゆっくりと動かしてみた。

これは夢の延長かもしれない。
そう思う気持ちも、ないわけではなかった。

「俺はここで飲んだ。君がベッドで寝息を立てているあいだ、俺はこっちで起きてビールを飲んでたんや。君がこのまま目を覚まさないかもしれないって心配やったし、目が覚めた時、この状況を説明せなあかんと思ったから」

穏やかな風に乗って漂う細かな塵が、光の粒子となって部屋の中

を支配していた。

殺伐とした空気を感じ取るように、アパートの外で犬の鳴き声があった。

「…どうして？どうして…放っておいてくれなかったの？」

マドカはロランの顔を見下ろした。

蓋が開けられたままの瓶から、金色のマーマレードがこちらを向いている。

「放っておけるわけないやろ。昔、友達に酒を飲んで別れて、次の日の朝ぱたりと死んでしまった奴がおった。俺が公園で君を見つけた時、君の横には空になった缶ビールが三本転がっていて、ずいぶん気持ちよさそうやったしな」

ロランはマーマレードの瓶に蓋を乗せ、果肉のたつぷりといったトーストに齧り付いた。

彼の口元から軽快な音が聞こえてくる。

マドカの瞳にうつすらと涙が浮かぶ。

混沌とした記憶をいくら掘り下げてみても、どこまでが事実の境界なのか…見当もつかなかった。

「とりあえず、その服着れば？」

ロランが示す指の先に、脱ぎっぱなしになったマドカの洋服が散らばっていた。

薄手の水玉模様のブラウスに、白のタイトスカート。

そして白いレースの下着。

「見ないで…」

マドカの声が震える。

「服…着るから。こっち…、見ないで」

ロランはマドカに背を向けた。

布擦れの音を後ろに聞きながら、トーストを齧り、床に落ちたパン屑を指先で集める。

肌と布が触れ合う微かな音は、やがてマドカのすすり泣く声に変わった。

「…帰る」

全ての服を身につけると、マドカは足早に玄関へ向かった。

狭い玄関には、マドカの白いパンプスと磨り減ったロランのワーカーブーツが並んでいた。

急いでパンプスに両足を引っ掛けるとドアノブに手をかけて、マドカは立ち止まる。

背後にロランの視線を感じる。

あの大きな美しい陰影を含んだ瞳で、ロランは私を見ている。

「何も…何もしてない？」

ロランに背を向けたまま、マドカはほとんど誰にも聞こえないような声で呟いた。

ロランが立ち上がり、近づいてくる。

音も立てずにゆっくりと、マドカの後姿をロランは静かに見つめた。

「一人で帰れるん？」

それは優しい言葉でも、弁解の言葉でもなかった。

「ここを出たら右に歩いて最初の十字路を左。しばらくすると大通りに出るから。そしたらすぐあの公園やで」

どうしていつもロランが傍に居るとこんなに苦しくて、何も言えなくなってしまうんだろう。

ただ、その意地悪な優しさが…痛い。

そうやって突き放すみたいなお優しいふりをして、私をからかっているんだ。

「ずるいよ、ロラン…」

マドカは頬に残る涙の跡を掌で拭い、唇を噛み締めた。

「なあ…、信じてくれとは言わへん…けど、素敵な夢、見てたんやな」

素敵な夢…？

「信じる、信じないは君次第やから」

ロランの声が遠くの空から聞こえる。

微かに伸びる光の筋をたどって、高く上った夏の太陽が腫れた目蓋をちくりと刺す。

マドカは静かにドアを開いて外に出た。

私は、自分の姿を見失いつつあるのかもしれない。

マドカは睫毛を伏せて、深い溜息をついた。

第三章 解けない魔法（1）

「ねえ、智樹」

夏も本番を迎えた昼下がりに。街に響く、今年一番の蝉の声。

昼休み、マドカは久しぶりに智樹を食事に誘った。

「ねえ…、智樹」

「何だよ」

混合合い始めた店内は、昼時の会社員やOLでごった返している。

窓際の禁煙席に案内された二人は窓の外を眺め、パスタとハンバーグのAランチが運ばれてくるのを待っていた。

智樹が煙草を吸わないことに、マドカは少しほっとした。

ロランに出会ってからというもの、マドカは男性が煙草に火を点ける仕草を見ると、どうしても彼の姿を思い浮かべてしまうのだ。

「お前、食欲ないの？もう夏バテ？」

ハンバーグのデミグラスソースを口の脇につけながら、智樹が言う。

「うん…最近、食欲ない…」

「お前、今から夏バテってキツイぜ。パスタ、食わないんなら貰ってもいい？」

智樹がパスタの皿を移動する。

マドカの前に、跡形もなく綺麗に食べ尽くされたパスタ皿が置かれた。

「これ、めちゃくちゃウマイのに」

智樹はマドカの分まで美味しそうにたいらげる。

「幸せそうな奴…」

悩みとは無縁のような智樹を見て、マドカは心底そう思った。

ウェイトレスがやってきて、食後のコーヒーを置いていく。

「あれ？お前、コーヒー飲めたっけ？」

智樹はマドカに出されたコーヒーカップを珍しそうに眺めた。

「飲めない。けど別にいいよ、何も飲みたい気分じゃないし」

ミルクと砂糖を入れ、智樹はデミスプーンでコーヒーの海にくるくると小さな渦を描いている。

「でさ、さっきから何？なんか話したいことがあるなら言えって」

切れ長の智樹の目が、マドカの表情を鋭く伺う。

「悩み事？あ、もしかして…男の話か？」

図星だ…。

鼻を刺すコーヒーの香り。

マドカのカップに注がれたコーヒーの海は、ひっそりと口を噤んでいる。

「あ、なあこの曲さ、こないだのバンドのやつだろ？」

店内に流れる有線は、ラクテの「Stars」を流していた。

「結構このバンド、話題になってるよな？」

「うん…」

「そっいや、バンドの取材、うまくいった？」

黙り込むマドカの表情を伺いながらコーヒーを飲み干し、智樹はウェイトレスにおかわりを頼んだ。

「なーんか今日のマドカ、元気ないな」

窓の外を、ノースリーブシャツに身を包み、美しい肌を見せる女の子たちが通り過ぎる。

夏はまだ、始まったばかりだ。

「智樹…」

「ん？」

「男の人ってさ…、どこまで信じていいのか…分かんない」

「どうした？」

退屈そうに頬杖をついていた智樹は表情を変える。

「うん…ちょっとね」

ウェイトレスがやって来て、コーヒーのおかわりをカップに注いで離れていく。

「ねえ、智樹…、智樹に聞くのも間違ってるかもしれないけど…智樹だったら…どんな時に女の人に“信じて”って言う？」

「は？なんだよ、その質問。どんな時って言われてもなあ」

智樹はテーブルの上に置かれた六つ折りのペーパーを陽気に折りたたんでいた。

店内は客の笑い声と、食器の触れ合う音でいっぱいだった。

さっきまで天井のスピーカーから流れていた有線も、途切れ途切れにしか聞こえない。

「うーん…まあ、相手によりけりじゃん？」

「相手によりけり？」

「うん」

「そ、相手によりけりだよ。相手によりけりってのはな、俺だったら…そうだな、本気で相手のことを想ってるんなら、軽々しく“信じて”なんて言えねーけど」

「どうして？」

「だってさ、信じないほうが相手のためだってこともあるだろう？まあ、結局のところさ、信じてって言ったって、女ってのは疑ってかかるんだよな」

得意げに胸の辺りで腕を組みながら、智樹は一人で頷いている。

頭上から吹き付ける空調の風が、マドカの肌をひやりとさせた。

「だったら…、信じる信じないは君次第、って言われたら…どうすればいい？」

眉間に皺を寄せて真剣な表情で質問するマドカに向かい、智樹はぷつと噴き出した。

「お前さ、バカじゃねーの？」

大げさにお腹を抱え、むせ返る真似をする智樹にマド力はむっとした。

「お前さー、お前次第って言われたら、お前次第なわけ。てゆーか、俺こんなに笑ったの久しぶり」

周囲の視線もお構いなしに笑い続ける智樹を前に、マド力は顔を赤くした。

「なあ、いいか？マド力。これから俺の言うことを、よく覚えておきなさい」

一転した智樹の真面目な姿勢に、マド力は慎重に頷いた。

「あのさ、人生ってさ、面白いもんで一生にどれだけの人間に出会えるか分かんないわけ。編集者として働いてるお前なら、人と人の繋がりが、どれだけ大切なものか身に染みて分かるよな？」

マド力は頷いた。

「恋愛だっておんなじなんだよ。いいか？相手の人生っていう一本道で、お前がただの通行人になるか寄り道先の知り合いになるか、それとも、じゃあ一緒に歩きましょうか？って言われる人間になるか、どれをお前が望んでいるのか。それを考えてみれば、答えは自

ずと出るはずだ。

お前のことをよく知ってる、親友の俺がお前に言ってあげられるのは、それだけだよ」

夕立のあとの空。

色紙のように真つ青な昼間の面影はどこにもない。

オレンジ色の夕日と、やがて訪れる夜の闇を思わせる藤色の空。
ビルの影が灰色に染まり、足早に家路を急ぐ人たちの姿が見える。

オフィスの窓から、マドカはアスファルトの地面を見下ろした。

ちっぽけな人の群れと、通りを飾る道路標識の文字。
エアコンの風が湿度の高い社内を横切る微かな音。

夕暮れは街を彩るすべてのものが愛しく思える時間だ。
寂しさを抱えた都心の日々を、闇の奥底に沈める夕日。
さよならのうしろに、ほんの少しだけ赤い希望の光を照らしてくれる。

通用人になるか、寄り道先の知り合いになるか。

智樹の言葉に、マドカの心の混線が少しずつほどこけていく。

私はロランの人生のほんの通過点にすらその姿を留めることができないのかもしれない。

すれ違っても、きっとロランは目もくれないだろう。

それでも、ロランはほんの一瞬だったら……

気づいたふり、してくれるのかな……

私に、

笑いかけてくれるのかな

仕事を終えてオフィスを後にすると、外はまるで天然サウナだった。

都心を不慮の事故みたいに襲った夕立は、涼しさをもたらすどころか、さらに蒸し暑さを増強させたのだ。

19時半なのに、まだ昼間みたいに空が明るい。

うだるような暑さでまっすぐアパートに帰る気にもなれないマドカは、あの公園に来ていた。

噴水の水飛沫を眺め、わずかに吹く生温かい夜風に涼む。

ベンチにもたれると、映写機がスクリーンに映し出すように、ふと目の前を横切るロランの面影。

からっぽに空いた左側のスペース。

ミステリアスなベールをまとった、セブンスターに火を点ける優雅なロランの姿。

目を閉じれば、彼の流れるように美しいすべての仕草が、鮮やかな色彩とともに蘇る。

信じる、信じないは、君次第。

ロラン…、本当はあの日、もしあなたに抱かれていたとしても、それでもいいかなって思ってる。

でも、記憶の断片にロランに抱かれた思い出が存在しない私はこれからどうすればいい？

何も覚えていない私は、空っぽになって転がっていた缶ビールと同じだよ。

だけど…、ロランは初めて会ったあの日も、私のこと助けてくれたよね？

ただ純粹に、その優しさが嬉しかったから…

ただ純粹に、その優しさが嬉しかったんだよ、ロラン…

気がつくと、マドカはロランのアパートの前に立っていた。

何が自分をここまで駆り立てるのか、そんなことはどうでもよかった。

ただ、ロランに会って謝りたい。
少しでも、ロランを疑ってしまったことを、謝りたかった。

でも本当は…、
会話なんて何もなくてもいいから、ただロランの顔が見たかった
だけなのかもしれない。

もう一度、隣で煙草に火を点ける、ロランの姿が見たかっただけ
なんだ。

寂れたアパートの二階。

マドカは部屋の扉を叩いた。

コンコン

拳の音が虚しく響くだけ。

マドカは玄関脇のキッチンの曇りガラスを凝視してみる。

デビューして一ヶ月。

仕事が立て込んでいるのかもしれない。

もう一度、小さな握り拳でドアを叩く。

コンコン

マドカは思い切ってドアに手をかけた。
背後に差す夕日が、銀色のノブに当たってきらりと反射する。

マドカは恐る恐るドアを手前に引いた。

「こんにちは」

あの朝と同じ狭い玄関に、シンクの光るキッチン。

足元にはロランのワークブーツが揃えられていた。

もしかして、いる…？

「こんにちは」

さっきよりも声を張り上げて部屋の中に呼びかける。
キッチンと部屋を仕切るガラス戸で、中の様子はぼんやりとしか
見えない。

「お邪魔しても、いいですか？」

部屋の空気は淀み、灼熱のような暑さが充満していた。

おそらく、外のほうが涼しいだろう。

マドカはミユールを脱いで足元に揃え、玄関に上がった。

部屋の暑さとは反比例して、ひんやりとする板張りの床。

シンクには水切りの上に並べられた二枚の皿と、グラスが一つ置
かれている。

「こんにちは」

マドカはもう一度呼びかける。

夕闇にひっそりと包まれる部屋に、開いた窓の隙間から小さく差し込む光。

闇と夕日のあいだをすり抜ける、板張りの床に柔らかく落ちる影。

むっとした空気が、マドカの体に絡みつく。

キッチンを横切り、わずかに開いたガラス戸の隙間から、マドカは部屋の中を覗いた。

まるで、夢の中に置き忘れた、大切なもの確かめるみたいに。

「ロラン！ねえ、ロラン！！どうしたの！！？」

マドカの目に飛び込んできたロランの姿。

ベッドの上で小さな体を折り畳むようにうずくまり、頬には大量の汗が浮かんでいる。

「ねえ、ロラン！！大丈夫！？」

持っていた鞆を投げ出して、マドカはベッドに駆け寄った。

「ロラン！ロラン！！しっかりして！！」

頬をパシパシと叩くが反応がない。

「ねえ、ロラン！！しっかりして！！」

マドカは掌をロランの額にあてた。

「すごい汗……なにこれ……ひどい熱じゃない！」

ロランの体はまるで煌々と燃える太陽の一部みたいに熱く、汗でTシャツがぐっしりと濡れてしまっている。

「ロラン！！しっかりして！」

冷蔵庫からミネラルウォーターを探し、ロランの口元に持っていく。

「ロラン、お水！飲まなきゃダメ！」

部屋の暑さと高熱で意識が朦朧とするロランの唇の上に、マドカはミネラルウォーターを数滴垂らした。

「ねえ、ロラン…クーラーは!？」

マドカは薄暗い部屋を見渡した。

「もしかしてこの部屋、クーラーないの…？」

風を求めて窓を全開にするが無駄だった。

部屋の中は軽く40度は越えているだろう。
ロランは虚ろな瞳で天井を眺めている。

「どうしよう…これじゃ、ロランが…」

テーブルの上に置いてあった広告紙で、ロランの顔を煽ぐ。
さわさわと頼りない音を立てて、薄っぺらな紙はあっという間に歪んでしまう。

「あっ! そうだ…!」

マドカは勢い良くその場に立ち上がった。

「ねえロラン、ちょっと待ってて！すぐ戻って来る！それまで我慢しててね！」

マドカは急いでミュールを引っ掛け、アパートの階段を下りていく。

急がなきゃ…！！

「松田さん！！！」

「マドカちゃん？」

唐突に扉が開き、大きく息を弾ませたマドカの姿に、松田は驚きで息を呑んだ。

「松田さん…うちの会社に、扇風機…ありませんでした？」

息が上がってうまく喋ることができない。

これほど全速力で走ったことなど今までなかったかもしれない。

手をかけたドアノブに体重を預け、マド力は脇腹を押さえた。

「あるけど…マド力ちゃん、大丈夫？」

「平気です…！お借りしても…」

「ああ、いいけど…」

「お借りします…！」

編集部の隣にある四畳半の倉庫。

マド力は真つ暗な部屋の明かりを点けた。

急がなきゃ…！！

古くて使い物にならないワープロの脇に、マド力は見覚えのある
三枚の羽を見つける。

取っ手を掴み、オフィスの廊下をずるずると引きずった。

「あ、あれもだ！」

おそらくロランの部屋には体温計もないだろう。
風邪薬も常備していないに決まってる。

バファリンって…風邪にも効くんだよね…？

プラスチック製の救急箱からデジタルの体温計とバファリンの箱
を持ち出す。

松田に挨拶するのも忘れ、マドカは重い扇風機とともにエレベ
ーに乗って通りに出た。

ロラン…！待ってて！

ベッドから離して置いた扇風機が、ロランに生温かい風を送る。

マドカはキッチンの収納棚を開けていた。

蛍光灯の明かりが、仰向けになったロランの体を半分だけ照らしている。

氷水で絞ったタオルを額に乗せたロランは、朦朧とする意識がどこか自分とは別の場所でゆっくりと溶けていくような感覚の中にいた。

キッチンから微かに聞こえてくる物音は、遠退いたり近づいたりを繰り返している。

「ロラン、お湯沸いたよ」

お湯を張った洗面器を抱えてマドカは部屋に戻る。

「ロラン…今、体拭いてあげるね」

ロランの上半身を起こし、汗で湿ったＴシャツを脱がせる。

熱いお湯でタオルを絞り、マドカはそっとロランの体に触れた。

適度に筋肉のついた、細い腕と胸。

華奢だけれど男を感じさせる背中に、マドカはほんの少し戸惑う。

けれど、今は余計なことを考えている場合じゃない。

マドカは視線をそらし、ロランの体を拭いていった。

「ロラン…、これで少しは楽になるよ」

押入れの中から適当な着替えを探して、寝癖でくしゃくしゃになったロランの頭にマドカはシャツの首を被せた。

「これで、すっきりしたでしょ？」

腫れぼったい、虚ろなロランの瞳を覗く。

あとは、食事だね…

マドカはタオルと洗面器を持って立ち上がった。

「ロラン、起きれる？」

白い器に盛り付けられた卵粥。

柔らかく立ち昇る湯気が、扇風機の微風に揺れている。

「ロラン、ちゃんと食べなきゃダメだよ。少しでもいいから」

ベッドの傍に駆け寄り、マドカは額のタオルを取り替える。

部屋の真ん中で、卵粥の湯気だけが楽しそうに空気中を泳いでいる。

「煙草…」

ぐったりとしたロランが口を開いた。

「煙草…吸いたい…」

細くかすれた声で、仰向けになったまま、ロランはテーブルに手を伸ばす。

マドカは力ないその手を、両手で包み込むようにしてぎゅっと握った。

「ロラン、お願い。少しでもいいから、何か口にしないと…それ以上痩せてどうするの…」

結局、ロランは卵粥を二口食べただけで、薬を飲んで寝てしまった。

38度8分。

23時を過ぎても、ロランの熱は下がりそうにない。

終電の時間を気にしながら、マドカは額のタオルを氷水で絞って交換し、何度か熱を計った。

部屋の明かりを豆電球にして、寝息を立てるロランの顔を見つめる。

「子供みたい…」

意地悪で近寄りがたい美しさを放ついつもの面影は消え、そこにはただ可愛い少年の顔をして眠るロランの姿があった。

「ロラン…私、そろそろ帰るね。終電なくなったら帰れなくなっちゃうから…」

寝返りを打つロランの枕元でそう言うと、マドカは静かに立ち上がった。

もう一度、穏やかなロランの寝顔を振り返る。

心配だけど、別に私…、ロランの恋人でも何でもないんだもんね…

言い聞かせるように頷くと、マド力はベッドに背を向けて玄関に向かった。

「…行かないで」

ふと、ロランの手がマド力の手を弱々しく掴んだ。

まるで空気の一部に触れられているみたいに、ロランの柔らかな体温がマド力の指先を包んでいく。

「行かないで…」

重い目蓋を開き、ロランは軟弱な瞳でマド力を見つめている。

「そばにいて…」

腫れた目蓋がそつと重なり、瞳が閉じられた。

「ロラン…、私…どこにも行かないよ」

その言葉がロランの耳に聞こえたのかは分らない。

マドカはロランの手をぎゅっと握り締め、再び傍に寄り添った。

東の空が明るさを増した午前五時。
マドカは静かに部屋を出た。

気分はどうですか？

ガスコンロの上にあるお鍋には、お粥が入っています。

冷蔵庫にはヨーグルトや缶詰など、食べやすいものを入れておきました。

心配なので、また夜にでも来てみます。

マドカ

第三章 解けない魔法（2）

カンカンカン

アパートの階段を上る。

すっかり薄暗くなってしまった辺りには、家々の黄色い明かりが灯り始めている。

近所のスーパーで買った夕食の材料を抱え、マドカはロランの部屋を訪れた。

昨日より大分涼しい。

右から左へ移動する夜風がスカートの裾をはためかせる。

だいぶ遅くなっちゃった…

部屋の前に立ち、古びた茶色のドアを見つめる。

どこかの部屋から洩れる夕飯の匂い。

食欲をそそる懐かしいその香りに、マドカの顔はほころんでいく。

コンコン

小さな握り拳でドアを叩く。

「こんばんは」

ドアの向こうにいるはずのロランに呼びかけ、マドカは再びノックする。

コンコン

「鍵、開いとるで」

部屋の中からロランの声が聞こえた。

マドカの大好きな、少しトーンの高い柔らかく落ち着いたロランの声。

深く息を吸い込むと、マドカはゆっくりとドアを引いた。

「遅かったな」

キッチンの立つロランが、マドカの右手に下げたスーパールの袋に気付いた。

「飯ならとつくにできとるで」

小さなテーブルに並ぶ、色とりどりのおかず。

「すごい！これ、全部ロランが作ったの！？」

真っ白なご飯と油揚げの味噌汁。

小松菜の御浸しに冷奴、そして大根と鶏肉の煮物。

「美味しそう…」

漆塗りの箸を両手に挟み、マドカは手の込んだ料理に目を奪われる。

「さ、食いなさい」

目を輝かせて喜ぶマドカに、ロランが缶ビールを差し出した。

「うっん、私はいいよ。ロラン、飲まないんでしょう？」

「病み上がりやからな」

ロランはペリエを二つのグラスに注いだ。

丁寧に器に盛られたおかずを一つ一つじっくりと味わう。
その優しく上品な味に、マドカは舌鼓を打つ。

「ロラン、料理上手いんだね」

味の染みた大根を口に運び、思わず溜息がこぼれた。

「美味しいか？」

「うん！かなり！」

嬉しそうに微笑むマドカを見て、ロランは目を細めた。

「俺、コンビニの弁当がダメやねん。弁当買って食べるくらいなら、
食わないほうがマシやな」

「じゃあ…、ロランはいつもこうして自分で料理して食べてるの？」

「時間のある時はな」

「ふうん、そうなんだ…」

箸先を唇に当てたまま、マドカは感心して頷いた。

「だったら、ロランの奥さんになる人は大変だね」

「何で？」

ロランが最後に残った鶏肉を口にして、マド力は空になった皿を名残惜しそうに眺めた。

「だって…ロランがこれだけ料理が上手いんだもん。奥さんはもっと料理上手じゃなきゃダメでしょ？」

「そんなこと関係あらへん。女にはもっと別のことを望むな」

「別のこと…って？」

マド力の問いの答えを考えながら、ロランは空になった茶碗を重ねた。

開いた窓から綿のように柔らかな風が部屋に入り込み、マド力の頬を撫でていく。

「まあ、簡単に言うと当たり前のことがちゃんと出来る女やな。俺が弱ってる時に傍にいてくれて。俺も相手が弱ってる時には傍にいる。人間って、案外普通のことができるなかったりするねん。こんな感じやな」

美味しい料理をご馳走になった御礼に、マドカが洗い物を済ませる。

シンクの上に乗せた洗い終えた二つの茶碗。

新婚みたい……

頬を緩めて振り返ると、マドカの目にアコースティックギターをチューニングするロランの姿が映った。

悔しいけど…、なんであんなに絵になるの？

まるで、ラブソングを歌うために生まれてきた天使みたい。

「そつえばこれ、お世話になりました」

ロランがテーブルの上に体温計とバファリンの箱を置いた。

「うつん、それより、もう体調は平気？」

「まだ本調子やないけど。おかげさまで」

御礼を言って小さく頭を下げるロランに、マドカはくすぐったい気持ちになった。

どんな仕草をしても、ロランがするとそれは美しい魔法のように見える。

ロランに見つめられると、自分が自分でなくなってしまいそうになる。

それもロランの魔法の一つなのかもしれない。

「そういえばさ、バファリンって、女の子がアレになった時に飲む薬やなかった？」

「えっ？」

「違った？」

「いやっ、その……」

ロランが歯を見せて笑いながら、頬を赤くしたマドカを上目遣いで覗き込む。

「もう、何のおかげで熱が下がったと思ってるの！？他でもない、バファリンのおかげなんだからねっ！」

ロラン…、ロランがこんなに笑ってくれて…

私はとても気持ちの良い夢を見てみたい。

でも…こんな時間がいつまで続くのかな。

ロランは、私をどんな色の瞳で見ているの？

その大きな瞳で…何を考えているの？

「送るよ」

ロランがギターを持って立ち上がる。

「公園まで散歩や」

ロランがギターの弦を弾く。

左手を器用に動かしてコードを押さえ、黒のピックが六本の弦を軽やかに弾いた。

噴水の水飛沫の他には何の音も聞こえない。

静まり返った公園に、幻想的なギターの音色が響いていた。

まるでロラン自身を描いているような、柔らかく透き通る音色に、
儚くてどこか切ない旋律。

それは哀しげで、それでも芯の強さを感じさせる音。

「それ、何ていう曲？」

一つのメロディーを弾いてしまうと、ロランは煙草に火を点けた。
細い煙草を軽く指に挟み、そっと口づける。

「その曲って、ロランが作ったの？」

「ああ。まだ歌詞はないけどな。俺が初めて作った曲。バンドでメ
シ食って生きてこうって決めた頃かな。確か、十八の頃やったかな
あ
」

時折聞こえる大通りのノイズ。

都会の喧騒は、夢の欠片を凝縮した切ない泣き声みたいだ。

「ねえ、ロラン」

「ん？」

「ロランは、どうしてこの仕事を選んだの？単純に、音楽が好きだった…から？」

短くなったセブンスターを、ロランは砂の上で揉み消した。

ロランに出会い、マドカは何度この姿を見ただろう。

胸の奥に知らず知らずのうちに焼きついた、ロランの仕草が一つずつ増えていく。

「なんでやるな。そういうふうに向いてたんとちゃう？すべてのものを剥ぎ取ったら、これしか残ってなかったんやな」

ロランはそう言って夜空に向かい、掌を翻した。

その存在を確認するように指先を見つめ、やがて力なくその指を閉じる。

「絵は…？」

「絵か…絵も…、描きたかったけど、親父が画家でな」

「お父さん、画家なの？」

ロランはそつと足を組み直し、ベンチの背に深くもたれかかった。

「売れない画家やった。だからいつもこう言っとった。メシが食え

ないから、画家だけにはなるなっ」

ロランは何かを思い出すようにふと微笑んだ。

外灯の優しい光がロランの腕の中にうずくまったギターをひっそりと照らしている。

ロランに抱かれたギターはまるで臆病な迷子の仔猫みたいに震え、控えめに輝いた。

「だから絵は趣味やね。暇つぶしに描くようなもんやな」

「お父さんは、今でも絵を描いてるの？」

「親父は俺が小さい頃に事故で死んだ。金なんてこれっぽっちも残さへん。ただ、部屋に溢れる無意味な画材と売れない絵だけ残してな」

さらさらと流れる水の音。

この水の音だけが二人が共有する風景を結びつける唯一の音だった。

切り取ってできた断片を繋ぎ合わせて出来る一つの風景が、ここにはある。

「マドカは？何で編集者になったん？」

マドカ……

「ロラン、今…マドカって…」

「なんや？お前、KK出版編集部の吉井マドカやろ？」

「ロラン、名前…覚えててくれたんだね」

噴水の水飛沫が象る波紋が微かに揺れる。
嬉しさで涙目になってしまったマドカは、気づかれないようにそつと深呼吸をした。

ロランの優しい視線が横顔に注がれている。
恥ずかしさと緊張で、マドカは乾いた唇を噛み締めた。

「私は…やっぱり本が好きだから…かな。もともとね、絵本とか童話が好きで児童図書の編集をやりたくて。海外の絵本が好きなんだ。大人が見ても、どこかふわりと入り込んでくるものがあるから」

ロランはマドカの声に静かに耳を傾けていた。

公園の端にある古びた時計の針は、22時30分を回ったところ

だ。

「今は音楽雑誌の編集をしてるけど、もっと絵本について勉強したい。お金貯めて、留学して…あと、これは夢のまた夢なんだけど…自分で本を書けたらいいな、って」

赤い光を点滅させながら、灰色の雲の隣を飛行機の影が横切っていく。

都会の夜は、その息が絶えることを知らない。

「なあ…これ、やる」

ロランが左手を差し出した。

「夢が現実になるお守り。持っていると、そのうちどっかでいいことがあるかもしれんな」

ロランはマドカの掌に小さなピックを乗せた。

手の中に落ちた黒い三角形は、外灯の淡い光を受けてきらきらと光を放った。

「俺たちな、もうすぐセカンドシングルが発売されるんや。あと、アルバムのリリースも決まった」

「本当？」

柔らかな笑みを口元に浮かべ、ロランはゆっくり頷いた。

「ロラン、私…ずっと大切にするね。このピックも、こうしてロランに出会えたことも」

マドカは右手のピックをぎゅっと握り締めた。

ベンチの上で自然と触れ合う二人の肩に、マドカは心地良い笑みを浮かべる。

「ロラン、もう一度弾いて。さっきの曲…ロランの夢を閉じ込めた、たったひとつの曲」

ロラン…

いつかこの美しいメロディーが、例えこの世界の端っこにいても…

ずっとなんとなく耳に届く日が来ますように。

第四章 マドカの朝（１）

日差しが暑い。

アスファルトに照り付ける太陽の光は、街に渦巻くあらゆるものに反射する。

ノースリーブシャツにミニスカート、色とりどりのペディキュアに宝石を象ったようなサンダルを履いた女の子たち。

すれ違う人の群れ。

汗で湿った互いの肌が微かに触れ合う。

逆毛を立てて、長い髪をずっと上のほうで束ねる女の子。

透き通る玩具のような髪飾りをつけて、精一杯背伸びをして。

女の子に生まれてきたことを心から祝福するかのように、目一杯お洒落をする。

きつとここにいる女の子たちも、大切な、自分にとって大切な何かを探してる。

「ちょっと智樹ーっ、どこまで歩くのよー？」

八月最後の日曜日、マドカは智樹に連れられて原宿の街に来ていた。

最後に原宿に来たのは随分と昔のことのように思える。
休みが来ると、精一杯のお洒落をして原宿に向かう。

ラフォーレ前の交差点を通る時はいつも胸がドキドキした。
ファッション誌のスナップ写真。

ほんの一瞬だけど、声をかけてもらえるかどうかそれだけが楽しみだった。

あれから、私は何か変わっただろうか？

変わったのは、こうして行き交う人々の影だけかもしれない。

キャットストリートを越えて交番の前を通過する。

不快な雑音を残していく蝉の鳴き声を頭上に聞きながら、表参道を下っていく。

マドカの前を颯爽と歩く智樹がチラチラと後ろを振り返る。

「ここ、左ね」

真新しい巨大なビルの手前を智樹の指差すほうへ曲がる。
閑静な住宅街の中に、お洒落なインポートショップが立ち並ぶ。

排気ガスの匂いが裏通りに入ったところでふっと消えた。

騒音の途絶えた住宅街では、心なしか暑さも引いたように思える。

「……」

智樹が立ち止まって指差す、白い壁にグリーンの窓枠のカントリ風の建物。

開いた扉の手前には、鉢に植えられた緑と季節外れのアネモネの花が飾られている。

「カフェ？」

「ま、いいから」

智樹に背中を押され、マドカは建物に足を踏み入れた。

家庭的な料理の匂い。

ヨーロッパの家具を基調とした店内は、ベーシックなインテリアと子供っぽさを感じさせる小物でコーディネートされている。

出迎えてくれた背の高いウェ이터に連れられて、二人は奥のテーブルに案内された。

「素敵な感じの店だね」

「だろ？ここ、前から来たかったんだ」

料理を頼み、マドカは頬杖をついてレースのカーテンの揺れる窓を見つめた。

これといって大切な日でもない休日の昼下がり。

智樹の顔を見ながら食事をするのは、なんだか無性に退屈だった。

「ねえ、智樹」

「何？」

パスタの上で何度もくるくるとフォークを回すマドカの向かい側で、智樹はチキンの香草焼きにナイフを入れる。

「私さ、お盆休みも貰えなくて、働いて。せつかく今日休み貰えたのに…なんで智樹と食事なんかしなきゃいけないの？」

「は？なんだよ、それ」

智樹は顔を上げると、怪訝そうな表情でマド力を見つめた。

「別に、智樹と一緒にいるのが嫌なわけじゃないよ？ただ…、ちょっと虚しいの」

マド力が帆立の実を勢いよくフォークで突き刺すと、智樹の皿にクリームが跳ねた。

「お前さ、まだ元気ないわけ？」

「何が？」

「こないだ会った時、あの時元気なかったじゃん？最近、お前元氣なさそうだったから。だから誘ってやってただけなのに」

智樹はアイスティーのグラスに口をつけ、思い出したように付け足した。

「お前さ、忙しいのも分かるけど、少しは実家にも帰れよ。俺、お盆に実家帰った時にお前の母さんに会ったけど、寂しそうだったぜ？お前さ、母さん一人なんだから、それくらい分かってるだろ？」

皿の上でフォークを回しながらマド力は下を向いた。

「まあ、田舎に帰りたくないのは分かるけど。俺も来年からこっちの商社で働くし……でも、お前にとってはたった一人の親だろ？もつと大切にしろよな」

マド力はこくりと頷いた。

「んーまあ、偉そうなこと言ってるけど、俺はマド力にどんな時も笑っていてもらいたいからさ。些細なことでもいいから、何でも言えよな。性教育も含めて、相談に乗ってやるから」

智樹が大きな口を開けて笑う。

その笑顔はマド力の瞳の中でぼんやりと滲んでいった。

マド力は実の母の顔を知らない。
知らないというより、覚えていないといったほうが正確かもしれない。

薄っすらと残る母の記憶は、柔らかな手の温もりと絵本を読んできれる優しい声。

母はマドカが三歳の時、多量の睡眠薬を飲んで自殺した。薄暗いキッチンでのダイニングテーブルに長い黒髪を伏せ、青白い腕の中には半透明の小瓶が転がり、傍らには数粒の薬が散らばっていた。

どこか作られた場面のように感じられるのは、幼い頃の曖昧な記憶にいくつかの映像が後付けされたものだからだろう。

ぐったりした母の抜け殻を抱き上げた父は、まるで役を演じる映画スターのように思い起こされる。

睡眠薬で死ぬという発想さえ、今では滑稽だった。

それでも記憶の中にはつきりと映るのは、母が死んだ時、テーブルの上に置かれていた一枚の絵葉書だった。

新緑の山に囲まれた湖に浮かぶ、一艘のボート。

その水彩画だけを今でもマドカは鮮明に覚えている。

母の記憶をたどる時、マドカが真っ先に思い浮かべるのはその絵だ。

死んだ母の隣で彼女の息を今にも吹き返してくれそうな、力強い

筆感に心を奪われたのだった。

新しい母がやって来たのは小学六年の時で、反抗期を迎えたマド力は反発する毎日だった。

そんな時中学にあがり、智樹に出会った。

母親に対する嫌悪感を胸に閉じ込めたまま、次第に自分の殻に閉じこもってしまうマド力を一番近くで励ましてくれたのが智樹だった。

母親との確執も埋まった高校二年の時、大好きだった父が死んだ。雪深い山の中で、雪崩の下敷きになったのだ。

あの絵葉書の行方は分からない。
父が再婚する際、引越しに紛れてどこかへ紛失してしまったのか
もしれないし、今の母親が捨てたのかもしれない。

マド力はそれを探す術を持たなかった。

いずれにしても過去は離れていくものだから、思い出す必要もなかった。

けれど、あの静謐な湖水を漂うボートがあてもなく流されていく

場面を想像すると、マドカはそれだけで胸が詰まりそうになる。

母は小船に乗り、二度と会うことのない遠い場所へ行ってしまうのだと理解するからだった。

「すっかり暗くなっちまったなー」

マドカは智樹と肩を並べて夜の繁華街を歩いていた。

原宿で食事をした後、マドカは智樹を映画に誘った。

ベタなラブストーリーを鑑賞するため、カップルで埋まった座席に二人で腰を下ろした。

傍から見たら恋人同士にしか見えない二人だけれど、隣にいる智樹の存在など忘れたように、マドカはハンカチを片手に号泣していた。

「泣くほどそんなに面白かったか？」

「めちゃくちゃ良かったじゃん！超感動だったし！」

台詞の一つ一つからストーリーまで、すべてを完全否定する智樹は退屈そうに欠伸を繰り返していた。

ふと立ち寄ったレコードショップのど真ん中に貼られた大きなポスター。

“ラ・ヴォワ・ラクテ セカンドシングル発売”の文字が踊っている。

公園でロランの弾くギターの音色を聞いた夜から一ヶ月。それ以来、マドカがロランに会うことは一度もなかった。

仕事帰りにふらりとあの公園に立ち寄ってみてもロランの姿は見当たらず、あのベンチは毎日空のままだった。

拳句の果てにはロランのアパートにまで足を運んだ。

けれど、一度も会えない。

マドカは心底、神様というものを憎んだ。

神様は意地悪だ。

天に昇るほどの喜びをくれたあとには、虚しい日々しか残らない。

「あー、こいつらね」

J・popのフロアの真ん中で、一枚のポスターを愛しそうに見上げるマドカの背後から、智樹が身を乗り出した。

「あのバンドか。CD発売のペース早くね？」

智樹はそう言って予約カードの隣に積み上げられたチラシを一枚手に取った。

人気歌手の新譜情報に雑じって、『La Voie Lactée』の文字が目に残る。

「なあ、こいつら今日渋谷でライブやってんじゃん」

マドカは智樹の指に挟まれたチラシを覗いた。

「ほら、これ。こないだのライブハウスじゃん？」

智樹の手から奪うようにしてチラシをもぎ取り、マドカはラ・ヴ
オワ・ラクテの文字を探した。

そこには確かに今日の日付と、あのライブハウスの名前が記され
ている。

開演時間は三時間前だった。

「ホントだ……智樹…私、智樹、ごめん！」

フロアを駆け抜け、マドカは出口に向かう。

「おい、マドカ！どこ行くんだよ！？」

「ライブ……！」

二人のやりとりに店内がざわめく。

マドカの「ライブ」の声だけが、ずっとその場に響き続けている。

ネオンの明かりと雑踏をすり抜けてライブハウスに向かう。

ロランに会える保障はどこにもない。

テクテのステージはもう終わってしまっただろう。

けれど、今のマドカにはそんなことなどどうでもよかった。

ただ、ロランに会いたい。

会って、ロランに伝えなきゃいけないことが、私にはあるから。

闇に浮かび上がるライブハウスの赤い光。

路地に落ちる光をたどれば…

そこにはロランがいる。

第四章 マドカの朝（2）

ライブハウスの前は女の子たちの黄色い声も熱い活気もなく、ただしんと静まり返っていた。

楽屋口のある裏通りに回ってみても、出待ちのファンの姿は見つからない。

関係者専用と書かれた通用口の黒い扉だけが、蛍光灯の青白い光を受けて異彩な雰囲気を放っている。

マドカは再び表に向かい、ステージのある地下へと続く階段を見下ろした。

何の音も聞こえない。

ただそこには深い絶望にも似た虚しさが漂っているだけだ。

階段を上る、誰かの足音が聞こえてくる。

ハードな装飾品をつけたロック風の身なりをした、三十代前半位の男性だった。

「あの…」

男は足を止め、鋭い視線をマドカに向けた。

「ライブ…終わっただんですか？」

眉間に皺を寄せて怪訝そうな顔をした彼に、マドカの体は萎縮してしまふ。

「あの…19時から、ラ・ヴォワ・ラクテのライブが…あったんですよね？」

マドカは智樹の手から勢いよく奪い取って来たチラシを広げ、男の前に差し出してみせた。

男は煙草に火を点けた。

薄暗い路地に、ライターの炎が揺らめく影が伸びていく。

「それ、中止になったんだよ」

「…中止？」

「そ、中止」

白い煙を見つめながら、男は繰り返した。

「どうして…中止になったんですか？」

マドカは訳の分からぬ顔で、男の唇に挟まれた煙草をじっと見つめていた。

宙に浮かんだ煙が、視界をかすめていく。

「君、知らなかった？喧嘩だよ、ケンカ」

「ケンカ…？」

マドカは表情を曇らせた。

「三日前のライブの時だったかなー。ほら、その関係者通路のところあるだろ？」

男が裏口を指差した。

「そこで、ファンの子たちが派手に喧嘩したわけ」

「ケンカ…」

「何が気に入らなかったのかよく分かんないけど、女の子が取っ組み合いの喧嘩になって、警察まで来てさ。メンバーに直接的な責任はないだろうけど、またそういうことになるって色々面倒だろ。デビューしたばかりだし。まあ、そういうことだから。しばらくライブはやめるんだと」

男はそう言ってアスファルトの上で煙草の火を消した。

闇に浮かび上がる赤い光が、マドカと男の間に歪んだ円を描いている。

マドカの心に埋もれていた感情が、一つずつ音を立てて崩れ落ちていった。

「まあ、君にこう言うのもなんだけどさ……あのバンドは、もうこんな小さなところでやっていかなくても充分すぎるくらいバンドだよ」

男の手に握られたライターにマドカは焦点を合わせた。

「君は？君も、ロランのファン？」

「えっ……」

頬を赤くしたマドカを見て、男は小さく笑った。

「ロラン……か。俺が思うに、ボーカリストとしてのあいつの実力も含めて、あのバンドは売れる。絶対に売れる。あと二年もすれば、あいつらは日本のロック界の頂点に立つ。俺にはそれが分かるんだ」

あと二年もすれば、あいつらは日本のロック界の頂点に立つ

マドカは電車で揺られ、男の言葉を思い出していた。

ほんの数週間前、隣にいたロランの存在が別世界へと遠退いてしまふ。

さらさらと夜風に揺れる綺麗な髪も、その細い指に挟まれたセブンスターから立ち昇る煙も、二重の大きな美しく深い瞳も、ロランを形作るすべてのものが遥か彼方へ消えてしまった過去の出来事のようにだ。

それらはすべて、通過点にすぎなかったのかもしれない。

私にとっても…、ロランにとっても……

鉄の階段を上る。

寂れたアパートの二階。

この階段を上るのも今日が最後だ。

今日、ロランに会えなかったらもうここに来るのは止めよう。

ロランに出会えたことはすべて、ただの偶然だと思えばいい。

私は…気持ちの良い夢を見ていただけなんだ。

キッチンの曇りガラスに部屋の明かりがないことを確かめると、マドカはドアの前にしゃがみ込んだ。

タイムリミットは午前0時。

0時までにはロランが現れなかったら…

今のマドカにはただ、ロランに会えることを祈りながら待ち続けることしかできなかった。

きっと、ロランは現れる。

いつだって逢いたいと願えば、そこにはロランがいてくれた。

あの雨の日も、星の見えない夜も、ロランは私を見つけてくれた。

祈れば…、きっと会える。私はそう信じてる。

「…マ…ドカ」

誰かが私を呼んでいる。

この優しくて柔らかい声は…ロラン？

ロラン…私を迎えに来てくれたの？

嬉しい…私も…、ロランに逢いたかったんだ。

「マドカ！」

目を覚ますと、そこにはロランが立っていた。

生温い夏の気温がマドカの肌にまとわりつく。

「ホンマに、お前はどこでも寝れる奴やな」

どうやらマドカは部屋の前でしゃがみ込んだまま寝てしまったらしい。

「また酔っ払ってるん？」

ロランはポンポンとマドカの頭を掌で叩き、部屋の鍵を開けた。

「ロラン…、ロラン、私…」

マドカは急いで立ち上がる。

いつものようにロランの唇にはセブンスターが形良く収まっている。

マドカの大好きな煙草の香りが辺りに漂う。

形の良い唇からほんの少しだけのぞいた綺麗な歯並びが眩しい。

「あがれば？」

ドアを開けると、締め切っていた部屋の空気がむっと外に流れた。

呆然とするマドカをよそに、ロランはそそくさと部屋の中へ消えてしまった。

扇風機の電源を入れるカチツという音が聞こえてくる。

「なあ、この扇風機なんやけど…これ、お前のやろ？なあ、これ、涼しくなるまで貸してくれへん？」

マドカは暗い部屋の中にいるロランの声に耳を澄ましていた。

ロランが窓を開けるガラガラという音。

ただ、そんな物音を聞くだけで胸が熱くなる。

ロランが近くにいただけで、こんなに切ない気持ちになる。

こんなに誰かを愛しいと思ったのは、初めてだ。

「なあ、どうしたん？俺の話聞いとる？」

マドカは玄関に立ち尽くしていた。

開いたドアの後ろから差し込む街灯の明かりが、キッチンの床を白く包んでいる。

ロランは冷蔵庫からエビアンのボトルを手にとると、マドカの影に近づいた。

「マドカ…？」

ロランの大きな瞳は、今日も完全にマドカの心を見透かしているみたいだ。

「ひゃっ！冷たい…！」

不意に冷えたボトルを頬にあてられて、マド力は思わず右頬を掌で押さえた。

ロランが白い歯を見せて悪戯に笑う。

「元気やった？ここ最近、会えなかったな」

ロランの優しい微笑をマド力はじっと見つめた。

キッチンの床に落ちる二人の影が、左右に揺れている。
マド力は俯いて、次の言葉を探した。

「もしかして…会いたかったん？」

ロランは首を傾げてマド力の瞳を下から覗いた。

マド力の目に涙が溢れる。

月の光がシンクを照らし、きらきらと反射させる。

どこからともなく聞こえる時計の音。

時間は、ゆっくりとその針を進めている。

「ロラン…」

マドカは細い声でロランの名前を呼んだ。

「もし…もしね、ロランに会いたくなったら…私はどうすればいい？ロランに会いたくて、会いたくて…、どうしようもない時は…どうすればいい？」

零れる涙が頬を伝い、足元に落ちる。

溢れる涙をこらえようとしても、それは、無駄な抵抗だった。

マドカの意味とは反対に、涙の粒はただ、細い感情の線を伝って瞳から次々と流れてくる。

静まり返ったアパートの部屋は、マドカのすすり泣く声と切ない想いで満たされるばかりだ。

「会いたかった…。毎日、会いたくて…何度もあの公園に行っただけ、会えなくて…ここにも来ただけ…会えなくて…」

無邪気にすすり泣くマドカに、ロランは目を細めた。

吹き付ける夜風がスカートの裾を揺らし、その度にマドカの胸の奥はズキズキと痛んだ。

「ロラン、教えて…ロランに会いたい時…どうすればいい？私は…どうしたらいい…？」

泣きじゃくる自分がどんな顔をしていたのか、どんな場違いな言葉を重ねてしまったのか、そんなことを考える余裕はなかった。

これが精一杯の気持ちだった。

月の光に照らされて並ぶ二つの影。

迷子になった幼い子供のように必死に泣きじゃくるマドカを、ロランは愛しそうに見下ろした。

ふたつの影が静かに重なる。

「バカやな」

ロランはマドカをそっと抱きしめた。

腕の中で細い肩を上下に震わせてすすり泣くマドカを宥めるように、ロランは言った。

「マドカ…お前はバカやな。なあ、マドカ…」

腕の中で呼吸を整えるマドカの耳に、ロランはぴたりと頬を寄せ
る。

「お前もバカやけど、俺も相当バカやな」

マドカは顔を上げて月明かりを含んだロランの大きな瞳を見つめ
た。

「祈ったん？会えるように、マドカも祈ってたん？」

優しい夜風が肌をくすぐり、涙に濡れた頬を乾かしていく。

近づけられたロランの瞳は美しく、まるで深い緑色の湖の底をゆ
らゆらと泳いでいるような感覚に包まれた。

「不思議やな…マドカ。お前が傍にいたとな、俺もまだ知らない、
別の自分があることに気づくねん。子供の頃に見た夢の続きの中に
放り出された感じがして……忘れてた、懐かしい何かをお前がそつ
と引き出してくれるんや。俺の言ってることの意味が分かる？」

「わから…ない」

ロランの柔らかな声と息遣いを感じながら、マドカはくすくすと
笑った。

「まあ、ええわ」

マドカはロランの小さな体に身を寄せた。

泣いて腫らした目が痛い。

夜風とロランの手の温もりが、マドカの額をふわりと撫でた。

「でこ」

ロランは掌でマドカの前髪をひらりと上げてキスをした。

形の良いロランの唇から、ほろ苦い煙草の香りがする。

マドカはロランの手をそっと握り締めて指を絡めた。

「ロラン…」

波のように浮き上がる血管の筋と骨張ったロランの指が、マドカの胸を熱くさせる。

「ロラン…、ロランの手」

「ん？」

「ロラン、こんなに華奢なのに…男の人みたいな手してる」

血管の筋に指先で触れ、マドカはロランの顔を見上げた。

「お前なあ、俺…男やないか」

大きな瞳とバランスの良い眉をしかめて困惑するロランの表情が可愛くて、マドカはぷつと噴きだした。

さっきまでずっと離れたところに感じられていたロランの瞳が、今は手を伸ばせばすぐ届くところにある。

耳元に響く微かな鼓動がロランを彩る一つ一つの美しい仕草に結びつくことを、マドカはこの時とてもリアルに感じる事ができた。

「キス…、フレンチがいい？それとも、ディープ？」

ロランは指先でマドカの唇をなぞると、長い髪をゆっくりと撫で、意地悪そうに質問した。

「どっち？」

「…フレンチ。フレンチが…いい」

マドカは恥ずかしそうに、虚ろな瞳でロランに視線を送った。

唇で感じるロランの体温や柔らかくて、とても温かい。

息を吐く瞬間に、ふっと香る煙草の苦い味。

知らず知らずに差し入れられるロランの舌を、マドカは少しも迷いもせず素直に受け入れる。

マドカは目蓋を閉じて、ロランの体に身を預けた。

マドカには、瞳を閉じていても分かる。

そこに、空に浮かぶ雲のように儚くて掴めないような美しさをただ純粹にまとった、ロランがいることを。

「意地悪…」

「意地悪？」

ロランは片眉を上げて首を傾げると、不満気に頬を膨らませるマドカを見下ろした。

「そう、意地悪…。フレンチって言ったじゃん…」

潤んだ瞳が可愛くて、ロランは両腕をマドカの腰に回してぎゅつと抱き寄せた。

マドカの鼻先にロランの喉仏が当たる。

ロランの首筋に、窓から微かに入る月の光が伸びていた。

「フレンチは、こないだしたやる？」

「こないだ？」

「…ああ、そっぴゃお前…酔っ払って忘れてたんやっけ？」

ロランが話すと小さな喉仏が上下左右に連動する。

マドカは首を傾げてロランの顔を見上げた。

大きな口を開け、綺麗な歯を見せて笑うロラン。

あの時と同じ…ロランの整った顔が、ほんの少しだけ崩れる瞬間。

「ちょっと、ねえロラン、あの日…何もしてないって言ったよね？」

「ん？」

「私が公園で酔っ払ってた日。何もしてないって言ったじゃん…！」

マドカの膨れた頬を、ロランの両手が包み込む。

「フレンチキスなんてなあ、何もしてないのと一緒にやん」

ただ、静かに彼の鼓動を聞けば、そこに一つだけ…
確かな答えを見つけることができる。

私はロランが好き。

きっとこの恋は、私の全てを捧げてしまっても後悔などしない恋。

果てしなく続く空の向こうに、真っ白なキャンバスが見える。

ずっと探していた、大切な…大切なものを、

ロランが気づかせてくれたんだって、そう思ったから。

第四章 マドカの朝（3）

濡れた髪についた滴をタオルで乾かしながら、ガラス戸を開けて
ロランが部屋に入ってくる。

ロランはテーブルの上に置かれたセブンスターに手を伸ばし、ジ
ツポで火を点ける。
白い煙が天井の四隅にまで広がっていく。

ただ、そこには美しいロランがいる。

マドカが生まれて初めてその体に触れた相手　。

マドカはこの誰でもなく、ただ目の前にいる愛しい彼のことを
想う。

複雑な気持ちを閉じ込めた抜け殻が、煙草の煙に混じって天井に
消えていく。

ロランの指の中で、煙草の灰だけがその姿を歪めている。

「マドカもシャワー浴びれば？」

ロランの顔がベッドに横たわるマドカの視界に飛び込んでくる。

首まで引つ張り上げたタオルケットに体を包んだまま、マドカは窓辺に揺れるカーテンをぼんやりと見つめていた。

薄い壁を通して隣の部屋のテレビの音が聞こえる。

七時のニュース番組の始まる音楽だ。

「まだ、痛いん？」

髪についた水気をばたばたと払いながら、ロランは床に座った。

「うん…まだちょっとヒリヒリする」

「それ、当分痛いで」

ロランはテーブルの上の空き缶に、煙草の灰を落とした。

「まあ、だいたい女の子は慣れるまで…五回目くらいまで痛いんっちゃう？」

窓から差し込む光がテーブルの上にくっきりと台形の模様を描いている。

光の筋の直線状にロランの細い腕がある。

二の腕に小さくついた筋肉の動きをマドカは見つめ、その腕に抱きしめられた時の感触を思い出していた。

「ねえ、ロラン」

「ん？」

「ロランは今まで、何人の人とセックスしたの？」

マドカの不意をついた質問に、タオルを動かすロランの手が止まった。

「いちいち数えてないから分からへん」

その答えに不満そうな表情を浮かべ、マドカはタオルケットの中でしなやかな体をそつと震わせた。

「じゃあ、付き合った女の人は？」

マドカの瞳が好奇心に駆られる幼い子供のようにくりくりと動く。

ロランはふつと微笑んだ。

「付き合った数がセックスした人数とは限らんやろ？」

意地悪そうに勝ち誇った顔をしたロランに口を尖らせながら、マドカはその答えに渋々納得する。

青く澄んだ晩夏の空が、窓の隙間から二人を見下ろしている。

ロランが短くなった煙草を缶の中に落とすと、カランという齒切れの良い音が聞こえた。

「まあ、俺の場合…付き合ってたっていうより、メシ食わせてもらってたって感じやけど」

ロランは光の中で眩しそうに目を細め、ベッドの上にあるマドカの体を見つめた。

「それって、ヒモってこと…?」

「そうやな。金なんて持ってなかったからな。彼女が仕事に出てる昼間に俺が家事やって、夜になったらバンドの練習に行って…人妻からキャバ嬢まで…ああ、幼稚園の先生もおったわ」

「ずっと? ずっと…そうだったの?」

「俺が14の時からやったから…」

「じゅっ、14歳!？」

「そんな驚かんでも」

「だって…私…初めて母親と喧嘩して唯一家出っばいことしたのが17歳の時だったし…」

ロランは唇に挟んでいたまだ火の点かないセブンスターを箱の上に戻して、マドカの傍に歩み寄った。

ガラス玉みたいなロランの瞳が覗く。

「マドカ…俺のこと嫌いになる？」

ロランが指先で頬をくすぐりながら顔を近づけると、まだ湿り気を帯びた彼の前髪がマドカの頬に落ちた。
石鹸の香りがする。

「マドカを色に例えたら…白やな」

「白…？」

「そう、純白の白。まだなーんの色にも染められてへん白」

通りを行き交う人々の話し声が外からぼんやりと聞こえてくる。
街が、人が、その息をゆっくりと吹き返している何も変わらない朝。

ただ一つだけ変わったのは、マドカの瞳に映る景色だ。
昨日よりもずっとずっと近いところにロランの姿を捉えることができる。

その美しさも、彼の匂いも、ロランを彩るものがマドカの瞳には鮮明に映し出されている。

傍にいるロランの温度が、マドカの想いを膨張させたり収縮させたりする。

「ロラン…私、もっとあなたのことが知りたい。どんなロランでも私は構わない。ロランのすべてをもっと近くに感じたいの。」

私はただ、ロランの瞳に映る景色と同じ風景が見たいから」

手のひらに握り締めた部屋の鍵。

太陽の光に翳し、その銀色の輝きを何度もこの目で確かめては、感情の高鳴りを痛いくらいに感じる。

歩道に伸びた影を眺めると、その小さな影たちにも伝えきれない愛しい気持ちが混じり合っている。

「これで祈らなくても会えるやろ」

そう言って渡された、ロランの部屋の鍵。

明けない夜はないと言っけれど、マドカはこの淡い色彩に包まれた世界がただいつまでも続くことを願った。

寒くて暗い闇が訪れないように、

その小さな星が消えてしまわないように。

マドカの新しい朝が始まる。

第五章 或るボーカリストの軌跡（1）

「お電話代わりました、吉井です」

「マドカちゃん、元気？」

聞き覚えのあるハキハキとした声だった。
でも、誰の声だろう。

「あー、どちら様でしょうか…？」

声の主は神妙に、受話器の向こうで咳払いをした。

「タツです」

「えっ、タツさん…？」

「久しぶりだね、マドカちゃん。元気だった？」

「はい！元気ですよー」

二ヶ月ぶりに聞くその優しい声に、マドカはデスクの回転椅子で
くるくると回った。

「マドカちゃん、今日は何時くらいに仕事終わる？」

「え、今日ですか…?」

散らばった書類にざっと目を通し、マドカは期日の迫った原稿をチエックする。

「えーっと…今日は早く終われそうですね」

「18時だと…平気かな?」

「はい!大丈夫だと思います!」

「じゃあ、18時にどこかで会えないかな?」

「はい!いいですけど…」

受話器の向こうから、街の喧騒が聞こえる。

「本当?でさ、マドカちゃんに渡したいものがあるんだけど…実は俺、ジャケットデザインの打ち合わせで抜けられそうにないから、俺の代理が届に行っても大丈夫?」

「代理…?」

マドカはデスクの上に置いてあったメモ用紙に、ボールペンで意味のない模様を書いていた。

「そう、代理。マドカちゃんのオフィスってどこ?」

「九段下です」

「じゃあ、駅前に18時！」

「え、ちょっと…代理って…タツさん!？」

そこでぶつりと電話が切れた。

マドカは受話器を戻して首を傾げると、再びパソコンの画面に集中した。

ふと、卓上カレンダーに目をやる。

ロランと互いの気持ちを通じ合わせて三週間　。

毎日仕事が終わると、マドカは渡された合鍵でロランの部屋を訪れる。

どんなに仕事が遅くなっても、オフィスから歩いて二十分のロランのアパートに足を運んでいた。

けれど、マドカが部屋を訪れると大抵ロランは留守だった。

冷蔵庫の中のものであり合わせの食事を作り、やりかけの仕事に手直しを入れながらマドカはロランの帰りを待った。

コンコンコン

ロランはいつも、部屋のドアを三回ノックした。

愛しい人の帰りを待ちくたびれたマド力は、急いで鍵を開ける。

そこにはセブンスターを啜えたロランが立っている。

そして「ただいま」と言って煙草の苦いキスをくれる。

ロランがマド力の帰りを待つ時には、必ず手の込んだご馳走を作ってくれていた。

マド力の大好きな鰯の照り焼きに肉じゃが、揚げだし豆腐にふるふき大根。

ロランの料理の腕はなかなかだった。

あの美しい風貌からは想像もつかないけれど、マド力はロランのそんな意外な一面にますます惹かれていった。

どんな時も会いたいと思えば、そこには必ずロランがいてくれる。この時間が永遠に続けばいいと願う。

もともとこの体で彼の全てを感じたいと思う。

マド力はもう、自分が無力な女の子ではないような気がする。

自分が、一人の男性を愛する一人前の女であるように感じる。

目に見える確かな愛が欲しい。

何度も「愛してる」と言って欲しい。

出来ることなら「愛してる」と大きな文字で紙に書いて証明して欲しい。

けれど、そんな馬鹿げたことなんてできないから、私たちは抱き合いたいと思う。

一つになりたいと思う。

ロランもこんな気持ちでいてくれるのだろうか？

一人のアーティストとして輝くロランが、このまま私をずっと愛し続けてくれるのだろうか。

それでもマド力はあの夜を忘れない。

システム手帳に挟めた黒いピック。

夢が現実になるお守り。

これがあればロランがいつでも傍にいてくれるような気がする。

隣で、あの美しく深い瞳が息づいているのを感じることができる。

それは、たった一人の愛しい人。

マド力は静かに瞳を閉じる。

マドカは約束の時間より少し前にオフィスを出た。

夕暮れの街には初秋の風が吹き始めている。

やがて訪れる秋の予感を抱きしめ、ちぎれた雲の散らばる空を見上げると、白い月が凜と浮かんでいた。

コットンのカーディガンを羽織り、マドカは九段下駅へとその足を急いだ。

困ったなあ…駅前って言われても、どこの出口が分からないんだけど…

九段下には三つの地下鉄が通っている。

漠然と駅前と言われても、何番出口が分からないのだ。

どこかしらやりきれないマドカは、小さな溜息をつく。

とりあえずいつも利用している、オフィスに程近い7番出口の前でタツの代理という人物を待つことにする。

行き交う車のエンジン音に紛れて、途切れ途切れに聞こえる音楽。耳を澄ませると、近くのコンビニから流行のアイドルが歌う新曲のサビ部分が聞こえている。

腕時計はちょうど午後6時を示していた。

待ち合わせ場所が曖昧なうえに、相手の顔を知らないという焦燥感がマドカを襲う。

群衆をきよろきよろと見渡してみても、そこには見知らぬ顔ばかりが並ぶ。

「マドカちゃん」

マドカは呼ばれたほうへ振り向いた。

「吉井マドカちゃんですか？」

「はい、これ」

彼女はマドカの前に二枚のチケットを差し出した。

「タツちゃんが、あなたにとって」

彼女はそう言って、可愛らしい笑顔に向けた。

マドカはタツの代理という人物に7番出口で出会い、近くのコーヒーストップに入った。

店内は客足も少なく、二人は比較的落ち着いた奥のテーブルに座った。

マドカは差し出されたチケットを手にとった。

それは、ラクテのクリスマスライブのチケットだった。

「まだちょっと早いけど、それがライブハウスで演奏する最後のステージになるかもしれないって」

彼女はテーブルの上のカップを両手で包み込むようにしてコーヒを飲んだ。

斜めに分けられた前髪と、肩までの髪に緩いパーマをかけて感じの良い微笑を向ける彼女は、笑うと目尻に薄っすらとチャーミング

な皺が寄る。

おそらくマドカより少し年上だろう。

柔らかそうなピンク色のニットが、彼女の表情を明るく見せている。

「最後のステージ？」

「うん、もう小さなところでやることはないんじゃないかって。来年から大きな会場を回るんだって。タツちゃんがね、ロランは照れ屋さんだから自分からライブに來いなんて言えない奴だし、せっかくのクリスマスにマドカちゃんがロランと一緒にいれないとかわいそうだって」

彼女はそう言って優しく微笑んだ。

彼女が笑うと柔らかかそうな頬に小さなえくぼができる。

にこやかな表情を向ける彼女に、マドカも自然と笑みがこぼれた。

「私ね、アサミって言うの。マドカちゃんの話は、タツちゃんに少しだけ聞いてたから」

「タツさんに？」

「私ね、タツちゃんと付き合ってるの。タツちゃんが大阪にいた頃からずっと」

店内の薄暗い照明が、アサミの赤茶色の髪を静かに照らしている。

アサミが瞬きをするたび、彼女の長い睫毛が揺れていた。

「やっぱり、マドカちゃんは思った通りの女の子だった」

「えっ？」

アサミの頬に見え隠れする小さなえくぼは、傍にいる人間に安心感を与える。

きっと彼女の人柄を表しているのだろう。

マドカは会って間もない彼女のことを、一目見ただけで好きになった。

「絵本から抜け出してきたみたいな女の子」

「…絵本？」

「うん。ロランがタッチちゃんにそう話したんだって。絵本から抜け出してきたみたいな女の子だって」

絵本から抜け出してきたみたいな女の子……

「それって…褒め言葉なんでしょうか？」

予想もしない言葉に苦笑いしながら、マドカは微笑むアサミに問い掛けた。

「それはロランに直接聞いてみないとね。私は素敵な褒め言葉だと思っけど」

アサミの口元からこぼれる嫌味のない微笑み。

その淑やかな大人の仕草にマドカは見惚れてしまう。

彼女の豊かな表情に比べ、マドカは自分の幼さを笑うしかなかった。

「アサミさんは…タツさんとは長いんですか？」

アサミは唇につけたカップをソーサーの上に下ろした。

「タツちゃんに出会って、もう6年になるかな。でも、どうして？」

「いえ、あの…」

照明が落とされた店内には、甘いボサノバソングが流れている。

言いかけた言葉を飲み込んだマドカの瞳を、アサミの丸い目が覗いていた。

「あの…もしよければ、アサミさんの知っている範囲で構わないので…バンドについて教えてくれませんか？」

「バンドについてというより、タッチちゃんのろけ話になっちゃうかも」

アサミはそう言って承諾の笑みを浮かべた。

マドカは彼女の頬にさりげなく現れる小さなえくぼの存在を、羨ましいとさえ感じていた。

長い睫毛を伏せるアサミは人形のように愛くるしかった。

アサミはコーヒーを一口飲むと、その瞳をマドカに向けた。

「そうだね、私がタッチちゃんに出会ったのは十九の頃で、当時まだラ・ヴォワ・ラクテっていうバンドは存在しなかった。タッチさんは今のメンバーとは違う三人とバンドを組んでいて、私はそのバンドのファンだった。もちろん、タッチちゃんが好きだったんだけどね。何度もライブに足を運んでいるうちに自然と仲良くなって、私から積極的にアプローチして付き合うようになったんだ」

アサミはそう言って、テーブルの上に置かれた五本の指に輝く桜色の爪を撫でた。

「当時私が入りしていたライブハウスでは、タッチちゃんのバンド以外に四組のバンドがステージに立っていて、良い意味で互いのバンドがライバルだった。その中で知り合ったのが、ドラムのカラルくん。今もそうだけど、あの頃から凄く無口な人だったんだ」

マドカはカラルの顔を思い出す。

確かにいつもむすつとしていて口数は少ない。
インタビューの内容以外で言葉を交わした記憶さえなかった。

「タッチちゃんのベースの腕はね、大阪では結構有名だったんだよ。だから、タッチちゃんがカラルくんに新しいバンドの話を持ちかけた時、大阪でバンドをやってる人たちの間じゃちょっとした話題になったんだ」

アサミの胸元の、プラチナのネックレスがきらきらと揺れていた。

「じゃあ他のメンバーはどうするっていう話になった時、カヲルくんの知り合いがたまたまライブに連れて来たシンちゃんを紹介したの。シンちゃんは大学二年生だった。シンちゃんのギターを聴いたタツちゃんは、その音に惚れたって言ってたよ。テクニクに関してはまだまだ甘いけど、感情のコントロールが巧いって」

シンのギター。

マドカはその音を耳元でリフレインする。

技術に関してはよく分からないけれど、巧い下手というくらいのはことはマドカには少しは分かる。

シンのギターは、マドカが今まで聴いたことのない類の音だった。

細く緊張した甘い旋律に、胸の奥が切なくなる。

「タツちゃんはシンちゃんに、本気でやるなら大学を辞めて本格的に俺と組まないかって言ったの。バカみたいでしょ、将来も見えないか。ロックバンドのために学校まで辞めろって。でもあの時、タツちゃんは本気だったんだと思う。きっと、これが最後の賭けだと思っていたのね」

アサミはそう言って懐かしそうに目を細めた。

「タツちゃんが一目置くくらい最高のドラマーがいて、誰よりも切ない音を奏でるギタリストがいて、そして大阪で天下をとったベシストがいて……。タツちゃんが夢にまで見た理想のバンドの土台が固まった。それが今から五年前のことかな。タツちゃんがちょうど二十歳の頃」

アサミはそこまで話すにつこりと笑いながらマド力の瞳を覗いた。

「マド力ちゃん、私の話…退屈じゃない？」

「いえ、そんなことはありません。続けてください…」

マド力は頭の中で流れるラクテの「Stars」を特別なものように抱き締める。

アサミの口から語られるストーリーは、マド力のまだ知らない、劇的な物語の始まりであるのだろう。

「ここまで完璧に揃えば、あとはボーカルを探すだけ。ボーカリストはバンドの華。ボーカルにそのバンドのすべてが委ねられると言っても過言ではない。だから…なかなか見つからなかったの。タツちゃんの求めている逸材が」

カップの縁についた口紅の跡を指先で拭って、アサミは首を傾げ

た。

「マドカちゃん、私にもよく分からないけど…ルックスが良くてちゃんと歌えて、作詞ができて、ある程度ファンもついていて…そういう将来性のあるボーカリストは大阪に何人かいたのよ。だけど、タツちゃんは大阪から範囲を広げて、関西のライブハウスを一つずつ回って頭の中に描かれた理想のボーカリストを探したの。私にも、周りの人間にだってそこまでするタツちゃんの信念みたいなものが理解できなかった。むしろそんなタツちゃんが怖いくらいだった」

アサミは綺麗に手入れされた細い指をテーブルの上で絡ませた。

マドカは手にしたカップをソーサーの上に静かに乗せて、アサミの顔を見つめていた。

「でも…今思えば、それで正解だったのよ。ロランに出会わなければタツちゃんの夢もこうして実現しなかっただろうし、ラ・ヴォワ・ラクテっていうバンドも生まれなかったんだから」

アサミは長い間、その長い睫毛を伏せていた。

マドカはじっと、彼女が再び話し始めるのを待った。

「関西中探し回っても、結局ボーカルは見つからなかった。でもね、やっぱりそのボーカリストはいた。タツちゃんの求めるすべての条件を満たしたボーカリストが存在したの」

「すべての条件？」

「それは私にも分からない。タツちゃんにしかイメージできないことだから」

店内は仕事帰りのOLたちで賑やかになった。

どのテーブルにも、おしゃべりに夢中な彼女たちの華やかな雰囲気気が漂っている。

アサミは残りのコーヒーを飲み干して、ゆっくりと唇をカップの縁から離れた。

「結論から言うとね、ロランは松山にいたの」

「松山？松山って…愛媛県なの？」

「そう。松山の、ずーっと田舎にある小さなライブハウスにいた。ロランはそこで、フランスのロックバンドのコピーをしていたの。そのフランス人のバンド名は忘れちゃったけど、あの頃は…今もそうだけど、フランスのロックバンドのコピーなんて誰もやらないものね」

アサミはそう言ってテーブルの上で指を組み替えた。

「タッチちゃんはロランのことを人づてに聞いて、何度も松山に足を運んでロランのステージを見た。遠い田舎の、今にも崩れそうな寂れたライブハウスに、タッチちゃんのイメージをリアルに持ち合わせたボーカリストがいたのね」

マドカはあのライブの日、ステージの上に立つ彼の姿にあっさりと瞳を奪われてしまったことを思い出した。

麗しく力強い大きな瞳が、フロアにいる全ての人間を惹きつける。ステージの上で様々な色に変化するロランの表情が、一つ一つの曲に鮮やかな息を吹き込む。

ロランの魅力は甘く透明な歌声だけではないことが、そこにいる全ての人間にはストレートに伝わる。

それは、才能や素質という領域に収められるものではない。

ただ、そこにロランがいる。

それだけでその場がステージになる。

マドカは、彼の持つ美しさが見事に凝縮された世界がそこにはあるのだと思う。

それだけのことだと思う。

「ロランはタツちゃんの誘いを何度も断り続けたの。タツちゃんは自作のデモテープを持って、しつこいくらいロランに会いに行った。俺の前に立って歌って欲しいって。ロランが歌ってくれないのなら、タツちゃんは必死になって確立させたそのバンドを辞めるとまで言い出したのよ。ロランがどうしてそこまでタツちゃんの想いを受け入れなかったのか、それはロランにしか分からない。でも、ロランはタツちゃんにある条件を呑んでくれたら、歌ってもいいって言ったらしいの。これは他のメンバーも知らない。タツちゃんとロランが交わした、契約みたいなものだと思う」

「…契約？」

「もちろん私にも詳しい内容は分からないわ。タツちゃんも誰にも言わないし、そのことを話題にも出さない。もう忘れてるんじゃないかな、きつと。男同士の約束みたいなもので、あまり重要なことではないと思うけど…。ロランが加入した後は、だいたいマドカちゃんも知っている通りだと思う。インディーズで出したアルバムが売れて、メジャーデビュー。そんな感じかな」

アサミはそこまで話し終えると、今までで一番素敵な微笑みをマドカに向けた。

洗練されているわけでもなく、幼さを残した可愛らしさでもなく、アサミの柔らかな笑顔は生まれ持った美しさのように、無意識のまにそこにあるものだった。

優しくて柔らかい。

どこか懐かしい風景に溶け込んだようなその笑顔。

「マドカちゃん…、ロランが好き？」

「えっ…？」

唐突なアサミの質問に、マドカは顔を赤くして下を向く。

「好きなのね」

マドカの恥ずかしそうな表情に、アサミは目を細めた。

「マドカちゃん、私がこんなこと言うのもおかしいけど…、ずっとロランの傍にいてあげてね」

アサミは淡い照明の下で、長い睫毛を揺らしていた。

「マドカちゃん、ロランは悲しみを背負って生きてる。ロランの心にはぼつかりと大きな穴が開いているのよ。私にはそれがなんとなくだけど、分かる。ロランはずっと寂しかったんじゃないかな。ロランは喜びとか悲しみを、誰かに共有してもらいたんだと思う。でも、それは誰でもいいわけじゃない。彼は滅多に人に心を表さないから…。きっと、ロランはずっと探してるんだよ。その悲しみを沈めてくれる誰かを、ずっと探してる」

第五章 或るボーカリストの軌跡（2）

部屋のドアを開ける。

月明かりがシンクの上に一筋の線を落とし、キッチンの床に丸い円を描いている。

静まり返った部屋の中に冷蔵庫の稼動する音が響き、板張りの床はひんやりとしている。

ロランはまだ帰っていない。

マドカはガラスの仕切り戸を開け、狭い六畳の部屋を見渡した。

何も変わらない。こざっぱりとしたシンプルな部屋。

煙草の吸殻と一緒に、テーブルの上に散らばる六線譜。

ギターのコードがずらずらと殴り書きされている。

その空白のスペースに、マドカは言葉の断片を見つける。

おそらく詞を書いていたのだろう。

そこには、一人のアーティストとして生きるロランの影が浮遊していた。

マドカの手が触れない領域。

ロランの世界を取り囲む城壁が、マドカの言葉を跳ね返す。

ふと、マドカはアサミの言葉を思い出した。

ロランは悲しみを背負って生きてる。

目を凝らせば、霞んだ空気の中にある塵とともに、濃い闇と深い悲しみが存在しているように感じられる。

六線譜の上にも、煙草の吸殻の中にも、窓辺に置かれたギターの傍らにも、ロランの面影と一緒にそれは淡いベールに包まれている。

でもそれは結局、マドカのやるせない想いを描いた欲望の渦なのかもしれない。

マドカは綺麗に整えられたベッドにそっと腰掛け、部屋の明かりもつけずにテレビの電源を入れた。

14インチの画面に、無意味な笑いが飛び交っている。

チャンネルを変えながら、21時の人々の営みをマドカは画面から感じ取る。

ぼんやりと青白い画面を見つめていると、車のCMが流れた。

どこかで耳にしたことのある歌声。

画面の右下、「Song by: La Voie Lactee」
の文字。

カタン…

玄関のドアが開き、外灯の光が部屋の中に差し込んでくる。

ロランが鍵を開け、扉を閉める音が聞こえた。

「マドカ？」

ロランはベッドの上に体育座りをしたマドカの姿を見つけた。

両腕で膝を抱え込んだまま、マドカはコンビニの袋を下げたロランの顔を見上げる。

「マドカ、どうしたん？電気もつけないで」

ロランが部屋の明かりを点ける。

黄白色の蛍光灯がカチカチを音を立て、二人の頭上で静かにその呼吸を始めた。

ロランはジーンズのポケットから煙草を取り出すと、部屋の鍵と一緒にそれらをテーブルの上に置いた。

「どうしたん？ 冴えない顔して」

ロランが首を傾げてマドカの顔を覗く。
サングラスをかけたロランの瞳が、レンズの奥で幾通りの光をも放っていた。

「マドカ、何ふてくされとるん？」

ロランはコンビニの袋からミネラルウォーターと缶ビール、牛乳と朝食のヨーグルトを取り出して順番に冷蔵庫の中にしまった。

冷蔵庫の扉を開くと、オレンジ色の光がロランの頬を鮮やかに照らした。

マドカはロランの心に潜む、その闇を手探りで前に進もうとする。
まだ知らないロランの過去を、小さな両手で抱き締めようとする。

マドカは彼の内側に秘められた壁を無言でノックする。

確かな痛みが、そこにはあるのだ。

「ほら」

目の前に大きな手が差し出される。

マドカは深い藍色の瞳をしたロランを見上げた。

「散歩や」

大通りを走る車のライトが左右に揺れ、くもったエンジン音とともに生温い風を吹き付ける。

マドカは静かに繋がれた手を見つめた。

無言のまま口を噤んだ二人の指先。

その指先にマドカは心の声を落とす。

きつと、ロランの音楽は世間に認められていく。

それでも、ロランは私を大切な女の子だと思ってくれるのかな…。

ロラン…私には、あなたの抱えた悲しみが理解できる？

その瞳に映るすべての風景を私にも見せて。

「なあ、俺、腹減ったんやけど。マドカは？」

後ろを振り返るロランのブラウンの髪が、通りを走る車の風にさらされて白い肌をかさかさとして撫でている。

黙り込んだままのマドカに、ロランの口から溜息がこぼれた。

歩道に並んだ二つの影に、繋いだ手の温もりが穏やかに流れている。

再び前を向いて歩き出すロランに、マドカの心は小さく震えた。

「シーザーサラダとスモークチキンのディッシュ。で、俺がビール」
ウェイトレスがしよげたマドカの横に立ち、注文を打つ。

「それと、こいつにはクリームソーダ」

二人は駅前のファミレスにいた。

深夜のファミレスは和やかだ。
ぼつぽつと空席が見えるフロアは、遠くから眺めるとやけに寂しく見える。

ロランは煙草に火を点けた。

ファミレスで彼の姿を見つめるのも、何だか妙な感じがした。

「私、クリームソーダなんて飲みたいって言ってないよ」

マドカはぼんやりと煙草の煙の行方を目で追った。

「マドカ、クリームソーダ嫌いなん？」

サングラスを外したロランの瞳がこちらを向く。

「嫌いじゃない…むしろ大好きだけど」

「やっぱり。まだ子供やな。子供って、機嫌の悪い時にクリームソーダ与えると喜ぶやろ」

マドカはぽかんと口を開けてロランの顔を見つめた。

「別に、機嫌悪くないよ」

「いや、機嫌が悪いというより…いつもの笑顔が見当たらん」

そんなことない。

ただ、自分の無力さに少し落ち込んでいるだけなのに…

マドカの前にクリームソーダが運ばれる。

グラスいっぱいに詰められたアイスクューブ。
鮮やかなグリーンに着色されたソーダ水。

綺麗な半球型をしたバニラアイスに赤いさくらんぼ。

マドカは思う。

ロランは簡単に人の心を引きつけてしまうのと同時に、引きつけたその心を離さない。

これはマドカが彼に恋をしているからではない。
おそらく、ロランのこうした先天的な魅力にタツも魅了されたはずだろう。

選ばれた人間にしか与えられない美しさ。

とても必然的に、ロランはこの世界に生まれてきたのだとマドカは思う。

マドカは赤いさくらんぼを口に入れた。

「こうしてマドカと外で食べるのって初めてやな。たまには外で食べるのもええな。ファミレスやけど」

ロメインレタスを頬張りながら、ロランが言う。

マドカはストローの先を左右に折り曲げながら、ロランの瞳を直視した。

「どうしたん？」

ロランは不思議そうに首を傾けた。

「ロラン…」

「ん？」

ロランは口に運んだフォークを静かに下ろす。

「ロランは…、私とこうしているところを誰かに見られても、平気なの？」

「平気って？」

「だって…ロランは今いつちばん注目を集めているバンドのボーカルで…私とだってこうして仕事で会ってるわけじゃないし、ファンの子だっていっぱいいて…ほら、バンドにとって今は大事な時期なんじゃないかな、って思ったわけで…」

マドカはそう言っつて、手持ち無沙汰になった両手を膝の上に丁寧に揃えた。

「お前、今更何言ってるん？バンドはバンド、マドカはマドカ。それとも、マドカ…そんなに気にしてるん？」

マドカは首を左右に振った。

「俺、マドカはそういうの気にしないと思ってたんやけど」

「うっん、実は…今日ね、アサミさんに会ったの」

「アサミ？」

マドカは頷いた。

「あー、タツちゃんのか」

「ちょっとアサミさんが羨ましくなったんだ。私の知らないロランを、たくさん知ってて…」

再びうつむいて目を伏せたマドカに、ロランが小さな溜息をつく。

「なあマドカ、マドカは俺のことよく知つとる。チーズバーガーはダブルが好きで、真昼間に絵描いて、弱ってる時に一人でいられなかったり。マドカにしか見せたことのない俺の顔…いっぱいあるんやけどな」

ロランは眩しそうに目を細めてマドカを見た。

目を細めてそこにある対象を見るのが、ロランの癖だった。

「私の記憶の中にあるのは、絵本を読んできた優しい声と、一枚の絵葉書」

「絵葉書？」

二人は浅い眠りから覚める。

眠りから覚めた二人は、互いの存在を確認するかのように何度もキスをする。

ロランがマドカの耳朵を噛み、マドカは彼の滑らかな髪を撫でる。額に触れ、ロランはマドカの頬を両手で包み込む。

マドカはこの瞬間が一番好きだ。

その深く色づいた瞳に見つめられたまま、時間が止まれば良いのにと願う。

ロランの胸に鼻先を寄せて、マドカは何度もそう願う。

「お母さんが死んだ時、傍に置いてあったの。一枚の絵葉書が…」。

どうしてお母さんは自殺なんてしたんだろう。小さな私には何も分からなかった。お母さんの顔も覚えていないくらいだもんね」

マドカは霞んだ部屋の空気をそつと吸い込んだ。

外の冷たい空気が薄い壁を伝って部屋の中に入り込んでくる。

「お母さんの写真…、再婚した時に父親が全部捨てちゃったの。写真だけじゃない。ある日学校から帰ったら、母親の記憶に繋がるものは全部なくなってた。お母さんが編んでくれたっていう毛糸の帽子とか、セーターとか…私の幼い頃の記憶がすべて失われてしまったの」

マドカはロランの腕に顔をうずめた。

「勝手に母の思い出を捨ててしまう父親の行為も酷いって思ったけど…私は父親のことが大好きだったから。新しい母親に早く懐いて欲しいっていう気持ちからしたことなんだって分かってたから、何も言えなかった。でもね、母親の記憶が薄らいでいくにつれて、私の中で母の思い出を繋ぎ止めようっていう想いが強くなっていった。その顔も覚えていないけれど、私にとってのはたった一人のお母さんなんだって、そう思うようになったの。だから案の定、新しい今の母親とは折り合いが悪くて酷い喧嘩も何度かしたし、自分の殻に閉じこもってみたりしたこともあった。だけど、そんな家庭環境だからって周りに迷惑だけはかけなくなかったの。親が再婚するって珍しいことじゃないし…だからちゃんと勉強して働いて、早く自立す

るんだって思ってた。反発しても惨めになるのは自分自身だって気づいたから」

ロランはマドカの背中を掌でぽんぽんと叩いた。

手のひらから伝わるロランの体温が深い優しさとなってマドカの体に潜り込んでいく。

「父親が死んで五年近くになるけど…、実家にはもう二年以上も帰ってない。私は今でも、自分の本当の母親は二歳の時に亡くなった母親だと思ってる。きつと、いつかは越えなくてはならない壁なんだろうね。私はまだ、小さな女の子の端くれでしかないんだよね」

マドカはその晩、ロランの腕の中で声も出さずに泣いた。

ロランが週刊誌に叩かれたのは、それから五日後のことだった。

第五章 或るボーカリストの軌跡（3）

「人気ボーカリストの寂しい過去」

若者を中心に人気急上昇中のロックバンド「ラ・ヴォワ・ラクテ」のボーカル、ロラン（年齢非公表）に悲しい過去が浮上した。

ラ・ヴォワ・ラクテのボーカルと言えば、その女性をも超える謎めいた神秘的な美しさで多くのファンを魅了しており、彼の魅力がこのバンドをスターダムに押し上げたと言っても過言ではない。

我々取材班の報告によれば、彼の父親は愛媛県松山市に生まれた風景画家、桜田直義で、彼が幼い頃に交通事故で他界（享年35）、唯一の肉親である母親の所在はつかめず（或いは既に他界）、幼くして頼る肉親を亡くした彼は、愛媛県内にある児童養護施設を転々としていたと言う。

実際に施設で生活を共にしていた方に、一部話を伺うことができた。

「彼とは七歳から九歳までの約二年間、同じ施設で生活していました。彼は無口で感情を表に出さず、いつも絵ばかり描いていました。大人しくて手のかからない子供だと教師には可愛がられていましたよ。ですが、我々子供たちのあいだでは彼に対して良い感情は抱けませんでしたね。話し掛けてもこちらの声に答えようとしません。これといって特定の友達はいなかったと思います」

また、知人の話によると、彼は十三歳の時、暴行事件を起こして施設を追い出され、以来、知人女性宅を転々として暮らしていたという。

十四歳で松山市にあるライブハウス「Duo」に出入りし、十九歳で大阪に移住するまで、肉親の愛情に飢えた素行の知らない生活が続いた。

針のように細い雨が、垂れ込めた灰色の雲からアスファルトに降り注ぐ。

スモークのかかった街をマドカはぼんやりと歩いていた。

目に付いたカフェに入り、揺りかごのようなソファにもたれて記事を読み返す。

『人気ボーカリストの寂しい過去』

カプチーノの泡をスプーンですくう。
コーヒートミルクが溶け合ったカップの中で、角砂糖が崩れていく音が今にも聞こえてきそうだった。

通りを染める色とりどりの傘が、湿った空気の中で美しく舞っている。

記事の上部に、ラクテの宣材写真を切り取ったロランの顔が大きく載っている。

寂しそうな陰影を含んだ瞳で、ロランはこちらを向いていた。

その瞳に映るのは遠い過去なのか、どこかへ続く未来なのか。

マド力は指先で写真をなぞった。

ぼそぼそとした再生紙の上には、温かなロランの体温も柔らかな声も聞こえない。

それはただ、マド力が彼に出会う前の記憶だった。

ひっそりと息を潜めて、記憶の断片が宙に舞う。

閉じた傘を引きずりながら、暗い夜空を見上げる。

頭上には美しい月が小さな予言のように佇んでいる。

肌を撫でる風は日に日に秋の色を増し、ひやりとした空気の中で

さわさわと音を立ててすり抜けていった。

ロランのアパートへ向かうマドカの足取りは重い。
いつもなら、ピンヒールを軽やかに鳴らしてこの道を急ぐのに。

等間隔に並んだ外灯の明かりに違和感を感じながら、マドカはロランのことを考えていた。

きっと、記事のことをロランは特別気にしていないだろう。
ロランにとっては、当たり前に通り過ぎて来た道なのかもしれない。
い。

記事にあったことが嘘でも事実でも、マドカにはどちらでも構わなかった。

ただ、寂しそうなロランの瞳はマドカをいつも言いようのない虚しさの中に追いやってしまう。

そんな瞳のロランは見たくない。

彼の抱える感情をすべて共有したい。

マドカが願うのはそれだけのことだった。

マドカはあの公園に立ち寄った。

噴水の音が鳴り響く園内でベンチに座り、辺りを見渡してみる。

数ヶ月前にロランとこの場所で出会った時、マドカにとってただロランと一緒にいる時間だけが、夢い夢の欠片みたいにきらきらと輝いていた。

彼の仕草を一つ一つ瞳に焼き付けて、そつとそのワンシーンを思い出す。

それだけでマドカの心は弾んだ。

けれど、今のマドカの心を揺らすのはロランの瞳に沈む、その寂しさだった。

彼のことを知りたいと思うほど、マドカの胸は不安でいっぱいになる。

そこにあるはずのロランの姿が、霞んでいくような気がするのだ。

「マドカ？」

名前を呼ばれ、マドカは顔を上げた。

「見つけた。やっぱりここにおったんか」

いつものように美しい微笑みを浮かべ、ロランはマドカの隣に腰掛けた。

「ロラン…」

「部屋で待ってても、マドカ遅いから迎えに来たん」

ロランはそう言ってマドカの長い髪を撫でた。

唇に挟んだセブンスターから白い煙が立ち昇る。

いつもと何も変わらない美しさと、子供のような笑顔を見せるロラン。

マドカは言葉が見つからないまま、黙ってうつむいた。

「なあ…、十五夜っていつなん？」

「えっ…、もう終わったと思うけど…」

「なんや、団子食いたかったな」

ロランは空に浮かぶ満月を見上げた。

指に挟まれた煙草の灰が、風に吹かれてぱらぱらと散らばる。

マドカは鞆の中に畳んだ週刊誌のことを気にかけていた。

聞くべきか、聞かないでいるべきか。

「今夜は月が綺麗やな」

遠い月に向かって、ロランが煙草の煙を吐く。

その白い煙は優しい夜風に揺られ、どこかへ消えた。

「ロランってさ…」

「ん？」

「七夕とか、十五夜とか…季節を感じるのが好きなの？」

マドカは首を傾げてロランの瞳を覗いた。

「もしかして、俺って季節感ない？」

「なさすぎだよ」

「日本人たるもの、四季を感じて生きるのが基本やね」

ロランの指先からセブンスターの灰が落ちる。

その美しい横顔を、穏やかな風が撫でていく。

「日本のアーティストは恵まれてとるな。春には春のイメージがあって、夏には夏、秋：冬は雪も降るし。そうして季節が巡るたびに、色んな景色を思い出す。まあ、ミュージシャンやったら、それぞれの季節を描いた曲を一曲は残したいわな」

そう言ってロランは短くなった煙草を揉み消した。

「タツちゃんの受け売りやねんけど」

外灯のオレンジに包まれたロランの横顔を、マドカはそっと胸の奥に仕舞い込む。

その笑顔があれば、どんなことがあっても強くいられそうな気がする。

ロランの隣に、ずっと強くいられそうな気が。

「なあマドカ…、マドカは母親の顔、覚えてないって言ったやろ？」

マドカはこくりと頷いた。

「俺も母親の顔なんて覚えてない。覚えてないというか、全く知らない。母親の声とか温もりとか…そういう記憶もない。俺は、母親がどこの誰かも知らんねん」

「ロラン…」

マドカはロランの横顔を見つめた。

「小さい頃の記憶で覚えてるのは、病院のベッドの上だった」

「…病院？」

「ああ。目を開けたら、そこに親父がいた。親父しかおらんかった。それがいくつの頃の記憶か分からへん。でも、俺には親父しかおらんかった。」

親父は画家やったから毎日絵を描いていて、俺は親父と二人で小さなアパートで暮らしてたんやけど、狭い部屋の中は画材やらカンバスで埋め尽くされていて、絵の具の匂いだとか油の匂いとか、それが幼い頃の記憶として残ってる」

マド力は黙って頷いた。

「マド力も、週刊誌の記事見たんやろ？あれに書いてあることはほぼ事実やな。まあ、俺は書かれたことに対して別に何とも思わへんから。ただ…このことで、メンバーやスタッフや…マド力に迷惑かけてしまったな」

「迷惑…？」

「心配したやろ？」

「うん…」

マド力はロランの白い指先にそっと触れた。

「ロラン、私は迷惑だなんて思っていないよ。私は…もっとロランを近くに感じたいし、もっとロランのことが知りたい。寂しそうなロランは見たくない。できることなら、ロランの背負っているものを全部一緒に…」

「マド力…」

ふわりとロランの腕の中に抱き寄せられる。

腕の中で、マド力は彼の鼓動に耳を澄ませた。

「マドカ…、失いたくない」

「ロラン…？」

ロランは小さな体をマドカに寄せ、華奢な腕でマドカをぎゅっと抱き締めた。

「マドカだけは失いたくない。俺は小さい頃にひねくれてしまったせいで、どんなに欲しいものも欲しいと言ったところで手に入らないって思ってた。本当に欲しいものなんて何もなかったし、何も必要ないって思ってた。だけど、その代わりに失うものばかりが増えて、ある日気づいたら俺は空っぽになってたんやな」

ロランはそう言って、マドカの耳に頬をぴたりと寄せた。

「マドカに出会って…マドカは俺の失くしたものをそつと手繰り寄せてくれた。マドカの無邪気な笑顔…見ていたら、空っぽな俺の人生も捨てたもんやないなって思った。こういうのって…重い？」

ロランは大きな瞳を潤ませてマドカの顔を覗いた。

マドカはぷつと噴き出して笑う。

「こら、何で笑う」

マドカはロランの腕を掴み、声を上げて笑う。

「だーって」

満面の笑みを浮かべて楽しそうに笑うマドカに、ロランの口元も緩んだ。

「だって、ロラン…子供みたい。子供がお母さんに甘える時みたいな表情するんだもん。可愛い」

手を叩いて喜ぶマドカに、ロランはむっとした表情を作る。

「でも…どうして私なんだろう。ロランだったら…綺麗な女の子がたくさん寄ってくるでしょ？それに、ロランを幸せにしてあげたいと思ってる女の子なんていっぱいいるよ」

「そりゃな。確かにマドカはまだまだ子供やし、胸は小さいし、まだエッチも上手くないし、料理も俺のほうが巧いし、すぐ泣くし…」

「ちょっとロラン！それって私のことバカにしてる？」

マドカは頬を膨らませてロランの顔を見る。

「嘘。さっきのお返し」

そう言って、ロランは再びマド力を抱き締めた。

「マド力…やっとめぐり会えたな。神様が、マド力に出会えるように俺をここまで連れて来てくれた」

ロランの息遣いを耳元に感じながら、マド力はそっと目を閉じる。

「俺はきっと、マド力を愛してる」

「きっと…？」

「いや、たぶん…」

「なにそれ？」

「うるさい。愛してる」

ロラン…あの時、私は本当に幸せな女の子だった。

あなたの傍にいと、いつの日も胸が痛かった。

今にも消えてしまいそうな美しいあなたを、私は小さな手で抱き

締めてあげることしかできなかった。

それでも、あなたは私を愛してると言ってくれた。

あなたの失った風景に、私はほんの少しだけ近づいた気がしたの。

あなたの瞳に映る景色を、ほんの少しだけ眺めることができたように感じたの……

完璧な闇が訪れる前に、ひとつの光が消えてしまう前に、私はずっとあなたの傍にいたかった。

あなたを…その悲しみの海から救いたかった。

なのに、気づいてあげられなくて…
ごめんね、ロラン。

第六章／過去への招待状（１）

「久しぶりじゃん」

智樹の声に振り返る。

マド力はウェイター姿の智樹の傍に駆け寄ると、どこか曖昧に微笑んだ。

「今、休憩時間だから。あまり長く話せないけど」

智樹はそう言って、コインパーキングに設置された自動販売機のボタンを押した。ガチャンという大きな音を響かせて、取り出し口に缶コーヒーが落ちてくる。

溜息をつきながら缶に口を付け、智樹はマド力に視線を向けた。

「元気？」

「うん…まあまあ」

二人はブロック塀に凭れ、通りの風景を眺めた。大学通りの一角を、講義を終えた学生がぞろぞろと通り過ぎて行く。

「智樹…」

「ん？」

「ごめん」

「ごめんって…何だよ」

智樹は不安げに俯いたままのマド力に視線を送った。

「怒ってないの？」

「はあ？何のことだよ？さっぱり分かんねーんだけど」

智樹はそう言つと、一気にコーヒーを飲み干した。穏やかな秋の風がマド力の長い髪をさらさらと揺らしている。マド力の小さな顔を見つめながら、智樹は手の中の缶をきつく握り締めた。

「うまくいったんなら、よかったじゃん？」

「えっ？」

「うまくいったんだろ？あのバンドのやつと」

「なっ、なんで!？」

「顔に書いてあるもん。それに、なんだかマドカ可愛くなった」
智樹の意外な言葉に、マドカは再び下を向く。

誰よりも近くにいた智樹。その存在が少しずつ、マドカを取り囲む世界から遠ざかって行くような気がしていた。

「智樹…ごめんね」

「だからー、なんで俺に謝るのか意味わかんねーんだって」

智樹はそう言うと、ブロック塀を離れてマドカの前に立った。

「あの日…」

「あの日？」

「智樹、私のこと心配して誘ってくれたのに、私…途中でいなくなったりして。しかも、それからもう一ヶ月以上連絡してなかったし…私って、友達失格だよな？」

マドカの瞳が智樹の顔をじつと見つめる。

時折吹き付ける風がマドカの前髪を左右に揺らした。色白の小さな顔を少し上げ、上目遣いで長身の智樹を見つめるマドカ表情は、いつだって智樹のもやもやした想いを不完全な場所へ導いていく。

「なんだよ、そんなの別に気にしてねーし。それに…俺はお前と会わなかったって、遊んでくれる女の子はいっぱいいるんだよ」

智樹はそう言って、空になった缶を数メートル先のゴミ箱に向かって投げた。

カランという気持ちの良い音を立てて、缶がゴミ箱に落下する。

「智樹…、私ね」

「ん？」

「智樹がいてくれたから、どんな時もまっすぐ前を向いて歩いて来れたんだと思う。私が何かにつまずいて、前に進めない時…いつも励ましてくれたのは、父親でも彼氏でもなく、智樹だもん。田舎から上京して寂しかった時も、智樹と一緒にいてくれたから頑張れた。だから…これからもずっと何でも言い合える仲でいて欲しいな

…」

「お前、いきなり何言っちゃってるわけ？」

智樹がぷつと噴き出した。

「なつ、何で笑うのよ！笑うとこじゃないし！」

マド力はそう言つて、長いタブリエのポケットに突っ込まれた智樹の両腕を強引に引つ張った。

「だつて、お前…」

笑いを必死でこらえた涙目の智樹に、マド力はぷいとそっぽを向く。

「おい、そんな怒んなつて。可愛い顔が台無しだぞ」

「えっ？」

「嘘だけだな」

マド力は智樹の胸を握り拳で叩いた。智樹の胸はマド力の手を跳ね返す。

骨張った智樹の大きな手に、マド力の腕はすぐに捕まってしまう。

体格も性格も、ロランとは対照的な智樹。

優しくて意地悪なところは似てるけれど、その優しさは違う。智樹の優しさはいつまでもずっと傍にあるものだ。マド力は思っていた。ただの友達でも恋人でもない、それは抱き心地の良いクッションのような関係。

智樹がいてくれたからこそ、マド力は悲しみを共有してくれる相手を近くに感じる事ができた。マド力は、ロランにとって自分がそういう位置に属した人間になりたいと強く思う。

二人を繋ぐ、目に見えない鎖のようなものを結びつけることができた。どんなに素敵だろう。ロランにとって、そんな存在になれたら。

「智樹、ネクタイ曲がつてる」

黒いレザールのネクタイの首元を、マド力は背伸びして直してあげ

る。

「サンキュー」

智樹は軽やかに手を振った。

タブリエの裾を揺らして路地に消えるその後姿を、マド力は笑顔で見送った。

銀杏がその葉を金色に染め、見事なグラデーションを作り上げている。

マド力の頭上には、秋晴れの高い青空が広がっていた。

おろしたてのトレンチコートを羽織り、ブーツの踵を鳴らして歩く。ロランに出会ってから、マド力は今までよりヒールの低い靴を選ぶようになった。新しい靴を買う時はいつも、ロランのことを思い出す。

全速力で走ったら危ないよ。

思えばそれがすべての始まりだった。

たった一人の愛しい人に出会えた喜びを、マド力は胸の奥で抱き締める。

オフィス街にある公園を横切り、マド力は図書館を訪れた。

平日の午前中、館内に見える人影はまばらで、広々とした空間にどこか得をした気分になる。

カウンターでレファレンス係に美術書のある場所を尋ねる。

マド力は、ロランの父親の絵を探しに来たのだ。

『日本の名画』『日本人画家名簿』『美術史・日本人画家に学ぶ』

緑地公園が見渡せる窓際の席に座り、書架から抜き出した本に順番に目を通す。けれど、週刊誌に載っていたロランの父親、桜田直義という名前はいくらページを捲っても現れなかった。

三冊目の本を手に取り、「売れない画家だった」というロランの言葉を思い出すと、探しても見当たらないだろうという気持ちになつていく。

最後のページを眺め、マド力は本を閉じた。

マド力は再びレファレンス係の元へ向かった。忙しそうに電話の対応をしていた女性に代わり、事務室にいた若い女性がマド力に笑顔で対応した。

「松山出身の画家を探しているんですけど、そういうのって地方史に載ってるんですか？」

「どのような画家でいらっしゃいますか？」

「二十年くらい前の画家で、風景画の……」

「それでしたら松山市の観光ガイドや市政ガイド、もしくは松山市の芸術家という美術雑誌がございますので……」

『松山市の芸術家』という雑誌を胸に抱えてマド力は席に戻った。ページを捲ると、そこには夏目漱石や正岡子規のほか、松山市を代表する作家・詩人・音楽家・画家などの名前がずらりと並んでいた。

松山市の歴史と並行して、芸術家の名前が書かれた年表。それは1980年で終わっていた。

マド力は素早く人名索引に目を通していく。

さ さくらだなおよし 桜田直義：p142

マド力は恐る恐るページを捲っていった。

さくらだなおよし
桜田直義

194X年～197X年（享年35）

194X年、愛媛県松山市に生まれる。美大卒業後、27歳でフランス留学。

力強い色彩感覚と繊細なタッチを持ち合わせた新時代の画家として注目を浴びるが、35歳という若さで残したその作品はあまり評価されていない。

代表作に「湖水」などがある。

あまり評価されていないって……こんな書き方しなくてもいいのに……

ロランの父親は、どちらかというところあまりぱっとしない風貌の、異様に痩せこけた顔の男だった。雑誌に小さく掲載された写真から、マド力が感じ取れるのはそれくらいのことだった。三十代の頃だと思われる写真は、無造作に整えられた頬に掛かる長い髪と、自然に伸びた髭は放浪者を思わせた。

だが、しばらくその顔をじっと見つめていると、桜の花弁のような形の良い唇に薄っすらと浮かんだ微笑と、凛々しい眉の生え際がどこことなくロランに似ていた。

それでも写真の男性とあの美しいロランを重ねることのできる人間は、まずいないだろう。

ロランは母親似なんだ……

ページの四分の一に記された桜田直義の略歴。

マドカはもう一度、簡素な文章に綴られた彼の一生をたどっていく。

代表作に「湖水」などがある。

ふと、マドカの頭を過ぎる湖の水面。

それはマドカの故郷秋田県の、ある湖の面影だ。深い緑色の水面を吹き抜ける五月の風。新緑の山並みを映した揺れ動く波紋。

懐かしい記憶が、マドカを遠い空の下に誘う。

目蓋の奥に広がる淡い母の面影と、その匂い。

マドカは長い間、椅子の上で静かに目を閉じていた。

どこからともなく聞こえる鳥の囀りが心地良い。

柔らかな秋の日差しが、マドカの頬に光を差す。

マドカは瞳を開けた。

ロランの父親が写真の中でどこちなく微笑む姿をしっかりと目に焼き付ける。

画家、桜田直義は幼いロランの記憶にどのような影を落としていくのだろうか。

その存在がロランにとってどんな種類の感情を呼び起こすものなのか、マドカには想像もつかなかった。

ふと、隣のページに視線を落とす。モノクロ印刷された一枚の絵。

桜田直義 『湖水』

彼の感情が今にも溢れ出しそうなくらい熱情的なタッチで描かれたその絵は、マドカに深い感銘を与えた。

しかし、その感銘が驚愕に変わったのは言うまでもない。

母の記憶に眠るあの出来事が、足音を立ててマドカの体を通り抜けた。

手の中に握られた薬の瓶。テーブルの上に伏せた母の抜け殻。そして、一枚の絵葉書。

どこかで繋がっている。

桜田直義の「湖水」は、母の記憶に貼り付いた予言であったのだ。言葉を無くしたマドカに、「湖水」は無言で語りかける。

「ロラン…、私…この絵知ってるよ」

マドカの中で千切れた感情は、その瞬間、深い闇となって訪れる。水面に描かれた一艘のボートが、マドカの想いをどこかへ奪い去るうとしていた。

第六章／過去への招待状（２）

「えー、ではタツさんにお伺いします。今回のアルバムの聴きどころは？」

「なんやらな、んー…ラ・ヴォワ・ラクテってこんなバンドですよ、っていうのをまず聴いて覚えてもらいたいかな。歌詞がどうでメロディーがどうでっていう、技術的なことはその次でいいかな」

ラクテのファーストアルバム発売まで一ヶ月を切った。

セカンドシングルが８０万枚を売上げ、ラ・ヴォワ・ラクテはその名を日本のロック界に異例の如く留めようとしていた。

スチール撮影を終えたラクテのメンバーは、和気藹々とした雰囲気取材に応じてくれた。

表紙と巻頭特集がラクテの記事で埋まる。彼らの勢いは留まることを知らない。

きつと、これからなのだ。ラ・ヴォワ・ラクテの革命は、まだその序章部分を彷徨っているだけなのだ。

「ではロランさん、全１０曲の歌詞をすべてお書きになられますが、普段はどんな時に詞を書かれるんですか？」

恋人にこのような質問をするのも変な感じだ。それに、ロランの態度がおかしい。隣にいるタツの表情も、メンバー全員の視線がじれったくてくすぐつたい。

「えーっと、どんな時に詞を書かれますか？」

さつきより声を張り上げて、マドカはロランの顔色を伺う。

「マドカちゃん、そんなマドカちゃんのこと考えて書いてるに決まっとるやろ」

タツが真面目な声で答えると、マドカの顔が赤くなる。ラクテのメンバーも堪えていた感情を噴出して笑った。

「意地悪…」

マドカは下を向き、ヴォイスレコーダーの録音ボタンを取り消した。

「マドカ？」

ロランはマドカの顔を覗くと小さな溜息をつき、マドカの手からヴォイスレコーダーをもぎ取った。そして自ら録音ボタンを押して喋り始めた。

「詞はすべて妄想で書いています。実体験をもとに書いてるわけではないんで」

ロランが声を張り上げる。

「これでええ？」

ロランは悪戯に笑うと、メンバーと雑談を始めた。

「ロラン！」

「どうしたん？」

「どうしたじゃなくて…！」

取材を終ると、マドカは思わずロランに駆け寄った。

「もう！何であんなこと…」

ロランはセブンスターをそつと口に運んだ。ほろ苦い香りがマドカを包む。

ロランはマドカの頭をぼんぼんと掌で撫でると、子供みたいに首を傾けた。

「なあ、それより今日やる？」

マドカが顔を上げる。

「豪華フレンチフルコースディナー。待ち合わせは、18時？」
ロランがにっこりと微笑んだ。

その夜、二人は食事の約束をしていた。図書館で桜田直義の略歴と「湖水」を目にしたあの日以来、ロランの父親のあの絵が、自分の幼い頃の記憶にはつきりとその形を残しているという偶然の一致

ととれる数奇な話を、マドカはなかなか言い出せずにいた。

あの絵がさらに掲載されたページを読み進めみると、ロランの父親は「湖水」という油絵でフランスのル・サロンに入選した記録を持っていた。彼がフランス留学中の、二十八歳の時に描かれた作品だと言う。

しかしそれ以降の経歴に関しては一切触られていないことから、ロランの父親は「湖水」以上に、世間一般に評価される作品を残せなかったと考えるのが妥当だろう。

母が自殺を図ったとき、なぜ「湖水」が描かれた絵葉書が彼女の傍に置かれていたのか。

これは単なる偶然でしかないのだろうか。

混乱したマドカの脳を、水面に揺れる緑がその色を染めていく。

ロランの父親によって描かれた一枚の絵は、どこかで繋がるもつれた糸を手繰り寄せる恐怖を、マドカにもたらしていた。

智樹のバイト先でもあるレストランは、リーズナブルな値段で本格的なフレンチが食べられる有名店だ。テーブルの上に美しくセッティングされたナイフ・フォークとワイングラスが、オレンジ色の間接照明を受けて控えめに輝く。

フロアの白い壁にはモダンな絵が飾られ、ウェイターに迎えられてフロントを抜けると、大きなワインセラーが見える。

仕事で遅れるというロランの到着を、マドカは智樹の計らいでフロアの一番奥のテーブルで待つことにした。ディナーの始まる時間より少し早めに着いてしまったため、マドカ以外に客の姿はなく、

辺りはがらんとしている。

「マドカ、何か飲み物だけでも頼む？」

ドリンクメニューを広げ、智樹がテーブルの前に立った。

「ううん、彼が着いてからで平気」

マドカはそう言ってテーブルの上で指を絡ませながら、ウェイター姿の智樹を見つめた。白いシャツに黒いレザーのネクタイを締め、立派なベストを着込んで腰に長いタブリエを巻きつけた智樹。長身のすらりと伸びた長い足に、褐色の肌が爽やかな笑顔。こんなに素敵なウェイターを親友に持つのも、悪い気分はしない。

智樹は赤ワインを両手で抱え、フロアを颯爽と歩いていた。

智樹って…、あんなにいい男だったかな…？

「お前、何見てんだよ。仕事に集中できないから、俺のことばかり見るなよ」

マドカはあどけない智樹の顔を見つめて、チャームिंगな笑顔を作った。

「まあ、彼氏の前で俺のこと見るわけねえよな」

「え？何？」

「なんでもねーよ。とりあえず、マドカのテーブルは俺が担当だから。何なりとお申し付け下さいませ」

智樹はそう言ってマドカの横で深々と頭を下げた。

何組かの客が席に着き、フロアには客たちの親密な会話とグラスを傾ける音が静かに漂った。

マドカは左手の腕時計に目をやった。

約束の時間から一時間以上が経過している。

智樹は他の客の食事のペースを気にしながら、マドカのテーブルに駆け寄った。

「マドカ、まだ来ねえの？」

「忙しいのよ、きつと」

鞆の中からシステム手帳を取り出し、マドカはスケジュールをチ

エックして暇をつぶした。

最初に来た客のテーブルの上には、既にメインディッシュの皿が運ばれている。

フロアに響くナイフ・フォークと皿の触れ合う音を耳元に聞き、マドカは溜息をこぼした。

「お待ち合わせのお客様がお見えです」

フロントの女性従業員が皿を下げる智樹の傍に駆け寄り、小さな合図をするのが見えた。マドカはテーブルの上に広げた手帳を閉じて鞆に仕舞う。

フロントの女性に案内され、ロランがフロアに現れた。

スエードのジャケットのポケットに手をつ込み、喜怒哀楽の見えない表情で、ロランはマドカの姿を探して女性の後ろを歩いて来た。

食事をしていた学生らしい女の子たちがロランの姿を振り返る。

やはりロランはラ・ヴォワ・ラクテのボーカリストなのだ。

その姿は、誰が見たって美しい一人のアーティストなのだから。

「遅くなつてごめんな。タッチちゃんが機嫌悪くて大変やつたわ。

まあ、いつものことやねんけど。もしかして…マドカ、かなり腹減つてたり、する…？」

バツの悪そうな顔をしたロランに、マドカは一度だけ頷いてにっこりと笑う。

ロランに出会ってから、デートらしいデートは今までしたことがなかったから、こうしてお洒落なレストランで彼の瞳を見つめることは、マドカにとって最高に幸せな時間だった。

ふとした瞬間に見せるロランの子供みtainな笑顔が、マドカの心を溶かしていく。

フロアにいる女の子たちの視線も、ロランがロックバンドのボーカリストであることも忘れ、マドカはただ純粹に、この時間を胸に

刻みたいと思った。

「ロラン、紹介するね。これが親友の智樹。中学の頃からずっと仲が良かったの」

ドリンクメニューを持ってテーブルに現れた智樹をロランに紹介する。

「それでこつちが…紹介するまでもないけど、ロラ…」

「はじめまして」

マドカの言葉を遮るように、智樹は営業用の笑顔をロランに向けていた。

「俺、ワインにしようかなー。お勧めとかあるん？」

ロランがワインリストを指差し、智樹の顔を見上げる。

智樹は料理の相性とそれぞれの特徴をひと通りすらすと述べた。ロランと智樹。

こんなに対照的な二人を眺めているのも、不思議な感じがする。柔らかな淡い雰囲気身をまとった幻想的なロランと、きびきびとした爽やかな男らしい智樹。まるで月と太陽のようだ。

二人のやり取りを見て、マドカは微笑んでいた。

椅子に座ったロランが横に立つ智樹を見上げると、本当に子供みたいだ。ロランの華奢な体は智樹の体にすっぽりと隠れてしまう。

「マドカも赤ワイン飲むやろ？ボトルで頼む？」

「マドカ、確か赤ワイン駄目だったよな？」

二人の間を通り抜けるみたいに、智樹の言葉が宙を舞った。

「マドカ、赤ワイン駄目なん？」

「うん、ちょっと苦手かも…私、甘めの白ワインにしようかな」

メニューを閉じて智樹に渡す。料理は適当に任せるとロランが言い、智樹はテーブルを離れていった。

フロアは客の温かな笑い声と食器の触れ合う音で満ちている。マドカはテーブルの上に折り畳んであったナプキンを広げ、膝の上に

乗せた。

「智樹くんって、マドカのこと何でも知ってるんやな」

ロランがぼやけた照明の下で、その目を細めた。

「そんなことないよ。ただの腐れ縁だもん」

「男前やな」

「え？」

ロランが言うと、それはどこか現実味を帯びていた。

「どこが？どこが、男前？」

「女にモテそう」

マドカは思わずぷつと噴き出した。

「ロランに言われたら智樹も喜ぶね、きっと」

智樹が慣れた手つきでグラスにワインを注ぐ。

澄んだ色から香る葡萄の匂いをマドカは静かに嗅いだ。

「テイステイングされますか？」

ボトルのラベルをロランに向け、智樹が尋ねる。

「いない」

ロランは一言だけ言うと、智樹に向かって穏やかに微笑んだ。

グラスの八分目までワインを注ぎ終わると、智樹はテーブルを立ち去った。

「乾杯しようか」

ロランがグラスを傾ける。

丸みを帯びたワイングラスはフロアの光を集め、眩しいくらいに輝いた。

「何に乾杯？」

「そうやなあ……」

ロランはしばらくの間、グラスを傾けたまま考え込んだ。マドカは手にしたグラスのワインをじっと見つめる。

「初めてのデートに」

ロランはそう言って、傾けたグラスをマドカに寄せた。

グラスの触れ合う音が耳に響く。

ロランはマドカの顔を見つめるとにつこりと笑い、その香りを堪能しながらワインを口に運んだ。

「ロラン、変装してくればよかったのに」

「何で？」

「今日に限ってサングラスしてないし」

「俺、そんなに有名なん？自分が見られてるとか、どうだとか、全く気にしてないんやけどな」

ロランの瞳は静かに息づいていた。賑やかなフロアを包み込む淡い光は、マドカの頭上をぐるぐると回り続けている。

「今度は、人気ボーカリスト編集者と熱愛！とかって記事にならんかな」

ロランが悪戯に笑い、大きな瞳でマドカを見ていた。子供のようなその笑顔に、マドカの胸は締め付けられそうになる。

いくつもの夜が二人の距離を縮めてくれたことに、マドカは喜びを感じた。ロランの瞳をこうして見つめることができる今の幸せを、この胸に閉じ込めておきたい。

『初めてのデートに』

ロランの言葉が心を打つ。

「ロラン…ロランのお父さんの絵、雑誌で見たよ」

ロランはナイフ・フォークを動かす手を止め、白い皿から顔を上げた。

「ごめんね。黙ってるつもりはなかったんだけど、ロランのお父さんってどんな人だったのかなあって…図書館で…」

マドカは俯き、膝の上の真っ白なナプキンに視線を落とした。

「こういうのって…嫌だよね？」

ロランは何も言わずにナプキンで口元を拭った。

「ごめん…」

テーブルの上にマドカの溜息が浮かぶ。

ロランは皿の上に綺麗に切り分けられた、鴨のテリーヌに焦点を合わせていた。

「別に謝らなくてもいいんやけど…親父の絵、何の雑誌で見たん？本に載るような画家やないで」

「松山市で出している雑誌だった。随分古いやつだったけど…」

「もしかして、湖の絵のこと？」

「うん」

「親父、あの絵しか評価されてなかったみたいやからな」

マドカは首を傾げて曖昧に頷いた。

「ねえロラン、あの湖の絵って…絵葉書が何かに使われた？」

「葉書？」

「うん。ほら、よく観光地とかで使われるでしょ？県や地域で発売したりして」

ロランは顔を顰めた。

「知らんなあ。でも、何でそんなこと聞くん？」

マドカは肩をすくめてロランの顔を見つめ返した。

マドカにもまだ、あの絵が結びつける母の過去を整理することができなかった。

あの葉書に描かれた絵は、確かに桜田直義の「湖水」と瓜二つだった。

湖畔の静けさと水面に揺れる波紋。山に囲まれた湖にひっそりと浮かぶボート。

その色彩だけは分からないけれど、マドカの記憶にしっかりと留まる母の化身。

もし、あの葉書が特別に母親の元へ送られたものだとしたら。あの絵を描いたのはロランの父親、桜田直義なのだろうか。

知りたい。母の死と、その過去に繋がる一枚の絵葉書に託された謎を、マドカは強く知りたいと思っていた。あの絵を描いた桜田直義と母が、どこかで親密に深く関わっていたとしたら。

例え、目の前にいる大切な人との関係が壊れてしまうことになっても、この手で母の過去を開いてみたい。その真実を確かめることに、母の死を慈しむ意義があるのだとマド力は感じていたのだ。

美味しい料理にワインが進み、デザートのマスカルポーネのムースが運ばれてきた時には、マド力はだいぶ気持ち良くなっていた。虚ろな瞳でロランの顔を覗くと、彼はまだ余裕の表情でワインを飲み続けている。マド力は皿に盛られたデザートを愛しそうにフォークでつついた。

「マド力、酔ってるやろ」

ロランが手を挙げてウェ이터を呼ぶ。

しばらくすると、智樹がミネラルウォーターのグラスをマド力の前に置いた。

「お前、本当にアルコール弱いな」

「そんなことないもん。料理も美味しくて、雰囲気も良くて…ちよつと気持ちいいだけだもん」

マド力が潤んだ瞳で智樹の顔を見上げる。上気した頬のマド力にじつと見つめられると、智樹は何も言えなくなってしまった。

「せっかくのデートやのにまた記憶なくすといけないから、もうワインは止めやな」

ロランはそう言ってマド力のグラスを自分のテーブルに寄せた。傍にいた智樹は呆れたように溜息をついた。

「ちよつとお化粧室行ってくる」

椅子から立ち上がり、マド力は化粧室に歩いていく。

22時を回った店内は客の姿もまばらになり、上品なクラシック音楽が優雅に流れている。

気まずい雰囲気智樹がテーブルを離れようとする、ロランが口を開いた。

「智樹くん…やったよな？」

智樹はテーブルのロランを見下ろした。

「今日はどうもありがとう。智樹くんが色々と気遣ってくれたおかげで、心から楽しめたよ。今まで二人きりで外で食事したり、デートらしいデートもしたことがなかったから。マドカもきつと喜んでやるな」

「別に、俺は何も」

ロランの顔には目もくれず、智樹は素っ気ない言葉を返した。

「俺はただ、あいつが笑ってくれるんだっただらそれでいいと思ってますから。あいつの嬉しそうに笑う顔見るとほっとするんですけど、それだけのことですから」

「なあマドカ、智樹くんってやっぱり男前だな」

「智樹は男前じゃなくて、男っぽいだけじゃないかなあ」

マドカは雲間にのぞく月を見上げた。

外の空気に当たり、酔いも次第に覚めていく。

「確かに智樹はモテるけど、私にとっては恋愛の対象にならないっていうか、大切な友達っていうか…」

ロランのジャケットのポケットに手を入れ、マドカはその小さな空間でそつと手を繋いだ。街の明かりが二人の行き先を明るく照らしている。ごみごみとした繁華街を抜けると、マドカの目に大きなポスターが飛び込んできた。

「あつ！」

マドカは思わず立ち止まる。

「ラクテのポスターだね。すっごいなー」

マドカはビルの上の広告塔を眺めた。

「アルバム、きつと大勢の人に聞いてもらえるね！」
満面の笑みでロランの顔を覗く。

「ロラン…？」

ロランは無言でポスターを見上げた。

歩道を歩く人々の影が、街灯に照らされて黒い影を地面に落としている。

「なあ…、俺って、マドカを笑顔にすることちゃんとできてると
思う？俺は…マドカに何をしてあげられるんやろ。曲書いて歌って
…マドカを喜ばせるようなこと一つもしれやれんな」

ロランはそれだけ言つと静かに歩き出し、マドカも後に続いた。
耳元で鳴り響くロランの歌声を、マドカは何度もしフレインしながら彼の手を握り締めた。握り返したロランの手が離れてしまわないように。

彼の歌声がいつの日も、一番近くにありますように。

不安な夜が、訪れませんように。

マドカは白い月に祈り続けていた。

第七章／運命の恋人（１）

しばらく一人で考えたいことがあるので東京を離れます。
24日のクリスマスライブには必ず戻るね。

マドカ

クリスマスも近づいたある日、マドカは秋田県にある小さな町に向かった。そこはマドカの生まれ育った町であり、新しい母親がたった一人で住む町だった。

車窓から見る景色は夢のように真つ白だった。木々に降り積もった雪が風に吹かれ、辺りに氷の粒を飛ばしている。寒々とした灰色の低い空は、マドカを懐かしい場所へ移動させていた。

年末の忙しい時期に三日間の休みを貰えたのは奇跡的だったが、マドカは気が重かった。実家に戻るのは三年ぶりだった。父のいない家に一人取り残された母親とは、電話での会話もなかった。

久しぶりに帰った血の繋がらない娘を、母はどう思うだろう。何と言って迎えるだろう。事前に電話の一本でも入れておけばよかったと、マドカは大きく後悔した。

ロラン…、もしあなたが知っているのなら教えて欲しい。

あなたのお父さんが描いた一枚の絵が、これほど私の記憶を混沌とさせるのは何故だろう。もし、母の死がああ絵と結びつくものであったなら、私は真実を知りたい。二人を繋ぐ過去の扉をそつと開けてみたい。

あなたの母親は誰？私は母の顔を知らない　そう、あなたも母親の顔を知らないと言った。私はとても重要なことに気づいたの。あなたのお父さんが事故で亡くなった年…それは母が自殺した年だ

った。それも度重なる偶然に過ぎないのかもしれない。けれど……これは私の仮定に過ぎないけれど、もし、あなたのお父さんが私の母親と恋に落ちていたら……二人が運命の悪戯に導かれてどこかで引き裂かれてしまったのなら、それはとても悲しいことでしょう？

これはすべて、私の憶測に過ぎないのだけれど。

ロラン、私はあなたを受け入れたい。例え最悪の事実が待ち受けていたとしても、私たちがもつれた運命に翻弄されてしまったとしても。

私はあなたを愛してる。あなたを愛し続けるために、あなたの父親と母が残した一枚の絵に隠された真実を、この手で紐解いてみたい。

深い湖の底に沈んだ心が枯れてしまわないように、その想いを、そっと留めておきたいの。

「いらつしゃいませ」

冬の風とともに店内に入ってきたロランは、丈の長いトレンチコートポケットに両手を入れ、智樹の姿を見つけるとサングラスの奥にある瞳で挨拶をした。智樹はやりかけの仕事を丁寧な片付けると、エントランスに佇むロランの元へ駆け寄った。

「もうすぐ上がりなんで、時間があるならそれまで待つてもらえますか？」

「すぐその公園におるから」

ロランは智樹の顔を見上げてにっこりと笑った。

公園というより、そこは空き地に近い広場だ。

寂れたベンチが並び、小さな滑り台が一台あるだけで、ベンチに一人のお年寄りが座っているほかに賑やかな景色はなかった。

智樹がその場所を訪れた時、ロランは広場の隅にあるベンチの上でセブンスターの煙を優雅に吐き出していた。見る者に繊細で幻惑的な美しさを与えるロランの姿に、智樹のやるせない気持ちと溜息が重なり合う。

智樹はうんざりして、空を見上げて物思いに耽るロランの前に歩み寄った。

「話って何なんですか？」

唇を噛み締めたロランは、ポケットからくしゃくしゃになった煙草を取り出すと、二本目に火を点けて緊迫した空気の中でゆっくりと白い煙を吐いた。

ただ一種の自己表現のようなその動作を、智樹は横目で見ていた。磨り減ったスニーカーの底についた砂の粒が、ざらざらという感触を足元に残す。

「マドカの生まれた町を教えて欲しい」

智樹はロランの横顔を見つめ、そこに浮かぶ表情から彼の言葉の真意を読み取るうとした。けれど、完璧な彼の美しさの中には、何も掴めないもどかしさを感じるだけだった。

幼い子供のように無邪気なマドカの顔を、智樹は思い出していた。智樹の瞳に映ることのないマドカを、ロランはとても親密に知っているのだ。

そして、ロランの瞳に映ることのないマドカを智樹は知っている。マドカを軸にして二人はその想いを巡らせる。

これは駆け引きなのだ。

「俺、初めてあなたのライブを見た時、ちょっと感動したんです。

なんつーか、女の子たちがあなたのことを見てキヤーキヤー騒いでる気持ち、なんとなく分かるよな気がした。単純にすげーなっと思って、それから何日もあのステージのことが頭から離れなかったのを覚えてますよ」

智樹はそう言うのと膝の上に乗せた拳を強く握り締めた。

ロランは相変わらず自己の世界を確立させたまま、静かに煙草を吸っていた。

「僕はあなたのことは嫌いじゃありません。むしろあなたのことは好きです…っつうか、好きっていう表現の仕方は適切じゃないんですけどね。あなたの持つ才能だとかそういうのは俺にはないものだし、簡単に言ってしまうえば…尊敬してます」

智樹はそこまで言うとき大きく息を吸い込んだ。

公園の遊具たちはみな、冷ややかな視線をこちらに向けていた。

ロランは煙草から立ち昇る煙を眺め、智樹の口から吐き出される次の言葉を待っていた。

「あなたのことからもう気づいてると思うんですけど…、僕はマドカの方が好きです。まあ、なんつーか…あなたとマドカのあいだに入ってどうしたいとか、そういう気持ちは始めからありません。マドカはあなたのことが好きだし、あなたもマドカのことを大切に想ってくれているみたいだから。そこに俺が入り込んだところで全く意味のないことです」

智樹はベンチに深く座り直すと、長い足を放り出した。

「僕はマドカの友人です。あなたとマドカがこれからずっと良い関係でいられるのなら、応援したいと思っています。別にこれはマドカの方が好きだからとか、深い意味はなくて、正直な気持ちですよ。前にも言った通り、僕はマドカの嬉しそうに笑う顔を見ていられるのなら、それでいいと思っています。今までもこれから、マドカにとって僕は友達の一人でしかないということは確信していますから」

自分の口からその出た言葉は、あまりにも乱雑で無意味なもので

しかないと思樹は思った。行き場のない想いと、後味の悪い違和感だけが残る。

ロランの煙草から、灰がぱらぱらとこぼれ落ちた。

「それでいいん？」

ロランは乾いた声で尋ねた。

ロランの指の中で長くなる灰が、智樹の調子を狂わせる。

深く吸い込んだ空気を肺に入れ、智樹は言葉の断片を探した。

「良いとか悪いとか、それは僕にも分かりません。けれど、僕はいつかこの気持ちをマドカにぶつけてしまうと思います。あなたがいても、僕は好きだという気持ちをマドカに話してしまうと思います。でも……マドカは僕のところには来ない。きっとあなたがいてもいなくても、マドカはそうすると思います。僕のところには、彼女は来ません」

さつきよりも闇は深くなり、都会の真ん中に沈む夕日は曖昧な明るさを残していた。短くなった煙草を揉み消すと、ロランの足元には二本の吸殻が何かの象徴のようにこぢんまりと並んだ。

「僕とマドカは深い絆のような、特別な関係で結ばれています。僕には彼女が必要だし、彼女も僕のことを必要としてくれていると思っています。けれど、それはあなたとマドカが結ぶ関係とは全く別のものです。あなたとマドカのあいだにある信頼関係とは、全く違う種類のものだと僕は思います。僕の言っていることは間違っているでしょうか？」

ロランは首を振った。

「俺にも分からへん。俺にも、そういうことは分からへん。ただ、君とマドカの関係と僕とマドカの関係が大きく異なるんやったら、君がマドカに対して抱く気持ちと僕がマドカに対して抱く気持ちも、全く別のもと考えたほうがいいんちゃう？」

智樹は黙っていた。どこからともなく聞こえるサイレンの音が通り過ぎると、辺りは必要以上にしんとした。

「智樹くん…、マドカにとって君はとても特別で大切な人だつてことは俺にもよく分かるねん。君とマドカの関係はとても素敵やと思っし、正直なところ俺は君に嫉妬してるんやで。俺は、マドカに出会わなかったら…どうしようもないただのマネキンみたいな人間になつていたかもしれへん。うまく言うことができないんやけど、俺は好きという気持ちだけでマドカと一緒にいるわけやない。なんや、こんなこと君に言っても仕方のないことやね」

ロランはそう言つて、膝の上に開いた掌を見つめた。

「一つだけ聞いてもいいですか？あなたがマドカに惹かれた理由って何ですか？別に疑つてゐるわけじゃないですけど、あなたみたいな人だつたら言い寄ってくる女の数だつてハンパないと思うし…俺が言うものなんですけど、マドカは普通の女の子ですよ？」

ロランはしばらく黙り込んだ。

その美しい口元から放たれる言葉を、智樹は固唾を飲んで見守つた。

「そうやな…、君の言いたいことは分かる。けど、俺は特別な人間でも才能のある人間でもない。俺は普通の男やで。俺にしてみれば、智樹くんのほうが何十倍も魅力的やし、輝いて見える。こんなこと言つても説得力なんてないやろうけどな」

ロランはそう言つと力無く目蓋を伏せた。

「智樹くん…俺はな、マドカには必然的に出会つたと思つてゐるんや」

「必然？」

「マドカに出会つたのは偶然やなくて、俺にとっては必然やつた。今こうして出会わなくても、俺にとってマドカはいつかきつと出会わなくてはならない存在やねん。誰が決めたことでもない。俺にもよく分かんけど、マドカに出会わなくてはならない必然性が俺にはあつたから」

「言つてゐる意味がよく分からないんですけど」

智樹は眉間に皺を寄せ、足元の小石を蹴った。

「智樹くん、マドカは……俺の知ってる女性によく似てるんや」

第七章／運命の恋人（2）

軋むベッドの上で目を覚ます。部屋の隅に置かれた石油ストーブの電源を入れる。ギンガムチェックのカーテンを開き、再びベッドに潜り込む。布団に包まり、窓から差し込む白い朝の光を頭上に受ける。

マドカはふと、窓の外を見上げた。

粉雪が舞う灰色の空。

曇りガラスの遠い向こうには、生い茂った針葉樹林が微かに見える。

ここはマドカの生まれ育った町だ。

部屋の中をぐるりと見渡す。学習机に小さなテーブル、二つ並んだカラーボックスの中には懐かしい小説や漫画の背表紙が見えている。

数年ぶりに自分の部屋を訪れた不思議な違和感に、マドカの体は押し潰されてしまいそうだった。何も変わっていない。幼いマドカの複雑な形をした様々な想いが、この部屋には密集していた。リビングのほうからはたばたという足音が聞こえてくる。朝食を準備する軽やかな音がキッチンから響いた。まな板の上で何かを切る包丁の音。油を敷いたフライパンのじゅうつという音。何もかもが懐かしい。

マドカは起き上がると、脱ぎ捨てたスリッパを履いて部屋を出た。

「まだ寝ていればよかったのに。こんなに早く起きて」

母はテーブルに皿を並べていた。リビングのソファに無造作に置いてあったカーディガンをパジャマの上に羽織り、マドカは母の後姿を眺める。

「いつもこんなに早く起きてるの？」

「うっん、本当はまだ寝ている時間だけだね。今日は特別ね、マドカちゃんが帰ってるから」

彼女は笑顔で答えると、水切りしてあった野菜を器に盛り付け始めた。

マドカはソファに座り、テレビのチャンネルを回した。

朝のニュースはどこも同じようなものばかりだ。唯一、退屈のぎになりそうな芸能ニュースにチャンネルを合わせる。

週間アルバムチャート。

『モーニングチャンネルをご覧の皆さん、おはようございます。

ラ・ヴォワ・ラクテです』

画面に映るラクテのメンバー。そして、カメラ嫌いなロランのぎこちない笑顔。録画だと分かっているにもかかわらず、画面の向こうにロランが佇んでいるような感覚に襲われる。マドカは吸い込まれるように画面に集中していた。

五週連続でアルバムチャートの首位を独走するラクテのショートインタビュー。

タツを中心に、メンバーの短いコメントがオンエアされていた。

マドカはブラウン管を見つめ、そこにいるロランと、彼の父親が残した絵のことを考えた。

窓の外に降る不規則な形をした雪が、マドカの瞳を一瞬のうちに曇らせていく。

「マドカちゃん、ご飯にしましょう」

母はマドカのことをいつまで経っても「マドカちゃん」と呼ぶ。

マドカが十二歳の時に彼女がこの家にやって来て、かれこれもう十年近くになるというのに。

テーブルの上には、朝食とは思えないほど手の込んだ料理が並ん

でいた。

母は笑顔でマドカの茶碗に白いご飯を盛った。

「マドカちゃん、昨日はよく眠れたの？久しぶりの我が家で、寝心地はどうだった？」

「別に…普通だった」

マドカは適当な言葉を投げると、豆腐の味噌汁を啜った。

朝から酢豚か…。

首を傾げながら豚肉に箸を刺す。

「マドカちゃんがこうして帰って来てくれるなんて夢みたいね。お父さんも喜んでるわね、きっと」

マドカはリビングのショーケースの上に置かれた、生前の父の写真を眺めた。父が生きていたら、今の自分はもっと違うものになっていただろうとマドカは思う。

「別に、気まぐれで帰ってきたわけじゃないから」

母は箸を動かす手を止めて、マドカの顔を見つめた。

マドカは味噌汁の茶碗と箸をテーブルの上に置いた。

「確かめたいことがある。とても大切なこと。ここにはきっと、その答えがあるはずだから」

「やっぱ外寒いなあ」

スタジオを出たタツは、ジーンズのポケットに両手をつ突っ込んで肩を丸めた。

頭上には雲の垂れ込めた藍色の空が広がっている。

「タツちゃん、煙草吸ってええ？」

フィルターに火を点けて、ロランはタツの後を追うように螺旋階段を上っていく。

二人は二階の高さになる階段部分に腰掛けた。

通りを挟んだところに見えるオープンカフェの前に、やけに大きなクリスマスツリーが飾られていた。淡い光を放つツリーは街を彩る最高のイルミネーションだ。星は見えなくても、都会の夜にはとびきり華やかな演出がある。

煙草をふかしながらロランはタツの隣でクリスマスツリーを眺めた。

風が吹くたびに体がひやりとする。容赦ない冬の北風に、ロランは顔を顰めた。

「タツちゃん、最近どうなん？アサミやつけ？あいつ、元気してるん？」

「お前…今までそんな話したことあった？互いのプライベートには触れるな言うたのお前やる？」

「んー、恋をすれば人も変わるっていう…」

「はあ？」

タツは眉を顰めてロランの横顔を見ながら、ぷつと噴き出した。

「恋…まあ…恋も悪くないんちゃう？音に出るし。あ、お前の場合、合は詞やな」

タツが笑うと白い息が宙に舞った。ロランはくしゃみをして指の合間から灰を落とし、再び静かにフィルターに口付けた。

「うまくいってないん？マドカちゃんと」

「んー…、別にそういうわけやないんだけど」

頭上に広がる夜空を、飛行機が赤いランプを点滅させて通り過ぎる。羽織っていたブルゾンのジッパーを首まで閉め、タツは都会の喧騒にそつと耳を澄ませた。

「タツちゃん、あのこと忘れてないやろな？」

「あのこと…?」

「随分昔の話やからって、もしかして忘れたん?」

通りのどこからか女の子たちの笑い声が聞こえてきた。タツははつとしたように目を見開くと、真剣な眼差しをロランの横顔に向けた。しかしそこには、いつもの表情を浮かべた美しいロランがいるだけだった。

「忘れてない。忘れてへん…けど、今はその話はナシやろ?それとも…」

「いや、そういう意味やない」

「マドカちゃんには?マドカちゃんには…言った?」

ロランは首を横に振った。

「人を好きになることがこんなにも苦しいもんやとは思わんかった。今まで、俺はずっと一人でええって思ってたから」

冷たい風に足元を揺られ、二人は行き場のない想いを暗闇に馳せていた。

ロランが煙草を消すと辺りはしんと静まり返る。タツの腕時計が刻む時の単位だけが、遠くのほうへ流されていった。

「ロラン…嘘やないんやろ?今更こんなこと聞くのもあれやけど…あの時、俺に言ったことは嘘やないんやろな」

「タツちゃんに嘘は言われへん。タツちゃんがおらんかったら、このバンドは生まれなかつたんやろ?俺だって、タツちゃんが何度も頭を下げて、あそこまで言うてくれへんかったら、このバンドにはおらんかった」

ロランは足元に縮こまった吸殻を見つめた。

「なあタツちゃん、俺はいつも思うねん。タツちゃんの未来がどこまでも続くように、神様でも何でもええから、タツちゃんが作り上げたこのバンドの未来を保障してくれる誰かが現れて欲しいって、祈るのは簡単やけど、それだけじゃどうにもならへん。それでも、俺はこのバンドを愛し続けて歌う。俺には…それぐらいのことしか

できないから。だからあの時、タツちゃんに嘘は言われへんかった。うまく伝えられへんけど、そうなってしまった時はそれで仕方ないと思って欲しい。色んな覚悟は必要やけど、俺はラ・ヴォワ・ラクテっていうバンドが大好きやで」

朝から降り続いた雪は止み、白い世界とその風景はさらに深くなっていた。

真つ暗な窓の外を見上げると、壮大な冬の夜空がマドカの視界に広がった。

ぽつぽつと明かりのともる民家の屋根には、降りたての雪が積もっている。

時折、近くを走る乗用車のエンジンの音がこだまして、それ以外は何の音も聞こえなかった。

マドカは学習机の前に座り、雪国の空を見つめていた。

凜とした空気の中に輝く小さな星。どんなに離れていても、この空だけはどこまでも繋がっているのだと思うと、マドカは優しい気持ちになった。

「明日はクリスマススイブか…」

コンコン…

「マドカちゃん…」

母が部屋のドアをノックした。マドカは伸び上がり、カーテンを閉めると落ちて着いた声で返事をする。

「どうぞ、入って」

母はそつとドアを開けて部屋の中に入ると、マドカの傍に歩み寄った。

この部屋で母親と二人きりになると、父が死んでから喧嘩ばかりしていた頃の生活を思い出してしまう。

私たち親子の間には、見えない長い距離がある。この時もそれは同じだった。

暖まった部屋の空気が、ゆっくりと天井に昇っていく。

「マドカちゃん……」

母の手にはくすんだクリーム色の封筒が握られていた。

薄い目蓋を伏せ、彼女はマドカにその封筒を差し出した。

「マドカちゃん、ごめんね」

封筒の表には「隆二さんへ」という文字が書かれていた。

父の名前だった。

「お父さんが亡くなった時、書斎の引き出しから出てきたの。本当はもつと早くマドカちゃんに渡すべきだったんじゃないかって……ずっと後悔してたのよ。でも、私にはそれができなかった。なぜなら……あなたは私の娘だもの。血の繋がりはないけれど、あなたは私のたった一人の娘だから。私のことを母親として認めてもらいたくて……どうしても渡せなかった。ごめんなさいね……、でも……この気持ちだけは分かって欲しい。マドカちゃんはどこにいても私の娘なんだって。私はあなたの幸せをいつも祈っているわ。それだけは忘れないで欲しい」

母の声は震えていた。

「この手紙は私が読んではいけないものだった。私には辛すぎて最後まで読むことができなかったわ。これは……マドカちゃんを生んだお母さんがお父さんに宛てて書いた手紙よ。お父さんは長い間ずっと、これを大切に仕舞っておいたのね」

マドカは母の手からそつと手紙を受け取った。

変色した封筒がその歳月を物語っていた。

青いインクで書かれた文字は所々で滲み、柔らかな曲線を描きながら今にも脆く散っていこうとしていた。

「今度はマドカちゃんが大切にすべきなのかもしれないわね。お父さんがマドカちゃんのお母さんの想いをそつと抱き締めてあげたように、二人の想いをマドカちゃんの胸の奥に仕舞ってあげて。マドカちゃんは愛されてるんだもの。この手紙はマドカちゃんに宛てられたものでもあると思う。あなたのお母さんは、すばらしい人だったのね」

第七章／運命の恋人（3）

隆二さんへ

こうした形で本当の気持ちをあなたに伝えなくてはならないことを、私は心の底から恥ずかしく思います。私は薄情な女でした。そして、あなたにとっても良い妻ではありませんでした。まず、私はそのことをあなたに謝らなくてはなりません。すべてが終わってしまったあとで、このようなことを言うのも随分勝手だと分かっています。でも、それも仕方のないことだとあなたは分かってくれるでしょう。きつと、あなたは私のすべてを見透かしていたのだと思います。こうなってしまったことを許して欲しいとは思いません。けれど、私の気持ちはあなたのその広い心に届くだろうと信じています。

あなたは私を心から愛してくれたたった一人の男性でした。あなたに愛されたこの五年間、私はこれ以上にないくらいの幸せを感じていました。それは、あなたの想いが私の心を揺さぶり、凍りついたその荒んだ過去をゆっくりと溶かしてくれたからです。私はあなたを愛していました。二人のあいだにマド力が産まれた時、私は本当に嬉しかった。愛するあなたの子を日々育てていく喜びは私にとってかけがえのない一筋の光であり、人生の支えでした。

これだけは言わせて下さい。マド力は望まれて産まれてきた子供です。たとえこの先、私がマド力の成長を彼女の傍で追いつけることができなくても、私はいつでもマド力のことを想っています。あなたを愛し、マド力を愛し、そしてあなたは私を愛してくれた。私にはこの生活が何よりも大切でした。そう、他の何よりも大切だったのです。

それでも死を選択する私を、あなたは憎みますか？

今からここに書き留めるのは、あなたに出会う前の私が通り過ぎた風景の一部にすぎません。しかし、私には自分の持つすべての言葉を投げ打つても、あなたに伝えなくてはならないことがあるのです。あるいは過去を文字にしてしまうことで、それらを清算してしまいたいという思いからあなたに向けてこのような手紙を書いているのかもしれませんが。どちらにしろ、あなたに向けて放たれる私の言葉はこれが最後になるでしょう。

きつと、私は誰も愛すべきではなかったのです。

私は愛媛県の松山に生まれ育ち、二十五歳でこの町にやってきました。この町に来てあなたに出会うまで、私はずっと松山のはずれにある小さな幼稚園で保母のような仕事をしていました。というのも、私は保母の資格を持っていないので、人手の足りない幼稚園で子供たちと遊んだり、ピアノを弾いてあげたり、歌を歌ったり、本を読んであげたり、時には自分で書いた物語を子供たちに聞かせたりして、ごく僅かな手当をもらって暮らしていました。生活は苦しく、夜の仕事も経験したことがありました。けれど、私は幸せでした。

私は比較的裕福な家庭に生まれましたが、恋人との関係を否定され、十八歳の時に家を出ました。それ以来、私は恋人と二人で今にも傾きそうなおんぼろのアパートに住み、画家を志す彼の支えとなることを決心したのです。

当時、彼は私より四歳年上の美術大学に通う学生でした。風景画を得意とする彼は、朝から晩まで狭い六畳の部屋でキャンバスに向かい、絵筆を握り締めていました。時々、河原や公園に行って大きなスケッチブックを広げる彼の隣で、私は読書をしたり、日光浴をしたり、ぼんやりと空を眺めたりして二人の時間を深め合いました。生活は苦しかったけれど、彼の傍にいただけで将来への不安や恐怖などは私の心から自然と取り除かれていました。

彼は私が生まれて初めて愛した男性でした。私は彼を心の底から愛していました。とても深く、愛していたのです。

彼に出会ったのは、私がまだ十四歳の時でした。出会いはこれといって特別なものではなく、私が落とした定期券を彼が家まで届けてくれたのがはじまりでした。彼は私と同じ電車を通学に利用する近隣の高校生で、それ以来、駅のホームで見かけるたびにどちらからともなく挨拶を交わすようになりました。

ある日、いつものように私がホームで電車を待っていると、彼は私に絵のモデルになってくれないかと言いました。もちろん、私は突然のことに驚き、不信感から彼の依頼を断りました。しかし、ただ自然な表情を描きたいだけと言って、一度で良いから受けてもらえないかとそれから何度も彼は私に頭を下げました。そんな熱心な彼の想いに、定期券のお礼も兼ねてついに私は絵のモデルを引き受けました。

彼のどこに惹かれたのか、それは自分でも分かりません。私は同じクラスに好きな男の子がいたので、彼のことも絵を描く年上のお兄さん程度にしか思っていました。それでも私が彼に惹かれ

てしまったのは、スケッチブックの上に描かれた私と、モデルとして彼の前にいる私を、何度も見つめ返す情熱的な眼差しに心を奪われてしまったからでしょう。彼の瞳は、自らの強い意志でその動きを決定づけられているような感じのする、特別な瞳でした。彼と私が恋に落ちるまで、そう長い時間はかかりませんでした。

彼は大学を卒業し、教員となって松山市の高校で美術を教えていましたが、教員生活を一年で辞め、純粹に絵を描く道を選びました。絵を描いて食べていくのは容易なことではありません。まして自分の描きたい絵だけを描く画家になれる人なんてほんの一握りです。絵だけ売って生活することは不可能に近いのですから。

私は彼の傍で、そんな不可能に近い生活を支えてきました。彼が二十七歳でフランスに単身で留学するまで、そんな生活が五年間続きました。私は十八から二十三歳になり、彼との生活のために必死で働きました。彼はレストランや喫茶店に飾るためのちょっとした絵を描いて収入を得ていましたが、二人で暮らしていくには厳しいのが現実でした。

それでも、私たちは愛し合っていました。少なくともあの頃の私は、彼も私と同じように愛してくれているものだと思っていました。彼に出会ってから九年間の歳月は、私にとって彼を愛し、彼に愛される時間の凝縮だったのです。その凝縮された時を、私はこうして一つ一つ手に取りながら、最後の言葉としてここに書き留めているのです。

彼がフランスに留学してしまうと、私はそれまでの二人の生活が泡のように儚いものであったことを実感しました。古びたアパートの畳の上で、彼の帰国を私は一人で待ち続けました。生活資金を切

り崩して貯めた彼の財産は彼の渡欧費用に消え、僅かに残った私の貯金も今後の二人の生活を保障してくれるようなものではありませんでした。

クリスマスと誕生日には、いくつかの作品が私のもとに届きました。きっと作品を制作する合間に、彼が私のために描いてくれた精一杯のプレゼントだったのでしょう。当時、彼の作品にはすべて名前の頭文字を取った「N」というサインが走り書きされていました。受け取ったそれらの絵に、彼がつけた「N」というサインを見て、私は何度も涙を流しました。彼の記憶と彼への想いが胸のずつつと奥のほうから込み上げてくるのが分かりました。

私には彼がすべてでした。この世界から彼が消えてしまった時、私もこの姿を持って彼のたどり着く場所へ行こうとさえ思うくらいでした。

留学中の二十八歳の時、彼に転機が訪れました。フランスのサロンという有名な展覧会に出展した作品が認められたのです。それは、彼がプロの画家として新たな人生を踏み出した素晴らしい出来事でした。

出展されたのは、彼が日本でスケッチした絵をもとに描かれた「湖水」という作品で、それはここ秋田県ある湖を描いたものでした。初めて売れた絵から得た収入で、彼と私はこの町に旅行したことがありました。旅行中、彼がスケッチブックに描きとめた湖が「湖水」という作品になり、完成されたのです。サロンで入選を果たした彼から、“帰国したら結婚しよう”という手紙をもらった時、それが私の人生で一番幸せな瞬間でした。

今でも私には、彼と過ごした日々がオペラグラスで覗いた世界のよう目蓋の裏にはつきりと焼きついています。あの時、彼は一人の才能ある日本人画家として、世界に名を連ねる手前を歩いていたのです。そして私は誰よりも幸せを近くに感じていました。

しかし不運にも、その幸せが長く続かないことに、私は全く気づいていませんでした。

彼が帰国してから半年経ったある日、入籍間近の私たちの新居を、ある女性が訪ねて来ました。あいにく彼は外出中で、自宅にいたのは私だけでした。その人はとても美しい女性でした。透き通るような白い肌に大きな瞳を持ち、整った目鼻立ちに華奢で長い手足と、毛先がカールした柔らかそうな黒い髪をしていました。

彼女は若いフランス人女性でした。若いといっても当時の私が二十五歳でしたから、私より二、三歳年下だろうという憶測でしかありません。彼女は彼がパリにいた時の恋人でした。そして、彼女には産まれたばかりの子供がいました。彼の子供でした。

彼と別れることを決意し、私は町を出ました。彼と過ごした十一年間を自分の中でどのように受け止めれば良いのか。私の前に提示された問題はそれだけのことでした。

引き止めようとした彼の言葉は全く覚えていません。裏切られたという気持ちより何より、そこにあるはずの自分自身の姿が私には見えなくなってしまったのです。最後に抱かれた彼の腕の感触と、画材の匂いだけがいつまでも私の周りをつきまとい、離れませんでした。

そして時の流れがいつしか私の知らないところでその速度を速め、気がつくと私は彼との思い出を拭い去れないまま、秋田県のこの小さな町にたどりついていたのです。

隆二さんに出会い、私は自らの過去を他人事のように何気なくあなたに話せることができたなら、どんなに楽になるだろうと何度も自分に言い聞かせてきました。そして、私の寂しそうな瞳を気にかけるながらも、あなたは私の過去について何も尋ねようとはしませんでした。

あなたはただ、私を愛してくれると言ってくれました。それでも私はあなた話すことができませんでした。彼と過ごした十一年という歳月を誰かに話してしまったら、彼の記憶が私の体から抜け落ち、私は抜け殻のように生きなくてはならないような気がしていたのです。

隆二さん、あなたは私を愛し、私もあなたを愛していました。でも、それは寂しさの影を背負った愛だった。あなたの愛に、私は正面から向き合って答えることができなかった。あなたの愛を、今日まで私は不安と恐怖と、哀愁を帯びた瞳で見つめてきました。

私はあなたを愛しています。けれど、本当の私はあなたを愛してはいない。私は誰も愛せないのです。私は誰かを愛してはいけないのです。私は人を愛するという感情を、遠い過去に封印してしまつた人間なのです。あなたも、マドカも、そんな私が作り上げたおとぎ話の中の登場人物でしかないのです。

画家としてその人生を全うした彼が、先月事故で亡くなりました。

彼の死は、私に何の感情ももたらしませんでした。彼の死亡記事を雑誌の小さなスペースで見つけた時、彼の死が私に与えたのはただ一つ、やっと自分の落ち着く場所が見つかったという安堵感でした。記憶の隅にうずくまっていたものが、そっと払い除けられたような感覚と、振り返ればそこには無数の希望が満ちているような、懐かしい光を取り戻した気がしました。あなたに出会う前の、ただ純粹に彼を愛していた頃の私に戻ったような感じがしたのです。

皮肉にも、私は今でも彼のことを愛しています。あなたはきっと気づいていたのでしょうね。私が彼の手紙を大切に仕舞っていることや、美術雑誌を定期的に購読していることも。あなたはすべて気づいていたはずです。私の気持ちにも、あなたははつきりと気づいていたはずです。

こんなことを言ってしまったら、私を救えなかったことであなたは自分自身を苦しめてしまうかもしれません。でも、それは間違っています。私を救えなかったのは私自身であり、自分を苦しめてしまったのも私そのものです。あなたにはどれだけ感謝をしても、いくつもの言葉を並べただけでは足りないような気がしています。だから、何も残せない私を、あなたは何も言わずにただ見送るだけでいいのです。あなたは私に、何物にも変え難い、無償の愛をくれたのですから。

あなたの愛は私を越えて、いつの日かマドカに届くでしょう。
私に降り注ぐあなたの愛が、マドカを永遠に包むことを祈って。

さようなら。ありがとう。

追伸

マドカに大きな転機が訪れた時、私の存在を示すものはすべて消して下さい。ただ、ひとつだけお願いがあります。私の宝物である絵本の中から、『空に架かる橋』というタイトルものもを抜き取り、それをマドカの誕生日に渡してください。これが私の最後のお願いです。母親の記憶が失われてしまっても、彼女はあなたの愛を通じて私を感じることが出来るはずです。

隆二さん、愛してくれてありがとう。

合計七枚の便箋に綴られた言葉は、マドカの記憶の断片を繋ぎ合わせるようにその息を吹き返していた。封筒の中には、父に宛てた母の手紙と一緒に、一枚の絵葉書が入っていた。死んだ母の隣で幼いマドカの瞳に鮮明な色彩を残した、桜田直義の描いた絵だった。「湖水」の裏には、当時母が住んでいたアパートの住所と名前、その下にはAir Mailと殴り書きされた彼の筆跡があった。桜田直義が母に宛てた葉書に記された文字を、マドカはゆっくりと目で追っていく。

ロランの父親は、確かに母のことを愛していたのだ。

入選した僕の絵が絵葉書としてパリで売られている。この葉書がそうだ。

きつと、君もこの湖を覚えているだろう。

僕は三年前、この湖をスケッチしながら、隣で欠伸をして空を見上げる君と、僕の未来を考えていた。

君にかけた苦労を思うと、僕はなかなか中途半端な気持ちで「結婚」という二文字を言い出せずにいたんだ。

だけど、これで君を幸せにできる。

子供は多いほうがいい。

女の子が産まれたら、君に似てきつと美人になる。

今度は子供を連れて公園へ行こう。

僕が絵を描く隣で、君は子供と遊べばいい。

こんな話はまだまだ先かな。

君の笑顔が早く見たい。

帰国したら、結婚しよう。

桜田直義

第七章／運命の恋人（4）

目の前に広がる寒々とした冬の湖は荒み、雪に覆われた山並みを水面に映すことなく無言のままマド力を見つめていた。

午前九時の湖畔は人影もなく、深い雪が穏やかな波を取り囲んでいる。

マド力は首にぐるぐるとマフラーを巻きつけ、白いコートのポケットに両手をつっ込んで雪の中を進んだ。

湖が一望できる高台にある野原。幼い頃によく遊んだ場所だった。朝の光が汚れない純白の雪を照らし、氷の粒を輝かせている。歩くと度々白い息が舞い、冷たくなったマド力の頬が次第に紅潮していく。

平野を取り囲むように植えられた裸のナナカマドの群れが、雪の上に灰色の影を落としている。マド力は野原の真ん中で足を休め、頭上にある太陽を見上げた。

冬の太陽は、淡い光を惜しげもなく雪原に放っていた。

手袋をはめた手でポケットから母親の手紙を出すと、マド力はそこに記された「隆二さんへ」という文字を見つめた。

インクの滲んだ封筒は、懐かしい母の匂いが染み付いているような気がした。

マド力はそつと封筒の中に仕舞われた絵葉書を手に取る。

母の記憶にいつまでも消えることのない痛みと、儚い日々。

マド力の瞳に涙が溢れる。母の幸せと悲しみの混じり合った長い歲月：それを包み込んだ父の想い。その想いを胸の中で反芻するたびに、自然と溢れる涙をマド力は拭い去ることができなかった。

朝の日差しが、マド力の周りを静かに照らしていた。

「みーつけた」

後ろのほうで声がして、マドカはふと振り返る。

照りつける太陽の光が雪に反射して、眩しさにマドカは目を細めた。

閉じた目蓋をゆっくりと開くと、そこにはロランが立っていた。

「ロラン！ どうして!？」

ロランのワークブーツが深い雪を踏みしめる鈍い音が近づく。マドカはその場に立ち尽くしたまま、次第に大きくなるロランの姿に焦点を合わせた。

広々とした雪原の大地には、マドカの足跡に隣り合わせて、ロランのワークブーツの跡が何かの記号のように並んでいた。

白い風景に溶け込んだロランの肌とブラウンの髪の毛のコントラストを、太陽がさらに美しいものに変えていた。

ロランはマドカの前に立つと、穏やかな微笑を向けた。

「迎えに来た」

ロランはそう言ってマドカの隣に並んだ。

「綺麗なとこやね、ホンマに。まるでマドカの心をそのまま描いたような風景やな。汚れない心と、無邪気な美しさ」

「ロラン… どうして? どうして… ここに…?」

「マドカの行くところならどこでも分かる。なーんて、智樹くんに教えてもらった。マドカに家に行ったら、お母さんがきつとここだろうつて教えてくれた」

肩を並べた等身大の二人の影が、雪の上にくっきりと浮かび上がる。

ロランは高い冬の空を見上げると、眩しそうに目を細めた。

「マドカに見せたいものがあるん」

「見せたいもの…?」

首を傾げるマドカの前に、ロランは抱えていた古いスケッチブックを差し出した。マドカが不思議そうにそれを眺めると、彼はにっ

こりと微笑んだ。

「マド力と、俺の記憶」

マド力はスケッチブックを開く。日焼けした表紙を捲ると、柔らかな線で細密に描かれた何枚ものデッサンが閉じられていた。

「これ…私…？」

そこに描かれた絵に、マド力はただ目を丸くした。幾ページにもわたり、そこには自分とそっくりの女性が何枚も描かれている。鉛筆一本で濃淡をつけられた彼女は、一冊のスケッチブックの中で密やかに呼吸しているようだった。

「たぶん、マド力を産んだお母さんやな…死んだ親父が残したスケッチブック。親父はいつも、この女性の絵を描いていた」

「どういうこと…？ ロラン、お母さんとロランのお父さんのこと…知ってたの…？」

ロランは首を振った。

「俺が覚えてるのは、ただ親父がよくこの女性の絵を描いていたことだけ。毎日、記憶をたどるようにして描いた。だから、部屋にはこの女性の絵が溢れてた。親父は何枚も、この人の絵を描いとったんや。小さい頃な、親父の絵を見ながら、もしかしたらこの人が俺の母親かもしれないって考えたことがあった。でも違った。俺は純粋な日本人やないって分かってたから…よくそれが原因でいじめられたりしたんやけどな」

「じゃあ…、留学中にフランス人の恋人のあいだにできた子供って…」

マド力は握り締めていた母の手紙をロランに差し出した。

「俺のことやろな…きつと。俺に記憶なんて全くないけど、たぶんその人が俺の母親なんやろな。親父がフランスにいた時の恋人…」

ロランはスケッチブックを閉じた。

どこからともなくやってきた鳶が、二人の頭上を円を描くようにして飛んで行った。

肌を刺す風に、頬がひりひりと痛む。

「マドカ、俺の親父が憎い？マドカのお母さんを幸せにしてやれなかった親父が…憎い？」

マドカは雪に埋もれた足元に視線を集中させていた。

寒さの中であらゆるものの寂しさが鳴る。

「仕方ないよ…起きてしまったことは起きてしまったことなんだし。私たちが悔やんでも、仕方ない…」

木々に積もった雪が音を立てて舞い落ちた。他には何の音もしなかった。

マドカが息を吸うとロランが白い息を吐き、二人の呼吸は張りつめた空気の中に丸い輪を浮かび上がらせていた。

「なあマドカ、俺な、ずっとマドカに会いたかったんや…マドカにというより、親父に描かれた女性に会いたかったといったほうが正しいかもしれんな。親父がその影を引きずる女性に、会えるもんなら会いたいつて。でも、どんなに俺が願ったところで会えるわけがないって、諦めるしかなかった」

ロランは白い風の中で深く息を吸い込み、話を続けた。

「マドカ…、初めてあの交差点で出会った日のこと…覚えてる？」

マドカは静かに頷いた。

「俺、あの時は本当に自分が夢の中にいるような、現実の世界とリンクしていないような、不思議な気持ちやった。なんやる…、やっと出会えたつていう安心感みたいなもののほうが大きかった。俺と親父を結ぶ記憶の中にいる絵の女性…それがマドカやった」

ロランはそう話すと、何かを懐かしむように目を伏せた。

「でも、マドカには誤解してもらいたくない。親父の絵に描かれた女性に似てるからというだけで、俺はマドカに惹かれたわけやない。確かに、初めて会った時はもう一度この子に会いたい、この子はどんな女の子なんやろうつて思ったけど、俺は何も言えなかった。ただ礼を言つて別れたマドカの笑顔だけがずっと残ってた。何日も

頭から離れなかった。でも…、もう二度と会えないもんやと思ってた。だから俺はきつとツイてただけなんやと思つて…それはそれでよかったんやけどな。マドカに再会して、俺は興味本位とか好奇心とかやなくて…ただ、マドカに会いたかった。マドカに会えればそれだけでよかった」

「ロラン…」

「だけど、俺の気持ちはそれだけじゃ収まらなくなった。素直で子供みたいに無邪気なマドカを見てたら、産まれて初めて誰かを愛しいって思う気持ちになった。俺はマドカに惹かれてたんやな。マドカが好きで好きでどうしようもなかった。今だつてずーっとそうやで。俺はマドカを失いたくない。マドカを…失うのが怖い…」

ロランはそう言つて、冷たくなった指先でマドカの頬に触れた。

ロランの深い藍色の瞳がマドカを包み込む。

マドカが何度も目蓋の裏に焼き付けた、美しいロランの瞳。

その瞳に映るもの。

そこにあるのはどんな風景でもなく、寂しさの影でもない。

そこに映るのはマドカだ。

ロランの瞳には今、マドカの姿が鮮明に映し出されている。

マドカは手袋をはめた両手でロランの手をぎゅっと握り締めた。

「ロラン…、手、冷たい。霜焼けになっちゃうよ」

そう言つてロランの両手を包み込むと、マドカはそこに温かな息を吹きかけた。

ロランの腕に抱えられていたスケッチブックが雪の上に落ちる。

「ロラン、帰ろう。東京に…帰ろう」

「マドカ…」

ロランはマドカの体を抱き締めた。温かな吐息がマドカの耳元にかかる。

二人はそのまま雪のクッションの中にふわりと倒れこんだ。瞳を開けると、どこまでも続く青空がマドカの視界に広がった。

「もーっ、ロラン！雪…冷たい！」

仰向けのまま声を上げて笑い、マド力は口を尖らせた。

「さすがに、ここで抱いたら寒いわな」

悪戯っ子みたいに綺麗な顔を歪めて、ロランは唇を重ねた。

ロランのキス。

まるで甘い綿菓子になっちゃったような気分になる。

このまま…ロランの唇に、どこまでも溶けてみたい。

あなたとどこまでも溶けて、このまま消えてしまいたい。

「ねえ、ロラン…お母さんたちも、こんな甘いキスしたのかな」

「したんやろなあ。でも、キスは親父より俺のほうが絶対巧いと思っんやけど」

「なんでえ？」

マド力がぐすくすと笑う。

「絵の才能は親父のほうが上やけど、キスは俺のが巧いの」

ロランはそう言って、マド力の頬や額に何度もキスを落とした。

ロランの肩越しに、冬の空が見える。

彼の唇から繰り出されるくすぐったいキスに、マド力の顔は照れ臭い嬉しさでほころんでしまう。白い肌に揺れるロランの長い髪を、マド力は細い指で包み込むように優しく撫でた。

微かに香る煙草の匂い。

「あれっ…ねえ！ロラン、ライブは！？」

ふと思いつ出した大切なイベントに、マド力はその場に跳ね起きる。

「ロラン！今日、クリスマスライブじゃないの！？」

「ああ…そうやけど」

「そうやけどって…こんなところでキスしてて大丈夫！？リハーサルとか…平気なの？東京まで三時間だよ？」

腕時計の時刻は十一時を少し回ったところだ。ロランはコートについた雪をばたばたと払って立ち上がると、雪の上に座り込んだマ

ドカに手を差し伸べた。

「ライブ、間に合わなかったらマドカの責任やで。こんなに俺を好きにさせるマドカが悪い。こんな気持ちにさせるマドカが悪いんやから。責任とってもらうで？」

マドカは目を細めて笑うロランの手を取って、雪原の中を走り出した。

雪に足を取られて転びそうになるロランを笑い、雪玉を投げる。

はらはらと舞う粉雪。

柔らかな太陽の光が、冷たい銀世界を静かに溶かし始めていた。

今日はクリスマスライブだ。

第八章／クリスマスの思い出（１）

「ジングルベル、ジングルベル、すっずが鳴る〜」

街のあちらこちらで流れるクリスマスソングを口ずさみながら、マドカはインターホンを押した。

ピンポン…

「メリークリスマス！」

開いたドアの向こうで、智樹は寝癖のついた頭を撫でながら大きな欠伸をした。

「あれっ？智樹…寝てたの！？今日は楽しいクリスマスだよ？」

「あ？ああ…」

「はい、これ！」

マドカは智樹の前に紙袋を突き出した。

「何だよ…これ」

「お土産、おばさんの漬物」

冴えない顔の智樹に、マドカは口を尖らせる。

「はあ？じゃなくて！あんたのお母さんの漬物だよ？マドカちゃんにもどうぞ、って私も貰っちゃった！あとね、あとね…」

「お前…、テンション高すぎねえか？イブだからって浮かれてるだけ…？」

寝惚け顔の智樹の胸に紙袋を押し付け、マドカは鞆の中を弄る。

「えっと…あ、あつた！はい、これも！」

「何これ？」

寝癖の頭を撫でながら、智樹は差し出された紙切れに視線を近づけた。

「ラ・ヴォワ・ラクテ、クリスマスライブ…？」

「うん！」

「何で…これを俺に…？」

虚ろな瞳の智樹は首を傾げて、マドカの顔を不思議そうに見下ろした。

「何でって…二枚貰ったし、こないだ食事に行った時のお礼！これから一緒に行こうよ？智樹が来てくれたら、ロランも喜ぶよ」

智樹は顔を顰めた。

ロランも喜ぶよ、か…

「どうしたの？行こうよ？」

「いや、せつなくなんだけどさ…」

「何？」

「俺、これから用事あるんだよね」

「えっ？」

「いや、うん。だから、一緒に行けねえや」

「そつか…、いくら智樹でもイブ当日に誘うつてのは無理か…」

マドカは一瞬寂しそうに俯いたが、次の瞬間にはにっこりと笑っていた。

「もしかして、デート？ねえ、デートなんですよ？」

「うるせえな、お前には関係ないじゃん？」

智樹はムキになってマドカを見下ろした。

「ねえ、どんな子？可愛い子なんだ？」

悪戯に笑うマドカを見て、智樹の心は大きく揺れた。

いつもすぐ傍にいて、誰よりも信頼できるマドカ。自分の踏み込めない領域と距離に、智樹は激しい葛藤を覚える。

そして、マドカの愛する恋人について考えると、その葛藤は嫉妬に変わる。

「はいはい、お前には関係ないだろ。つか、お前にだけは絶対に教えたくないね。お前のことだから面白がつて色々詮索……」

「智樹くん！」

その弾んだ声に、二人の会話は遮られた。

声のするほうに目をやると、アパートの階段に女の子が立ってこちらを見ていた。

女の子というよりは、女性という表現のほうが似合う。短く切りそろえたショートボブの赤茶色の髪に、白いツイードのジャケットを羽織り、ミニスカートにヒールの高いロングブーツを合わせた美しい女性。

玄関のドアから顔を覗かせた智樹を見ると、彼女はにっこりと微笑んでひらひらと手を振った。

「智樹くん、お待たせ！」

ブーツの踵を威勢良く鳴らして、彼女は智樹の部屋の前にやって来た。

そして再び綺麗な歯を見せて微笑んだ。

マドカの隣には彼女が、智樹の前にはマドカとその謎の女性が、三人は歪な三角形を作っていた。

高そうな服に身を包んだ彼女から、ふわりと甘ったるい香水の匂いが香る。

ふと視線を落とすと、手首には随分高価な装飾品がさりげなくこちらを向いている。

「待ちきれないから来ちゃった！智樹くん、遅いんだもん！」

彼女は口を尖らせて、智樹のトレーナーの端を甘えるように引張った。マスカラがふんだんに塗られた睫毛が、彼女の瞬きに合せて音を立てるように揺れている。ふつくらとしたセクシーな唇は、彼女のチャームポイントだろう。その輪郭は、隣にいたマドカも溜息が出そうなくらい可愛らしかった。

「あーっ！これ、ラクテのライブのチケットじゃない！？すごい！今、日本で一番チケットが取れないバンドでしょ！いいなあ、羨ましい！」

マドカの右手に視線を落とし、彼女はチケットをまじまじと見つけた。

彼女が動くたびに香水の香りがいちいち辺りに漂った。

マドカが智樹の顔を見上げると、バツの悪い、どこか困り果てた表情を浮かべて、寝癖の頭をさつきから延々と触っていた。

「智樹、紹介して？」

「え？あ、マドカ、こちらが大学で同じゼミの…」

「北マリ子です」

冴えない声で話す智樹を見かねたのか、彼女は自ら割って出た。マリ子は満面の笑みでマドカの顔を覗き込んでいる。蝶の羽ばたきのようなその微笑みに、マドカも笑顔になってしまう。

「吉井マドカです。智樹とは中学の時からずっと一緒で…、もしかして、同い年ですか？なんだか凄く大人っぽい」

マリ子は目を細めて笑った。

「あたし、二浪した上に一年留年したから少し上なんだ。あ、でも智樹くんとは波長があって仲良しなの。ねっ、智樹くん？」

「あ…ああ、まあそんな感じっすね」

「あれえ？智樹くんどうしたの？いつもと喋り方違うくない？」

マリ子は智樹の手を引っ張って腕を絡めた。

「ちよっ…」

動揺する智樹。いつもなら女癖が悪いところも、他の女の子と一緒にいるところをマドカに見られてしまっても、平気で知らん顔をしていられたのに。それがマドカへの想いを埋める唯一の手段だった。親友であるマドカに想いを伝えることが、どうしてもできなかったのだ。

でも、今は違う。ロランに出会ってからのマドカを、智樹はどうしても放っておけなかった。自分の傍に置いておきたいと、強く思うようになっていたのだ。

「そっか、智樹、今日はこれからマリ子さんとデートなんだね。私お邪魔だし、そろそろ行かないとライブ遅れちゃうから…またね、智樹。マリ子さんとスウィートな夜を楽しんでね！」

からかうように微笑むと、マドカはマリ子に頭を下げてもう一度につこりと笑って手を振った。

「おい……マドカ！」

智樹は身を乗り出してマドカを呼び止める。細い指をひらひらと振りながら、マドカは智樹にピースサインを向けた。歩調に合わせて揺れるマドカの長い髪を見つめ、智樹は肩を落とす。

「やべえ……」

智樹は腕にマリ子の体温を感じた。マリ子は絡めた腕を強引に寄せると、何食わぬ顔で智樹の顔を見つめた。

「智樹くんて、あの子のことが好きなんだ」

「え！？いや、そんなことないない！」

顔を赤らめて頑なに否定する智樹を、マリ子はしらけた顔で見つめた。

「ふうん……でも顔に書いてあるよ、あの子のことが好きだって。でも、まあいつか、今日は智樹くん、マリ子のものだもんね！私、智樹くんのこと本気なんだよ。智樹くんに好きな子がいても、構わないんだから」

「メリークリスマス……！」

シャンパングラスの触れ合う音。

カジュアルなイタリアンレストランを貸し切って行われた、ライブの打ち上げ兼クリスマスパーティー。

それは、ラクテのメンバーと親しい関係者だけが集まった、シン

ブルでいて親密なものだった。

ロランに連れられたマドカの隣には、久しぶりに再会するアサミの顔。

リーダーのタツを支えるたくましい恋人。

そんなアサミを前にしたマドカの瞳が少しだけ曇る。タツやシンと楽しそうに談笑するアサミに、マドカは少しだけ嫉妬する。マドカの知らないバンドの歳月を、アサミはいつも傍で見てきたのだから。

「こら、何ぼーつとしてるん？」

ロランがマドカの額をこつんと叩く。ステージの上で歌っていたさっきまでのロランとは、その瞳の色がどこかしら違って見える。

今ここにいるのは、マドカが大好きないつものロランだ。

ロランはシャンパンを飲み干し、マドカのグラスをテーブルの上に乗せると、そつと手を引いた。

「ここまで連れてきて悪いんやけど、もう帰らへん？」

ロランは首を傾け、マドカの瞳を撫でるように見つめた。

「早く二人きりになりたいん」

マドカの額に軽くキスをして、ロランは再びメンバーの元へ戻って行く。

淡い照明と、フロアの隅に飾られたクリスマスツリーの赤や黄色の電球。

そこにいる人々の温かな声。

マドカが今までに味わったことのない、クリスマスイブの一場面。この日見たロランの優しい笑顔は、それからもずっと、マドカの胸の一番深いところにずっとずっと貼り付いていた。

「やっぱりステージの上にいる時のロランって、人を引きつける不思議なオーラがあるよね」

「そうなん？俺には分からへんなあ……」

都会のイブを見下ろす夜空に見える冬の星座。ロランのアパートに向かう二人の距離が、冷たい空気の中でどんどん縮まっていく。繋いだ手が離れないように、マド力はロランの手に華奢な指を絡めた。

通りに面した建物の窓から洩れる明かりは、それぞれのクリスマスをそつと闇に浮かび上がらせている。歩道に落ちる影は優しく、今にも凜と透き通る鈴の音が聞こえてきそうだった。

ロランはいつものように空を眺めて歩き、時折、隣にいるマド力の顔を見つめた。

吹き付ける風の冷たさに、マド力の頬は紅潮している。規則正しく吐き出される二人の息が宙を舞い、やがて闇に消えた。

「ねえ、ロラン」

「ん？」

「私、最後の曲が好きだったな。“瞬きするのも惜しいくらい、手のひらの君が愛しい”っていう歌詞の曲」

マド力はロランの歌声を思い出していた。ラクテの音楽は、まるでどこかの風景を描写するように、リアルにその音と歌詞が頭に残るのだ。

「あれって新曲？冬っぽくて、素敵な曲だった」

暗闇の中にいるロランはその白い肌が闇に映え、一層美しく見える。空に浮かぶ幻想的な蒼白い月よりも、ロランの美しさは見る者の心を引き寄せ、魅了した。

「ああ、あの曲か。まあ、一応新曲やったけど……」

「新曲やっただけど？」

「新曲やっただけど、途中で歌詞が飛んでしまったから、勝手に言葉つけて歌ったんや」

ロランは笑いながらマドカの肩を抱いた。

「マドカが今言ったとこの歌詞なんて俺、覚えてないもん。即興でつけた歌詞やっただから、もう忘れた」

「なにそれー？プロとしての自覚が足りませ…ん」

ロランの唇が一瞬だけ重なり、マドカの言葉を遮る。

唇が触れるか触れないくらいの優しくて軽いキスだった。

二人の足が止まる。

「手のひらの君っていうのは、マドカのことやで。昼間、雪の中で抱き締めたマドカのこと思い出したら、その言葉が出てきたん」

路地に並んだ外灯を背に受け、微かに聞こえる大通りのノイズ。

二人を取り囲む藍色の世界に、懐かしいクリスマスソングがどこからともなく流れてきた。

「あれ…？ねえ、この曲って…ワムのラストクリスマス？」

「んー、そうみたいやなあ」

顔を上げたマドカに、ロランはそっけない態度で答える。

「ねえロラン、そっちのポッケ、なあに？」

右手を突っ込んだロランのジャケットのポケットから、甘い音色が聞こえる。マドカは腕を伸ばし、ロランの手を引っ張った。

「見つかったか…」

ロランはポケットから飾り気のないネジだけがついた小さなオルゴールを出し、それをマドカの手に乗せた。ラストクリスマスは徐々にそのテンポを落しながら、星屑のように甘い音を響かせ、ゆっくりと聞き慣れたメロディーを歌っていた。

「ワムと言ったらラストクリスマス。クリスマスと言ったらラストクリスマス。この曲、昔から大好きやった。マドカは？」

「私も好きだけど…どうしてロランのポッケにオルゴールが入っ

てるの？」

マド力は首を傾げてロランの瞳を覗いた。

北風がマド力の髪をさらう。

今にも消えてしまいそうな音を響かせていたオルゴールを、ロランがそつと手に取った。

「俺なりの演出やったのにな。もしかして、雰囲気出てなかったかな？」

ロランは子供みたいに可愛らしく首を傾げている。

今にも途切れそうなほど、ラストクリスマスはその音色で凜とした空気を震わせ、最後の一言がゆらゆらと揺れてすつと消えていく。辺りは急に静まり返った。

ロランの掌で動きを止めたオルゴールは、古いブリキの玩具みたいだ。

マド力は手を重ね、唯一の装飾ともいえる銀色のネジを再び回そうと指をかけた。

「なあ、マド力……」

ロランがその手をぎゅっと握り締めると、オルゴールが微かな音を立てた。

それは一瞬のきらめきを閉じ込めた、ガラス玉が触れ合うような脆い音。

二人の体温が呼吸に合わせて上昇していく。

重なり合った手を、ロランが冷えた頬にぴたりとつけた。

「マド力…抱きたい。抱いてええ？」

「こつ、こつで!？」

思わずマド力の声が上がった。

「いや、ここやなくて。ここじゃ寒くて凍えてまうわ」

ロランはそう言っ歯を見せて笑い、マド力の手を取って歩き出した。

「帰ったらさっそくエッチしような、マド力」

「…なっ、なんで！？まずはチキン食べて、ケーキ食べて、ゆっくりしようよ」

「だーめ、あと二十分でイブ終わるで？クリスマスは恋人たちが楽しくエッチする日なんやから」

真剣な表情でそう言ったロランに、マド力はくすくすと笑う。

「ロランのエッチ。イブじゃなくても抱きたいって言うのにな」

このクリスマスを、私はきつと忘れないだろう。

狭い部屋の真ん中には、小さなケーキと間に合わせて作ったキャンドル。

隣にはロランがいて、私の髪を優しく撫でてくれる。

暖房の無いあなたの部屋は寒かったけれど、あなたに抱かれる私は暖かな暖炉の前にいるみたいだった。

ねえ、ロラン…キャンドルが揺れるたびに私の心も震えていたのを覚えてる？

あなたが囁く意地悪で甘い言葉が、私の胸を苦しくさせた。

私の小さな手でさえも、抱き締めたら消えてしまいそうなあなたの美しさが眩しくて…私は瞳を閉じた。

あなたの過去に繋がる扉を、ほんの少しだけ開けることができたなら、

あとは…ずっとあなたの傍にいたい。それだけでいい。

私はアサミさんのように強くはないけれど、それでもあなたが好きだから。

メリークリスマス。ロラン…

第八章／クリスマスの思い出（２）

窓から差し込む朝日が部屋の中に充満している。軋むベッドの上で寝返りを打つと、テーブルの上に置かれた燃え尽きたキャンドルの跡が見える。

寝息を立ててぐっすりと眠るロランの温もりを背中に感じる。深呼吸をすると、マドカの息がぼっかりと白く宙に浮かんだ。

肩の辺りが冷気にさらされて冷たい。

暖房の無いロランの部屋は、雪の中でただ一人マツチを売る少女の物語を思い起こさせた。

この部屋には幻覚にも似た暖かさがあつた。マツチを擦って夢のような時を過ごした、少女の風景と同じように。

ロランを起こさないようにベッドから抜け出すと、マドカは床に散らばる服の中からモヘアの黒いニットを取り、裸の体に頭から被った。肩幅は広く、袖もマドカには少し長い。ロランの服を着るだけで、彼に抱き締められているような気持ちになる。

糸の結び目が、マドカの肌をちくちくと刺した。

裸足で板張りの床を歩く。震える肩を抱き、掌で両腕を撫でる。

マドカはキツチンに立ち、お湯を沸かしながら立ち昇る湯気をぼんやりと眺めた。

シンクに反射する光が、時々マドカの視界を遮る。

クリスマスの朝。子供たちが枕元に用意されたプレゼントのリボンをほどく時間。

希望の光に満ちた、一瞬のきらめきを追いかける想い。

マドカはふと、幼いロランが見てきたクリスマスに思いを馳せた。ロランはどんな幼少時代を送ったのだろう。

ロランが記憶するクリスマスの思い出。

それは悲しみに埋もれてしまっていないだろうか？

熱いカップにコーヒーを注いで部屋に戻ると、ベッドの上で上半身を起こしたロランが目蓋を擦りながらこちらを見ていた。

唇に挟まれたセブンスター。虚ろなロランの瞳はまだ眠そうだ。寝癖のついた頭をそのままにして、マドカを見上げる姿がいいらしい。

「ロラン…どうしたの？」

カップをテーブルの上に置き、マドカは首を傾げてロランの顔を覗く。

「その格好…そそるんやけど」

「えっ？」

下着もつけずにモヘアのニットだけを頭から被ったマドカを、ロランは爪先から頭のとっぺんまで眺めた。

「可愛い…」

ロランはシーツを引きずりながらベッドを下り、板張りの床に座った。

灰皿に煙草の灰を落とすと、ロランは湯気の上がるカップの縁に唇をつけてコーヒーを一口飲んだ。

「おいで、マドカ」

ロランは膝のあいだをぼんぼんと叩くと、マドカを見てにっこりと微笑んだ。

マドカは言われるままロランの膝のあいだに滑り込んで床の上に乗ったりと座る。

彼の体に少しだけ身を預ける。背中に感じる体温と煙草の香りが、ふわりとマドカの体を包み込む。

マドカはカップを両手で包み、寒い部屋の中で一段と白く浮かび上がる湯気を見つめた。

「あ、マドカのコーヒー、ずるい」

ロランは後ろからカップの中を覗き、マドカの手に指を絡めた。

「だって…苦いの飲めないんだもん。牛乳入れてカフェオレにしてくださいっ」

マドカはそう言っただ砂糖の溶けたカフェオレを飲んだ。

「なんや、まだ子供やな」

熱い空気が喉を通って体内を抜け、冷えた体が次第に温まってく。

カップの縁に唇をつけたまま、静まり返る部屋でロランの息遣いを背中で聞く。

ゆっくりと、一定の速度で刻まれる彼の鼓動。耳の後ろに、ロランのひんやりとした鼻先が当たった。

マドカはカフェオレのカップをテーブルの上に乗せると、少し後ろにあるロランの顔を見上げた。

「ロラン、そういえば…クリスマスプレゼント、まだ渡してなかったね」

マドカはそう言っただロランの腕の中から立ち上がる。

「待つて、マドカ」

不意にロランに腕を引っ張られ、マドカは再び彼の腕の中にうずくまった。

ロランは灰皿の上で短くなったセブンスターの火を消し、一呼吸置くとマドカの耳に優しくキスをした。

「マドカ、俺からのプレゼント。受け取ってくれる？」

ロランは耳元でそう囁くと、ベッドの下に手を伸ばした。

短い沈黙の後、ロランは黒い表紙のノートを出して、マドカの膝の上に乗せた。

よく見ると、それは表紙と裏表紙を紐で閉じるタイプのスケッチブックだった。

“Dear est Madoka”

「ロラン、これ…」

「ごめんな、マドカ。こんなもんしかプレゼントできなくて」

ロランはそう言って藍色の瞳を伏せた。

マドカは指先で“Dear est Madoka”の筆跡をなぞった。

「ロラン、中…見てもいい？」

ゆっくりと紐の結び目を解き、マドカは表紙を開く。

「わぁ…」

ページを捲るたびに現れる、淡いトーンで描かれた風景。都会の喧騒の中に佇む風景が、マドカの手の中で呼吸を始める。ビルのおいだに見える空と木々、街路樹の陰と木漏れ日、街を象る建物の影、あの公園のベンチから見える噴水。

それは、二人だけの特別な場所だった。

心の奥に触れるような優しさを漂わせ、画面いっぱい広がるもう一つの風景。

ロランの描いた風景は、マドカが今までに見たどんな景色よりも輝いて見えた。

「仕事の合間に少しずつ描いottaん。本当は、もっとちゃんとした絵、描ければよかったんやけど」

ロランの言葉に、マドカは首を横に振った。

「ロラン…、私…すごく嬉しい！」

瞳を潤ませて、マドカはにっこりと微笑む。

「だって…私ね、初めてあの公園でロランの絵を見せて貰った時、凄く感動したんだもん…！嬉しい…ありがとう、ロラン」

汚れないマドカの笑顔は、まだ幼い少女のようだ。ロランは手を伸ばし、マドカの長い髪に指を絡めた。

「なんか俺…親父と同じことしてるな」

ロランはそう言って照れ臭そうに笑った。

「なあマドカ、俺…こうしてマドカに見せたくてこの絵を描いと

ったやろ？そしたらな、何で親父が売れない画家で終わったのか、
なんとなく分かったような気がした」

溜息をつき、諦めのような陰影を含んだロランの表情が、マド力を一瞬不安にさせる。

「結局、親父はマド力のお母さんのために絵を描いとったんやな。世間一般に認められる画家ってのは、誰かのためになって必死に描いてるだけじゃ、駄目なんや」

ロランはそう言って、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

「親父にとって、マド力のお母さんは絵を描くこと以上に大切な存在やったんやろな。だけど、それに気づいた時にはもうマド力のお母さんは傍におらんかった。きつと、俺が覚えてる親父の記憶っていうのは全部、マド力のお母さんの面影を背負った、親父の喪失感で構成された世界でしかなかったんやろうな。親父は画家でも何でもない、ただの空っぽな人間でしかなかった」

寂しそうに目を伏せたロランに、マド力は静かに微笑んでみせる。
「そんなこと……ないと思うよ。ロランのお父さんの絵は、お母さんの記憶にずっと鮮明に残っていたんだもん。評価や名声はあとからついてくるものでしょ？誰かを想って描いたものがその人に伝わって、そこでずっと共存し続けることのほうが難しいんじゃないかな……私は……、たった一人でもいいから、自分の作品を大切に想ってくれる人がいることのほうが、素晴らしいと思うな……」

窓から入り込む光の筋が、テーブルの上に複雑な模様を描きながら、次第にその姿を広げていく。

塵が舞う部屋でロランは目を細め、霞んだ時間を生きてる。

いつかは泡のように消えてしまうこの時間の全てを、できることならいつまでも、衰えゆく記憶の中に留めておきたいとマド力は思った。

記憶の中に、いつの日もロランの姿を思い描くことができたなら。

「マドカ、一緒に暮らさへん？春になったらここよりもうちよつと広い部屋でも借りて、二人で暮らすのも悪くないと思わん？」

ロランはマドカの顔を必要以上に注意深く覗いた。

彼の瞳を見つめたまま、マドカはぽかんと口を開けている。

「マドカ…あまり乗り気やない？」

ロランはマドカの耳にぴたりと頬を寄せた。

「俺、マドカとずーっと一緒にいたい。今のままでも十分幸せなんやけど、仕事が忙しくなって…マドカと一緒にいる時間がどんどん削られていくようになったら、俺には自信が無い。マドカを絶対不安にさせない、って言い切れない。俺の言ってることの意味が分かる？」

マドカはこくりと頷いた。

「ただの俺のわかがままかもしれへんけど…、マドカが傍にいてくれたら、それでいい。無理にとは言わへん。マドカのペースで考えて、いつか二人で暮らそうな」

ロランはそう言うときマドカの頭を撫でた。

掌から溢れ出すロランの優しさに、このまま時が止まればいいのにと、マドカは願わずにはいらなかった。

「ロラン、でも私…アサミさんみたいに強くないよ？アサミさんがタツさんを支えているみたいに、私もロランを支えてあげられる自信が…ない…」

マドカは睫毛を静かに伏せた。

「マドカは何も心配せんでええ、傍にいてくれるだけで、マドカは俺の支えになれるんやから」

ロランが掌でぽんぽんとマドカの頭を叩いた。

その柔らかな声を聞きながら彼の体に寄り添うと、マドカは自分が世界で一番可愛い女の子になったような気持ちになる。そんな不思議な魔法にかけられたまま、ロランの傍にいる限り、この夢は続いてゆくのだらうとマドカは思った。

「ねえ、マドカのプレゼントって何？」

マドカは彼の腕の中から立ち上がると、鞆の中からリボンのかかった包みを取り出した。

「お金のかかるものはいらないってロランが言うから…本当にお金はかかってないよ」

マドカはそう言ってロランにプレゼントの包みを渡した。

「…本？」

長方形の平らな包みは、可愛らしいリボンをかけてあっても一目で本だと分かる。

「開けていい？」

ロランが包装紙を開くと、中から薄っぺらな冊子がのぞいた。

「絵本？…にしては地味やし、随分古びた表紙やな」

水色と薄緑色のパステルカラーのストライプで彩られた表紙に、控えめな文字で印刷されたタイトル。

「空に架かる橋…？」

「六歳の誕生日にお父さんから貰ったんだ。誰が書いたお話か分からないけど、ずっと私の宝物だった」

マドカはそう言って微笑んだ。

「もうボロボロになってるけど、ロランにあげるよ」

マドカがもう一度にっこりと笑う。

「なあマドカ、せっかくやから…読んでくれへん？」

「えっ？私が？」

マドカは思わずロランの顔を見つめ返した。

「俺、生まれてから今まで、誰かに本を読んでもらった経験がないんや。駄目？」

平然とした顔で懇願するロランの顔を見て、マドカの恥ずかしさもどこかへ消えてしまった。

「しょうがないなあ、一回だけだよ」

マドカは本の上に置かれたロランの手に触れると、ゆっくりとそ

の表紙を開いた。

第八章／クリスマスの思い出（3）

空に架かる橋

今日、大好きな彼女が死んだ。

僕は彼女のことを大好きだった。

彼女は僕のいちばんの友達だったし、いちばんの女の子だった。いちばんケンカもしたし、いちばん仲良しだった。

だけど、彼女は星になってしまった。

僕はもう、彼女とケンカもできないし、おしゃべりもできない。

一緒に歌もうたえないし、晴れた日に外で遊ぶこともできないんだ。

僕はいちど、彼女をつれて、町でいちばん空に近い小さな塔に登ったことがある。

そこはとても風が強くて、海から吹く潮風は、僕らの足元をぐらぐらと揺らした。

彼女は僕の腕につかまり、塔の狭い階段を一步步つおそるおそる登っていった。

僕は彼女の目になり、彼女は僕の勇氣になった。

彼女は、生まれた時から目が見えない、おもい病気をかかえていた。それでも、目が不自由なことをのぞけば、彼女は明るくて活発なふつつの女の子だったし、なによりとてもかわいかった。

彼女は町中の女の子のそれよりも、かわいかった。

僕をふくめて、男の子はみんな彼女に恋をしていた。

彼女のいるところには、いつも男の子たちで大きな人だかりができていたし、

彼女が二、三日顔を見せないと、

みんな自分のことのように必死になって彼女のことを心配した。

そういうぐあいでは、男の子はみんな彼女に恋をしていた。

どうして彼女が僕とくべつに仲良くしてくれたのか、それは僕にもわからない。

けれど、彼女にとって僕は、ほかの男の子たちよりも少しだけとくべつな存在だったんじゃないかとおもう。

僕はそのことを、なんだかほこりにおもっていた。

いつのことが、彼女が虹を見たいと言ったことがあった。

ほんとうのところ、あとき僕はどうしていいのかわからなかった。

彼女は目が見えないし、高い空にあらわれる虹は、

手でさわることもできなければ、そのにおいをかぐことだってできない。

彼女はいつも、目に見えないものは手でさわってみたり、

あるときには匂いをかいでみたりして、いろんなものを感じとっていたからだ。

僕は、彼女に虹を見せることができたなら、どんなにすてきだろうとおもった。

雨上がりの空に架かる大きな橋を、彼女と一緒にわたることができ

たら、
どんなに幸せだろうとおもった。

塔のてっぺんにつくと、僕は彼女の手を引いて、
空と街が見渡せるところまでつれていった。

あいかわらず風は強くて、塔の上にいる僕たちをどこかに連れ去る
みたいに、
ごうごうとふきつけていた。

塔のてっぺんから街を見下ろすと、そこはやりかけのジグソーパズ
ルのように、
いろんなものがふくぎつにかさなりあっていた。

僕たちの頭の上には、水色の空が広がっていた。

ここへ来れば、いつもよりずっと近くに空が見えるとおもっていた
けれど、

高い空はどこまでも高く、僕たちの手のとどかないところにあった。

雲がゆっくりと右から左へながれていた。

その景色は、とてもきれいだった。

だけど、地上で見た虹はすでに消えてしまっていて、
僕は悲しい気持ちになった。

彼女が僕の手をぎゅつとにぎりしめたので、
僕も彼女の手をにぎりかえした。

虹はどこか別の場所へいつてしまった。

けれど、空に架かる橋は、今でも僕と彼女をつないでいる。

僕は彼女の目になり、彼女は僕の勇気となって橋をわたったのだ。

今日、大好きな彼女が死んだ。

僕は彼女のことを大好きだった。

彼女は僕のいちばんの友達だったし、いちばんの女の子だった。
いちばんケンカもしたし、いちばん仲良しだった。

彼女は星になってしまった。

夜空の星になってしまった彼女が、雨上がりの空にかかる、
うつくしい虹に出会うことはもうないだろう。

僕はいつかひとりでわたる日が来る。

僕と彼女をむすぶ、空に架かる橋を　。

第九章／太陽の絆（１）

電話のベルが鳴る。リビングにその音が、時間を遮るみたいに響いた。

ソファでくつろぐマドカの横を母が小走りで通り過ぎ、受話器を取った。

電話の相手と新年の挨拶を交わす母の背中を横目で見ながら、マドカはテーブルに並んだおせち料理をついついている。

特別予定のない正月休み。実家に帰ってのんびり過ごすのも、悪くない選択だった。料理は美味しいし、何より、マドカと母のあいだに横たわっていた深い溝も、以前に比べて穏やかだ。

マドカは御重に入ったかまぼこを箸でつまんだ。

「マドカちゃん、電話よ」

急いでかまぼこを噛み砕きながら、マドカは受話器を受け取る。

「なーんだ、お前：実家帰ってんじゃん」

声の主は智樹だった。

「智樹：？なんで家の電話にかけるのよ。携帯にかければいいじゃん」

「別にどっちだっていいだろ、俺はお前の母さんに挨拶したかっただけだよ」

新年早々ぶつきらばうな口調の智樹に、マドカは少し呆れた。

「あっそう、お母さんに用事だったの？じゃあもう切るよ？今年もよろしくね、智樹」

「おい！マドカ待てって。お前さ、初詣行っただけ？」

「まだだけど？」

「じゃあ、一緒に行くか。今からお前ん家行くから、準備して待ってるよ」

「え？今すぐ？ちよっと…智樹！？」

電話が切れた。

年が明ける前にロランはレコーディングと曲作りでロスに発った。マドカが楽しみにしていたロランとの年越しも、初詣も、申し合わせたみたいに見事に流れた。

寂しくないと言えば嘘になる。けれどマドカは、離れている時間も見えない何かでロランとずっと繋がっているような気持ちでいた。ロランは「好き」という感情の枠に収めることのできない、特別な人。

智樹を玄関で待たせて、マドカは身支度に取り掛かった。薄いメイクをして長い髪を梳かし、ウールのセーターの上にコートを羽織る。

「智樹、お待たせ」

ロングブーツを履き、マフラーを首にぐるぐると巻きつけた。

「お前、そのブーツ危ないんじゃないの？」

「そう？」

「そう？じゃねーよ、お前さ、ここ東京じゃないんだぜ？秋田だぞ、秋田！秋田の山奥ですけど？」

智樹の言いたいことはよく分かる。凍結した雪道を、細いピンヒールで無事に歩けるわけがないのだ。

「仕方ないじゃん。東京からこれで来たんだもん…これしか履くのないし」

マドカが口を尖らせると、智樹は呆れたように深い溜息をついた。

「コケても知らないふりしていいか？俺、手貸さないからな」

神社までの道をこうして智樹と二人で歩くのは、何年ぶりだろう。初めて智樹と初詣に行ったのは、確か、中学一年の時だった。

新年になると、毎年一緒にお参りをして、おみくじを引く。ほんの些細なことでもよく笑い、雪道を転げ回るようにしてはしゃいでいた。智樹と付き合いたいななんて考えたこともなかったけれど、気心が知れていて、一番近くにいた智樹に特別な感情を抱くことなく今日まで来たのも、奇妙な感じだった。

久しぶりに歩く故郷の風景に、マド力はこの町で過ごした様々な出来事を思い出していた。上京する前の、まだ小さくて半人前だった自分。まだ幼くて恋も愛も知らない、ロランに出会う前の、自分。

「きゃっ…！」

ぼんやりと考え事をしていたマド力は足を滑らせた。体がバランスを失い、思わずポケットに手を突っ込んでいた智樹の腕をぎゅっと掴んでしまう。

「あ、ごめ…ん」

さっきの言葉を思い出し、マド力は手を引っ込める。智樹はマド力の不安定な足元に目をやると、何もなかったかのようにしらけた顔で歩き出した。

「きゃ…っ！」

「危ねーな」

雪道に足を取られて何度も足を滑らせるマド力に、面倒臭そうな顔をしながら智樹はその大きな手を伸ばした。

「つかまれば？」

「え、いいの？」

マド力が長身の智樹の顔を見上げる。差し出された智樹の手は、青白いロランの手とは随分違っていて、太い指に血管の筋が浮き出

て、いかにも男性的だった。

マド力は俯いたまま、差し出された手を掴むのをためらった。

「つかまる？つかまらない？どっちだよ」

急かす智樹の言葉に、マド力は思わずその手を取った。

「ありがとう」

マド力の手をすっぱりと覆ってしまう智樹の男らしい手。頭一つ分ほど違う身長差。悪戯な中学生だった智樹は、いつの間にか大人の男性に成長しているのだとマド力は実感する。ロランの温もりとは違う心地良い安らぎがマド力を包んでいく。

「そっぴいやお前、あいつとは年越さなかったの？」

「あいつ？」

「彼氏だよ、お前の彼氏。ラクテのボーカル」

「ロランは仕事だもん…智樹こそ、マリ子さんと過ごすんだと思っただよ、お正月」

マド力が顔を見上げると、一瞬、智樹の表情が曇るのが分かった。

「マリ子さんって…、彼女じゃないの？」

智樹はぐいぐいとマド力の手を引いた。その大きな歩幅に、マド力は小走りになる。二人の息は弾み、繋いだ手は汗ばんできた。

「ちよつと、智樹！歩くの速いってば！」

ようやく智樹の歩調が穏やかになる。張りつめた空気の舞う智樹の背中を見つめながら、マド力は黙って後ろをついて行った。

「なんかお前、勘違いしてない？」

「え…、何が？」

「マリ子さんのこと、勘違いしてるだろ」

智樹は足を止め、マド力の正面に立った。

「え、彼女じゃないの？じゃあ、智樹がマリ子さんを好きだったこと？もしかして…片思い？」

「お前、勘違いもほどほどにしるよな。マリ子さんはただの友達

なんだよ、別に俺が好きとかそういうんじゃない。仲良しなだけなの」

智樹はそう言ってマドカの小さな顔を見下ろした。口元からこぼれる白い息と、ピンク色に染まった頬のコントラストがいつも以上にマドカを可愛らしく見せている。込み上げる想いに耐え切れず、智樹は思わず繋いでいた手を解いた。

「なーんだ、そうなんだ。イブの日：智樹、照れてたみたいだったから、もしかしてマリ子さんのこと好きなのかなあって思って」

智樹は再び呆れたように溜息をついた。

「なあ、マドカちゃん？」

「何？」

マドカが智樹の顔を見上げる。智樹は思う。マドカが自分のことを見上げて話す時の上目遣いや、頬を膨らませる仕草が何度この理性を奪おうとしただろう。何度、「親友」という一定の距離を保った複雑な関係を壊してしまいたいという想いに駆られただろう。マドカはこれっぽちも気づいていないのだ。この想いを伝えない限り、マドカは永遠に気づくことはないだろう。鈍感なマドカには十分あり得ることだった。

智樹はマドカの真っ直ぐな瞳から視線を逸らすと、再び前を向いて歩き出した。

「俺はさ、特定の女なんて必要ないんだよ。別に今は好きな女もいないし、恋だの愛だのって、めんどくせーじゃん」

「でも私、智樹には可愛い彼女を作って幸せになってもらいたいもん……」

「いいんだよ」

智樹がマドカの言葉を遮る。

二人は何の言葉も交わさないまま、神社の境内に向かった。

「見て智樹！私、大吉だよ！」

初詣客で賑わう境内は、若いカップルや家族連れでこった返していた。

「智樹は？」

紙切れを握り締めて呆然とする智樹の後ろから、マドカはおみくじを覗いた。

「凶……」

「やだーっ、智樹、凶だって！」

「うつるせえな……もう一回引くんだよ。なんだよこれ、新年から気分悪いいじゃん」

智樹はいつもこうだった。彼のおみくじは、毎年必ず三回は引かれるのだ。

智樹が二度目のおみくじを引き、マドカがそれを笑って見ていると、後ろのほうから声がした。

「マドカ！智樹！？」

振り向くと、そこには高校時代の友人の姿があった。

「超久しぶり！」

懐かしい面影に、どちらからともなく思わず駆け寄る。手を取り合って、数年ぶりの再会に花が咲く。

「マドカ、智樹と二人で来たの？」

友人はマドカと肩を並べる智樹の顔を見上げた。

「智樹、またかつこよくなったねえ、マドカも……なんだか綺麗になっただけじゃない？」

友人の言葉に、マドカは照れ笑いを浮かべる。

「てゆうかさ、あんたたちって付き合ってるの？」

「な、なんで！？そんなふうに見える？」

マド力は智樹と顔を見合わせた。

「だってさあ、あれだけ仲の良かった二人が一緒に東京に行って、私はてっきり向こうでマド力と智樹はくっついたんだと思ってたよ？違うの？」

友人は微笑みながら二人の顔を交互に見た。

「なつ、何言ってるの！？そんなのあり得ないってば！なんで私がこんなのと付き合わないかならにのよ、冗談やめてよー」

友人の言葉を完全否定するマド力の隣で、智樹の胸中にはもやもやとした霧が立ち込めていた。その智樹の気も知らずに友人は続けた。

「でもマド力、こんなに可愛いんだから、彼氏ぐらいいるでしょう？」

友人の、他人の恋愛事情を探るような視線。同級生の女の子たちの恋愛動向が気になるのも仕方ないのかもしれない。

「え…まあ、うん…」

「えーっ、ねえどんな人！？どんな感じ？」

「どんな人って言われても…」

マド力は口ごもってしまう。どこにいても、誰に聞かれてもはっきりと言えないもどかしさ。

私はロランの彼女だよって。

「普通の人かな。可でもなく不可でもなく…」

「えーっ、なによそれえ？」

友人は不満気な表情で口を尖らせた。

「智樹は知ってるんでしょ、マド力の彼氏」

「んー、まあな」

「ね、どんな人？かつこいい？」

「まあ、男の俺が見てかつこいいかどうか分かんねーけど、マド力の彼氏って俺の友達だぜ？普通の奴だよ。マド力の言う通り、可でもなく不可でもなくって感じ？」

「智樹…」

マド力は淡々と話す智樹の顔を見上げた。

これって…、私のことかばってしてくれてるんだろうか…

それとも、面倒だからって適当に流してくれてるだけ…？

マド力はほつと胸を撫で下ろす。

鳥居を抜けて人気のない歩道に出ると、来た時と同じようにマド力は智樹の大きな背中を見つめて歩いた。冷たい北風が痛いくらいにマド力の頬を刺す。

智樹のワークブーツの底に貼り付いた雪が、さくさくと気持ちの悪い音を立てている。

「お前さ、いつもあんな感じなの？」

「あんな感じって…」

黙々と歩きながら、智樹は平坦な口調で話した。

「いつもああやって隠してんのかよ？」

「隠してる？」

「彼氏のこと。誰にも言うなって言われてんの？」

いつになくぶっきらぼうな智樹の口調は、マド力を苛立たせた。

「別に…、ロランには何も言われてないよ。二人の関係を隠すとか、誰にも言うなとか…ロランはそんなこと言わないよ」

マド力は智樹の言葉を強く弁解するように言った。

「でも…、ただ…あんなふうに恋愛のことを聞かれると、私は自分が本当にロランの恋人なのか自問自答したくなるだけ。ロランの彼女だなんて、誰も信じてくれないと思う」

行き場のない虚しさがマド力の中に込み上げる。スピードを上げて歩く智樹をよそに、マド力はその場に立ち尽くしてしまった。

「お前は…それでいいの？」

智樹は後ろを振り返った。遠くに立ち尽くしたまま、マド力は両手で顔を覆って俯いている。

「ばーか、お前…何泣いてるんだよ！」

智樹は急いでマド力の元へ駆け寄った。マド力は静かに肩を震わ

せている。

「おーい、何で泣くんだよ！」

泣きたいのは俺のほうじゃねーか、と智樹はつくづく思った。マド力を見下ろし、何もしてやれない無力な自分に対して、やるせない気持ちが込み上げてくる。

「そんなに辛いんなら、別れちまえばいいだろ？ミュージシャンだかボーカルだか知らねーけど、そんな面倒な奴と無理して付き合うことないんじゃないの？」

智樹が顔を覆っていたマド力の手を振り払うと、頬を伝う涙の粒がこぼれ落ちた。マド力は赤い目で、唇を噛み締めて智樹の顔を見上げる。

まあ、泣くだけ好きだってことだよな…あいつのこと。

智樹は今日何度目かの、深い溜息を浮かべた。

「お前はさ、何も心配することはないと思うぜ？これは俺の考えでしかないけど…、きつと向こうだって辛いんだろうよ。あの人…ロランだっけ？別に悪い人じゃないし、お前のこと大切にしてくれてるんだろ？」

智樹は幼い子供を宥めるみたいに腰を屈めてマド力の顔を覗いた。マド力はこくりと頷いた。

「色んな恋愛の形があるんだからさ、これくらいのことで泣いてどうするんだよ。好きなら好き、それでいいんじゃないの？片思いの中学生じゃあるまいし…お前はあの人に愛されてんだよ、そのどこが不満なんだよ」

智樹の優しい言葉が身に染みて、マド力の胸はじんと熱くなる。

「また泣く…！俺、何か悪いこと言ったか！？」

マド力は首を左右に振った。

「しょうがねえ奴だな。こうなったら、彼の好きなのところを十個言いなさい。好きっていう気持ちを声に出してしまえば、少しは楽になるだろ。一人で言うのも虚しいから、俺が聞いてやるよ」

智樹はそう言うのと立ち上がり、マドカの顔を再び見下ろした。

「え…、本当に言うの？」

智樹が真っ直ぐに頷く。

「恥ずかしいじゃん。何で智樹に言うのよ、それこそ虚しいじゃん…」

マドカが頬を膨らませると、智樹が催促するように言った。

「まずは一つ目。はい、どうぞ」

マドカは渋々、言われるまま智樹のペースに引きずられてしまう。

「えっと…、大きくて深い瞳が好き…かな」

「よし、じゃあ二つ目」

「一見冷たそうで意地悪なんだけど、根は優しくて甘えんぼなところ…とか」

「三つ目は？」

「柔らかな少し高めめのトーンで話す、独特の関西弁とか…」

「四つ目」

「ああ見えて、実は家庭的で…料理でも何でも全部一人でこなせちゃうところとか…」

「五つ目」

「綺麗な歯並びを見せて大きな口で笑うところ。完璧なロランの顔が、ほんの少し崩れるのが好き…」

「六つ目」

「ロランの描く絵が好き」

「絵？あの人、絵なんて描くのか？」

「うん、風景画。すごく巧いの」

「へえー、じゃあ七つ目は？」

智樹の問いかけは続いた。

「んーっと、恥ずかしい台詞もさらっと言えちゃう、意外とロマンチストなところ」

「八つ目」

「煙草を啜える仕草と、風に流れる髪とか…」

「九つ目」

「全部好き…かも」

「ん？」

智樹がマド力の顔を覗く。

「智樹、私…ロランのすべてが好き。ロランの過去も現在も、彼を取り囲むすべてのものが好きだよ」

マド力はそう言うてにっこりと微笑んだ。

頬に薄っすらと残る涙の跡が吹き寄せる風にさらされて、そっと乾いていく。

「そっか、それならもう泣くな。お前が泣くと、こっちも調子狂うんだよな。友達として心配ってゆーか、なんつーか。とにかく、もう泣くなよ？これぐらいで泣いてどうすんだよ」

「智樹」

マド力は思わず智樹の上着の裾を愛そうに引つ張った。

「…なんだよ」

「智樹の好きなところ、言ってあげようか？」

「は！？何言ってるんのお前…」

思わずマド力の瞳から視線を逸らし、智樹はそっぽを向いた。

おそらくマド力は冗談や面白半分ではないだろう。純粹に俺の好きなところを言うともりなんだろ、きつと。それも、「友達」として好きなところを延々と言うつもりなのだ。

マド力の大きな丸い瞳がじつと智樹を見つめている。智樹の複雑な気持ちをよそに、マド力は口を開いた。

「ロランと正反対なところが好き」

「なんだよ、それ」

智樹は呆れて眉間に皺を寄せた。

「だって、ロランと智樹って月と太陽みたいなんだもん。ロランが月で、智樹が太陽。ね、ぴったりでしょ？」

「ぴったりか…？」

すっかり笑顔を取り戻したマドカの顔を見て、智樹は安堵の表情を浮かべた。

風に流されるマドカの長い髪はきらきらと透き通り、いつまでも智樹の目に焼きついていて、ブーツの踵についた雪を爪先を立ててトントンと払い除けると、マドカは智樹の顔を見て微笑んだ。

「智樹…」

「ん？」

「ずっと友達でいようね。遠く離れても、智樹に好きな女の子ができて、お互いに結婚しても、例えば歳を取っても…、智樹は私の一番の友達でいて欲しい。私たちって、本物の男女の友情でしょ？」

首を傾げるマドカの質問に、智樹は何も答えることができなかった。そこにいるマドカへの気持ちをこのままずっと打ち明けることなく、ひっそりと想い続けることも、この先できそうになかった。

けれど、マドカに対するこの想いが行き着く先も、智樹には検討もつかなかった。もやもやとした複雑な回路をたどりながら、智樹はじつとマドカの世界に佇んでいる。この先ずっとマドカの親友であり続けることが、唯一の愛情表現なのかもしれない。

けれど数日後、智樹の願いは見事に破られる。その歯車が狂い続けることに、二人はまだこれっぽっちも気づいていなかったのだ。

第九章／太陽の絆（２）

正月休みも終わり、マドカはいつものようにオフィスで仕事をし
て一日を終えようとしていた。年明けの仕事はのんびりとデスクワ
ーク。溜まったメールをチェックしながら、マドカは卓上カレンダー
に目を向けた。

ロランの話だと、今日が帰国予定ってことだけど…

彼の帰りが待ち遠しい。ロランの顔を見るまでは、新しい年が始
まったという実感が沸かなかった。

とりあえず、ロランのアパートに行つてご飯でも作つておこうか
な…

松田に挨拶をしてマドカはオフィスを後にした。エレベーターで
一階に下り、エントランスを抜けて外に出ると冷たい北風が身に染
みた。マフラーを顎の上まで引つ張り上げ、マドカは肩を縮める。

「マドカちゃん、お疲れさま」

弾むような滑らかな声に顔を上げると、目の前にマリ子が立つて
いた。

「マリ子さん？」

どうしてここにマリ子がいるのだろう。マドカは立ち止まり、初
めて会った時と同じように、感じの良い微笑を浮かべたマリ子をじ
っと見つめた。相変わらず高価な装飾品をつけ、頭のでっぺんから
爪先、指先にまで丁寧に気遣いされた彼女の美意識が伺える。マリ
子がつこりと微笑むと、完璧な形をした美しい唇が洗練された無
駄のない表情を作る。

「マドカちゃんって、出版社に勤めてたんだね」

マリ子はそう言ってこぢんまりとした古いビルを見上げた。

「急に来てびっくりしちゃったよね、迷惑だったかな？」

マリ子の口元には相手を安心させる不思議な魅力を帯びた笑いが

浮かんでいて、マドカも何となく笑顔になってしまふ。

「マドカちゃんの会社、智樹くんが教えてくれたの。だからちょっとだけ会いに来てみたんだけど、よかったらそのへんでお茶でもしない？」

「え…、これからですか？」

マドカは腕時計に目をやった。

「あれ、もしかして都合…悪い？」

「いいえ、少しだけなら…大丈夫です」

日が沈むのにはまだちょっとだけ時間がある。ロランの笑顔を出しながら、マドカはマリ子と一緒に目に付いた喫茶店に入った。

「本当、急に訪ねたりしてごめんね」

マリ子はティーポットからカップに熱い紅茶を注いだ。アールグレイの深い茶葉の香りが広がっていく。シュガーを一粒落とし、スプーンでカップの底を掻き混ぜると、彼女は一呼吸置いてカップを口に運んだ。

細く長い指にはカルティエのリングが光っていた。高価なものも、マリ子にはしつくり馴染んでいる。

マドカは陶器のカップをゆっくりと下ろし、マリ子の表情を伺っていた。

「今日は…何か用があつたんですか？」

マドカの視線に気づくと、マリ子は再び微笑んだ。瞬きをする度に、彼女の黒い睫毛が揺れた。

「そんなにたいした用じゃないの。ただ、マドカちゃんと一度ゆ

つくりお話がしたくて」

マリ子はそう言っと、細い指でカップを持ち上げた。

緊迫した緊張感を覚えながらも、マド力はマリ子に強い嫌悪は抱けなかった。

「マド力ちゃんと智樹くんって、本当に仲がいいんだね。智樹くん、私と一緒にいてもマド力ちゃんの話ばかりするの。親友のマド力があした、こうしたってね」

マド力は肩をすくめた。マリ子の穏やかな瞳はじっとマド力の視界を捉えていた。二人のあいだに流れる空気はどこか重く、その違和感も膨張していた。

マド力は思わず息を呑む。

「マド力ちゃん私ね、智樹くんのが好きなの」

マリ子はそう言ってほんの少しだけ頬を赤らめたように見えた。

けれど、その瞳はじっとマド力の表情を伺っていた。

「驚いた？」

「いいえ……」

マド力は首を振った。

「始めはね、遊び程度だった。前に付き合ってた彼と私がうまくいかなかったね、智樹くんが色々心配してくれたのよ」

マリ子は目を細めて静かに笑った。

「彼氏と別れて、しばらく恋なんてしないって思った時、智樹くんが優しく励ましてくれて。何度か二人で会うようになって……。でもね、私……智樹くんも辛い恋と向き合っていることを知ったの」

マド力は一瞬、首を傾げた。

智樹が恋……？

女癖が悪くて、いつも違う女の子と体の関係しか持たなくて。その智樹が、辛い恋と向き合っている……？

「智樹が辛い恋ですか？」

マドカはマリ子の言葉を疑った。

智樹が恋なんて……相手が誰であろうと、智樹はいつだって私に何でも話してくれるのに。

「私ね、そんな智樹くんを見てるのが辛かった。智樹くんはカッコいいし、女の子にもモテるし……恋愛の悩みなんて一つもない人だと思ってた。大学でも智樹くんの周りにはいつだって女の子の人だからができるほどよ。智樹くんは社交的で話上手だし、魅力的だもの」

マリ子は瞳を伏せ、静かに首を振った。

「私はいつの間にか智樹くんのことが好きになっていた。前の彼のことも、智樹くんがいたから忘れることができたの。でも、ちょっとおかしいなって思った。智樹くんだったらすぐに素敵な彼女ができそうだし、どうして色んな女の子をまるで着せ替えみたいにとつかえひつかえしてるんだろうつて。だから聞いたのよ。好きな子はいないのって」

マリ子はそのままで話すとカップを口に運び、嗜むように紅茶を飲んだ。マドカはただマリ子の話を注意深く聞いているだけだった。

智樹が恋　　？

「率直に言うわね」

マリ子の視線が鋭くなる。

「マドカちゃん、もう智樹くんに会わないで」

「……どういことですか？」

マドカは眉間に皺を寄せた。マリ子の言葉が頭の中で渦を巻き、複雑な稜線を描いていく。その言葉の真意を読み取ろうとしても、答えはどこにも見つからない。マドカの違和感はさらに増すばかりだった。

「どういことですか？マリ子さん、私はイブの日に初めてあなたに会って、純粹に智樹とあなたのことを応援したいって思ってい

たんです。あなたはとても綺麗で素敵な人だし、智樹といい関係になつてくれたらいいなつてそう思つたんです。それなのに、どうしてそんなこと言ふんですか？私が、二人の間を邪魔するとも思つてゐるんですか？」

「違ふわ。そういう意味で言つてゐるんじゃない」

「だったらどうして？智樹は私にとつて一番の友人なんです。どんな時も私には智樹がいてくれて…お互いに必要し合える存在だと思つてゐます。私たちは何年も一緒にいて、色んなことを話して、色んなことを乗り越えてきた友達です。それなのに…第三者のあなたに、どうして会わないでくれつて言われなきゃならないんですか？マリ子さんは一体…智樹と私のあいだを、どうしようつて言ふんですか？」

マド力はうんざりして首を横に振つた。

「確かに、私はあなたに嫉妬しているわ。あなたは智樹くんの一歩近くにゐる女の子だから。とても仲の良い女の子だから…。でも、それだけじゃない」

マリ子は何を考え、何を言いたいのか、マド力にはすっかり検討もつかなかった。

「マド力ちゃん…あなたは気づいていないみたいだけど、智樹くんがどうして特定の彼女を作らないのか、知つてる？」

「それは…、今はまだ特定の彼女はいらなかつて智樹が自分で思つてゐるからじゃないですか？智樹はいつも私にそう言います。本人が言つてゐるんだから、間違いないと思いますけど」

マド力は冷めた紅茶を一口飲んだ。カップとソーサーが触れ合う音が二人の間に響いた。

マリ子はゆっくりと首を振つた。

「それは嘘よ。智樹くんはあなたに嘘をついてゐるわ。智樹くんには想いを寄せてゐる女の子がゐるし、彼はずっと、彼女のために悩んだり傷ついたり、辛い想いをしているのよ。マド力ちゃん、私

の言いたいことが分かるかしら？」

智樹は…私に嘘をついてるの？そんなこと…智樹は一度も言ってくれなかった。

これっぽちも、好きな子がいるなんて、そういう仕草…見せてくれなかったよね、智樹…

マリ子の言葉が痛いほど胸に突き刺さる。

けれど、それだけの理由で会わないで欲しいと言われる覚えはなかった。

「智樹は…、その好きな子のために彼女を作らないっていうことですか？」

マリ子は静かに頷いた。張り詰めた空気が二人を覆う。

「残念だけど、智樹くんが想いを寄せている相手は私じゃないわ。どんなに頑張っても、私は智樹くんの彼女にはなれない。彼の心はいつも別のところにある。智樹くんはずっと、たった一人の女の子のためにその心を震わせている。私にも、他のどんな女の子にも彼の心を揺らすことはできないの。あなた以外を除いては…」

「私…？」

マド力は淡々と話すマリ子の顔を見つめた。マリ子の表情が次第に曇っていく。

「マド力ちゃん、お願いだからもう智樹くんに会わないで。これは私があなさに意地悪をしているわけでも、何でもなくて。ただ、智樹くんがかわいそう。あなたのために彼は悩んだり傷ついたり、複雑な想いを抱え込んで。私はそんな惨めな想いをしている智樹くんを見ていられないわ。智樹くんは、マド力ちゃんのが好きなのよ。あなたへの気持ちを誰にも言えずに苦しんで。私にはそれが分かるわ。だからお願い、彼を苦しめないで。もう、智樹くんに会わないであげて……」

悪い悪夢を見ているような気がする。目を閉じてもどこまでも闇は広がり、思うように寝付けないまま寝返りの数が増えていく。

マリ子の言葉が何度も頭の中でリフレインして、ふと気がつくとき智樹の顔を思い浮かべている。

いつだって智樹は誰からも好かれて、女の子にも人気があって、頭もキレルしスポーツも万能で…絵に描いたように爽やかな男の子だった。なのに、女にだらしがなくて、たくさんの女の子を泣かせて……

そういえば、二十歳を過ぎた頃からどんどん大人びていく智樹が私の傍から離れてしまいそうで、時の流れにほんの少しだけ嫉妬したのを覚えてる。

智樹はずっと私の傍にいれくれた。喧嘩して仲直りして、智樹はいつも私のことを気に掛けてくれた。私が悩んだり苦しんだりしている時、智樹はいつも傍にいてくれた。智樹が私の隣にすることが当たり前だったし、これからだっただけでそうだと思ってた。

だけど、智樹はそうじゃなかったの？

智樹は、私をどんなふうに見てた？

枕元に置いた目覚し時計は午前二時を回ったところだ。浅い眠りがやってきては、何かのしるしみたいにマド力を掴み、一瞬の出来事のように消えていく。

マド力はベッドから起き上がると、薄暗い部屋を抜けてキッチンの冷蔵庫を開けた。中から牛乳を取り出し、小さな鍋をコンロにかけて温める。

温めた牛乳をマグカップに注いで、それを両手で抱えるようにし

て部屋に戻る。

頭の中をクリアにしよう…

マド力は部屋の窓を開けた。

パジャマの上に外の空気が絡みついた。凍えるような風の冷たさに、思わず肩を縮める。

吐く息は白い。藍色の空を見上げると、闇と一体化した部屋が今にも夜空に吸い込まれてしまいそうだ。スモークの立ち込めた東京の夜空でも、冬の星座は比較的よく見える。凜と張りつめた空気が漂う中、北の空を見上げると、一際輝く大きな三つの星が等間隔に並んでいるのが見えた。

あれって、もしかして冬の大三角形かな……

思わず人差し指で宙に三角形の模様を描く。三つの星はそれぞれの色を僅かにきらめかせながら、マド力を見下ろしていた。

「智樹…」

溜息をとともにマド力は彼の名前を呟いた。普段は何気なく呼びかける彼の名前が、今日は重大な役割を与えられたみたいにマド力に重く押し掛かる。

ベッドに腰掛けてホットミルクを飲みながら、マド力は次第に落ち着きを取り戻した。気分がいくらかすっきりすると、睫毛を伏せ、目蓋の裏に焼きついた智樹の面影を探した。けれど、闇は深く、そこに見えるのは蒼白い月だけだった。

太陽は月の裏側にその姿をすっぽりと隠している。
まるで、マド力の心を見透かしたみたいに。

第九章／太陽の絆（3）

マリ子の言葉を頭から振り払えずに朝を迎え、時間だけが過ぎていった。

智樹の顔が、声が、頭の中にちらついて離れない。

マドカはマリ子の言葉が信じられなかった。信じたくても信じていけないような気がしていたのだ。

何度も溜息ばかりが宙を舞い、一日が終わる。

仕事が終わると、マドカはいつものようにあの公園に向かう。ロランに出会った交差点を渡り、ベンチに座って噴水を眺める。日が暮れるのが早いこの時期は、マドカ以外に誰の姿も見当たらなかった。水の流れる音が耳元に残る。

不意に、鞆の中で携帯が震えた。手直しを入れなければならない原稿を掻き分け、マドカは携帯を掴む。

どこか祈るように聞こえるバイブの音。

着信画面を見つめる。

「智樹」

携帯はマドカの手の中で震え続けている。智樹からの着信は随分長い間マドカの携帯を鳴らしていた。

智樹、ごめん…

鳴りつ放しだったバイブ音も、しばらくして振動が止まった。

マドカはぎゅっと携帯を握り締めると、ロランのアパートに向かった。

部屋の明かりがついてる…

ロラン、帰って来てるんだ……

ロランの部屋の前に来ると、マド力は何だか後ろめたい気持ちになつた。

ロランの前でいつものように笑える自信なんてない。

「マド力？」

ドアが開き、中からロランの顔が覗いた。いつものようにセブンスターを啜えて、少し虚ろな大きな瞳でロランはマド力の顔を見ると、目を細めてにつこりと微笑んだ。

「おかえり、マド力」

「たつ、ただいま…」

ただいまって…それは私が言うべき言葉じゃない。帰ってきたのは、ロランのほうなのに。

ロランは立ち尽くすマド力を部屋の中へ招き入れると、啜えた煙草を持ち替えてマド力の頬にそっとキスをした。

「マド力、いい子にしてた？」

ふわりと香る煙草の匂い。

「ロラン、おかえりなさい…」

ロランは夕食の野菜を切っているところだったらしい。四等分に切り込みを入れたトマトがシンクの上に乗っている。

「今日は豆腐ハンバーグやな。マド力、お腹空いてるやろ」

久しぶりに見るロランの姿に心臓の音が勢いよく鳴り出して、マド力は首を斜めに振って曖昧な返事をした。

「ちよっと待ってな、今、夕飯の準備始めたところから」

ロランは手際よくレタスをほぐし、ボウルに入れてさつと水を落とした。

マドカはじつとロランの器用な指先を見ていた。ワカメを水に浸して胡瓜を輪切りにしたかと思うと、弾むように気持ちの良い包丁の音が聞こえ始めた。

「ロラン、いつ帰ったの？」

「昨日。時差ボケで…寝てるか起きてるんか分からなかったけどな」

ロランはそう言って笑いながらマドカを見た。一瞬、マドカの体がこわばる。

そうだ、智樹のことにかまけて私…ロランが帰って来たっていうのに、何やってたんだろう…

マリ子さんの話に気が動転して、どうにかしてた……

「ロラン私…、昨日は…」

「仕事、忙しかったんやろ？無理してまでここに会いにくることないんやから」

ロランはそう言って、冷蔵庫の中から挽肉と木綿豆腐を取り出した。

私…、ロランの帰りをずっと待っていたのに。恋人の帰りを、一番近くで待っていてあげたかったのに。

一瞬でもロランのこと、頭の隅に追いやっていた自分がいる。

ごめんね、ロラン。こんな私を、許してくれる？

「マドカ、どうかしたん？」

豆腐と挽肉のパックを開けながら、ロランはマドカの顔を覗いた。ロランがこんなに近くににいるのに、どうしてロランだけを見れないんだろ。ロランのことが大好きなのに、色んな想いが一色になつて揺れる。

私にはロランがいて、智樹がいて……こういうのって欲張りなの

かな…二人とも大切な人なのに…

どうしてだろう、うまく笑えない。今の私はロランの前でも笑えないし、智樹の前でもうまく笑えないだろう。見えない糸がどこかで絡み合ってもつれてる。それはロランにも解くことはできないし、智樹にも解くことはできない糸。私が、自分で解くしかないんだ。

マドカは思わず両手で顔を覆った。

「マドカ、どうかしたん？何か心配事でもあるん？」

ロランは手を洗い、ペーパータオルで滴を払うと心配そうにマドカを見つめた。

ロランの視線が一步一步近づく。さっきまで口に咥えていたセブンスターはいつの間にか短くなって灰皿に捨てられていて、形の良いろランの唇が次にどんな言葉を紡ぐのか、マドカはそんなことばかり考えていた。

「あ、そういえば…」

ロランは思い出したように六畳の部屋に向かうと、薄いディスクを持って戻ってきた。

「これ、ロスのお土産。発売前のレアなCD。クリスマスライブの時にマドカが好きだって言ってくれた曲が入ってる。今ならファンクラブ会員限定、バレンタインライブのチケットも付けちゃおか
な」

ロランはそう言って、隠していたチケットをディスクの上に重ねて微笑んだ。

「嬉しくない…？」

「ううん、そんなこと…」

マドカは首を横に振る。

「そっか、ならよかった。なあ、一緒にハンバーグ作ろうか」

ロランはペーパータオルに木綿豆腐包んで水分を切り、その間に胡瓜とワカメの酢の物を作った。

「マドカ、玉葱のみじん切り頼むな」

「うん…」

ロランの隣に立ち、皮を剥いた玉葱に包丁を入れる。

「俺の豆腐ハンバーグはな、焼くんじゃなくて煮るんやな。醤油と砂糖とみりんで煮込むと味が染みて美味いんや。ヘルシーやろ？」

「ロラン、私ね…」

マドカの目から涙が溢れた。胸の奥で込み上げる想いが、喉の辺りにつかえて声にならない悲鳴を上げている。

「どうしたん？」

ロランは心配そうにマドカの顔を覗いた。

「もしかしてお腹でも痛いん？生理なん？」

「違う…玉葱が…目に染みただけだもん…」

マドカはそう言っただけでシャツの袖で頬を拭いた。それでも堰を切ったように流れる涙は、止むことなく頬を伝う。

ロランはマドカの背中を優しくさすった。

「今日のマドカ、情緒不安定みたいやな」

マドカはロランの胸に顔を埋めた。

ロランの手がマドカの小さな背中をそつと撫でていた。

「泣きたい時は思いっきり泣いたほうがええ。そのほうが楽になるから…」

マドカの涙が乾き、落ち着きを取り戻すと二人はテーブルの上に並んだ夕食を食べた。

泣きじゃくるマドカを宥めながら、結局ロランが一人で料理を完

成させてしまった。部屋の中はやけにしんとして、マドカは少し罰の悪さを感じる。

「こうして自炊して食べるのも久しぶりやな。やっぱ和食はええなあ」

ロランは胡瓜とワカメの酢の物を口に運びながら満足そうに頷いた。

相変わらず、美しいロランと酢の物のアンバランスな組み合わせはマドカを優しい気持ちにさせた。

「ロラン、今日は仕事じゃなかったの？」

「ああ、今日は休み。明日からまた犬のように働かなあかん」

「何だかビートルズの歌みたい」

マドカが笑うと、ロランはいつものように目を細めた。

「ロラン、これ本当に美味しい。今度作ってみよつと」

ロランの作った豆腐ハンバーグを口に運ぶ。優しい味が口の中に広がって、まるでロランの温もりが心に浸透するようだった。

食事を終え、二人で洗い物を済ませる。こういう時間をささやかな幸せと呼ぶのかもしれない。

ロランと一緒にいると、嫌なことも、もやもやした気持ちも全部どこかへ消えてしまう。ただ、ロランを好きという想いだけが残って、あとは全部抜け殻みたいに朽ちてしまえばいいのに。

マドカは皿を拭き、食器棚に戻した。

ぴかぴかになった器を重ね、戸棚を開ける。

「ねえ、ロラン」

「んー？」

「ロランって、薬：飲んでるの？どこか具合でも悪いの？」

食器棚の隅に、内服薬と書かれた紙袋が無造作に置かれていた。

それはどこにでもありそうな一つの風景としてマドカの目に映った。

「ああそれはな、俺、アレルギー持つとるから。たまに飲んでる

「だけやねん」

ロランはシンクの上を綺麗に拭き終わると、煙草に火を点けた。

ロランはいつものようにギターを弾いた。

それは懐かしい景色となつていつの日かマドカの脳裏に浮かぶだろう。

鮮やかな光を浴びて色褪せた、ひとつの足跡みたいに。

「マドカちゃんとして二人で会えるなんて光栄やな」
ソファに深く腰掛けるタツがにっこりと笑い、マドカにピースサインを向けている。

マドカの年明け最初の取材は、タツの単独インタビューだった。ティーンズ向けのファッション誌に、ラクテの中でもお洒落に一倍独自のこだわりを持つタツが登場するのだ。

「ファッション誌に載れるなんてめっちゃ嬉しい」と何度も笑顔を見せるタツは、用意された衣装を着替えるたびにマドカの元に駆け寄った。

「マドカちゃんの出版社って音楽誌だけじゃないねんな」

「小さな出版社だから、大手の下請けみたいな記事も書いたりしてるんです。最近はファッション誌の下請けも多くて。でも、私もタツさんと同じでたくさんお仕事できて嬉しいです」

アルバムの発売以来、ラクテの人気は留まるところを知らず、ラ・ヴオワ・ラクテの名前は日本の音楽界にすっかり浸透してしまった。

一日に一度はどこかでラクテの曲を耳にしたし、ロラン目当ての女性だけでなく、ロック好きの男性ファンも増えた。

十代の男の子たちは皆、ラクテのバンドスコアを買い求め、新曲の出荷枚数は予約だけで軽く100万枚を超えた。それでもラクテのメンバーは仕事が忙しくなったことを除けば、出会った当初と何も変わりなかったし、ラ・ヴォワ・ラクテは素敵な音楽をリスナーに届けてくれた。

「ツアーが始まったら、マドカちゃん寂しくならない？」

「会えない時間が減っちゃうのは寂しいですけど……でも、タツさんだつてアサミさんと会えなくなるの、寂しくないんですか？」

「俺の場合は嫌でも毎日顔合わせてるからね、むしろ良い息抜きになるかも」

タツは笑ってマドカと顔を見合わせた。

「でも、マドカちゃんのほうは逆だもんね」

「逆？」

「マドカちゃんよりロランのほうが寂しいんじゃないかな。マドカちゃんが傍にいないと、ロランのやつ、寂しくて死んじゃうかもしれないね。かつこつけてるけど、ああ見えて小心者のウサギみたいなんやから」

スタツフの淹れたコーヒーを飲み終えると、タツは空になったカップをテーブルの上に乗せた。

マドカは一呼吸置いて、前からずっと気になっていたことを思いきって切り出した。

「タツさん、一つ質問してもいいですか？言いたくなかったら、答えなくても構いません」

「何だろう？」

「アサミさんから聞いたことなんですけど……タツさんがロランをバンドのボーカルにしたいと申し出た時、ロランはどうして何度

もタツさんの誘いを断ったんでしょうか？」

マドカの言葉に、立つの表情がほんの一瞬鋭く曇った。

「ロランがタツさんのバンドで歌うって決めた時、ロランがタツさんに出した条件：タツさんと交わした契約って…一体どういうものだったんですか？」

タツはしばらく何かを考え込んでマドカを見つめると、肯定とも否定とも取れる表情を浮かべてにっこりと微笑んだ。端正な顔立ちのタツが笑うと、目尻に小さな皺が寄った。

「マドカちゃん俺な、初めてロランのステージを見た時、頭の後ろを鈍器で殴られたような衝撃…驚きというか感動っていうか、言葉も出なかった。俺は色んなボーカリストを見てきたんやけど、ロランみたいなのは初めてだった。なんて言うんやろな、存在感があるとか華があるとか、そういう単純なものやなくて。これは大袈裟な言い方なんだけど、自分の体がすべてロランに支配されるような感覚に襲われた。うまく説明できないんやけど」

「タツさんの言いたいことは、なんとなくだけど…私も分かります」

マドカがそう言うと、タツは小さく微笑んだ。

「ロランが人を引き付ける才能を持つてっていうのは、誰が見ても納得できることなんだ。瞳を奪われるっていう言葉はロランのためにあるようなもんやな。それだけ俺がロランから受けた衝撃は凄かった。今でも鳥肌が立つくらい、ロランのステージを初めて見た時のことは一生忘れられない」

マドカはあのライブハウスのステージの上で、鮮やかに照らされるロランの姿を思い出していた。マドカにとっても、それはこの先ずっと忘れることはないだろう。

「俺が一番惹かれたのは、ロランの目。あの大きな瞳やった。ただ美しいだけじゃなくて、ロランの瞳には様々な感情が詰め込まれ

てる。ロランの感情はあの瞳から溢れてる。マドカちゃん、あれだけ完璧な魅力が揃っていたら、何だって手に入りそうなもんやろ？でもロランは違ったんだ。そのことに俺が気づかされたのはずっと後になってからのことだったけれど」

タツはそう言って唇を噛み締めた。

「マドカちゃん、アサミが何を言ったのか知らないけど、俺はロランの人生を預かってるんだって自分に言い聞かせながらラ・ヴォワ・ラクテをやってきたつもりだよ。俺が転んだらロランも痛い目に合うし、俺がこのバンドを捨てたらボーカリストロランの人生もそこで終わる。俺とロランはそういう道を歩いてる。でたらめなことを言ってるようにしか聞こえへんかな？」

マドカは静かに首を振った。

「マドカちゃん、ずっとロランの傍にいてやってくれないかな……。何があってもずっとロランの隣にいてやって欲しい。これはマドカちゃんだから言ってることだよ。ロランが一番大切にしているマドカちゃんだから」

「私：同じこと…アサミさんにも言われました。私はずっとロランの傍にいたらそれだけでいいな、っていつも思っています。ロランが私のことを必要としてくれる限り、ずっと傍にすることができればいいなって。私にとってロランは儚い夢の欠片みたいなものなんです。私、ロランの恋人でいる資格なんてないって悲観的になったり、些細なことでもめそめそして彼のことをうまく支えてあげられる自信なんてないけど…それでもロランと一緒にいるとほんの少しだけ強くなれる自分がいて…」

マドカは俯いた。

「マドカちゃんなら大丈夫だよ。マドカちゃんはロランの瞳に映るものをあいつの隣でそっと眺めてあげるだけでいいんだ。マドカちゃんになら、ロランを救える」

第九章／太陽の絆（４）

オフィスで古い写真の整理をしていると電話のベルが鳴った。あいにく他の社員は取材出向していたり、それぞれの仕事を抱えていて、オフィスにはマドカ以外には誰もいなかった。

電話は執拗に鳴り響き、マドカはフィルムから顔を上げると手を伸ばして受話器を取った。

「はい、こちらKK出版編集部です」

マドカは受話器を耳と肩の間に挟むと、再びフィルムをチェックする手を動かし始めた。

「もしもし？」

押し黙ったままの相手にマドカは少し苛立った。オフィスに掛かってくる無言電話の大半は、ただのいたずら電話か読者のクレームを装った嫌がらせだった。

マドカは耳をそばだてて相手の様子を伺うと、再び受話器に向かって問い掛けた。

「もしもし？どちらさまでしょうか？」

「俺」

低くてはりのある若い男の声。聞き覚えのあるその声色に、マドカの思考が一瞬止まる。

「智樹……」

「お前、いつまで俺のこと無視するつもり？」

受話器の向こうにいる智樹の声は必要以上に大きく感じられた。マドカはぎゅっと瞳を閉じた。このまま電話を切ることもできたかもしれない。けれど、今更逃げるわかにもいかなかった。ただ受話器を置いてしまえばいいだけなのに、マドカにはそれができなかったのだ。

「仕事中で忙しいだろうから、用件だけ言うよ」

耳を澄まして聞いているわけでもないのに、智樹の声はマドカの体内を駆け巡るようにして響いてくる。

「今日の午後七時、お前の会社の近くまで行く。確か近くに公園あったよな、そこで待ってる。話があるんだ。大事な話だから」

七時…、今夜はラクテのバレンタインライブが

「智樹、私行けない。用事があるの。大切な用事…だから、智樹には会えない」

「来れないならそれでもいい。でも、俺は七時に公園にいる。もしかしたらってこともあるかもしれないから。お前の意思で会いに来て欲しい。会社に電話なんかして悪かった。それじゃ、これで」

開場前の外を見渡すと溢れんばかりの人だった。

デビューライブのことを思い出すと、スタッフの数も警備も大幅に拡張され、若い女の子の群れにも負けず、男性ファンの姿も多かった。集まったファンの表情やテンションの高さはラクテの人気を物語っていた。

関係者専用の通路をするりと抜けてロランの元に向かう。長い通路を抜け、マドカはやっとの思いで楽屋口にたどりつく。マドカは辺りを注意深く見渡してロランの姿を探した。

あの電話を切った後、マドカはずっと考えていた。今の自分にとって本当に大切なもの。一番守らなきゃならないもの。誰よりも必

要としている一人の相手。

たった一度も智樹のことを忘れたことはない。だけど、

「マドカ」

右手にはミネラルウォーターのペットボトル、左手にはギターのコードが殴り書きされた六線譜。かつちりとした衣装に身を包んだロランが、マドカの瞳を覗いてにつこりと微笑む。

二人は裏口の螺旋階段に腰掛けた。

ロランはジャケットのポケットから煙草を出して唇に挟むと、ジッポで火を点けた。

「マドカ、今日は来てくれないかと思った」

「ど、どうして…？」

マドカは思わずロランの横顔を見つめた。白い煙が宙に舞っている。

「ここ最近元気なかったし、色々悩んでるみたいやったから」

ロランが溜息混じりの苦い煙を吐いた。

マドカの心臓が高い音を立てて鼓動を速める。

「そんなこと…」

「でも、こうしてマドカが来てくれてよかった」

ロランは立ち上がってマドカを見下ろすと、優しく微笑んだ。

「今日はマドカのために歌うよ。マドカの悲しみが、一瞬で吹き飛んでしまうように。俺には…それぐらいのことしかしてやれへんから」

私、今すごく嫌な女の子だ。智樹に甘えて、大好きなロランにまで甘えて…自分一人じゃ何も解決できなくて、知らない間に二人を傷つけてる。

それだけじゃない。きっと私…、ロランのこと不安にさせてる。

ロランは何も悪くない。悪いのは全部、私のほうなのに。

なのに、私のために歌うなんて言わないで…、そんなこと言わな

いでよ、ロラン…

私はお姫様でも何でもなし、普通の女の子だよ。
お願いだから、私のために歌うなんて言わないで。

ロランが白い羽を背中につけてステージに立つと、会場にいるファン
のテンションは最高潮に達した。今日最後の曲 S t a r s。
マドカの思い出の曲だった。

募る想いを抱き締めて眺めた夜空。

あの頃、ロランはまだずっとずっと遠い存在だったけれど、日に
日に近づいていく距離が嬉しくて、伝えられない気持ちがあつた。
切なくて……それでもあの頃の私は、今よりずっと素直で真
っ直ぐだった。

ロランの隣にいられるだけで、幸せだったのに……

「すつげえチョコの数！」

楽屋に積み上げられたダンボールの中に、ファンの子が持参した
バレンタインのチョコレートがぎっしりと詰め込まれていた。

ステージを終えて楽屋に戻ったシンはロラン宛のダンボールを見
るなり、面白そうにはしゃぎ始めた。ロランは自分の背丈よりも高
く積み上げられたダンボールを見上げ、首を傾げて煙草をふかす。

「来年はバレンタインにライブなんて止めようや。俺、甘い物苦
手やねんから、なあタツちゃん」

腑に落ちない表情を浮かべてロランが言うと、タツは大きく肩を
すくめた。

「そういや、今日はマド力ちゃんも来てるん？」

「ああ、外で待ってる。俺、そろそろ出るわ」

灰皿でセブンスターの火を揉み消し、サングラスをかけるとロランは荷物をまとめて扉に向かった。

「ロラン」

「ん？」

「マド力ちゃんによろしく」

「ああ、おつかれさま」

ロランの手は大きくて温かい。体は小さいけれど、この大きな手でロランは何でも掴めるんじゃないかなっていつも思う。

だけど、ロランは欲しいものなんて何も無いと言う。既に与えられているものがあまりに大きすぎて、ロランは自分で何かを選んだり、捨てたり、そういう当たり前のことが普通にできないのかもしれない。ただ、自分に与えられたひとつひとつの事柄を、自らの意思に関係なくこなしているだけなのかもしれない。

ポケットの中で触れた手をぎゅっと握り返すと、少し前を歩くロランが後ろを向いて微笑む。

どこか寂しそうな笑顔は、きっと私のせいだった。

ロランは何も言わないけれど、私はロランを不安にさせてる。
マド力は再びロランの手を強く握った。

「やっぱ車、買わなあかなあ」

「ロラン、もう電車に乗る必要ないでしょう？いくらなんでもあれだけのファンの前に立った後に電車で帰るなんて、冗談でも笑えないよ」

「俺は今の生活のままで十分幸せやで。ただ、そろそろ電車はキツイな。本当はマドカと一緒に電車に乗ったり、手を繋いで街を歩いたり、普通にそういうことができたらええなって思ってたんやけど。俺がいると公共の場に迷惑がかかるというか、マドカにも嫌な思いさせかねないな」

二人の間を強い北風が通り抜けた。

「俺は有名になって高級車に乗りたいたとか、広い部屋に住みたいとか…そういうふう考えたことなんて一度もなかった。けど、最近ばかりがどんどん変化していつて…それに対応せざるをえない状況に追い込まれてるような気がして。こんなこと思うなんて、俺っておかしいんかな？」

マドカは笑って首を振った。

「でもね、ロラン。ロランにはずっと今のままでいて欲しいけど…私、寒いのは嫌だな。ロランの部屋、暖房ないんだもん。いくらロランでもそれだけは嫌だな」

温かな笑いがこぼれると、緊張したマドカの心はだいぶ解れていった。

「久しぶりに、公園の中でも通ってく？」

ロランに手を引かれ、マドカは木々の揺れるあの公園を通り抜けた。外灯のオレンジが浮かび上がるたび、マドカの瞳に映るロランの背中が大きく見えた。

智樹、どれくらいここで待ってたんだろう…

マドカは噴水を囲むようにして設置されたベンチを見渡していた。ロランに手を引かれ、繋いだ手から溢れる想いを胸の中で痛いほど感じながら。

智樹の顔を思い出し、マドカは睫毛を伏せた。

二人は噴水を回るようにして歩いた。水の音に耳を澄ませると、あの夏の鼓動まで聞こえてきそうで懐かしくなる。

空に広がる黒と灰色の雲が重なり合って、行く手を暗い闇で包んでいる。

外灯の光をたどると、木々の陰に隠れた薄い人影がぼんやりと浮かび上がった。

「智樹……」

長い足を投げ出して、コートのポケットに両手を突っ込んで、智樹は噴水の前に腰掛けていた。

ロランはマド力の視線の先にいる智樹の姿に気がつく、繋いだ手を引きながら智樹の傍まで歩み寄った。

智樹が顔を上げる。

「マド力、俺は部屋で待つとるから」

ロランはいつもの笑顔でそう言い残すと、二人に背を向けてアパートのほうへ歩き出した。

辺りは必要以上にしんとしていた。冬の風がマド力と智樹のあいだにできた溝を広げるみたいに容赦なく吹き付けている。

去り行くロランの背中をじっと見つめ、その姿が闇に溶けるまでマド力はずっとずっとロランのことを想っていた。

智樹の顔は見れない。

マド力はそっぽを向いて、水の音だけを聞いていた。

「寒いだろ、ちょっと待ってるよ。何かあったかい飲み物買ってくるから」

智樹はそう言ってマド力の傍を離れると、しばらくしてコーヒーと紅茶の缶を手にとって戻ってきた。

何も言わず、智樹は紅茶の缶を差し出した。

「とりあえず座ったら？あ、噴水の前だと寒いな。あそこのベンチにすっかな」

「今まで、ずっと待ってたの…?」

やっとの思いで口を開く。極度の不安と緊張に、マドカの声はかすれた。

「まあね、でもマドカが来てくれてよかったな。なんつーか、ただ通り過ぎただけかもしれないけど」

「なんで…なんで11時まで待つよ。このまま私が来なかったら終電なくなつて帰れなくなるじゃない。ばっかじゃないの…」

マドカは手の中の缶を力をこめて握った。外気にさらされた缶の表面はだいぶ温くなっている。

「さあな、別に終電がなくなつてもいるつもりだった。どっちにしろ、お前のことだから明日の昼休みにでも見に来てくれるんじゃないーかつて思ってたし。お前の行動はだいたい予想がつくから」

「かつ…風邪引いても知らないからね」

マドカはタブを開けて紅茶を飲んだ。甘味と香料の匂いが口の中に広がっていく。

智樹は長い足を組み替えると、大きな咳払いをして話し始めた。

「なんか…バレちゃったな。マリ子さんから聞いたよ。話したんだって?俺のこと、全部。参っちゃうよなー、人の知らないところでえらいことになってたなんてさ」

智樹はそう言つて鼻で笑った。照れ笑いでも苦笑いでもない、どちらとも取れる表情を漂わせる笑いだつた。

どんな言葉を搜しても、適切な表現が浮かばない。手の中にある缶を見つめ、マドカは智樹が語る次の言葉を待っていた。

「ごめんな、マドカ」

俯いたマドカの顔は暗くなる。

「そんな顔するなよ、なんだか虚しくなるじゃん」

「だって…、だって智樹は何も悪くない。悪いのは私のほうだもん。私、智樹のこといっぱい傷つけた。私…、智樹の気持ちなんてお構いなしで…ずっと嫌な想いばかりさせてたんだよね。ごめんね、智樹…」

今にも泣き出しそうなマドカの横顔を見るなり、智樹は目蓋を伏せて左右に首を振った。

「そんなに謝るな。もとはと言えば、お前が俺の気持ちに全く気づかないのがいけないんだぜ？」

「だっ…だって智樹、何も言わなかったじゃない。何も言わなかったし、そういう態度だって見せなかったでしょ？だから私…」

「言いました。お前が気づかなかったただけじゃん？俺は言ったよ、一度だけちゃんとお前に言いました」

マドカは顔を上げて智樹の横顔を見つめた。見に覚えなどなかった。

「…いつ？」

「高二の夏。お前が先輩と付き合いおうかどうしようかって悩んだ時。そんなに迷ってるんだったら、俺と付き合いがいいじゃんって言っただろ。覚えてないのかよ」

マドカは首を振った。

「あれは私、冗談だと思って…、だって智樹は私のことを恋愛の対象として見るわけないって思ってたもん。私だって智樹のこと…そんなふうに思ったことなかったもん……」

「お前、鈍感すぎるんだよ。鈍感すぎて話にならねーよ。俺、あのとき結構傷ついてたんだぜ、お前は結局、あの後先輩と付き合い合ってたさ」

智樹は空になった缶をベンチの脇に置き、胸の辺りで腕を組んだ。「でも、智樹はいつも色んな女の子と遊んでたでしょ？付き合い合ったと思えばすぐに別れて、また違う子とくっついて…そんな感じだったじゃない。今だってそうじゃん、女には体しか求めないって…」

「そうだな。俺って最低だよな。お前みたいに誰かに一途になれ

ねーし、好きでもない女と寝るだけの男だもんな」

聞き慣れた智樹の声に耳を傾けると、失われていた二人の距離が近づいていくような感じがした。

それでも、マドカの心は痛いほどに締め付けられた。智樹の吐き出す一つ一つの言葉に、マドカの胸の奥は縮んだり膨らんだりしていた。

「だけど俺、マドカに対する気持ちはどんな女としても消えることなんてなかった。俺はいつもそうやって自分の気持ちを誤魔化してきたし、忘れられるもんなら忘れてやろうって思ってたよ。なんつーか、お前は絶対、俺のことなんて男として見てくれてないって分かったから」

闇が二人に近づいては消え、月の光は細い線を描きながら雲間に隠れては現れる。

智樹は呼吸を整え、話し続けた。

「まあ、しょうがないじゃん。俺、マドカには自分の気持ちをぶつける気なんてなかったけど、いつそのことバレてしまえばいいって思ったことも正直何度かあったし。でも、もうお前の前で嘘つかなくて済むんだなって考えたら、だいぶ楽になったな。この際だから全部言ってしまうけど」

沈黙が二人を包む。どこからともなく差し込む光が噴水を照らし、水辺が僅かに輝いていた。遠くのほうでクラクションの音が鳴り、智樹は長い沈黙を破った。

「俺はずっとマドカが好きだった。一人の友達としてお前の傍にいたけど、友情とか特別な存在だとか、そんなの関係なく俺はお前が好きだよ。できることならこの手でお前のことをずっと守ってやりたいと思う。あ、別にやらしい意味じゃなくて……いや、少しはそういうのもあるかしんねーけど。なんつーかお前は特別っていうか、そういう関係を望んでるわけじゃなくて……って何言ってるんだよ、俺……」

「智樹、私…」

「分かってる。お前の言いたいことは分かってるよ。ただ、俺はもうお前の前で嘘はつきたくない。変に隠し事もしたくなかったから。もしかしたら、今回のことでお前のこと…少しは傷つけたかもしれないけど。そのことは謝るよ。変な気使わせて悪かったな」

マド力は俯いて首を振った。

「傷つけたのは私のほうだよ。私…智樹に甘えてた。智樹にとって恋とかそういうんじゃない、私はいつも特別扱いされて当然の女の子だと思ってた。だから智樹に頼りすぎて…智樹が傍にいるのが当たり前だと思ってた。でもそれは、自分の都合のいいように智樹を利用してたのかもしれない…」

「は？俺はお前に利用されてるなんて一度も思ったことないけど？別に、甘えたっていいんじゃない？頼りすぎたっていいと思うぜ？そういう相手がいるって幸せなことだろ、きつと。だって俺、お前といて楽しいもん。俺だってお前から色んなもの貰って、吸収して、お前といるのが当たり前だと思ってる。こういうのって、単純に好きとかっていう枠に収まるもんじゃねーし。お前だって、そう思うだろ？」

マド力はこくりと頷いた。

「努力するから。お前以上に好きになれる女、見つけられるように俺も努力するよ。俺に可愛い彼女ができて、お前と俺はずっと友達なんだろう？どんなことがあっても、ずっと友達でいようってお前こないだ言ってたじゃん。あれって、今更取り消しとか言わないよな？」

「智樹…」

「俺、前にも言ったかもしれないけど、お前には笑っていて欲しいからさ。お前は好きな奴と幸せになって、自分の手で幸せを探して欲しい。俺はいつだってお前の味方だし、これからもお前の一歩の友達でいたいと思ってる。こういうのって俺の我儘でしかないけど…今まで通りマド力の親友でいたい。俺にとっても、マド力は一

番の友達だから。けどもし、こんな俺の一方的な感情のせいでお前を苦しめてしまっただったら、俺たちはもう会わないほうがいいかもしれないな。

でも…、俺は信じるよ。どんなことがあっても俺たちはずっと友達なんだって」

智樹と別れてロランのアパートを訪れると、ロランが部屋の前でしゃがみ込んでるのが見えた。

「ロラン！どうして？何で外で待ってるの！？風邪引いちゃうよ！」

マド力は急いで階段を上り、ロランの傍に駆け寄った。冷え切った肩を抱き締めると、ロランの体に流れる鼓動の音がコートの上からマド力の腕に伝わってきた。

「智樹くんと、ちゃんと仲直りしたん？」

寒さのせいかもしれない。ロランの大きな瞳は静かに揺らいでいて、不安げな表情でマド力を見つめている。

「うん…」

マド力は一言だけそう言うと、小さな手でロランの肩をぎゅっと抱き寄せた。

「部屋の中になると、もうマド力がここに来てくれないんじゃないかって…そんなことばかり考えて…、俺、どうにかしとるな。ごめん、マド力…」

足元には煙草の吸殻が何本も落ちていた。ロランはずっと、ここマド力の帰りを待っていたのだ。

マドカはロランの頬に顔を寄せ、そつと髪を撫でると瞳を閉じた。風が吹くたび、セブンスターの香りが辺りに漂った。

「ロランのバカ…私はどこにも行かない。ずっとロランの傍にいるから…だから、もうそんなに悲しい顔しないで。私にはロランしかいないんだよ。ロラン以外に行くところなんて…、ないんだよ…」

ロランの腕の中で丸くなり、小さなベッドで体を寄せ合う。

そつと肩を抱かれ、マドカは顔を上げた。

「ねえロラン、何か子守唄歌って…」

ロランはゆっくりと瞳を開け、マドカの顔を見下ろして微笑んだ。

「リクエストは？」

マドカはロランの胸に手をあてて、しばらく考える。

「なあ、与作なんてどう？嫌か？」

「やだあ、ロランが与作だなんて」

マドカはくすくすと笑った。

「じゃあ…何がええかなあ」

「あ、私…Starsがいいな。ロラン、歌って」

頬に掛かるマドカの髪に、ロランが指先で優しく触れる。

「だーめ、それじゃ俺が恥ずかしい。それに、さっき歌ったやろ？」

「あ、もしかして…ライブ、ちゃんと聴いてなかったんやろ？」

「そんなことないもん。私、この歌が一番好きなんだもん。お願い、もう一度歌ってロラン。そしたらちゃんと眠るから」

その夜、気持ちが高ぶってなかなか寝付けない私の隣で、ロランはずつと子守唄を歌ってくれた。

今にも消えそうな透き通るロランの声は、私を優しく包んでくれた。

不安定な私の気持ちを察してくれたのか、その日はただ、何も言わずに私の体をぎゅっと抱き締めてくれていた。

ロラン…、私はいつまでもあなたの腕の中にいたかった。ロランの歌声を、一番近くでずっと聴いていたかった。耳元に残るあなたの声は、今でも私のすべてをどこかへ運んでしまいそうになる。

ロランが私にくれたもの

それは切ない思い出の欠片じゃなくて、

大好きな、その歌声だったのかもしれないね。

第十章／さよならの予感（１）

「まったく、お前が観たいっていう映画はどうしてこうつまんねーんだよ」

「すっごい泣ける映画だったじゃん！再会した二人が抱き合ってキスする最後のシーンなんて、ボロボロ泣いちゃったもん！やっぱ、智樹に純愛は無理なのかもね。智樹って女の子の気持ち、全然分かってないんだから」

三月初めの日曜日、マド力は二十二回目の誕生日を迎えた。

映画館を出た二人は坂道を下り、行き交う人の波に沿って繁華街を歩いた。空はこれ以上にないくらいに澄み切っていて、春の訪れを予感させていた。

マド力の歩幅に合わせて、智樹はゆったりと坂を下っていく。

あんなことが起きた後でも、マド力と智樹の関係は以前と何一つ変わらなかった。時間があれば二人で食事をしたし、いつものように他愛の無い話を繰り返して冗談を言い合った。

マド力は智樹の本心が気にならないわけではなかった。けれど、相変わらず智樹は大勢の女の子をデートや食事に誘っていて、「ずっと好きだった」なんて言葉は本当は嘘だったんじゃないかな、と思うほうのことが多いくらいだった。

「お前、何か欲しい物ないの？」

「えっ？」

「誕生日だろ。プレゼント、何がいい？」

人ごみに流されるように歩きながら、智樹は頭一つ分違う隣のマド力を見下ろした。

「うーん、何か形に残るものがないかな。智樹に任せるよ」

レコードショップに立ち寄り、二人は各フロアを一通り回った。フルボリウムで流れるポップスは、気持ち良さそうにスピーカーを響かせている。

智樹はジャズのレコードを手に取り、マドカに差し出した。

「レコードは？ いらない？」

「なんでCDじゃなくてレコードなの？ 私、レコードプレイヤーなんて持ってないよ。聴けないじゃん」

マドカが口を尖らせた。

「別に今聴かなくていいじゃん。いつか聴ける時が来たら聴けばいいんだし。そういうのってワクワクしない？ 封を開けないままのレコードってのも、趣があつていいじゃん」

智樹は棚に並んだジャズの楽曲を物色すると、二枚のレコードを選んでカウンターに持って行った。

数分後、二枚のレコードは赤いリボンをかけられてマドカのところへやってきた。

「はい、これ」

「なんか変なの。貰うのは嬉しいけど… 実用性なんてどこにもないじゃん。まあ、智樹らしくていいんだけど」

「つべこべ言わずに受け取れて。ハッピーバースデー、マドカ」差し出されたレコードの包みは何も言わずにマドカの顔を見上げている。

マドカは贈られた二枚のレコードを丁寧に両手で受け取った。

「ありがと。だけどいつ聴けるか分かんないよ？ 一生聴かずに終わるかもしれないし。おばあちゃんになってから感想とか求められなくても困るからね」

そう言つてマドカが呆れたように笑うと、智樹は悪戯に肩をすくめた。

「あ、ちょっと見たいもんがあるんだけど、いい？」

マド力は言われるまま智樹の後ろをついて行くとJ・popのフロアにたどり着いた。辺りをきよろきよと見渡して新譜のCDを見つけると、智樹は急ぎ足で駆け寄った。

平積みになった大量のディスクがマド力の視界に入ってくる。

「ラクテの新曲じゃん…」

「これ、聴きたかったんだよな」

智樹はヘッドホンを耳に当て、プレイボタンを押して視聴を始めた。

「ちょっと、智樹」

「なんだよ、視聴するくらいいいーだろ。俺、打倒ロランなんだから…って嘘だつて！バカ、そんな顔するな！」

「智樹、それ冗談になつてないでしょ！バカはどつちよ？」

マド力は智樹の手からヘッドホンを奪い取って元の場所に戻すと、乱暴に停止ボタンを押した。

目の前にはラクテのポスターが堂々と貼られている。

澄ました顔のロランが黙ってこちらを見ていた。

「なんか…見られてるよな、俺たち。これじゃあ、マド力の唇も奪えねーな」

「バカ…」

ポスターの中にいるロランを見上げて、マド力は智樹と目を合わせて笑う。

「マド力、俺腹減った。メシ食いに行こうぜ」

「ねえ、デザートも食べていい？ やっぱケーキがいいかなあ？ でも、パフェも食べたいんだよねー」

「お前：まだ食うのかよ。夜は彼とデートなんだろう？ こんなぱつとしないファミレスなんかじゃなくて、高い店予約してくれてるんだろ？ もう食わないほうがいいんじゃない？ てゆーか、俺が食わせねーよ。ロランが可哀想だ」

智樹の言葉にマド力はぷつと頬を膨らませた。

「ふーん、なによ智樹：いつからロランの味方になったわけ？」

「ばーか、普通に考えてみるよ。可愛い可愛い恋人の誕生日、その可愛い恋人が昼間に他の男と会って食事してたら、誰だっていい気はしないだろうが」

マド力はしばらく考え込むようにしてロランの顔を思い浮かべた。

「だけど、お前の彼って本当に寛大な人だよな。器がでかいっすーか、肝が座ってるってゆーか、いつもどこか余裕な感じじゃん。俺にはとうてい真似できねーけど」

「相手が智樹だからじゃないの？ 今日だって智樹と会って言うたら、楽しんできてねって言われたよ？」

マド力は首を傾けてアイスティーのストローをくるくると回した。グラスの中で溶け始めた氷が触れ合って、涼しげな音を立てた。

「俺って…相当信用されてんだな」

「ん？」

「別に…何でもない」

智樹は小さな溜息を浮かべ、頬杖をついて窓の外を眺めた。

休日のファミレスはこれ以上にないくらいに騒がしかった。天井に取り付けられたスピーカーを流れるBGMは、客の話し声で掻き消されてしまう。

すっかり口数の少なくなってしまった二人のテーブルは、周囲の

音を吸収していく。不意に、後ろの席についた女子高生の会話が聞こえてきた。

「ねえ、これラクテの新曲じゃない？」

途切れ途切れに聞こえる音源に耳を澄ませると、確かにそれはラクテの新曲だった。ロランの歌声と独特の息継ぎでマドカにはそれが分かった。

「やっぱ、ロラン超かつこいい！ヤバイよね、あれは。マジであたしラクテのファンクラブ入るっかなあ…悩み中なんだよね」

こんな時はいつも聞き耳を立ててしまうけれど、聞かなきゃよかったと思うことも沢山ある。だって、良いことも嫌なことも、全部聞こえてくるから…

「ロランってどんな人と付き合ってたんだろ？超綺麗な人だよ、絶対。モデルとかじゃない？あーでも、一般人と付き合ってた欲しいなあ。有名人はなんかヤだもん」

「…マドカ？」

智樹に名前を呼ばれ、マドカは現実に戻される。

「お前、大丈夫なの？気にしない？」

「え…、何が？」

「あーゆうのだよ」

智樹は後ろの女子高生に目配せをすると、マドカの顔を覗き込んだ。

「初詣に行った時、俺の前で泣いただろ。本当に彼の恋人なのか自問自答したくなるって。今でもまだ、あんなバカなこと考えてんの？自分は彼に相応しくないとか、思ってる？」

マドカは睫毛を伏せ、左右に首を振った。

「ううん、もうそうやって悲観的になるのは止めたんだ。私が元気でいないと、彼まで落ち込んでしまうから。私が少しでも不安な顔

をすると、そういうのを敏感に感じ取る人だから……。だから、もうめそめそしたりしないもん」

「そっか、ならよかった」

智樹は砂糖の入らないコーヒを一口飲んだ。そして、マドカの顔を見るなりにつこりと微笑んだ。

「マドカは、とっても可愛いよ」

「なっ……何？いきなり……」

突然の言葉に顔を赤らめたマドカは、智樹の顔を不思議そうに見つめた。

「マドカは、自分が思ってるよりずっとずっと可愛いし、誰にも負けないくらい美人じゃん。まあ、たまーに可愛くないこと言ったりするけどさ。なんつーの？目の中に入れても痛くないって言葉あるじゃん、俺にとつてはあんな感じ。たぶん、あの人にとつてもマドカって、目の中に入れて……鼻に入れても痛くないんじゃないか？そんな感じるけどね」

そう言っただけで智樹は大きな口を開けて笑った。

夕日が二人の背を照らし、街をオレンジ色に染めていく。右手に抱えたプレゼントのレコードは、何だか一生分の勇気が詰め込まれたみたいで、智樹と過ごした歳月と深い絆の重さが掌にずっしりと伝わってくる。

バイトがあると言い残して智樹は手を振った。

マドカは智樹と別れると、地下鉄に乗って六本木に向かった。

ロランが予約してくれたレストランは、都内でも有名な高級レストランだった。

都会の真ん中に聳え立つ高層ビルの42階にある洗練された上品なレストランには、一流のシェフがいて、とてもよく調教された一流のウェ이터がいる。

感じのよいウェ이터は爽やかな微笑をマドカに向けると、フロアの一番奥の席にマドカを案内した。

窓ガラスに映る自分の姿に、マドカは少し肩をすくめる。
もうちょっとお洒落して来ればよかったかな……

シンプルな黒のフレンチスリーブのワンピースに黒のパンプスを合わせたその姿は、幼い子供のピアノの発表会みたいだった。

約束の時間より早めに着いたマドカは、ウェ이터にワインや料理の説明を聞いて軽い世間話をした。

広々としたフロアに集まった洗練された人間が、それぞれのテーブルで親密な時間を過ごしている。

無数の都市の明かりが小さな瞬きとなって彼らを包んでいた。

ウェ이터が笑顔を残してテーブルを離れると、マドカは窓の下に広がる大都会の輝きをぼんやりと眺めた。右手に東京タワーが見え、遠くのほうにレインボーブリッジが見渡せる。オフィスの青白い光、歓楽街のネオン、都心を横切る電車の窓から洩れる影、人々の温かな部屋の明かり、孤独と虚心、そして宛てのない夢がひしめき合うように瞬く路地の外灯。あらゆるものが解き放つ光の渦が小宇宙のように漂い、互いに引き合う都会の夜。

なんだか宙に浮いているみたいな気がする……

ガラス玉が弾かれたような輝きが眩しくて、マド力はそっと瞳を閉じた。

約束の時間になってもロランは現れなかった。無情に過ぎる時間に、マド力はやるせない気持ちでいっぱいになっていく。

いつものように仕事が長引いているのかもしれない。

ロランを待つことはマド力にとって苦痛でも何でもなかった。けれど、星屑を散りばめたような夜景を目の前にして独りぼっちで恋人を待つというのは惨めなものだった。

ウェイターが心配してテーブルを訪れる度にマド力は精一杯の笑顔を浮かべ、今にも込み上げてしまいそうな涙を吹き消そうとしていた。

約束の時間から一時間半が過ぎ、マド力の虚しさは次第に不安へと変わった。

ロランが大切な約束を忘れるはずかない。

こんな日にひとつも連絡がないなんて。

その時、マド力の心を見透かしたように携帯のベルが鳴った。

画面に現れた名前をマド力は覗き込む。

タツさん…？

マド力は首を傾げて通話ボタンを押した。

「…もしもし？」

「マド力ちゃん！？ロランが……！！」

リノリウムの廊下を無我夢中で走って行くと、病室の前のソファにタツの姿を見つけた。

「タツさん！！！」

大きな声で名前を呼び、マドカは急いでタツの元へ駆け寄る。

「ロランは！？タツさん！ロランは…！？」

タツは息を弾ませたマドカの姿を見ると、ソファから立ち上がってその腕を支えた。

「ねえ！ロランは！？」

「マドカちゃん、落ち着いて！」

弾む息を整えている場合じゃない。取り囲む全てのものが歪んで見える。

タツの声もぼんやりとしか耳に入らない。

ロランに会いたい…

今すぐロランに会いたいのに…

「マドカちゃん落ち着いて！」

マドカははっと我に返った。今にも泣き出してしまいそうなマドカは、震える指先に力を込め、タツの腕にしがみついて大きな深呼吸を繰り返した。

「マドカちゃん、ロランなら大丈夫だよ…」

タツはそう言っていていつもの優しい微笑を見せた。

「今、病室のベッドで眠ってる。ここ最近忙しかったから…ロラン、だいぶ疲れていたみたいやな」

「タツさん…」

「点滴が終わったら、一度先生に知らせてって。そんなに心配しなくても、大丈夫だから…ねっ？」

タツの瞳が不安げな表情のマド力をそっと抱き締めるように宥める。

穏和な彼の微笑みに、マド力は次第に落ち着きを取り戻した。

「タツさん、ロランは…」

「一晩眠れば元気になるよ。明日の朝には退院できるみたいだから。過労だって…俺たち、少し無理し過ぎてるんだな。マド力ちゃんにも…心配させちゃったしね」

ねえロラン…この時、私がタツさんの嘘に気づいていたら私はロランを救うことができたのかな…

いくつもの闇が波のように押し寄せる前に、鮮やかな光をまとった透明な息遣いが途切れてしまわないように…例えあなたをその苦しみから救うことができなくても、ずっとあなたの傍にいて、その哀しみを拭ってあげることだってできたのに…

この小さな手で、抱き締めてあげることだってできたかもしれなの…

ロラン、どうしてそんなに寂しそうな瞳をするの？

私はずっと祈ってたよ、ロランの瞳がずっとずっと傍にありますように…って。

コンコン…

病室のドアをノックする音が青白い光の広がるしんとした廊下に響き渡る。

音を立てないようそつとドアを開けて病室の中を覗き込むと、真っ白な壁に囲まれたベッドの上でロランが瞳を閉じていた。規則正しい速度で落ちる点滴が、細い管から左手の甲を通ってロランの体に抜けていく。

レモン色のカーテンの隙間から晩冬の淡い月の光が洩れ、病室の床を芸術的に照らしていた。

ロランはいつもの子供みたいな顔をして寝息を立てている。特に衰弱しているわけでもないし、顔色だって良い。相変わらずその白い肌に整った個々のパーツのバランスは美しく、幻想的だった。

「ロラン…」

彼の傍に歩み寄り、そつと手を握る。大きく温かなその手は、マドカの心をいつも潤してくれる。ごつごつと骨張った指に、甲に浮き上がる血管の筋。

そつといえば…華奢な体に似合わず、ロランの手はとても男らしいと思っただけ。

枕の上に落ちたロランの黒い髪があまりにも綺麗で、マドカはその柔らかな髪を優しく撫でた。

こうしていると、ロランも本当は私たちと同じように見えない羽を震わせて生きているみたいで、なんだかほつとする。いつもロランはその美しさが先行して…非現実的な殻に閉じ込められているみたいだから。

「ん……」

目蓋が小さく震え、ロランの瞳がゆっくりと開く。

マド力は握り締めた手に力を込めた。

「ロラン！」

生まれたばかりの子供みたいに軟弱な瞳で、ロランはマド力の顔を見上げた。

ロランの目蓋は弱々しく何度か伏せられ、再びマド力に視線を送る。大きな二重のその目蓋は腫れぼったく、随分重そうだった。

「ロラン…、大丈夫？」

マド力は月の光に照らされたロランの顔を心配そうに覗き込んだ。

「マド力、俺…」

「タツさんから電話があって……ロランが収録中に倒れたって…無理すぎてたんだね、ロラン…」

何もできない自分が情けなくて、マド力はただぎゅっとロランの手を握り締めた。

「なあ…マド力、誕生日…」

「そんなのどうだっていいよ。ロランの体のほうが大事でしょ？誕生日なんて…来年も再来年も、いつでもやってくるんだから…」

マド力は首を振ってロランの手を温かな頬に寄せた。

ロランはぼんやりと青白い天井を見つめている。

脈が一定のリズムを打ち、心臓の音と一緒に安らかな呼吸を放っている。

「マド力…」

「なあに…？」

「マド力…、顔…もっと近くに来て…」

いつもより細々としたその声に、マド力は言われたとおりロランの頬に顔を近づけた。

「マド力…マド力の顔…ずっとこうして見ていたい」

「どうしたの…ロラン」

ロランは繋いだ手を解き、マドカ類にあてた。ロランの口元が緩んで、いつもの笑顔がこぼれる。

「…なんでもない。ただ、近くでマドカの顔が見たかっただけ」
「なあに…それ」

マドカが呆れたように微笑むと、ロランは眩しそうに目を細めた。
「お誕生日おめでとう。マドカ、二十二歳になったんだね」

どうして私はこの時気づいてあげられなかったんだろう。ロランはずっと誰の目にも見えない大きな不安を背負っていて…寂しくて、苦しくて…、それでもじっと一人で前を向いて歩いてたのに。

その瞳に映るものはどんな色をしていたんだろうって…
今ならそう思えるのに。

第十章／さよならの予感（２）

「ねえロラン！ロランもこっちに来て！もっと近くで海見ようよ」
湘南の朝は早い。沖に出たサーファーたちが波を待つ姿が散らばっている。

三月半ばの海はまだ氷のように冷たいけれど、太陽の光は柔らかく、春の日差しを感じさせていた。

波は真つ白なレースのようにそつとマドカの足元に近づき、次の瞬間には沖へと去っていく。水面に手を触れると、体温が奪われてしまつくらい冷たい空気が重なる。

朝の光が砂浜に差し込むと、マドカは大きく息を吸い、潮の香りを嗅いだ。

ロランは砂浜から少し離れた人工芝の上で絵を描いていた。時折マドカが手を振ると、ロランはにっこりと微笑んで再びスケッチブックに視線を落とした。

ロランは病院に運ばれた次の日の朝、まるで何も無かつたようにけろつとした顔で退院した。

あれから一週間。ロランはまた一人のアーティストとして多忙な毎日へと戻っていった。

タツはただの過労だと言っていたのに、ロランのスケジュールは緩和されるどころかさらに過密になり、ラクテの音楽は多くの人間から支持されるようになっていた。

多くのものを犠牲にして手に入れたバンドの地位と勢いを保つためには仕方が無いことかもしれない。

当のロランだって、マドカの心配をよそに以前と変わらず元気そうだった。

「ロラン、何描いてるの？」

パンプスの砂を払って、マドカはロランの傍に駆け寄った。

「んー、内緒」

内緒というわりに、思い切りスケッチブックを広げて鉛筆を走らせている。

マドカは白い画面を覗き込んだ。

「マドカの顔」

ロランは手を休めてマドカの顔を見上げた。

「マドカの絵、今のうちに描いておきたかった。ほら、本物より美人やろ」

「えー、そうかなあ？」

マドカは笑いながら首を傾げた。

スケッチブックに様々な表情をした自分の顔が並んでいるのも不思議な感じがした。それはロランの父親、桜田直義が描いた母の姿を重ねて見えた。

柔らかな稜線で描かれた個々のパーツ。それがロランの瞳に映る自分の顔なのかと思うと、なんだか照れ臭かった。

「ロラン…、ロランのお父さんの描いた絵って、今はどこにあるの？」

「湖水のこと？」

「そう。有名な絵だからどこかに所蔵されてるのかなと思って」

ロランはスケッチブックを閉じると煙草を吸った。白い煙が沖から吹く潮風にたなびいていく。

「あの絵やったら、松山のどっかにあると思うんやけど」

「どっかって…美術館？」

「ああ、そうやな。郷土館とかそんな感じの場所とか？俺もよく分からん。小さい頃にどっかで見たような気もするんやけど、記憶にないな」

波の音に混じって、沖から吹き寄せる強い風が耳元で鳴る。目の

前の海に垂れ込めた浅い霧はすっかり姿を消し、鮮やかな光が波をさらって行った。

「私、いつかロランのお父さんの絵…見に行きたいな。松山は母さんの生まれた街でもあるし…ロランの育った街だから」

「なら、その時は一緒に行く？俺も向こうにはずっと戻ってないし…、まだまだ先の話になるかもしれへんけど」

長くなった煙草の灰がぱらぱらと芝生の上に落ちて、初めて気がついた。

その香りも、いつもとどこか違う。

「ロラン、煙草…変えた？」

ロランは輝く海を眺めると眩しさに目を細めて、高い空から落ちる光の筋をたどった。

「あれ以来、なんだか体…弱ってるかなあと思って。健康的なやつに変えた。煙草に健康も不健康もないんやけどな。これで少しはマシになるかもしれんなあ」

ロランの白い歯がこぼれて、マドカもそっと微笑んだ。

ロランは短くなった煙草の火を消して、マドカの顔を見つめるとにつこりと笑った。

「キスの味も違うんやで」

「えっ？」

「一応、確認してみる？」

ロランはそっと肩を抱き、マドカの顎に手を寄せた。

「ちょっと…ちょっと待って！ロラン、こんなところでキスしちゃっていいの！？」

肩に回されたロランの手を解き、マドカは思わず近づいた彼の顔を背けた。

ロランがいつものようにマドカの瞳をじっと覗きこむ。

今にも吸い込まれそうな、深い藍色の瞳。

「したくないん？」

「そつ、そんなことないけど……ここじゃ誰かに見られちゃうですよ？」

人気もまばらな浜辺でも、飼い犬を連れて散歩する人や、波乗りを終えたサーファーの姿がすぐそこにある。誰かに見られるかもしれないという照れや恥ずかしさもあるけれど、相手がロランだから余計に気にしてしまうこと、ロランはちゃんと気づいているんだろうか。

「誰も見てない。見てないから、キスさせて」

ロランの潤んだ瞳にマド力はまた何も言えなくなってしまう。

瞳を閉じてきゅつと唇を結ぶと、マド力はロランの体温が近づいてくるのをじつと待っていた。息を止めて、切なくなるこの瞬間が何よりも愛しい。

ロランはふわりと髪を撫でて、一呼吸置いてからその唇を重ねた。ほろ苦い煙草の香りに混じったキスの味は、前よりずっとずっと甘く感じられた。

名残惜しそうに二人の唇が離れると、ロランはそつとマド力の耳朶を噛んだ。

「キスの味、分かった？」

ロランは膝の上のマド力の手を取り、静かに指を絡めた。

沖からの風が浜辺を抜け、透き通る黒髪がロランの頬にはりついた。

マド力が指先を伸ばしてロランの白い肌に落ちた髪のを束を払うと、美しい瞳が覗いた。

「マド力、もう一度……キスしてもいい？」

何も言わずにマド力は瞳を閉じると、ロランは指先で唇の形を丁

寧になぞった。何度も優しく唇の上を這うロランの指がくすぐったくて、マドカはつんと顎を上げる。

「まだあ？ロラン」

「まだ。もう少し…こうしていたい」

「なにそれ、意地悪…」

マドカは頬を膨らませて悪戯に笑った。

「なあマドカ、俺は幸せやったな。マドカに出会えて…ホンマに幸せやった」

「…ロラン、どうしたの？」

マドカの言葉を遮るように、ロランは唇を塞いだ。

ロランの唇はいつだって私をとびきり可愛い幸せな女の子にしてくれる。

ロランの意地悪な言葉も、甘い言葉も、まるで唇から媚薬を放つみたいにして私の心を喜びで満たしてくれる。

波の音が漂う、二人だけの特別な場所。降り注ぐ淡い日差しの中で、私は永遠を傍に感じる。ロランと一緒になら延々と続く単調な景色でも、世界の端っこにある暗闇に放り込まれたっていい。

ロランのキスはそれからずっと、マドカの唇の上を陽炎のように虚ろに彷徨っていた。いつもより長くて甘いロランのキスを胸の奥に閉じ込めてしまえるのなら、いつそのことそうしてしまいたいとマドカは強く願った。

けれど、それが最後のキスだった。

三日後、私は失意のどん底にいた。

「別れよう」と言い出したのは他でもない、ロランだったのだ。

「俺がどうしてあなたに会いに来たのか、分かりますか？」

慣れないスーツを着込んだ智樹が、夕暮れの公園でロランと肩を並べていた。

オレンジ色の太陽がロランのサングラスに鮮明に映る。レンズ越しにある彼の瞳は、移ろう時の流れをゆっくりと追い駆けているようだった。

「俺：今、あなたのことを思いっきりぶん殴ってやりたい気分です。でも、そんなことをしたって何の解決にもならない。あなを殴ったところで、俺の気分が晴れるとも思えないですから」

智樹はそう言うのと襟元に手をやり、ストライプのネクタイを緩めた。糊の利いたワイシャツがやけに自分を幼く見せているようで、妙な顔つきになってしまう。

今日は入社式だった。明日から丸の内にある外資系の商社に勤務することになる。ロランの表情を横目で伺うと、智樹は大きな溜息をついた。

「あなたを責めるつもりはありません。あなたとマド力のことをどうしようとか、そういうことじゃないんです。ただ、これだけは言っておきたい。あなたが出した決断だから僕にはどうすることも出来ないけれど…何も言わずに別れるなんて、ちょっと酷いんじゃないですか？これはマド力とあなたの問題じゃありません。僕とあなたの問題です。俺はずっと…マド力のことが好きでした。あなたがマド力を愛していたように…俺もマド力のことが好きだった。多

少のズレはあるにせよ、マドカに対する気持ちはあなたと何ら変わりにはなかったと思います。俺は、あなただからマドカを諦める決心がついたんです。あなたにはどうでもいいことかもしれないけれど、俺にとっては物凄く重大な決意だったんです。俺の言いたいこと、分かってますよね？」

煙草の煙が夕暮れの空に昇っていく。ロランは立ち並ぶソメイヨシノの蕾を眺め、地面に灰を落とした。

表情一つ変えないロランに、智樹は苛立っていた。ロランの周りを取り囲む特別な空気や、その完璧な横顔はまるで細密に作られたマネキンのようなだった。

智樹は呆れて長い足を投げ出すと、藍色とオレンジが混ざる複雑な濃淡をつけた空を見上げた。瞳の奥にマドカの顔が浮かんだ。そのマドカを無心で傷つけたロランが隣にいると思うと、やるせない思いが込み上げてくる。

智樹はじつと沈黙を守り、ロランの言葉を待っていた。

沈黙と分厚い壁が二人の間に根を下ろしていた。

「智樹くん、人は生まれつき不公平に作られていると思う？」

「…どういう意味ですか？」

智樹は眉間に皺を寄せた。ロランの口から放たれる言葉は、いつも出鱈目で曖昧なものでしかないと智樹は思っていた。

個性的でおそろしいほど抽象的な詞を書くボーカリストだから。

それも才能の一つと思えばいい。

「自分の手で幸せを掴むなんて馬鹿げた話なんやってこと。まあ、何でも愛そうと思えばある程度は幸せな人生を送ることができるかもしれない。けれど、俺たちにできることは限られているから。どれだけ頑張ってもいつかは限界にぶつかる。自分の力ではどうにもならないことだってあるんやね。人生ってもんは生まれた時からあ

る程度決められていて、どうあがいても救いようのないものが存在するんや。実力も才能も、努力だって報われない。そんなふうに考えたことはある？」

智樹は首を捻って考えてみた。ロランが言っても、それはどこか現実味に欠けていた。

「あなたが言っても、何の説得力もないように聞こえますけどね」
「そうかもしれんな」

ロランは納得したように肩をすくめると、例によって美しく煙草を吹かした。

「あなたにとってマド力は、一体なんだってんですか？ただ漠然と、マド力を愛していたわけじゃないですよ？」

智樹の質問に首を傾げると、ロランはベンチに深く座り直した。
煙草の火をワークブーツの爪先で揉み消す。

再び長い沈黙が二人を包んだ。

「なあ智樹くん、俺は…マド力より幸せやったと思う。マド力が俺に注いでくれた光は、俺がマド力に与えた光よりもはるかに温かくて親密なものやった。目を凝らして見ればそこにはいつもマド力の想いが溢れていたし、どこまで行っても彼女の光は途切れることなんてなかった。少なくとも、俺は彼女より幸せやったと思う」

智樹は俯いて首を振った。

「あなたは、マド力のことを何も分かっていないんですね。なんだか…凄く裏切られた気分です」

空を見上げると、広がりだした藍色とオレンジは厚い雲と暗闇に覆われていた。

智樹は手持ち無沙汰に自分の頭をくしゃくしゃと撫でた。このサインが何かのきっかけになればいいと思ったけれど、ロランはずっと無言のままだった。

時間だけが過ぎて行き、辺りはすっかり闇に包まれた。
足を組み替えて膝の上に手を乗せると、ロランは目を細めて智樹の横顔を見つめた。

「智樹くん、マドカのこと…幸せにしてやってな」

その言葉は、智樹の想いを捻じ曲げた。

マドカが聞いたらどんなに悲しむだろう。

ロランの心はもう完全に途切れている。

この人の心が二度とマドカに結びつくことはないだろう…そう思
って口を開いた。

「あなたに言われなくても、そうするつもりですから」

あれからずっと、私はこの小さな体から何かが抜け落ちてしまっ
たような感覚の中を彷徨っていた。

最後に交わした言葉は何だっただろう……

混沌とした記憶を掘り起こしても、彼の影は曖昧でぼんやりと霞
んでいる。

ただ茫然と立ち尽くす私を、彼は一度も振り返らなかった。

あの深い藍色の瞳も柔らかな声も、透き通るような流れる髪も、
繊細な指先も……すべて失われてしまった。

そっと手を伸ばしたらすぐにでも届きそうなくらい近くに感じた

鼓動の音も、私にはもう何も聞こえない。でも、私の胸の奥には彼の煙草の香りだけが、微かな記憶とともにずっと染み付いている。ただ一つだけ　あの浜辺で交わした最後のキスが、永遠に失われることのない唯一の証だった。

私の恋人はラ・ヴォワ・ラクテという日本のロックバンドのボーカルで、彼の名前はロランだった。それはフランスの風景画家から取った名前で、彼は完璧なまでに美しい顔立ちをしていた。宿命的な美しさに支配されて、鮮やかな世界を描きながら　。

今でも瞳を閉じて浮かび上がる面影は、真夏の陽炎のように脆い。けれど、恋人はもういない。

私にとって彼は、一瞬の輝きにしか満たない短い夢だった。

第十一章／瞳に映るもの（１）

「ちよつと智樹ー、早くしないと遅れちゃうよーっ！ねえ、私先に行ってるから！」

「おい！待てよつ、マドカ！待て！」

勢いよくドアを開け、慌てたように襟元のネクタイを結び直しながら智樹が革靴を履いて出てきた。

「智樹、いつも遅いってば！私だって講義に遅れそうなんだからしつかりしてよね！」

「あーはいはい、毎日悪いな。反省してます、お姫様」

智樹はふて腐れた顔のマドカを見るなり、深々と頭を下げた。

そんな幼馴染の姿を呆れ顔で眺めながら、マドカは溜息をつく。

「だいたいさあ、昨日の夜何時に帰って来たのよ？夜中の二時でしょ？深夜に大きな音立てないでって大家さんにも言われてるじゃん。私だって、隣の部屋で気になって眠れないんだから」

「だから悪かったって謝ってんじゃん！俺にだって付き合いつてもんがあるんだよ。それとも何？お前、朝から機嫌悪いってことは、生理か？」

マドカはしらけた顔で智樹を見つめると、さつさと歩き出した。

狭い十字路をいくつか曲がり、歩いて十分ほどの距離にあるキヤンパスに向かう。交差点に差し掛かった頃には、智樹の姿はずっと後ろのほうにあった。

マドカは交差点を左に、オフィスに向かう智樹は右に曲がる。ここが二人の分岐点だ。

「おい、マドカ！今日は早く帰るから、一緒にメシでも食おうな！」

日本語で声を張り上げる様子にうんざりしながら振り返ると、大きく手を振る智樹の姿が見える。

マド力は信号が変わると前を向き、街路樹の茂る歩道を歩き出した。

あれから二年の歳月が流れ、マド力がロンドンにやって来てもうすぐ一年になるうとしている。

仕事の都合でロンドンに駐在することになった智樹の後を追うようにして、マド力もこの街にやって来た。

イギリスに留学することはマド力の夢だった。知らない土地で一人ぼっちになるのは怖かったけれど、智樹が近くにいてくれたら何かと心強いと思っただし、親友がロンドン支社に配属されてマド力も随分喜んだものだ。

ああ見えて智樹は仕事のできる男らしい。頭のキレる彼が会社から有望視されている優秀な社員だということはマド力にも想像できた。ブロンドの英国紳士に混じって、すらりとしたスーツ姿で流暢な英語を話す彼はなかなか素敵だなと思っただくらいだ。

マド力は智樹が住んでいるフラットの、隣の部屋を借りて生活している。何か困ったことがあれば智樹に相談すればいい。時間のあまる時は互いの部屋を行き来して一緒に食事をしたり、他愛ない話をして過ごした。

朝は一緒に部屋を出て、マド力は大学に、智樹はオフィスに向かう。毎日顔を合わせているけれど、智樹の存在を煩わしいと思ったことは一度も無い。水と空気のように互いになくてはならない存在だということは、ロンドンに来て変わらなかった。

二人は今、友達でもない微妙な位置にいる。

慎重に、互いの気持ちを手繰り寄せるようにゆっくりと、二人は前に進もうとしていた。

「何これ？ すっぱー！ 米じゃん！ 味噌汁じゃん！ 白菜の漬物まであるじゃん！ マド力、これどうしたんだよ！？」

「今日の午後、大量の食糧がおばさんから送られて来たよ。智樹、留守だったから私が受け取っておいたの。それから、おばさんには私からちゃんと電話入れといたから」

マド力はピーマンの肉詰めを皿に盛ってテーブルの上に乗せると、智樹の正面に腰掛けた。

「そっかー、うちの母ちゃんか。何か言ってた？」

「別にこれといって何も。元気なの？ 体に気をつけてね、って」

智樹はワイシャツの袖を肘まで捲り上げると箸を取り、玉葱の味噌汁を啜った。

「超うまい。やっぱマド力の料理って最高。あ、それと米ね。秋田の米は美味いなあ。俺、マジで泣けてくるよ」

智樹は社会人になっても「超」とか「マジで」とか、学生時代と全然変わらない言葉遣いのままだ。これで企業との商談をまとめているのだから、ある意味凄い奴だとマド力と思う。

「やっぱ日本人は和食だよな。パンと芋と白身魚ばっかじゃ、そのうち死んじゃうって思うもん。俺、この先ずっと白いご飯と味噌

汁があれば生きていける」

サラダにドレッシングをかけると、智樹は幸せそうにご飯を口に運んだ。どんなエリート社員でも、中身は単純な奴なのだ。

「あ、そういえばさ、またおばさんに言われちゃった」

「何が？」

口いっぱい詰めたレタスを頬張りながら、智樹はマドカの顔を見つめた。

「マドカちゃん早くうちの智樹と結婚してやってちょうだいってそろそろ孫の顔が見たいわーってさ」

「なっ……」

慌ててレタスを飲み込んで智樹はひどくむせ返ると、急いで味噌汁を啜った。

「……たたく何言ってるんだよ、母ちゃん。勘違いも程々にして欲しいよな。何考えてんだか……」

「おばさん、私たちが恋人同士だと思ってるんだね。全然その気はないのに、困っちゃうなあ」

そう言いながら智樹の表情を横目で伺って、マドカは思わず吹き出してしまう。

「なっ、なんだよっ！」

「だって、なんでそんな悲しい顔するのよ？もしかして……冗談キツかった？」

「べっ……別に！お前こそ勘違いしてんだよ！バカじゃねーの？」

「はい。以後、気をつけまーす」

きつと、智樹は待っていてくれる。

私が智樹を恋人として受け入れることのできる日が来るまで、ずっと待っていてくれる。

私たちはもう友達なんかじゃない。

私がロランと別れた二年前のあの日から…

智樹は私を一人の女性として見てくれている

過ぎたことなんて捨ててしまわなきゃ…

忘れなきゃ…全部、忘れてしまわなきゃ…

私には智樹がいるから大丈夫。

智樹が守ってくれる、誰よりも幸せにしてくれる。

そう信じてるのに…私はまだ踏み出せずにいる。

ロランの面影が、痛いほど胸を締め付けるから　。

ロンドンの夜更けは早く、夜が明けるのは随分と遅い。マドカはカーテンを開け、窓の外の風景を眺めた。

眼下に広がる美しい街並みに、何度溜息をついたことだろう。

緩やかに流れる川に架かった煉瓦造の大きな橋、鮮やかな緑の広がるハイドパーク、遠くに古い宮殿が見える。

まだ朝霧のかかる真っ白な世界は、額縁に収められた立派な風景画だ。

ロランだったら、この風景をどう表現するだろう　。

ふとそんなことを思いながら、マドカはグレイの空を見上げた。

「マドカ、今日バイト？」

「うん、午後からね」

いつものように智樹と一緒に部屋を出ると、霧の残る街の一角をのんびりと歩いた。今日は少しだけ時間に余裕がある。

智樹は歩きながらジャケットのボタンを閉め、使い込まれた鞆を持ち替えた。

見慣れた智樹のスーツ姿はすっかり大人の色気を感じさせている。

「なあ、今夜お前の部屋行っていい？」

「いいけど、どうしたの？ いちいち断る必要ないじゃん。いつも何も言わずに上がりこんで来るくせに」

マドカはパンプスの踵を鳴らして歩きながら、智樹の横顔を伺った。

「ちよつとな」

「ちよつとな？ 何か相談でもあるの？」

「ま、そんな感じだから」

マドカは大学の講義が終わるとレコードショップで在庫管理のアルバイトをして、大学が休みの日には児童館で子供たちに日本の絵本を読んで聞かせるボランティアをしている。日曜日には必ず智樹とデートをして、美味しい夕食を食べた。

マドカが迷っていた留学を決意したのは、智樹がロンドンで働くからというよりもむしろ、ロランとの思い出が詰まった東京を離れたかったからだだった。

日本にいれば嫌でもメディアに露出するロランの顔を見なければならぬ。聴きたくなくても、ロランの歌声をどこかで耳にするのとだろう。

それと同じ理由で音楽雑誌の編集者の仕事も、未練などなくすっぱりと辞めた。

マドカは一日でも早くロランのことを過去のものとして受け入れたかったのだ。

できることなら初めて彼に出会ったあの雨の日に戻って、何もなかったように平気な顔をして交差点を渡り終えたいとさえマドカは思った。

けれど、ロランと過ごした日々はマドカが考えていたよりもずっと重く、とても深い輝きを放っていた。

マドカは今でも夜空を見上げる。藍色の闇に浮かぶ青白い月のようなロランに、祈れば会えそうな気がして。

ラ・ヴォワ・ラクテはロンドンでも絶大な支持を受けている。マドカが日本を離れる少し前にラクテはアリーナツアーを行い、一年間に2枚のアルバムと8枚のシングルを発表した。出す曲はすべてミリオンヒットとなり驚異の売上を記録した。

目に見えない膨大な資金がラクテの音楽に注ぎ込まれていた。宣伝、広告費、プロモーションビデオ、ステージを彩るこだわりのセットとパフォーマンス、どれもが桁外れだった。これまでの日本のロックバンドの常識を超えていたといってもいい。ラクテは良い意味で殺人的なバンドだった。

十代の男の子たちは皆、ラクテのコピーバンドを結成していた。女の子たちは相変わらずロランに夢中だった。

ライブ開場に行くと彼女たちは皆、ロランに向けて両手を放っていた。ロランの瞳に少しでも近づきたいという彼女たちの熱意と信念が、いつも日もフロアを満たしていた。

ラクテのアルバムがイギリスで発売されたのは一年前のことだ。全曲英語版で収録されたそのアルバムは、アメリカでも同時に発売されたことで話題になった。

今でも時々、イギリスメディアはラクテのニュースを扱い、音楽誌には定期的にインタビューが掲載される。

マドカの元には、毎月タツから手紙が届いた。送り主の名前はアサミになっていたけれど、封筒の中にはタツの字で簡単な近況報告と、発売前のラクテのCDが添えられていた。

けれど、ロランのことには何一つ触れられずに書かれたタツの手紙は、マドカの心を痛いくらいに締め付けた。

送られた音源をマドカが聴くことは一度もなかった。

そこにはいつも、ロランの面影が無数の雲みたいに漂っていた。少なくとも、マドカにはそう思えた。

コンコン...

滴のついた髪をタオルで拭きながら、マドカは玄関の扉を開けた。

「あれ？お前、風呂上り？」

部屋着姿の化粧気のないマドカの顔を見るなり、智樹はいつものようにずかずかと部屋の中に入りこんだ。

「智樹も何か飲む？ビール？」

マドカは冷蔵庫を開けた。

「いや、いい。別に何もいらない」

「そっか、じゃあ私だけ飲んじゃおっと」

缶ビールを持って部屋に戻ると、智樹はテーブルの上に乗せていた雑誌の切抜きを読んでいた。

マドカはベッドの上に腰掛けると、タブを開けて缶の縁に口をつけた。

「あー、んまい！お風呂上りのビールって何でこんなに美味しいんだろうね、智樹」

真剣な表情で切り抜いた記事の内容を追う智樹の顔は、怒っているようにも曇っているようにも見える。

「智樹？」

「何だよ、これ」

読んでいた切抜きから目を離し、智樹が記事をマドカのほうに乱暴に向ける。

それは、三ヶ月前にイギリスのある雑誌に載ったロランのインタビューだった。

マドカが無意識のうちに切り取ったそのページには、べっこう色のサングラスをかけてインタビューに応じるロランの写真があり、ロランが作詞に対する想いを述べた記事が数ページにわたって記載されていた。

「なあ、マドカ」

智樹は大きな溜息を浮かべて瞳を伏せると、呆れたように鼻で笑った。

智樹が気に入らなかったのはロランの記事を残しておいたことではなかった。

おそらく、記事の見出しが気に入らなかったのだろう。ロランが

インタビューで口にした言葉だ。

『愛することと救われることもある。けれど、絶望を乗り越えるだけの光はない』

マドカは缶ビールを静かにテーブルの上に置くと、智樹の顔を見つめた。

「智樹、私…」

「何でだよ…マドカ、何でだよ。そんなにあいつが好きか？こんな男のどこがいいんだよ。お前なこと傷つけて平気でこんなことが言える男だぜ？どうかしてるよ、お前」

「違う…智樹、違うの」

「何が違うんだよ！」

智樹の張り上げた声にマドカはぎゅっと瞳を閉じた。

マドカは恐る恐る目を開ける。智樹の顔には怒りや憎しみよりも、どうしようもない諦めのような表情が浮かんでいた。

「俺は…ずっとお前のこと信じてたよ。確信してたわけじゃないけど、いつかは俺のほうを向いてくれるって信じてた。俺だけを見てくれるって。期待し過ぎてた俺がバカだったのかもな」

「智樹…」

返す言葉が見つからず、マドカは俯いて目蓋を伏せた。

静寂が二人を包み、窓の外では無数の星たちがロンドンの街を照らしていた。

「でもな、マドカ…こんな記事、取っておくな。何がボーカリストだよ。俺は心底裏切られた気分だね。お前がどんな想いでいたか、こいつは何も分かってないんだぜ」

智樹はそう言つと、紙の端に手を這わせた。そのまま、記事を破くつもりだった。

「やめて智樹！やめてっ！」

智樹の腕を掴むと、マド力は堰を切ったように泣き出した。もうどうなってしまうてもいい。

マド力は智樹の腕に掴まりながら、崩れ落ちるようになって泣いた。溢れる涙が頬を伝ってフローリングの床に落ち、智樹の手から舞い落ちたロランの記事が隣に貼り付いていた。

写真の中のロランは最後に会ったあの日よりもいくらか痩せて、伸びたブラウンの髪は彼の美しさをそのまま残していた。唇は閉じているけれど、口元にそっと浮かんだ微笑は昔のままだった。ただ、サングラスの奥にある藍色の瞳だけが見えなくて、それがロランの表情を寂しく曇らせていた。

智樹は肩を震わせて涙を流すマド力の体にそっと腕を回し、湿った髪を優しく包み込むように撫でた。

「忘れるよ、マド力。早く…忘れような…」

智樹の腕は躊躇いながらマド力の体を包んでいた。満足に触れることもできないマド力の小さな体を守るだけの長い腕と大きな手。智樹のシャツはマド力の涙でぐっしりと濡れている。

息を詰まらせて泣きじゃくるマド力は、雨に濡れた子羊みたいに弱々しく震えていた。

「マド力、俺が傍にいるよ。俺だったらお前をこんなふうに泣かせたりしない。俺がずっと傍にいるから。泣くなよ…お前の泣いた顔見るの、辛いんだよ。どうしようもなく抱き締めたくなるから…だからもう泣くな。お前だってもう疲れただろ？いつだって俺が幸せにしてやるから…」

頬についた涙の跡を水で洗い流し、マドカは部屋に戻った。

「落ち着いた？」

「うん…ごめんね。ありがとう…智樹」

マドカの泣きつかれた顔を目を細めて見つめると、智樹は静かに立ち上がった。

「マドカ、俺そろそろ帰るわ」

智樹の広い背中を玄関まで見送る。

ドアノブに手をかけた智樹に、マドカが思い出したように声をかけた。

「…そういえば智樹、何か相談があったんじゃないの？」

「ああ…、そのことならもういいって。俺の気持ちは…全部話したから」

智樹は振り返ると、いつもの笑顔でマドカに諭すように言った。

「おやすみ。寝坊しないように、早く寝ろよ」

第十一章／瞳に映るもの（2）

ラ・ヴォワ・ラクテ解散）日本のロック界に翳り

カリスマ的な人気を誇るロックバンド「ラ・ヴォワ・ラクテ」が昨日、所属レコード会社を通じて解散を発表した。突然の解散発表に、ファンを含め各メディアとも騒然としており、所属レコード会社、公式ホームページには問い合わせのアクセスが殺到。また、一部のファンが暴動を起こすなど、警官が駆けつけるほどの騒ぎとなった。

「ラ・ヴォワ・ラクテ」は三年前、天の川というバンド名にちなんで、7月7日、七夕の日にメジャーデビューを果たし、その後、十代から二十代の若者を中心に人気を集め、彗星の如く現れたこのバンドは、デビューからわずか半年で日本のロック界の頂点にその名を留めることになった。

一昨年、年間二枚のアルバムと八枚のシングルをリリース。異例のスピードで発表された楽曲はすべてがヒットを記録し、日本の音楽業界において驚異的な数字を記録した。楽曲のリリースと並行して大規模なツアーを行う傍らメディアに出演し、若者の圧倒的な支持を得てファンクラブの会員は10万人を超えたという。昨年春より、米英同時発売されたアルバムは合わせて500万枚を売上げ、海外での活動も注目されていた。

解散の理由は公表されていないが、メンバーの不仲説や音楽性の不一致など、インターネット上では様々な噂が飛び交っている。

今後の活動は7月7日、「ラ・ヴォワ・ラクテ」最後の楽曲となるシングル『La Voie Lactée』をリリース。解散ライブなどの予定はなく、デビューからこれまでのプロモーションビデオをすべて収録したDVDがシングルと同時に発売されるのを最後に、インディーズ時代を含め約七年間の短いバンド活動に終止符を打つ。

レコード会社の報告によると、解散後はメンバーそれぞれが独自の音楽活動を展開していく予定だが、ボーカル・ロランの活動は未定とされている。

日本のロック界の中核を担うカリスマバンドが下した突然の解散は、今後、国内だけでなく世界に波紋を呼びそうだ。

「ラ・ヴォワ・ラクテ」は三年間で四枚のアルバムと17枚のシングルをリリースし、これまで行ったライブの総動員数は……

マドカがその記事を目にしたのは、大学の図書館に置かれた英字新聞だった。

その日、イギリスのメディアでもラクテ解散のニュースが報道され、バンドの簡単な略歴と、ロンドン市内の若者の声を取材した映像が流れた。

日本の人気ロックバンドの突然の解散は、海外の音楽シーンにも大きな波紋を広げていた。

マドカには記事にあったような不仲説や音楽性の不一致といった問題が、解散の理由ではないくらい簡単に想像できた。だからこそ、一体どんな理由でタツが解散を決意したのか検討もつかず、マドカは戸惑いを隠せなかった。

タツが夢にまで見たバンドが、こんなにも早く最後を迎えてしまふなんて嘘のような話だったから。

混沌とした頭を抱えて時計に目をやると、二本の針は午後七時を示していた。

雨を弾く窓の外には闇が広がり、通りを行き交う車の音が微かに聞こえてきた。

枕元に置いたスタンドの光を背に、マドカはぼんやりと宙を眺めていた。

薄暗い部屋の床には数少ない家具とマドカの影が並び、スタンドの黄色いライトに無言のまま揺られていた。

ロンドンと日本の時差は九時間だ。夜が明けるのを待つわけにはいかない。

マドカは受話器を握り締めて、ダイヤルを回した。

明け方だというのに、電話に出たタツの声はおそろしいほどはっ

きりとしていた。

「タツさん…寝てました？今、日本は朝の四時過ぎですよね」

「いや、ずっと起きてた。僕はいつも寝る間もないくらい忙しいから」

いつもと変わらない調子で笑ったタツに、マド力はほっと胸を撫で下ろした。

けれど、懐かしいタツの声を聞いた途端、マド力の息が詰まりそうになる。

確かなりアリティーを帯びて突き刺さる。

ラクテが解散する。

「タツさん……」

「マド力ちゃんにはデビュー当時から随分お世話になったよね。」

デビューして初めて受けた取材もマド力ちゃんだった。僕らがここまで自由に音楽をやったのも、マド力ちゃんや大勢の人たちに出会ったからなんだ。もしそうでなければ、僕らはここまでやって来れなかったかもしれない。ラ・ヴォワ・ラクテはここまで大きなバンドにはなれなかったと思うんだ」

タツがそこで一呼吸置くと、マド力は受話器を持ち替えて、伏せていた目蓋をゆっくりと開いた。

「タツさん、私はラクテの音が好きでした。それは私がロランに恋をしていたとか、そういうことじゃないんです。私はラ・ヴォワ・ラクテが好きだった。本当に…好きだった。タツさんのベースも、シンさんにギターも、カラルさんのドラムも、ロランの歌声も……ラクテのすべてが大好きでした。ラクテの音楽はただのロックじゃ

ない。人の心の一番深いところに浸透する特別な音なんです。私だけじゃない、皆がそう思っているはずです。タツさん、あなたたちは何も恐れるものはない、そうでしょう？なのにどうして解散なんか…」

どうしてだろう…あんなに大好きだったラクテの解散が悔しいほど悲しいのに、言葉が見つからない。

言いかけたいくつもの言葉を飲み込んで、マド力は受話器を握る手に力を込めた。

「マド力ちゃん、君はいつかロランと僕が結んだ契約について聞いたことがあったね。ロランが僕に要求した、たった一つの条件のことだよ。覚えてる？」

マド力は黙っていた。

さっきよりも大降りになった雨が窓ガラスにぶつかり、耳障りな音を立てていた。

「僕はその契約を無視するわけにはいかなかった。解散の理由なんてどこにもない。僕とロランの交わした約束が実現されただけのことだよ。でも……、短すぎたね…。いいバンドだったよ。ラ・ヴオワ・ラクテは僕にとって本物のバンドだった。僕にとってラ・ヴオワ・ラクテは、覚めない夢だった」

タツは声のトーンを下げて淡々とした口調で話すと、溜息にも似つかない息を吐いた。

受話器の向こうにいるタツの表情は曇っているのだろうか。それとも、いつものように優しさを含んだ微笑を浮かべているのだろうか。

「マド力ちゃん、僕がどうして君に手紙を書き続けていたか分かる？」

マド力は受話器をきつく握り締めたまま、何も言わずに首を振った。

「僕はマド力ちゃんに忘れて欲しくなかったんだよ。ロランのことを…忘れてもらいたくなかった。僕のことや、ラ・ヴォワ・ラクテっていうバンドなんていつでも忘れてくれて構わないんだ。もっと複雑に言えばボーカリストとしてのロランのことも…忘れてしまってもいい。君が忘れたと思うなら…忘れてしまえばいい。でも君の隣にいたロランのことだけは忘れないで欲しい。君の笑顔を見て微笑む顔や、君に向けられた声や一つ一つの表情や、君の前で見せない特別な仕草や…そういうものを遠く離れてしまってもずっと思い出してほしかった。ロランと過ごした歳月を、君の記憶の中に留めてほしかった…」

表情の読み取れない電話のやりとりは、予想以上にマド力の心を疲れさせた。何もかもが灰色に歪み、霞んでしまう。指に巻きつけた電話のコードでさえ、その形をはっきりと確認することはできないくらい、闇に紛れてしまいそうだった。

込み上げるどうしようもない切なさ、押し潰されそうになる。静かに深呼吸を繰り返して、マド力は受話器に口元を近づけた。

「タツさん…、私はロランに何もしてあげることができなかったんです。私はロランの傍にいられるだけで幸せでした。私を笑顔にしてくれたのはいつだってロランでした。なのに…私は彼に何も与えることができなかったんじゃないかって思っています。ずっとロランの傍にいて約束したのに…、それも果たせなかった。私、今でもふと真夜中になると考えてしまう…ロランが私に愛想を尽かせて離れてしまったのも当然かもしれないって。私は彼の隣にいて…一番近くにいたのに、彼に何も与えることができなかったから……」

真っ直ぐ伸ばしたはずの聲が微かに震える。目蓋の裏側が熱くな
って、一筋の涙が頬を伝う。

深い悲しみはもう、どこかへ消え去ってしまったはずなのに……ど
うしてこんなに苦しいんだろ。私は一体どうしようっていうんだ
ろ。今更気づいたって遅いの……今更、こんなことを言ってもど
うにもならないのに。

マドカは涙を掌で拭くと、大きく息を吸い込んだ。

「こんなことなら出会わなければよかった……彼に出会えたことが
運命なら、こうして離れてしまったことだって運命なんです。月が
欠けていくのと同じ……あらゆるものは形を変えて時を刻んでいくか
ら……愛の形が変わってしまったのも当然ですよ。それに気づかな
かった私が悪いんです。傷つけてしまったのは私のほうかもしれない
せん。タツさん……本当に辛かったのはロランのほうだったのかも
しれない」

受話器を持つ手が震えて、声にならない言葉が放たれる。悔しい
のか悲しいのか、涙を堪えているのか……私には分からない。私はい
つだってこの苦しみと共存してきた。いつの日も、私は彼の記憶を
引きずっていた。どこまで行っても変わることのない景色の中に、
彼の面影を閉じ込めてきた。

昨日も今日も……きつと明日だって、この苦しみは消えることなく
確かにここに存在するのだから……だから、そっと目を閉じたその一
瞬だけでいい

彼に会わせて

ロランに……、ロランに会わせて

会いたい……

あの美しい大きな瞳に……会いたい。

「本当は、もっと早く君に伝えるべきだった」

受話器から聞こえるマド力のすすり泣く声に、タツは思わず目を伏せた。

「僕が君に真実を伝えることができたなら……どんなに楽になるだろうってずっと思っていたよ。隠すことなんてなかったんだ。結果的に僕は君を深く傷つけてしまった。あの時……僕には君に伝えるべき事実がいくつかあったのに、僕は話すことができなかった。君はロランが誰よりも大切に想っている女の子だったから……どうしても言えなかった」

「タツさん……？」

いつもと違うタツの平坦な口調が、マド力を言いのような不安と哀しみで包み込んだ。

沈黙が受話器を塞ぎ、思わず息を呑む。

「ロランは僕に言ったんだ。俺の目はいつか見えなくなる……その時が来たら、すべて終わりにしたいって。それが、僕がロランと交わした契約なんだ」

「……どういことですか？」

雨音が規則的に耳元を通り過ぎる。

混線した糸がどこかでぶつりと途切れてしまったような感覚がマド力を襲った。

「先天性緑内障」

「せんでいせい……りよくないしょう……？」

聞きなれない言葉に、マド力は片言の日本語を話す外国人みたい
にその単語をしっかりと繰り返した。

「あと数ヶ月のうちに、ロランは失明する」

先天性緑内障

緑内障とは眼球内部を満たす眼房水の圧力が異常に高くなったため、一時的に、あるいは永久的に視力障害をおこしたものをいう。成人病の一つと考えられ、失明する原因として世界各国で第一位から第三位の間にある。その中でも出生時あるいは三歳〜四歳までに発症する緑内障を先天性緑内障と呼ぶ。

遺伝は関係なく約一万人に一人の稀な病気で、自覚症状に乏しいために、発見が遅れるほど治療しづらく、角膜や強膜が伸び切つてしまい、黒目が大きくなったりする。放置すれば視神経の圧迫により、失明する。

発症の兆候は吐き気、めまい、発熱など風邪の表情と間違いやすい。一度緑内障によつて失われた視野は、薬や手術によつて回復することができない。術後の治療を怠れば再び発症する可能性もあり得るため、緑内障の危険因子となるカフェインや煙草を控えた生活習慣が必要となる。

先天性の特徴は涙目、光に敏感になる、眼球結膜充血、角膜の濁り、角膜の拡大等……

第十一章／瞳に映るもの（3）

カタン…

ポストを開けると、見慣れた文字が目に入った。

アサミの字で書かれたアパートの住所とマドカの名前。

封筒の膨らみを見ると、いつものようにCDが添えられている。7月7日、ラクテの最後となる楽曲かもしれない。タツはいつも発売前に真っ先に届けてくれる律儀な人だから、マドカの予想に間違いはないはずだった。

タツの手紙をポストから出して部屋に向かおうとすると、足元に白い封筒が落ちた。決して上手いとは言えない、殴り書きされたマドカの名前。裏面を見ても送り主の名前は書かれていなかった。

送り主の分からない手紙にマドカは首を傾げて部屋に戻り、ペーパーナイフで封を開けた。

便箋に書かれた文字とその内容にざっと目を通すと、送り主はすぐに分かった。

ロランだった。

マドカへ

こうして手紙を書く相手は君が最初で最後になるだろう。君は編

集者だから、文章の書き方とか言葉の言い回しとか、そういうことに關してはプロなんだ。僕は一度も手紙を書いたことがない。職業柄、美しい言葉を並べた陳腐な詞は書けるけど、文章は書けない。これといって必死になって勉強した記憶もないから、夏休みの作文だつて自分で書いたのかさえ疑いたくなるくらいだ。

だけど、これは僕の人生で最初で最後の手紙なんだ。少しはまともな文章を書こうと思う。まともな言葉で、君に話しておきたいことがある。まだ、僕がまともでいられるうちに、君のために書いておきたいことがある。僕は、君にすべてを打ち明けようと思う。それがこの手紙だ。

いずれ君の耳にも入ることだろうから、先に言っておいたほうがいいだろう。僕の目は見えなくなる。僕の左目は、こうして書いた手紙の文字が見えるほどの視力は残っていない。微かに見える右目だけが、今の僕に残されたたった一つの目だ。けれど、重度の緑内障を患った僕の右目も、やがて視力を失う。

人間の体はとてよくできている。片目だけになつても不自由なく、十分な世界を見渡すことができる。瞳の中で、世界は様々な色に美しく変化していく。見えない部分があるからこそ、風の匂いや光の色、あらゆる景色に敏感になる。そういう世界も、悪くはない。闇がこの視界を捉えるまでのわずかな時間を、僕は微かな光の筋をたどりながら、そっと瞳を閉じている。鮮やかな色彩をまとった風景を、いつの日も取り出せるように一つ一つ心の額縁に入れて、ただ静かに暗闇が通り過ぎるのを待っているだけだ。

僕の左目はいつも闇と隣り合わせだった。それを君に打ち明けられなかったことを、どうか許してほしい。君に出会う前の僕には、望みも何もない人生に、怖いものなど一つもなかった。僕は幼い頃

からすでに失うものはすべて失っていたから、何かを強く手に入れたいと願っても、何一つ叶いはしないものだと思っていた。僕の抱えるこの病気が再び発症し、例えば視力が失われてしまったとしても構わないと思っていた。物事を諦めて生きること慣れていたせいかもしれない。それが、君に出会う前の僕だった。

君は絵本から抜け出してきたみたいな女の子だ。いつも何かを夢中で追いかけているような、純粹無垢な女の子だ。小さな体に白い羽をつけて、僕の顔を覗く瞳は、透き通る雫みだった。その柔らかな髪を撫でれば、優しい光がやってきて君を包み、君が笑えば世界が逆転してしまうほど、僕は君のことを大切に想っていたんだ。君に出会えたことは、僕の人生で唯一の救いだった。君はまるで春の嵐のようにやってきて僕を掴み、その純粹な笑顔に僕は恋に落ちた。

今、この瞬間も、君に出会わなければ抱くことのできなかった感情が、深い海のようにこの胸を支配している。僕は今でもリアルに思い出すことができる。君の幼い声や肌の匂い、黒目がちな瞳と、長く細い髪が指に絡まる感触、頬を膨らませて怒った顔や無邪気な泣き顔、ヒールの踵を鳴らして歩く癖、僕の名前を呼んでにつこりと微笑む柔らかな表情や、恥ずかしそうにはにかんだ仕草を。君の面影は色褪せることなく、いつの日も僕の隣にそっと佇んでいる。欠けてゆく視野の中で、いつも記憶の中にある君の笑顔だけが確かな稜線を描いて目蓋の裏に浮かぶんだ。

僕は君を愛していた。君以外のものはすべて放り出してしまってもいいくらいに。

いつからだろう、僕は君を失うのが怖かった。君が傍にいる時、僕はいつも幸せを感じながらも絶望と背中あわせだった。君を失う

かもしれないという不安の波が、毎日のように押し寄せては泡を残して消えていった。腕の中で無邪気に笑う君のことを想ったび、この胸が張り裂けそうだった。

君に出会った時、闇と隣り合わせの左目はすでにその進行を止めることが不可能だった。僕は何度も打ち明けようとした。けれど、そのたびに君を傷つけてしまうかもしれないという恐怖と、君を失うかもしれないという絶望が目の前に横たわっていた。僕は君の未来を簡単に奪いたくなかった。大好きな君の笑顔を悲しみに変えてしまうことしかできないのかと思うと、僕は心底自分の人生というものをも憎んだ。僕が君のためにできることなんて一つもなかった。声を張り上げて歌うことしかできないボーカリストが、君にしてあげられることなんて何もなかった。

だから君に別れを告げた。

僕にとって視力を失うことより、君の笑顔を失うことのほうが怖かったんだ。君の笑顔を失うくらいなら、いつそのことこの世界の果てまでたった一人で生きていくことのほうがマシだった。君にどう思われてもいい。そして僕は別れを選んだ。

君は僕を恨んでいるだろうか。それとも、淡い思い出のページとして、受け止めてくれていたのだろうか。どちらにしろ、二年という歳月は僕たちを隔てるあいだを複雑なものにした。

今でもふと思い出すことがある。都会の冷たい喧騒の中で、藍色の夜空を見上げる君のことを。君は今、何を考えているのだろうか。今でも星の輝く夜には、願い事を放つことがあるのだろうか。

この先、人生で一度だけ後悔することがあるとすれば、羽のよう

な君の体を抱きしめたあの夜のことを思い出さう。君の面影を引きずって生きるには、この世界は美しすぎる。僕に残されたのは、儚い眠りだけだ。

もう二度と、君に会うことはないだろう。

霞んでゆく世界が消え失せるまで、浅い眠りに揺られて　。

タツの手紙に添えられていたのは、ラクテのビデオクリップだった。

テレビの電源を入れると、液晶が青白い光でマドカの顔を鮮やかに照らした。

ラクテの三年間がこの一枚のディスクに刻み込まれている。

ラ・ヴォワ・ラクテのボーカル、ロラン…

マドカは大きく深呼吸をしてから、プレイボタンを押した。

L a V o i e L a c t e e 『 S t a r s 』

分厚い雲を突き抜けて／あの小さな星まで君をさらえたなら
まるで永遠のように感じられるだろう
幻想の彼方に浮かぶ／星々の影に隠れ
この銀河の世界の中／そっと瞳を閉じるまで

悲しみは繰り返される。マドカはふと、桜田直義を愛し、深い傷を負いながらも彼の後を追って死んだ母のことを思った。

そして、桜田直義とフランス人の恋人のあいだに生まれたロラン。ロランの心の中にはずっと、言いようのない悲しみが渦巻いていたのかもしれない。

ロラン…、私はあなたを救えなかった。あなたの抱える苦しみや寂しさの影に気づいてあげられなかった。あなたがくれた微笑は、こんなにも愛しくて儚くて…

今にも崩れ落ちてしまいそうなくらい脆くて。

ロラン…本当は愛も幸せも何もいらなかったんだよ。私はロランの傍にいられるだけで…ロランを想うだけで、それだけで幸せだったんだよ。

ロランに出会えたこと。

それだけが私を支えるたった一つの真実だったんだよ。

ねえロラン…、あなたの面影を抱き締めて生きる私は、間違っていると思う？

薄れゆくあなたの記憶をたどりながら、あなたのために私にできることは何だろうって…今ならそう思えるのに。

私は今でも…あなたを愛しているから。

画面がふつと切り替わる。

La Voie Lactée
『La Voie Lactée』

ラクテが残した最後の楽曲。

流れるような優しいピアノの音。幻想的な月が薄暗い空に浮かんで、アコースティックギターの音色が聞こえてくる。切ない旋律はやがて透き通る歌声と重なり合い、麗しく哀しげな表情をまとうて深い海の底へと沈む。

シンのギターが緩やかなカーブを描きながらロランの歌声に抑揚をつけ、タツのベースがその曲調を支え、カヲルのドラムは短くりズムを刻んでいる。

白い月の下にロランがいる。ギターのコードを押さえ、軽やかに六本の弦を弾きながら、独特の息継ぎをしてラクテのボーカルがその歌詞を紡いでいる。

（星空の下で君に一曲弾いてあげよう）

「その曲、ロランが作ったの？」

「…まだ歌詞はないけどな。俺が初めて作った曲。バンドでメシ食って生きてこうって決めた頃だな…」

この曲…、あの時の。

ロラン…私たちはいつもあの公園のベンチに座って、オレンジ色の外灯と、噴水の流れる音だけが二人をそっと見つめていたんだね。ロランが煙草に火を点ける仕草や、ギターの弦を弾く横顔、ロランのブラウンの髪が風に吹かれて頬をくすぐる瞬間も、二人の肩が触れ合う時に感じた微かなあなたの体温も……今となってはすべて失われてしまった過去の断片でしかないけれど、あなたといった時間は確かに私の胸に強く刻まれている。

どんなに深い傷も、乾き切って枯れた涙も、あなたを思い出したら

びに美しい風景に変わる。あなたが私に注いでくれたこの光を絶やしてしまわないように、そっと瞳を閉じるから……

私を許して…あなたを救えなかった私を…許して、ロラン。

どれくらい泣いていたんだろう。今はもう、泣き疲れて…重い目蓋をしつかりと開いていることだけで精一杯だ。

枯れてしまった涙の海は、どこへ流れていくのだろう。

深い森の小川を抜けて、いつの日かあの人の元へ届くのだろうか。

もし届くのならあの人に伝えて欲しい。

私は、あなたを救えますか。

「じゃあな、マドカ。気をつけて帰れよ」

「智樹こそ、元気でね」

「何だよそれ、永遠のお別れみたいな言い方すんなって」

眉間に皺を寄せ、智樹が苦笑いを浮かべる。

人影が交差する空港のロビー。マドカはカウンターで日本行きチケットを受け取ると、見送りに来た智樹と一緒に搭乗時間を待った。

「手紙くらい書けよな。お前のことだから、俺が傍にいないと寂しくて泣いてばっかだろうから」

「はいはい、智樹がいなくても寂しくなんかありません。だって私、日本に帰るんだよ？北極に行くわけじゃないんだから。毎日白のお米炊いて、美味しいご飯食べるんだもん。全然寂しくなんだから」

マド力がそう言って笑顔を浮かべると、智樹は安堵の表情でマド力を見下ろした。

智樹：、いつ見てもあんたの顔は眩しい太陽みたいだね。

マド力は心の中でそっと呟く。

アナウンスが忙しく響き渡り、二人の傍を足早に行き交う人々の乾いた足音が舞っていた。

「マド力、俺：待ってるから。辛くなったらいつでも俺のところに来ればいい。俺はずっと、お前のもんだからさ」

「何それ？智樹、いつから私のものになったのよ？変なのっ」

「うるせーな、とにかく俺はお前のことを心配してんだよ！俺たち、ずっと親友だろ？世界でたった一人の、大切な友達だもんな」

智樹の優しい瞳が切ないくらい痛い。

智樹：、私はずっとずっと智樹の背中を見て歩いて来た。その大きな広い背中が、いつも私のほんの少しの勇気をくれた。

智樹がいて、私がいる。

その優しさはきつとこれからも、見えない翼になって私を包んでくれるよね。

マド力は智樹の顔を見上げて悪戯に笑った。

「ねえ智樹、目瞑って」

「何で？」

「いいから、目閉じてよ」

マドカの瞳を疑いながら、智樹は言われるまま渋々目蓋を閉じた。
「なんだよ、おい…まだか？」

瞳を閉じて、不安げな表情を浮かべた智樹がなんだかとても可愛い。
い。

マド力はきよろきよろと辺りを見渡した。

背の高い智樹の頬。思い切り背伸びをして、そっと唇をつける。
静かに唇を離して智樹の顔を見上げると、ぽかんと口を開けたまま大きな手で右頬を押さえてマド力を見下ろしている。

「ありがとう智樹。私、もう行くね」

あらゆるものは吹き抜ける風のように通り過ぎて行く。

それは通り雨にも似ている。傘を持たずに歩いていると、それは突然やって来て大きな痣を残していく。だけど、いつか雨は上がり、そこに微かな光が差し込んでゆっくりとその傷を乾かしてくれる。

私は日本に帰ってどうしようというのだろう。あの人が今どこで何をしているかも分からないのに。

記憶は不確かになり、やがてあの人の面影も薄れてしまうのに。
。

ロラン…、私はもう振り返らない。あなたを想う一筋の光が、いつの日もこの胸にありますように。

時を打つ鼓動の針を、そっとあなたに向けて祈るから。
。

第十二章 / 空に架かる橋（１）

松山市のガイドブックを片手に古い洋館風のアパートの二階に設けられたギャラリーの扉を開くと、柔らかな鐘の音がマド力を迎えた。

額に収められた絵画が懐かしい風景のようにじっと佇んでこちらを向いている。窓辺に群れる新緑の風は木々の葉をさわさわと揺らし、建物の隙間から入り込んでマド力の肌を心地良く撫でた。

「いらつしゃいませ」

入り口のすぐ傍に小さなカウンターがあり、椅子に座った年配の女性が微笑んでいる。

「ゆっくりご覧になって下さいね」

マド力にはつこりと微笑んで女性に軽く会釈をすると、表示された順路に沿ってゆっくりと歩き出した。

他に客の姿は見当たらなかった。年代を感じさせる木造の床が歩く度にきしきしと鳴り、窓から差し込む西日はくつきりとした影を落としている。

故・桜田直義絵画展へ失われた風景を見つめて

マド力が桜田直義の個展が松山市で開かれるという記事を情報誌で見つけたのは、二週間前のことだった。

桜田直義。

彼の名前は今でもマド力の記憶の中で鮮やかな熱を帯び、入り組んだ迷路をたどっている。そして、彼の名前は黒い影を残してあの人の面影を呼び起こさせる。

それは、かつて私の恋人だった美しい人……ロラン。

彼は今どこにいるのだろう。イギリスから帰国して半年経った今も、ロランの居場所を探す術をマド力は持たなかった。

ロラン…あなたは今、どこにいるの？

ねえロラン、教えて…言葉なんていらない、何もいらなから…

…ただあなたに会いたい。

もうあなたに会えないというのなら、私はこのままどこかへ消えてしまってもいい。

ロラン…、会いたい。

桜田直義の描いた風景画は、どれも写真みたいに精密でリアルな世界を表していた。その写実的な世界の中に、繊細な筆の使い方や独特の表現方法で、彼は自然の様々な表情を描き出すことに成功していた。

どうしてロランは父親のことを「売れない画家」なんて言ったんだろう。こんなに美しい風景を、まるで映写機みたいに映し出してしまう画家なのに。

その一つ一つの作品に彼の強い意志を感じる。マド力は桜田直義の魂が吹き込まれたそれぞれの絵に、鮮やかでいてほの暗い光と影の存在を見出しながら、額縁に収められた景色を眺めていった。

もし、彼が画家として大成していたら、あらゆる出来事はもっと単純なものになっていたのかもしれない。

桜田直義自身も、死んだ母親も……そして、ロランも。

それほど広くはないギャラリーを一回りするのにたいした時間は要さなかった。二十点近くの作品に描かれた、桜田直義が愛した風景。見慣れない建物の並ぶ街並は、彼がフランスに留学した時に描いたものかもしれない。

ふとマドカの足が止まる。これまで眺めたキャンバスとは比べようもないほど大きな画面に描かれた蒼い水面。

マドカの体を、内側から締め上げるような熱く苦い感情が貫いていく。

新緑の山に囲まれた湖、そこに浮かぶ一艘のボート。

「湖水」

マドカの記憶の片隅に、淡い陰影を残したその風景が今、ここにある。

目の前に広がる空の青と緑水、揺れる水面に映る木々の枝葉。マドカは今でもあの絵葉書を鮮明に思い出すことができる。桜田直義が母親に宛てた文面の裏で、ひっそりと息をしている湖水。いつまでも色褪せることのない母の記憶と重なるように、ロランの歌声が耳にこだまする。

マドカは込み上げる想いをぐっとこらえてその場に踏み止まった。窓からの西日はだいぶ和らぎ、緑風に窓ガラスがカタカタと鳴った。深呼吸をして「湖水」から目を離し、隣の額に視線を向ける。

これが最後の作品だった。

しかし、そこにある絵を見てマドカは思わず言葉を失った。

「マドカ」

それが額縁の下に小さな文字で遠慮がちに書かれた、作品のタイトルだった。

マドカが声をかけると、カウンターで個展のチラシを整理していた年配の女性はゆっくりと顔を上げた。

彼女の口元には絶えず感じの良い微笑が浮かんでいて、マドカの顔を見るなりその小さな笑みは波紋のようにふっと広がっていった。

「すみません、あそこにある最後の作品なんですけど……」

マドカは後ろの壁に掛かった作品を指差した。

女性はマドカの言わんとするところを薄々感じ取ったらしく、マドカの顔を見つめ返すにつこりと微笑んだ。

「あの絵ですね、女の人の寝顔でしょう？」

マドカは頷きながら小さく微笑んだ。

彼女は掛けていた薄いレンズの眼鏡を外して、静かな瞬きをした。「やっぱり分かります？ 実は、最後のあの絵だけは桜田先生の描いた作品じゃないんですよ」

彼女はそう言って血色の良い頬に手を当てて、唇をきゅっと結んだ。

日差しが泉のように重なってマドカの足元に小さな陽だまりを作り、時間は緩やかに流れていた。どこからともなく聞こえてくる鳥の声が、ギャラリー全体の雰囲気をも明るくしていた。

「私はこのギャラリーを管理している篠田と申します。桜田先生とは生前、ちょっとしたお付き合いがありましたね。物静かどころか掴めないような雰囲気をお持ちでしたけど、なかなか芯の強いし、しっかりした方でした」

篠田さんは立ち上がるとマドカにパイプ椅子を勧めた。マドカは

首を振ると、お礼だけ言つてにつこりと微笑んだ。

「あれは、桜田先生の息子さんがお描きになつた絵なんですよ」

「息子さん……？」

「ええ、今回桜田先生の個展を開きたいとおっしゃつたのも、息子さんなんですよ。私は息子さんに頼まれてこのギャラリーを管理しているだけなんです。桜田先生の作品も趣があつて素晴らしいですけど、息子さんの絵もなかなか素敵でしょう？あの淡い色彩といい、線が柔らかくて……まるで羽みたいだわ」

彼女は遠くを見るように目を細めて壁の絵画に焦点を当てると、絵の中の女性とマドカの顔を交互に見つめて首を傾けた。

「そういえば、あの女の人……なんだかあなたに少し似てるかもしれない。もしかして、先生の息子さんとお知り合いかしら？」

篠田さんの瞳に向かつて、マドカは左右に首を振つた。

「そうなの……残念ね。とても綺麗な女性よね。きっと、大切な恋人のことを想つて描いたのかもしれないわね」

再びマドカの顔を見上げると、彼女は目を伏せながらもとても残念そうな表情をした。

カウンターの上には個展のチラシに混じつて篠田さんが暇潰しに読んでいるらしいブックカバーのかかった文庫本と、高そうな万年筆が転がっている。

ギャラリーは暖かな古い木の匂いがした。

「息子さんも、絵を描いていらつしやるんですか？」

「ええ。このギャラリーの上をアトリエにしているらしくて。毎日画材をどつさり買い込んで、階段を上って行きますから」

篠田さんはそう言つて、廊下に行く木造の階段を指差した。

「いつもこのギャラリーにも顔を出すんですよ。ギターを抱えてね」

「ギター？」

「ええ、今日みたいに晴れた日の午後は、近くの公園で息抜きにギターを弾いているみたいですよ。そうだ、もし時間があるなら行ってみるといいわ。彼ね、絵も巧いけれど、ギターの腕もなかなかのよ」

初夏の光を浴びながら、篠田さんに教えてもらった道順をたどる。家々の庭を横目に坂道を登って行くと、午後の日差し of せいで額にうつすらと汗が滲んだ。

山間を縫って吹く風が運ぶ涼しげな空気が心地良い。マド力は長い階段を上り、美しく並んだ木々の間を抜けると、綺麗に舗装された広場に出た。

そこは松山の街が一望できる、高台に作られたテーマパークほどの広さを持つ公園だった。人工芝に囲まれた敷石の舗道をあてもなく歩き、爽やかな緑の風を吸い込む。広場には一定の距離を置いて白いベンチが並び、青々とした枝葉を伸ばした樹木が植えられていた。

「わあ……」

眼下に広がる景色と底抜けに青い空の下にいる開放感で、思わず溜息がこぼれてしまう。

民家の屋根と歴史を感じさせる建物のあいだを走る路面電車。遠くには美しい山々の峰が見える。雲ひとつない水色の雲が、今にも頭上に降り注いできそうなくらい近い距離にある。

マドカは空を見上げると、眩しさに目を細めた。

三年という歳月は私をどこまで運んでしまったのだろう。あなたが落とした影を引きずりながら、私がたどり着く場所はどこだろう。ロラン、あなたはここににいるの？あなたのギターの音が、今私には聴こえるかな…

二人でいたあの頃みたいに、あなたの隣でその音色を抱いていたい。

ロラン、私はここにいるよ。いつの日も、あなたの傍にいますから…
あなたがそこにいる限り、私はずっと祈り続けることができます。
会いたい、ロラン。

瞳を閉じ、風の音を聴けば…耳元をくすぐる微かな囁きに混じって、切ない旋律が聞こえるはずだ。
足元に溜まる空から降る光の色を追いながら、マドカはそっと耳を澄ましてみる。

ギターの音…コードを押さえる指、ぴんと張った六本の弦を弾く三角形のピック…あの美しい横顔…
彼の記憶が強い意識を放って蘇る。

この胸の震えが消えないうちに、脆く透明な音をたどって。
マドカはその名前を呼んだ。

「ロラン…！」
流れるギターの音がぷつんと途切れ、遠く離れた二人の間を強い風が吹いた。

白い肌と完璧な横顔、風に揺れるブラウンの髪、べっこう色のサングラス、綿のシャツの下にある華奢な体、アコースティックギター

―を抱える大きな手……そこにあるものが幻想的に美しくて、今にもひび割れてしまいそうなくらい胸が痛い。

「ロラン……」

そこにはロランがいた。空と木々の優しい緑のあいだに。白いベ
ンチの上で足を組んで、仔猫を膝に乗せるみたいに大切そうにギタ
―を抱えて。

まるで永遠に時間が止まってしまったみたいだ。あなたの面影を
抱いて、あなたの姿を探して、誰よりも会いたかったはずのあなた
がすぐ目の前にいるのに、言葉が出ない。出るのは涙だけ……いつ
の間にか鮮やかな景色が霞んで、そこにいるあなたの姿もちゃんと
見ることができない。

サングラスの奥にあるロランの瞳がこちらを向いて

ロラン、あなたの瞳は今も…私の姿を映すことができる？
その瞳は…一体何を見ているの？

第十二章 / 空に架かる橋（最終話）

ロランは静かに顔を上げ、立ち尽くすマド力を見つめた。

目を覚ました幼い子供がするような、焦点の定まらないぼんやりとした視線。

不安と緊張が波のように押し寄せ、マド力の体がこわばる。

ずっと…この瞬間を待っていた。

あなたに会える、この瞬間を。

想いとは裏腹に、何も言えずに黙り込んでしまったマド力を、ロランはただじつと見つめていた。そして、ふっと張り詰めた細い糸が切れたように力を抜くと、口元に小さな微笑を浮かべた。

ロランの柔らかな声が静かに舞う。

「マド力…」

あの時と同じだ。

それは三年前の暑い夏の午後、九段下の公園でスケッチブックから顔を上げて見せた、あの微笑みと同じだった。あの頃と何一つ変わらないロランの微笑みは、胸の奥に仕舞い込んだ願いをこの両手で取り出す時のように懐かしい。

マド力は頬を伝う涙を、何も言わずにそっと拭って顔を上げた。

「隣、座る？」

ロランはそう言ってベンチのスペースを半分空け、膝の上に乗せていたギターを足元に立て掛けた。

きつと私は今、ぎこちない笑顔を浮かべているだろう。あなたと

肩を並べることくらい、あんなに慣れっこだったのに……今はもう、あなたへの想いを募らせていた出会った頃の私に逆戻りしたみたいだ。

息が詰まりそうなくらい苦しくて、胸が締め付けられるほど痛くて、あなたの言葉が愛しくて……

あれからもう三年の月日が流れて、あなたと私の距離は縮まることなくここへたどりついた。今隣にいるあなたも、私も……あの頃の二人じゃない。

失われた風景は、取り戻すことができないのだから。

マドカは風に揺れるスカートの裾を押さえてベンチに掛けた。目の前の広がる、美しい松山の街並。すべてはこの街から始まっていたのかもしれない。

ロランの父親、桜田直義の未来も、母の未来も、そして、ロランのすべてがここから始まっていたのだろう。

「俺がいたライブハウスは、ずっと向こう。あの山の下あたりやな」

ロランは見慣れた風景の一部を、まるで自分のもののように指差して言った。

「田舎にある小さなとこやったから、もう潰れたかもしれないな。19の時まであそこにおったから……あれからもう10年になるんなあ」

穏やかな日差しが地上に降り注ぎ、マドカのスカートの上に小さな影を落としていた。ロランは足を組み替えると、膝の頭を包み込むようにして指を組んだ。

さっきまで軽やかに吹いていた風の音は止み、辺りは無音のまま時を刻んでいた。ロランは右手を膝の上に乗せ、掌をじっと見つめ

たり裏返したりしていた。

「今、何してるん？編集の仕事？」

「青山の児童図書館で…、働いてて…」

「図書館か、マドカらしいな」

ロランはふっと笑い、顔を上げた。べっこう色のレンズが太陽の光に反射して輝いている。

この青い空は、ロランの瞳にどんなふうに映るのだろう。セピアなのかモノクロなのか、それとも七色に彩られた世界なのか、マドカには検討がつかなかった。

静かに繰り返される彼のまばたきは重く、光の動きに何度も目を細めながらロランはじっと一点を見つめている。

そんな一連の動作に胸が締め付けられ、マドカはぎゅっと瞳を閉じた。

私は…ロランを救えなかった。いつも隣にいたのに、気づいてあげられなかった。

あなたの瞳を、救えなかった。

「ロラン、私…」

「なあ、マドカ…」

ロランは言いかけたマドカの言葉を塞いだ。

「俺が今、何を恐れて生きているか、分かる？」

マドカは目蓋を伏せたまま、左右に首を振った。

俯いたままのマドカにロランの表情は分からない。だけど、きっとロランは今、寂しそうな瞳をしている。

出会った頃と同じように、すべてを悟り切った、諦めを含んだ寂しそうな瞳。

マドカは溢れ出そうになる涙をこらえて、すっと息を吸い込んだ。

「俺は闇が怖い。暗闇が怖いんや。夜になるとな、どうしようもない虚しさに襲われる。毎晩のように眠りがやってきて…ベッドに潜り込んで寝ようと思っても、目を閉じるのが怖い。一度目を閉じてしまったら、二度とこの世界が見えなくなってしまうような気がして怖いんや。なあ、まるで小さな子供みたいやろ？」

あの頃と同じロランの声。二度と聞くことができないと思った、あなたの声。

記憶の中で何度も繰り返した名前……ロラン。

頬を涙が伝い、肩が震える。

泣いてはいけないって分かっているのに…ここで私が泣いても、どうにもならない。辛いには、ロランなのに…ロランはちゃんと前を向いて生きてる。

確かなものをその瞳に映そうって…しっかり前を向いて生きてる。

「俺は今、微かに見える右目を失うのが怖い。日に日に視界が塞がっていくのが分かる。覚悟はできてる…だけど、見えなくなるのが怖い。10パーセントの視野でも構わない。このままで…いさせて欲しい……」

消え入るような声で放たれた言葉がバランスを失ってその場に碎け散った。

ロランの瞳は眼下に広がる街を見下ろしていた。空を見上げればさっきまでは見えなかった綿雲がどこからかやってきて、退屈そうにぽつんと浮かんでいた。

太陽の光はさっきよりもずっと弱くなっている。頬を伝った一粒の涙はどこかへ消えた。

マド力はしっかりと前を向き、呑み込んだ言葉を真っ直ぐに伸ばした。

「ロラン…ごめんね、私…ごめんなさい…」

隣にいるロランの横顔を見ることができない。

マド力は再び俯いた。込み上げる想いだけが強さを増し、体を流れるすべての感情が今にも溢れ出してしまいそうだった。

この気持ちをロランに伝えるまでは、涙の海に沈んでしまわないように…

マド力は膝の上に置いた両手をぎゅっと握り締めた。

「私…、気づいてあげられなくて…ロランがどんなに辛い思いでいたのか…分かってあげられなくて…ロランの、大好きなロランの傍にすることができればそれだけでいいって…そう思ってたけど、それは全部私のわがままでしかなくて…ロランが抱え込んでいた苦しみに、何も気づかなくて…ごめんね、ごめんね…ロラン…ごめんなさい…」

どんなに悔やんでも、あの頃には戻れない。

マド力の瞳から涙が落ちる。

もう、振り返ることはないだろう。ロランと過ごした日々を思い出すこともないだろう。たとえこの先、ロランと歩む未来が見えなくても、こうして出会えたことがあなたと過ごす最後の時間だと想っていたから。

何度も繰り返し返したこの気持ちを伝えることで、少しは楽になるかもしれない。

「私…忘れることなんてできなかった。ロランと一緒にいた時間

も、ロランがくれた沢山の優しさも、ロランに出会わなければ感じることのできなかった痛みも…ずっとずっとこの胸に残ってた。ロランの隣にすることが、どんなに特別なことなんだろうって、ロランの傍にすることがどれだけ私を支えてきたんだろう、私がロランにしてあげられることは何だろうって…今ならそう思えるのに。今なら…何度もそう思えるのに。だけど、今更もつどうにもならないことなんだよね…すべて、失われてしまった過去のことなんだもんね……」

溢れ出す涙をせき止めようと、マドカは顔を上げた。風に乗ってゆっくりと流れる雲が、どこへ向かうのか思い思いのまま散り散りになっていく。

霞んだ視界が虚しさを運び、胸に伝う過去の痛みを嘲笑うように、頭上の空は底抜けに明るかった。

「フランスに行こうと思う。見えるだけの時間を、描くことで養いたい。この目で見たものを一つ一つ額に入れて飾っておけたらええなって」

「フランス…」

マドカの顔が曇る。

私はもう、ロランに何もしてあげられない。一度離れた心はきつとどこまでも離れていくように作られているのかもしれない。引き寄せる力を失った心は、二度と戻らないのかもしれない。

想う気持ちが強すぎて…遠い空で祈ることも、あなたを想い続けることも…

もう私は…あなたを救えない。

「どうしてそんな顔するん？」

マドカは首を振った。

「ううん、そうだね、ロランにはそれが正しい選択かもしれない。私…ロランの絵、好きだから…ずっと描き続けて欲しいな。どこにいても、どんな時でも…私はロランのことを胸の中に思い出して閉じ込めておくから…。どこにいても、ずっと忘れないよ」

精一杯の笑顔でロランの横顔を見つめる。少し痩せた頬にかかるブラウンの髪が、寂しさと苦しさで泣いているように見える。

その瞳から光が消えてしまう前に…あなたに出会えてよかった。もう思い残すことは何もないよ、ロラン……あとは笑顔で別れるだけ…

最後に、その瞳に笑顔の私を映して欲しい。その笑顔を記憶の墨に留めておいてくれたら…それだけでいい。

マドカは深い溜息をついた。すべては終わってしまった過去のことだった。隣にいるロランが、このまま何も言わずに立ち去ってくればいい。そしたら、笑顔でさよならを言って…今度こそ、これが最後の別れになる。

ロランはフランスへ…
もう二度と…会えない。

「一緒に…来る？」
「…えっ？」

「フランス…マドカも来てくれへんかなって。傍にいて欲しい。いつまでも俺の傍で笑っていて欲しい。こんなの無理やつて分かってる。けど…これが最後になるんやったら、素直に言っておきたかった。マドカの笑顔が何よりも大切なやつて」

ロランは深く息を吸い込んで空を見上げ、サングラスを外した。太陽の淡い光に目を細めながら、雲の流れを追いつけるその大きな深い瞳は、マドカの目蓋に焼きついた、美しいロランそのものだった。

「マドカ…、俺…どうしても眠ることのできない夜は、いつもマドカのことを考えてた。マドカの笑顔やマドカの声进行い出せば、何も怖がらずに目を閉じることができる。闇を怖がらずに生きることができる。ああ…そついや、あの本…」

「あの本…？」

「マドカのプレゼント…空に架かる橋。もう何百回も読み返した。全文暗記するくらい読んだ。あの本のページを捲ると、マドカの声が聞こえてくる。マドカが、眠れずにだだをこねる俺の傍にいる。子供を寝かしつけるみたいに、そつと枕元に手を置いて…マドカはゆつくりと本を読んで聞かせてくれる。毎日そんな夢ばかり見てる」

ロランは苦笑いを浮かべながら首を傾げた。

「俺、相当おかしいかもしれんな。母親の愛情に飢えてるからこんなことを考えてしまつうかな。ごめんな、マドカ…」

「ロラン…」

マドカはその横顔を見つめた。

私だつて…ロランのことを考えない日はなかつた。いつも、私の傍にはロランがいた。ロランの面影が、ずつとずつと…隣にいた。

「さてと、そろそろ帰らへん？」

「帰るつて…、どこに？」

「あれ？マドカ、ギャラリーから来たんやろ？」

「うん、そうだけど…」

ロランは立ち上がってマドカの顔を見下ろすと、にっこりと微笑んだ。

マドカの大好きな笑顔。綺麗なロランの顔が、ほんの少し崩れる瞬間。

「篠田さんにマドカのこと紹介せなあかん」

「ど…どうして？」

「あの絵のモデル、誰なんだってしつこいねん、あのおばちゃん。マドカ、何か言われなかったん？」

見上げたロランの顔があの頃と変わりなくて、マドカは思わず噴き出してしまった。

急いでベンチから立ち上がり、マドカはギターを抱えて歩くロランの後姿を追い駆ける。

あの頃のままだ。

そこにある景色をまとって、静かに美しさと共存しているロラン。少し前を歩く愛しいその人に、マドカは声をかけた。

「ロラン…私、フランス…行ってあげてもいいよ」

ロランが振り返る。

「私も…ロランの傍にいたい。どんなことがあっても、ロランの傍にいる。ロランが闇を怖がらずに目を閉じて眠れるようになるまで…ずっと傍にいてあげるから」

ロランは真剣なマドカの顔を見つめると、綺麗な歯並びを見せて

につこりと笑った。ロランのシャツの裾が風に揺れ、さらさらと気持ちの良い音を立てている。

マド力は唇をきゅっと結び、得意げに笑顔を作ってみせた。

二人の距離が近づき、いつの間にかロランの顔が鼻先のすぐそこにある。

「もう煙草の味なんてしないけど？」

丸い目で、マド力はロランの藍色の瞳を覗く。

「キス、もう煙草の味なんてしない」

「ロラン、煙草…やめたの？」

「ああ、随分前にやめた。街でマド力とすれ違って、見えへんようになったら分かんやろ？一分でも一秒でも…マド力の顔が傍にあったらええなって、そう思ったから」

ロランが私にくれる言葉は、いつもどこかくすぐったくて照れ臭い。だけど、私はあなたのことが大好きだからあなたの声を一番近くで聞いていたい。切ないギターの音でも、透明な歌声でもなく、ただあなたの声を一番近くで聞いていたい。

だって、あなたのギターと歌声は、離れていてもどこにいてもこの世界のどこかにいれば、耳にすることができでしょう？

あなたはラ・ヴォワ・ラクテのボーカリストだから、あなたの歌声はこれからもずっと、誰かの心の中に響くでしょう？

どんなに季節が流れても、あなたの存在は色褪せることなく誰かの記憶に残るでしょう？

だから、私はあなたが私に向けて放つ言葉だけを聞いていたい。

いつの日も、耳元に響くあなたの柔らかな声を思い出していたい。

「なあマドカ…、キス…してもいい？」

ロラン…、私はいつも祈ってる。

あなたの瞳がずっと傍にありますように。

あなたのその美しさが、永遠に色褪せることはありませんように。

例えばあなたの瞳にある唯一の光を闇が覆い隠しても、私があなたの目になって、あなたが私の勇気になれば…橋を渡れる。

星のない夜も、私たちは出会うことができる。

「ロラン…」

降り注ぐ光の影をまとい、マドカは瞳を閉じた。

- E N D -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908d/>

空に架かる橋

2010年10月11日19時45分発行